
目覚める竜

半導体

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目覚める竜

【Nコード】

N8888E

【作者名】

半導体

【あらすじ】

少年は追われていた。男はそれを見て、過去の古傷が痛んだ。助けた理由はそれだけだった。その小さな出来事は、バラバラに散っていた多くの偶然を集めることになる。

プロローグ

真っ暗闇だった。街灯こそ光っていたかもしれないが、記憶にない。

人の気配もない、街の華やかさもない、自分の声だけが反射する夜の大通りを、何も考えずに僕は走っていた。

荒れた僕の呼吸、石畳を蹴る軽音が、脇に犇めく家々の間を飛び交い、かろうじて耳に届く。自分のもの、そしてすぐ後ろからも別の音が迫ってきている。走りながら振り返るが、永遠とも思える夜が映るだけだった。

向きなおり、額の汗をぬぐい取ると、足が石畳にとられた。手があるように動かず、腹から倒れこむ。頭も打ちつけ、いくらか血が出た。立ち上がろうにも、腕に力が入らない。

一つになった音が、すぐ後ろまで来ているようだった。目を堅くつぶって、右手の封筒を握りしめた。こんなことになった原因の封筒だった。

諦めかけていた僕の体が勝手に持ち上がり、半ば強制的に立ち上がった姿勢になった。

二、三步ほどふらついて歩き、それからまた地面に倒れた。どうやらその二、三步で家と家の間に滑り込んだようだ。

体を起こして振り返ると、かろうじてわかる家の壁の隙間から、うつすらと影が横切るのが見えた。近づいていた音が、それを境に小さくなっていく。響く音が完全に聞こえなくなると、溜息を一つつき、仰向けにバツタリ倒れた。何が起こったのかよく分からないが、どうも助かったらしい。

「何をしていた」

頭上で声がした。倒れたまま上を向くと、まっ黒い中に顔の影が見えた。

「……」

何かを言おうとしたが、過呼吸で喉が潰れていて音にならない。唇だけが、何かを求めるように震えた。いくらか頑張ってみたが、当面の間声帯が音を発することはなさそうだ。

「何かに追われてるようだったが……その様子じゃ、ずいぶん追い回されたみたいだな」

「……」

僕の声帯は何も言わない。

「話は俺の家で聞こう。ほら、立ちな」

彼は僕の腕を掴んでひっぱりあげた。言われるがまま膝を立て、なんとか体重を支えてみたが、腕を離されるなりふらついてレンガにもたれた。逃げるのに必死で、もうまともに立つ体力も残っていないらしい。彼に体重を任せ、ゆっくりではあるがようやく歩く歩きだした。

明かりがほとんど役に立っていない。ライトは十分な光量を持っているのだが、山のように積まれた段ボールがその光を阻んでいる。目の前にカップが差し出された。茶色い液体が盛んに湯気を立てている。ホットココアのような。

「まあ、飲みな」

それを僕に持ってきていたのはさっきの男だ。年は三十に少し足りないくらいだろうか、あまり年取った様子は見受けられない。僕への態度もあまり棘はなく、優しい印象を受ける。

「お前……何て名前だ？何で追われてたんだ？」

思わず手が止まる。

この人がやつらの仲間でないのはこの一言で分かったが、かといって本当のことを話すのも怖い。

とっさに頭の中でテキトウな理由を考えた。それを口にしようとしたが、まだ声が出る状態ではないようだ。彼もそれが分かったよ

うで、横を向いて溜息をついた。

「：まあ、今無理に話そうとしなくてもいい、今日はもう休んでおきな。いずれ聞くこともあるかもしれない」

僕を残し、彼は物の影に隠れて見えなくなってしまった。

静かになった見ず知らずの部屋で、そつとココアを口に運んだ。

一週間が過ぎた。

流れ落ちるように、街路樹のつきものが覆いかぶさってくる。紅葉、というよりは、枯葉というべきだろう。樹の下を少し歩いただけで髪や肩は覆われてしまう。

風は枯葉と冷気を運び、人々は厚い防寒服を着込み、身をちぢ込ませながらせかせかとすれ違って行く。

肩がすれ違った人とぶつかった。つきものが数枚、力なく舞い落ちた。吐いた息が白くなって広がる。それは僕をかき消すことなく、幻のようにかき消えた。

僕とすれ違う人、反対側を歩く人、隅で小さくなっている人。その誰も僕を襲ってこないという保障はない。

：僕は怖かった。

今、僕は彼のもとでお世話になっている。僕は家をこの街に持っているし、そのことは彼にも話した。それでも彼は、しばらく一人にならないほうがいいと言って僕の世話をしてくれることになった。彼を巻き込みたくないのであまり甘えているわけにもいかないのだが、その機会を見つけられないままずっと今日までやってきてしまった。今もまた、彼の後ろについて歩くことしかできない。

彼は、バステールと名乗った。

昼の雑踏は冬が近いことを忘れられるほど賑やかだ。夜の恐ろし

さは、ここにいる誰一人想像もできないだろう。一週間前とはいえ、あの閉塞感と緊迫感は体が覚えている。

いや、みんな夜の恐ろしさを知っているからこそ……なのかもしれない。悪い考えは持ちたくないが、どうしても疑心暗鬼になってしまう。

はっとした時には、バステイルと数メートルの間ができていた。人が壁になり、これ以上離されると見失う可能性もある。僕は頭のつきものを払い落とし、身を前に押し出した。人と人の間に体をねじ込み、見失わないよう注意しながらじつくりとバステイルの後を追った。

通りから広場に出たらしい、人の量はさほど変わっていないが、密度が減り、ある程度は自由に行動できる。が、それでも人の多さは相当なもので、二人して広場のベンチに腰かけていた。今まで邪魔だった壁が、目の前で流れていくだけの、いわゆる『他人事』になっていた。

「悪いな、今丁度ラッシュの時間帯みたいだ。この駅は通勤に使う人も多いからだいぶ混むな」

後方の赤レンガ造りの建物を見ながらバステイルが笑った。

セントヘイム駅。建物の入り口上にそう刻んである。周辺の街から線路が集結して、ちょっとしたターミナルになっている。

普通列車だけでなく、レンバルト砂漠を挟んだ先の州都と繋がる線もあり、ラッシュ時以外でもなかなか人の量は減らない。もともと、最近は妙な噂が立っていてその線を使う人は少なくなっているそうだが。

バステイルは新聞を読んでいる。僕はそれには興味がないので、なんとなくびくびくしながら辺りを気にしている。

「…ベルトニアとの和平交渉決裂、だとき」

ベルトニア…確か、僕らのいる国、オルディアと隣接してる軍事

国家の名前。

数年前、今のオルディア国王がベルトニアとの同盟を解除して、それ以来ずっと再締結を求めているは却下されているとうのはこの国では知られた話だ。

つまりは、今に始まったことじゃないということ。

「またか、って感じがするけど」

「ははは、違うない」

それから、しばらく黙った。

「平和だな」

唐突な一言に、すぐに反応できなかった。

「え？…うん」

バスティールは僕の状況を分かってそんなことを言っているのだろうか。

「…あのさ、バスティール」

「ん？どうかしたか？」

「僕、そろそろ…戻ろうと思うんだ」

「……」

切り出すのが急だったかもしれないが、もう限界だと思った。

「もう一週間になるし、そろそろ大丈夫だと思うんだ」

「……そうか」

新聞で顔を隠していたバスティールが、それをたたんで横に置いた。

「そういえば、まだお前の名前を聞いてなかったな」

「あ」

思わず声が出た。結局まだ名乗れていないのを思い出す。散々お世話になって名前も教えずに去るのはさすがに失礼に思えた。

教えておこう…何故だかはわからないが、ようやく人を信じることができる気がした。

「…フィスト」

バスティールは黙った。

驚いた顔をしている理由はよく分からない。

「…!?!」

その直後にバスティールに抱きしめられたのはもっと意味が分からない。

「…バスティール？」

「いや…なんでもない。そうか、フィストか…」

「僕、そんな趣味無いよ」

「そういう意味じゃない」

僕を抱きしめたまま、頭を軽く小突いてきた。

しばらくそのまま固まっていた。

空の灰色は見ているうちにもどんどん濃くなり、あたりも薄暗くなって、見通しが利かなくなってきた。光が減り、地上も空とさして変わらない灰色に染まってきた。

僕もバスティールも何も言わない。

音がさっと耳から離れた。バスティールが目をはっと見開き、僕を突き飛ばした。僕はそれによってベンチから落ち、尻もちをついた。

乾いた銃声が聞こえたのは、そのすぐ後のことだった。

同時に、バスティールの腹部に穴があいた。

「殺しだあああああ!!」

叫び声がした。

静寂は瞬時に破られ、悲鳴が広場を包む。雑踏が波紋のように広がり、バステイル、そして銃を構えた男が浮かび上がる。

何が起きたのか。

頭がくらくらくして考えることができない。

銃を構えた男は、少し顔をゆがませた後、雑踏の影に消えていった。

「く…」

「…ちよつと、大丈夫!？」

バステイルが痛々しく腹を押さえながら倒れている。

起き上がって駆け寄ると、弾の貫通したらしい跡が左胸部に確認できた。さつき座っていた部分まで赤く浸っている。

「おい…ちよつといいか…?」

今にも琴切れそうな声だった。

「これを…お前に…」

「…これって…」

思わず出した手に、黒い鉄の塊…人殺しの道具が乗せられた。

「何、これ…」

「もう、おまえひとりでも…大丈夫なんだろう…?」

頷けない。バステイルの意識の薄くなるのが、痛いほど伝わってくる。

「…最期に…ひとつ言っておくが…」

そこで言葉が詰まる。激痛に耐えるような顔をした後、再び口を開いた。

「お前の思う、正義に生きな…」

しずかに、しんだ。

もう、ここにいるすべてのにんげんさえ、おそろしかった。

プロローグ（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

連載小説は初めて書くので、ぎこちない出来になっているかもしれません。文字がぎっしりで読みにくいのも自覚しております。それでも、温かい目で見守っていただけるとありがたいです。

1話 ノイズ

広い草原があった。深い森の中の、まるでくり抜いたかのような、丈の短い草の生い茂る草原だった。

街中のような喧噪も空気もなく、静かな自然だけが優雅にその時間を過ごしている。

ただ、不可解な点があるとすれば…静か、すぎることだ。

喧騒はおろか、虫の声も鳥の囀りも、風のせせらぎさえも、この空間にはない。…そしてもう一つ。

この自然ともつかぬ自然の中に、たった一点、入道雲を落としたような冷たい建物がひっそりと佇んでいた。その環境の中では不自然とも、その静寂の中では自然ともいえる。とにかく、景観は著しく損なっていたが、静けさを一切かき消してはいなかった。

殆どの人は、この存在を知らない。

細長い通路には突き当りの窓からの光が入っている。床にはその光沢があり、蛍光灯を必要としない。

特徴のない幾つもの扉の中には、どこも大量の精密機械、もしくは怪しげな実験器具が溢れていた。また、それらとは到底釣り合わない、無表情の白い研究服たちがいた。

外と比べてあまりにも時間が時間が早く流れているようで、どの研究服も時間を惜しむようにせかせかと何かをしていた。

地上の階はまだ明るく人もそれなりにいたが、それとその地下は全てにおいて対照的だった。日の光が入らないのは当然だが、それを補うべき蛍光灯さえ、廊下の光沢を作り出すのにやっとというほど少なく暗い。

ただ一人の研究服も姿を見せず、その代わり、扉のない一筋の廊下には、立ち入りを拒絶する黄色いテープがびっしりと張り巡らさ

れ、ある種のフェンスを作っていた。

そのテープを超えたさらに奥に、その廊下の唯一の扉があった。そこも、他の扉とは違う……人を寄せ付けない、別の静けさがあった。

部屋の中には何もない、出入り口であろう扉が一つだけ……ガラス越しに見る狭い景色は、今までと何も変わってはいない。耳に入ってくるのは、足下から湧き上がる泡の音、それと機械の起動音。

無限に繰り返される「今日」がそこにあるだけだが、それが無限でなかったということを、今の彼女は分かっていた。

それというのもここ数日、彼女の思考に奇妙なノイズが入るようになっていた。それは優しげな、穏やかな女性の声のようで、何か誘っているような、今まで忘れていた感覚を思い起こさせるものだった。

そのノイズについて処理を行い続けた結果、彼女は今しがた、一つの結論に行き着いたところだ。

右手をゆっくりとガラスに押し付けた。彼女を三百六十度覆うそのガラスは相当な強度を持っているようで、長年このガラス管の中で生きてきた彼女がいくら衝撃を与えたところで、ヒビ一つ入らないだろう。

彼女が脱走することのないように、慎重に作られているのだろう。だが、手を押し付けていると、彼女の頭にあのノイズが走った。

それは一瞬で、内容も記憶に残らなかったが、次の瞬間には、押し付けている手を中心にガラスに大きなヒビが入った。一瞬の間を置いて、もろくなったガラスは水圧に耐えられなくなり、水がガラスを破壊し外に流れ出た。

流れる水に押し出され、彼女の体もガラス片の上に横になっていた。その体は実際以上に重く感じられていた。

彼女はしばらく横になったまま動かなかったが、やがて震える手を下に付け、ゆっくりと立ち上がった。足が地に着くのは十年ぶり

だった。

着ているシャツは勿論、頭から足先まで水が滴るほど濡れているが、温度はそれなりにあるのであまり気になっていない。

しかし、足がまだ震えている。長い間立つことすらなかったのだからそれは仕方のないことだった。

ゆっくりと部屋を見回す。

明かりがなく、自身のいた機械から発する僅かな光が部屋を七色に色付けしている。

部屋自体はあまり大きくなく、出口の扉までは二、三步でたどり着ける。

割れたガラス管からは、まだ少しずつ水が流れ出ている。溜まると濃い緑に見える水も、広がると色が全く分らない。

じっと見つめる。

滴る水がなくなるほどまで見ていた時、足の震えが止まっていた。前に出しても、体重をかけてみても、足はもうたじろがなかった。

曖昧な意思が、彼女をつき動かす。

1話 ノイズ（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

中途半端に終わってすみません。あまり長くなると読みにくいと思っただけで…。

更新は急がず、ゆっくり書こうと思っています。どうか飽きずに読んでやってください。

2話 脱出

彼女は、喜ばない。

彼女は、怒らない。

彼女は、哀しまない。

彼女は、楽しまない。

彼女は、感情がないのだから。

だがそれは、いずれ過去の話になる。

あくまでゆっくりと、しかし確実に。

暗い廊下は相変わらず不気味なまでに静まり返っていた。
その静寂の中に、足音が響く。

一步一步、ゆっくりと。そして、水の跳ねる音を含んで。

部屋を出た彼女の目に入ったのは、部屋よりも暗く寂しい廊下だった。今出てきた扉以外には何もなく、ただの廊下が、わずかな蛍光灯の光を映しながら遙か先まで続いている。

だが、廊下に視線を沿わせていくと、黄色い集合体が見えた。廊下を塞ぐように阻んでいるそれは、よく見るとその材質はそれほど厄介な代物などではなく、通り抜けるのは容易そうだ。

ゆっくりだが、近づいて行くと、その確信は心に湧いて溢れた。だいたい近くに寄ると、それが細長いテープの集合体で、かつ何か書かれているのが分かったが、彼女にとってそれはどうでもいいことである。

頭に残ったわずかなノイズに導かれるように右手で払う仕草をした。そしてそれに呼応するようにテープに亀裂が走り、めくれるように穴があいた。生まれて十年ほどの人間なら簡単に通れそう、やや小さめの穴だ。

まるで気にすることなくゆっくりと通り抜けるとようやく、さらに延びた廊下の果てに上から入る光を確認できた。

何があるのかは知る由もないが、恐怖は無い。そもそも彼女は、それを知らない。

いま彼女を動かしているのは、ノイズの中で聞いた「会うべき人」、その存在だった。

掻き立つ好奇心と使命感。そして、彼女をのし上げる階段と照る光。

道は幾多にも分かれ、何の目印もなかったが、進むべき道のイメージがはっきりと頭にあり、明るくなった廊下を相変わらずで歩いていた。

光は歩けば歩くほど増していき、暗い中でしか生活してこなかった眼にはなかなか辛い。

その明るさにも目が慣れると、ちょうど出口のような扉が見えた。

誰にも遭遇しなかったのは幸いだった。歩幅が広がる。

「どこへ行く気だ？」

低い声…それも聞き慣れた声。特にあのガラス管の中で聞いたのは、その声意外に記憶にない。

振り返ると、やはり、研究服を着た「あの男」がいた。壁に寄りかかり、眼鏡を中指で掛けなおす癖もそのままに、しかし冷たい視線を彼女に向けていた。

「まさかお前にそんな感情が芽生えていたとはな…研究は失敗だったのか？」

男は頭をかきむしっている。このまま出口に走り出しても、すぐに追いつかれてしまうのは目に見えている。

「お前も、あれか？自由が欲しいとか、そんな事を言い出すのか？」
小馬鹿にするような笑いを見せつけてきた。彼女は理屈でない苛立ちを覚え、ぐっと拳を握った。

「ユリス、お前は外へ出てはいけないんだ。外でお前は幸せにならない」

「ユリス…？それ、私の…？」

聞き慣れない単語を聞き返すと、男はハッとした表情の後、今度は声に出して笑い出した。

「…ああ、そうか、ハッハッハ…お前は自分の名前も知らなかったんだったな。教えてないんだから当たり前か。ハッハッハ…」
苛立ちが増していく。ユリスの拳はわなわなと震えている。

「ほら、ユリス。自分の名前すら知らなかったお前が、何で外で生きていける？すぐに戻るんだ」

「…私、行くよ。戻らない」

「…」

男は黙った。表情は陰しくなり、今まで見せていた狂った優しさも消えた。

「私はお前を思っているんだ！」

「……」

「さあ、早くこっちに來るんだ」

追い詰めるように、覆いかぶさるように。鬼氣迫る男の顔など、ユリスは見たことがない。顔を見ていられなくなり、下を見たまま眼の奥の熱を感じた。

しかし、ユリスの決心は変わらない。

「ち、違う…」

声も震え始めていた。

「なに？」

「私のためじゃない…自分のためでしょ！」

それは、あきらかな怒り。声が奮い立ち、全身の力がそこに込められているかのようだった。

「…ほう」

そこで男の様子にまた変化があった。

激昂から冷蔑。

先ほどと一転して冷やかな表情になり、じっとユリスを見た。

「…そう、か。やり直しが利くかと思ったが、もう駄目だな。実験体にすらならない役立たずだよ、おまえは」

「そんなことっ…！」

「だが、おまえのことを外部に知られては困る。早々に処分しなくては」

「！」

男は、すでにユリスの言葉を聞いていない。それはすでに会話ではなく、一方的な通達に成り下がっていた。

男がユリスに近づく。

何のためらいもなく、処分しようと迫ってくる。

「……いやだ……いやだ…！」

先刻とは異なる震え。

恐怖。ユリスは分からない。

「……来ないで！」

一瞬ノイズが走るが、気にする前に右手を袈裟がけに振り下ろした。腕が空を切る。

するとそれに従うように、両側の壁が何かに引っ張られるような形で崩れてきた。

男とユリスの間に、越えるには暫くかかりそうな瓦礫の山が現れる。立ち上がった粉塵でユリスの視界から男が消えた。

「しまった！」

最後にそれだけがユリスの耳に届いた。なにも考えずにすぐに出口へ走り出し、外へ飛び出した。

細い裸足が大地を蹴る。頭に残るノイズを頼りに。

平原に、風が吹いた。

3話 遭遇

日が沈むと、月が輝く。物を形以外判別できないが、ユリスの心が何となく平穏でいられるのは、あの部屋と似ているからかもしれない。ふと懐かしそうにそこを思い出していた。

近くの壁に寄りかかり、そのまま床に座り込む。

上を見上げると、ちょうど落ちてきた落ち葉が鼻の頭に乗った。そつと振り払うと、街を溶かしこんだ空に銀色の月が浮かんで見えた。

今は冬、つまり「寒い」はずだが、ずいぶんと心地良い気温でシヤツ一枚しかない彼女にとってもあまり居心地は悪くなかった。

しかし、昼の間は遠々歩き続けたために街に入ったところでどう動けなくなってしまった。疲労感、空腹感はユリスの知識の中にもあったが、これほど苦しいものとは想像していなかったらしい。今のユリスにとって、あの狭いガラス管は一つの故郷でさえあった。

ただ生きるだけの日々が、どれだけ楽だったことか。

しかし、今さら戻ってももう居場所がないのは明らかだ。役立たずとまで言われ、処分という言葉があつた男から漏れていた。

それにユリスは、未だにこの行動を後悔していない。

思考にノイズが走る。ガラスを破った時や瓦礫を作り出したときとは違う、体の中の防衛本能を奮い立たせるような、恐怖を誘う声が通り抜けた。もっともユリスは、その感覚を「嫌な気持ち」としか取れていないが。

足だけではうまく立てない。壁に手をつき、這うように立ち上がると、走ろうと足を出した。が、その足はもう体を支えられず、その場に倒れた。

もう一度立ち上がろうとするがもう腕にそんな力は無い。

言葉にできない胸騒ぎでいっぱいになり、「危険」を感じる方向を見ると、街も空も飲み込んだ空間が津波のように押し寄せてきていた。このままではいけないと分かっている、体は思うように動かない。

自身の無力さを自覚した時、瞳から水滴が零れた。

体が浮いた。膝の裏と背中を軸にして、そして腹ばいから仰向けになって。

誰かが自身を抱えあげて運んでいるということとは分かるが、暗くて何も見えない。見えるのは僅かばかりの壁の輪郭だが、訳の分からないままユリスの体はその隙間へと入り込んだ。

存在の確認ができる壁がすぐそこにあることで、闇よりも更に詰められる感覚になる。

ユリスの体は少し奥のほうで着地したが胸騒ぎは高鳴る一方で、まだ目の前に何かいるのに、その感覚からか口から悲鳴が出かけた。しかし、その口を塞がれた。

「声を上げないで」

やや幼めの、少年の声だった。その時に、自分の口を塞ぎつつ外の様子を窺う少年の姿が見て取れた。

そこから暫く、二人とも動かなかった。そして安全が確認できたからなのか、少年のほうから話しかけてきた。ユリスの胸騒ぎがゆっくりと消えていく。

「何で追われてたのか知らないけど、大丈夫？」

ユリスの心を気にする様子で、優しさを感じさせていた。少なくともお礼の必要があるとユリスは判断した。

「その…ありがとう」

やや棒読みだったため、少年はやや苦笑いをした。

「いや、気にしないで。君、名前は？」

「……名前」

ユリスは考えた。名前は、ユリスで間違いない。その名前を初めて呼んだのは、あの男。

名前を聞かれた時に思わずその顔が浮かんでしまい、ユリスは嫌悪感を顔に出した。

「……ユリス」

名前とともに不満そうな顔が現れたので、少年は再び苦笑した。

「…そっか。ユリス、か」

少年はユリスの顔をまじまじと見つめてきた。真剣な、少し驚いているような顔だ。

つられてユリスも少年の顔を見た。見知らぬ顔は当たり前だが、再びノイズが頭をよぎった。今度は少し長い。

「あなたの名前は…？」

ノイズの影響か、ユリスの口から出たのは全く考えてもいなかったことだった。人の名前に興味は無いのに、今はとにかくそれを知る必要を感じた。

「えっと…フィスト」

名前を聞きとるなり、ユリスはまた強烈なノイズを感じた。

苦しくは無い。むしろ、頭の中の毛玉の糸が全て解けたような開放感を覚えた。そして、頭の中である一つの予想が立っていた。

「ユリス…ごめん、迷惑かもしれないけど、ちょっとついてきてくれる？」

フィストが隙間から外へ出た。ユリスもボロボロの足で後を追う。フィストはユリスのことを気にしつつ、ゆっくりと進んでいく。闇の中を、何も恐れていないかのように。

その後を追ううちにユリスは、何気ないうちにフィストに話しかけていた。

「フィスト、私に何か用？」

少し先に行くフィストに聞くと、振り向かないまま返事が来た。

「いや、なんて言うか…なんだろう？僕もよく…分からないんだけど」

「？」

「とりあえず、追われてるんだったら外を出歩かない方がいいだろうし…それに…」

そこで一度振り返り、ユリスの服装を確認してきた。

「裸足だし、シャツ一枚しか着てないし…それじゃ不便だと思ったから」

「…え、と」

「ん？」

「なんで、そこまで…」

初対面にもかかわらず、しかも追われていることに気付いていて、ここまで協力しようとしてくれる。ありがたいことなのだが、ユリスはフィストがそうしてくれる理由が理解できないでいた。

「…なんか、特別な感じがしたんだよ」

「…特別…？」

「…言ってて照れるなあ…ごめん、忘れて」

「……うん」

彼の家についたようで、フィストは隠れるように目の前の建物に入り込む。ユリスも追ってその扉をくぐった。

ユリスは確信した。

やはり、彼…フィストこそ、ノイズの伝えた「会うべき人」に他ならない。彼のユリスに対する態度も、それを裏付けていた。

銀色の月。輝いていたそれも、闇に潜んでいたものに覆い隠されてしまった。

輝きを失った世界に、小さな異変が浮かび上がりつつあった。

4話 母の面影

…違和感を覚えたのはいつごろからだろうか。自分が特別な能力を持つているわけではなかったのだが、街はずれの森からどす黒い人間の瘴気を感じるようになった。

ここ数カ月、日を重ねる度にその匂いが濃く、酷くなってきていた。そしてその匂いが闇を帯びたころ、頭の中に自分のものとは違う考えが刷り込まれていた。

その考えが背中を押し、それをしなければならないと悟った。それが刷り込まれなければこんな事にはならなかった筈だが、それは重要なことであるような気がしていたため後悔はしていない。

森の奥へ、頭の声が僕を引っ張っていた。日も沈みかけた赤い世界で影が長く延びる。

木が無くなり開けた草原に大きな影を見つけると、今までよりずっと嫌な匂い、そしてやらなければならない事とが強いイメージとなって僕の体を突き動かした。

明らかに部外者が入ってはいけない雰囲気があったのだが、そんなものは気にしなかった。声に従って行動していると、不思議とこの人間に見つかることはなかった。

声の指示する所。そこに、小さな封筒が一枚置いてあった。何も書いていない白い封筒だが、それがとても重要で大変なものというイメージが声からもたらされた。

封筒を取ったところで研究服に見つかり、すっかり暗くなった街の中を逃げ、彼に助けられ……

そして、彼を殺された。

僕の日常を狂わせたこの封筒にはいったい何が入っているのか？

何が僕の生活をこれほどまで捻じ曲げてしまったのか？

声の指示は、もう聞こえない。

自らの意思で、フィストは封筒を開いた。

書類が一枚：何かの報告書のようだ。「生物錬成」という聞き慣れない単語が題の部分に使われている。

難しい部分を飛ばすと、「被験体ユリスの実験から、錬成の条件は正しいことが証明」され、「状態良好のためユリスでの実験も続行する」といった文が記されていた。

その末尾にだれかのサインと、よく知っている人間のサインが書かれていた。それはずいぶんと身分の高い人間のようなのだ。

フィストが敵にまわした存在は、彼の予想をはるかに超えた強大なものだった。

事の重大さに気づいたフィストは、必要最低限の荷物をまとめて家を出る準備を進めていた。

同じ場所にとどまっていれば、確実に数日で発見される。一刻も早くそこから離れる必要があった。

無論、もう帰ることは叶わない。

気がついた時には彼は外を歩いていた。荷物を持っていなかったため、そのまま逃避行に移るにはあまりにも今後が不安が残った。無駄な時間と言えば確かに相違ない。しかし、フィストはどうしても逃げ出す前にこの街を歩いておきたかったようだ。

長く暮らしてきたその街を目に焼き付けるためだったのかもしれない。

彼と出会った日と同じ深夜の闇。そして回想が現実になったように、彼女に出会った。

積み上げられた段ボールを動かすと、ボロボロの木箱が発見できた。フィストがそれを取り出すのは六年ぶりだ。

引っ張り出してふたを開けた。そこには衣類がいくらか詰め込んであった。フィストに懐かしさを感じさせる独特の香りがそこから広がっている。

記憶の中で僅かに輝く…母の遺品。

それらを見つめていると、フィストの脳裏に母の笑顔が浮かんで消えた。

ロッキングチェアの優しい揺れ。朝から続いた出来事による疲労もそれを手伝い、ユリスは夢と現実の間を彷徨っていた。

温かい声が遠くからユリスを呼んでいる。励ますような優しい声だ。

ユリスの意識が夢から離れていくのと同時に、その声もユリスの耳から遠ざかって行った。

はっと現実に戻ると、奥の部屋からちょうどフィストが戻ってきていた。その手に女物らしい服を抱えている。そしてユリスに近寄ると、丁寧に畳まれていたそれを広げて彼女に確認させた。

「お母さんの古着で悪いけど…これが一番しっくりしてたよ」

ブラウンのTシャツとベージュのチュニックのセット、そして黒いスカート。飾りは殆どなく、平凡な服と言っても差支えは無い。

ただ、そのいずれにもちょっとした汚れや縫い合わせた跡があり、フィストの母親がどれだけこの服を大事にしていたかが分かる。

成人女性のサイズなのでユリスにはやや大きいようだが。

フィストはそれを椅子に揺られているユリスの膝の上にそっと置いた。

「その薄いシャツだけじゃこれから寒いでしょ？その服あげるからさ、着替えておいて。僕は隣の部屋に行っとくから」

「え…でも…」

「気にしないでいいよ。どうせ僕には着れないし、お母さんももう着ないし」

それ以上の追及を避けるように、フィストはそそくさと部屋を出て行き扉を閉めた。

聞こうとしていた事が何も聞けず、ふうとため息をついてから膝の上のシャツを手にとって広げた。

目の前がブラウンで染まる。その中に、一目では気がつかないほどたくさん汚れや傷がついていた。

つまりはこのシャツの使用期間がそれ相応に長いということなのだが、そんな物をもらっているのかユリスは疑問に思い、確認を取ろうとフィストの出でいった扉に近づいた。

足はまだふらふらしているがあまり気に留めていない。

「…フィスト」

「ユリス？もう着替えたの？」

扉越しにフィストの驚いた様子が伝わる。ユリスは気にせず、淡々と用件を述べる。

「これ、ホントにもらっているの？」

これほど大事にしている物をあっさりあげていいのか。ユリスの最も気にしている点だ。

「え？うん、もちろん」

フィストの返答には、なぜわざわざ聞くのかというような意志が込められている。

「お母さんに聞かなくていいの？」

「ああ…」

フィストのトーンが、その一瞬明らかに下がった。

「いいんだ。お母さん、六年前にもう死んでるから」

「…」

ユリスは部屋の中を見渡した。

必要な家具以外はあまり装飾品は無く、余分な物は一切が省かれている。若干女性の暮らしていた痕跡も見つけられるが、無理に忘れようとしたかのように隠されていた。

母親がいないというのも説得力がある。

「じゃあ、この服ってお母さんの形見？…大丈夫？」

服の汚れや傷が目に入り、意図せずその疑問が口に出ていた。

「そこは気にしないでいいよ。形見って言っても服は他にたくさんあるし、それに着てもらった方がお母さんも喜ぶと思う」

「…分かった」

それ以上は特に抵抗する理由もなかったので、ユリスは扉の向こうに軽くお礼を言ったあと椅子に戻っていった。

椅子に置いてあるチュニックを見つめた。しばらく考え込むように固まっていたが、持っていたTシャツを背もたれにかけ、着ていた真っ白なシャツを脱いだ。

椅子に座ったフィストは、何をするでもなくただぼんやりと奥の壁を見つめていた。

ユリスがまだ衰弱してしまっている以上、少なからず休息する必要がある。まさかまだ追手の徘徊しているかもしれない外に出すわけにもいかないし、彼女一人を残してここを出るわけにもいかない。いずれにしろ、ここで彼女と別れるという選択肢は選ばないだろう。

書類にあった「生物錬成」という言葉、そして書類の内容がフィストの頭から離れないでいた。

あの声の指示には従う方がいい：フィストは根拠のないままそう確信していた。なので、まだ後悔は微塵も感じていない。だが、まるで導かれるように助け出した彼女は、どんな内容のものなのかすら分からない「生物錬成」の関係者、厳密に言えば被験者なのだ。

たまたま名前が一緒という可能性もなくもないが、それにしては辻褃が合わない。

そして現在に至るまでのあらゆる出来事から、まるで全ては敵の大きさを表しているかのようだった。

ユリスのかかわっていた「生物錬成」の実験とは一体何なのか。まさか本人に聞くわけにもいかないだろう、と一人で考えていたが、それに関する知識があまりに乏しい。結論も答えも出るはずはなかった。それでもフィストは、考えることを止めることが出来ない。

閉めていた扉の開く音がした。ユリスがフィストのいる部屋に入ってきたようだ。

「着替え終わったよ、一応」

無表情なユリスの声に、フィストは考えるのを一旦やめて振り返ってみた。

やはり母より体が小さいので、服はサイズが合わず袖から手が出ていないのだが、奇跡的にスカートは膝あたりまで収まっている。しかしユリスは、まるで持ち主のようにその服を着こなしていた。チュニツクのベージュと、その下から覗くブラウン。そこにやや被さっている、腰まで伸びた髪のプロンド。その中に浮かぶ瞳の濃い空色がよく引き立たれている。

つまりは、よく似合っているのだ。

服のせいだろうか、フィストはその姿の中に母親の面影が重なって見えた。似合っていると伝えようとしたフィストの口は、違う言葉を発していた。

「お母さん、みたい…」

口にした直後、フィストの顔が赤くなった。

「お、母、さん…?」

ユリスの顔も赤みがかかった。どちらかというと困惑に近い顔をしている。

「あ、いや！変な意味じゃなくて！褒めてるんだよ、似合ってるっ

て！」

「褒めてる…似合ってる…」

ユリスの口元でいくらか言葉が繰り返された。ユリスはまだ恥ずかしそうに立ったまま固まっているが、すっきりしないような顔でフィストを見てきた。

「なんか、変な感じ…隠れたいような、でも明るくなってくる気持ち…」

「？」

「こんな気持ち…何て言えば…？」

少し小さい声でこんなことを聞いてきた。まさかこんなことを聞かれるなど、予想できるわけがない。フィストも例外ではなかった。

「え…？んーと、それは…。嬉しいんだよ、うん」

「嬉しい…これが、嬉しいってことなんだ…」

「うん…多分…」

言っているうちにフィストの方も自信を無くしてきた。遠まわしに自分のことも褒めているような気になってしまったようだ。ますます顔が赤くなったのを本人も気づいたらしく、とっさに別の話に変えようと試みた。

「今日はもう疲れたでしょ。外は真っ暗だし、そこに僕のベッドがあるから使って」

ユリスは小さく頷き、それからすぐそのベッドに潜り込んだ。

今夜は床寝だ。今しがたのことを瞬時に忘れ、フィストは横になったユリスの後頭部を見て溜息をついた。

と、ユリスがフィストを見つめていた。

「私、『嬉しい』って初めてだったから…ありがとう」
すぐにまた後頭部がフィストを向いた。

また紅潮した顔がどんな様子なのか、鏡を見なくともフィストはよく分かった。その気持ちを紛らわすかのようにせかせかと歩いて行って明かりのスイッチを切った。

5話 蠢く夜

目が慣れてきていた。影だけとはいえ、天井がよく見える。ただ、それは何もない暗黒とも見て取れる。

いつもより高い天井。片付け終わった床の上に布を敷いて横になっていた。ベッドは一つしかないし、一緒にベッドに寝るわけにもいかないのだから仕方がない。

先ほどの短い会話はフィストに妙な感覚を残していた。

小さな声でフィストもほとんど聞き取れなかったのだが、ユリスは「これが嬉しいってことなんだ」と言ったのは聞こえている。更に決定的なのは「嬉しいって初めてだったから」というその後が続けた言葉だ。

内容から察するに、彼女は「嬉しい」という感情を今まで知らなかったのだと思われる。

今さっきの会話で初めてそれを知ったのだろうか。普通の人間が普通の生活をしていればそんなことはまずあり得ない。

よって、彼女の関わった「生物錬成」の実験が要因としてあがってくる。

「まさか、実験の代償で感情を…？」

そんなわけない、とフィストはすぐさま否定した。

錬成の実験がどんなものかはフィストの知るところではないが、人間の感情を奪って何ができると言えば、何もできるはずがない。

ならばなぜ、彼女の感情が欠落しているのか。

そんな考えがぐるぐるとフィストの頭をめぐるっていた。当然ゴールには辿り着かない。

そして自身でも気付かないうちに、静かに、深い眠りへと落ちていった。

部屋には小さな寝息だけがよく響いていた。

恐らく誰も起きてはいないだろう深夜。そしてそれにかかわらず
たった一つ光る窓。人の影が動く。

温かみのある絨毯の上に革靴が二足立っている。

一足は落ち着かない様子で右と左を行ったり来たりしている。絶
え間なく継続するそれを、もう一足が溜息混じりに止めた。

「お前なあ、もう少し落ち着いて待てないか？」

「落ち着いていられるか！書類だけならまだしも、被験体まで損失
したんだぞ！」

「だからってそう動きまわってれば事態が好転するわけでもないだ
ろ」

そこでようやく動きが止まった。革靴は落ち着きを取り戻したよ
うに額の汗を拭き、スーツの乱れを直した。顔を見合せて、一瞬の
殺気が交差する。

ちょうどそこで入口の扉が開いた。

もう一足：こちらの二人よりも遥かに体格のいい巨漢の革靴が入
ってきた。つばの広いブラウンの帽子を深くかぶり、顔は分からな
い。

「待たせたな」

重みのある声だ。簡単に二人の顔を見た後、ゆっくりと窓の方へ
歩いて行く。

「それで、盗難に遭った書類と脱走した被験体の件だが……」

巨漢が顔を二人に向けた。僅かに見えるごつごつの顎の輪郭線か
ら威圧感を感じさせる。

「は、はい！えーっと……」

部屋の隅に立てかけてあった鞆から、一人が慌てて一枚のメモを
引っ張り出した。

「まず現状ですが、実験は順調です。このままいけば、おそらくあ

と数週間で最終テストを完了できるかと」

再び額の汗を拭った。巨漢から放たれる威圧がより一層汗を噴き出させている。

「しかし先日何者かが研究所に侵入しまして、王室への報告書を盗まれました。更に今朝、例の実験の被験体が脱走しました。その都度追手を送り込みましたが、いずれも見失っています」

「なるほど」

「マスコミへの漏洩を危惧しまして各新聞社等に監視をつけていますが、今のところそのような報告は……」

「報告書を盗んだのは」

言葉をさえぎるように巨漢が喋りだしていた。

「フィストという少年。被験体も同時に彼の元にある」

抑揚を一切付けていない。おかげでますます震えあがりそうな声に感じられる。

二人揃って啞然とした顔をし、暫時は空間が固まったと錯覚するほど全てが停止した。それから片方が感づいたように返事をした。

「わ、分かりました！早速その少年の住居へ捜索員を送ります！」

「ああ、最後に」

逃げるように部屋を出ようとした二人を巨漢が止めた。そして「生死は問わない。漏洩の防止が最優先だからな」と付け加えた。

「分かりました。情報ありがとうございます！」

二人の姿は慌ただしく扉の向こうへ消えていった。

遠くなる足音を聞きながら、巨漢の視線は窓の外を向いた。

こぼれた黒い絵の具があらゆる物の形を分からなくさせている。

息を吐くと、白い曇りがその様子を覆い隠す。

なんとなく、独り言が漏れた。

「ヴェクス……これで本当にいいのか？」

(ん…?)

気がつく、真っ白だった。決して間違った表現ではなく、本当に真っ白以外何もないのだ。世界が白くなったのか、自分の目が白くなったのか、判断はつかない。とにかく彼は、その中に横になっている。

ああ、これは夢だ、とフィストは気づいた。体の感覚が変で、あまりにも現実離れたその空間は夢以外の何物でもない。

可笑しくなったのか少し笑い、それから起き上がった。

立っているのに体の感覚は横になっている。それもまたフィストの笑いを誘った。

辺りは霧がかかったように白く、一メートル先はもう見えない。とはいっても、一メートル先がどこだ分からないのだから本当は見えているのかもしれないが。

そもそも、横だけでなく下まで真っ白いのは理由が不明だ。今にも下から手が出てきて引きずり込まれてしまいそうな感覚を覚える。が、これは夢なのでフィストにとってもどうということはない。

静かだったのだが、遠くから賛美歌が響いてきた。

初めは遠慮がちに、そしてだんだんはつきりと。

そしてそれとともに、何かが近づいてくる。

目を凝らしてそれをよく見てみた。

女性だった。腰まで伸ばしていた長い髪、二重の少し垂れた目、細い腕。優しいで清楚な顔が、大らかな視線をフィストに向けていた。

移動を止め、にっこり微笑む。それは、まだフィストの記憶にも鮮明に残る顔立ちだった。

母親、だった。六年前、この世を去った。

チュニツクは着ていないが、お気に入りのブラウンのTシャツを着たままずとそこから動かない。

フィストは、駆け寄って抱きつきたかった。しかし、足が何かに縛られたように動かない。呼ぼうとしたが、声が出ない。せめて夢だけでも、そう思っても、二人の間は縮まらなかった。

ただ彼女はずっと、こちらに笑いかけていた。

彼女の視線がフィストからずれた。夢の中でもそれははっきりと確認していた。

少し前を見ているようだ。その先を、目で夢中で追った。

ブラウンの服、ブロンドの髪、空色の目。

そこに立っているのは、ユリス。

母親に視線を戻す。それを聞くような顔を見ると、母はにっこり笑った。

言葉こそないが、フィストは何を自分に言いたかったのかすぐに理解した。

フィストも何か言おうとしたが、唇が動いただけで何も音にならなかった。

そのまま、彼女の姿は消えた。白い中に霞み、そしてゆっくりと、見えなくなった。

たった一つと思われた暗闇の街の中の明り。しかし、街はずれの小屋：傾いた倉庫のようなその窓から、僅かな光が漏れていた。

揺らめくランプと、その光を受ける影。

刃物を研ぐ定期的な音が、不気味な雰囲気にも更なる味わいを添えていた。

二十センチはあるナイフ。気がつく、それはもう短剣のような鋭い色を見せていた。揺れるランプの光を鈍く反射し、その喉の渴きを表しているようだ。

研ぐのをやめ、刃をまじまじと見つめる。

「明日は…まあなんとかなるか」

落ち着いてそういう彼の顔は哀しそうでも楽しそうでもなく、無表情だった。その本心が外の闇に覆い隠されてしまったかのように。

ほんの小さかった風の流れたち。今にも一つになり、颶風となって地上を荒そうとしている。

6話 曇天の朝

外は未だに薄暗い。時計はまだ四時半をさしている。無論朝の、だ。

窓の外は夜と呼んだ方が的確なほど闇色が濃い。更に空が雲に埋め尽くされているので日が昇っても十分な明るさは期待できない。

部屋の中はユリスの寝息以外の音が存在しない。唐突に目が覚める要因など見当たらない。

あまりに早く起きてしまったので、フィストは寝床から抜け出すこともせずに体だけを起こして時間の経過を待つことにした。

ユリスがフィストの方を向いて寝ていた。安心しきった様子でリズムよく寝息を聞かせている。その寝顔だけを見ればいたって普通の女の子で、起きている時の不思議な印象はあまり受けない。

「ん…」

ユリスが枕にしがみついてそこに顔を埋めた。布の擦れる音が暫く続いたあと、また寝息だけが唯一の音になる。

静かになったユリスを見つめ、フィストは無意識のうちに笑みをこぼしていた。

「…誰…？」

「え？」

「…」

聞き返したが返事は無い。どうやら寝言のようだ。

「なんだ、寝言か…」

溜息をつく音が部屋に広がった。

「何を…」

顔が枕に伏せられているのでくぐもってよく聞こえない。聞き返

しても返事が来ないのは分かっているので、フィストはその寝言に反応しない。

「…うう、ん…聞こえない…」

「…どんな夢見てるんだろう」

「…フィスト？」

「え？」

「…」

返事は無い。今のも寝言らしい。

思わず返事をしてしまい、フィストは頭を掻きながらユリスから視線を外した。

窓から外を覗いた。

雲の詰まった空。雨の降りだす様子はないが、冬に日光が得られないのはなかなか辛い。風がほとんど吹いていないのが救いか。

ユリスが起きたらフィストはすぐにここを出るつもりでいるのだが、やはり肌冷える外に自ら出ていくのはあまり気が進まないらしい。

鳥の鳴き声が聞こえてくる…雀とカラスだ。

雀は集団になって休む暇もなくやかましい囁きを続けていて、カラスの方は時折抑揚のない鳴き声を遠くに飛ばしている。他の仲間と会話をしているのだろう、その鳴き声のすぐ後に更に遠くから別の鳴き声が聞こえてきた。

「……か」

「？」

外から男の声が聞こえてくる。

まだ外を出歩くには早い時間帯なので、フィストにはその声の存在が不自然に思えた。同時に嫌な予感がフィストの脳裏をよぎる。

さらに耳を澄ます。

「……たしか、この辺だったな」

「ああ、だが同じような家ばかりで見分けがつかないな」

「被験体と窃盗犯：フィストといったか？早く見つけて始末しよう」
その会話は、どうやらフィストの家の前で交わされているらしい。
フィストの嫌な予感当たってしまったようだ。

まどろんでいたフィストは意識を叩き起こし、布の中から跳び起きた。そしてテーブルの上に置いてあった逃走用の鞆をつかむと、ベッドに駆け寄ってそこで眠っているユリスを慌てて起こしにかかった。

「ユリス、起きて。早く逃げよう、追手が来てる」

「ん：？」

ユリスは意外にもすんなり目を覚ました。フィストの逼迫した様子に状況をすぐ理解し、ベッドから飛び降りる。

「裏口があるからそこから出るよ」

「わかった」

言い切るより早く、二人は部屋を飛び出して裏口へと走っていた。玄関をノックする音が耳に入ったが、まったく気に留めていない。

「：あ、ちょっと待って」

裏口のすぐ前でフィストが足を止める。そして少し後ろに置いてあったタンスに駆け寄り、引出しを開けて中をまさぐり始めた。

家の中にだれかが入り込んだらしく、先ほどまで二人のいた部屋から物音が聞こえてくる。それが聞こえていないはずもなく、焦りが二人の余裕を奪っていく。

「フィスト？」

不思議に思ったユリスが近づくのとフィストが引き出しを閉じるのは同時だった。

「ああ、ごめん」

振り返ったフィストの手には、小さめのペンダントが握られていた。

細かい装飾は無いが、菊に似た花が彫られている。これにも服と

同じように大小さまざまな傷がついていて、どういったものかは容易に想像がついた。

「これだけではどうしても持っておきたくて…お母さんの一番のお気に入りだったから」

「…そう」

フィストはそのペンダントを胸ポケットに納めると、裏口を少し開いて外の様子を伺い始めた。

「…ねえ、フィスト」

後ろからユリスがフィストを見つめている。

「なに？」

「…：ううん、なんでもない」

首を横に振ったが、外を気にしているフィストには分かったのだろうか。

フィストがユリスの腕をつかみ、外に飛び出した。ユリスは少し躓きそうになりながらもそれについて走って行く。

曇った冬の早朝は、やはり体を貫くほど気温が低い。

二人の吐く白い息は、足音を携えて街の中を走り抜けていく。

暗がりの街灯の下で二人の男が話し合っている。

身長には大きな差があるが、二人ともブラウンのトレンチコートに中折れ帽で身を包んでいる。

「駅には一人も張らせないのですね？」

背の低い男が相手に疑問符を投げかけた。

高い男は何も言わず、帽子を一度被り直した。まだ暗く、街灯の下と言ってもその顔は影になっていて見ることが出来ない。

「脱出可能な他の経路には大勢張らせておいて、何故ここだけ？」

「…奴等がいる」

高い男がぼそりとつぶやくと、低い男も「ああ、そうでした」と納得した様子で頷いて見せた。

「見境のない奴等だ、あまり無駄な犠牲は出したくない…」

「私たちに同情してくださいるのですか？」

「…余計な人手を割きたくないだけだ」

それ以上は二人とも無駄口をたたかず、低い男が軽く一礼すると高い男は街灯の下を離れていった。

低い男はしばらく街灯の下で相手の去る様子を見送っていたが、その姿が見えなくなると反対方向へ踵を返した。

太陽の姿は厚い雲に阻まれて見ることは出来ない。しかし、空の色は次第に明るさを含み始めている。

夜明けが近い。

6話 曇天の朝（後書き）

読んでくださっている方、ありがとうございます。

夏休みが終わると書く暇が少なくなると思い、ゆっくりとは言い
ましたが更新させていただきました。

9月に入ったらもっと遅くなると思うので今のうちに頑張ってお
こうと思います。

挿入話 事務所（前書き）

短いです。1000字ありません。
だって挿入話ですから。

挿入話 事務所

お世辞にも広いとは言えない部屋の中には、そこそこ大きめの机が五つ並んでいる。しかしその内二つは未だに持ち主が現れていない。

ならばなぜ置いてあるのか、それはこの部屋の主以外知らない。その主も、この部屋をここ三ヶ月ほど留守にしている。

机の並ぶ横には接客用のテーブルとソファが並んでいる。

黒いソファは鈍く光沢をもっていて、無駄に高級感を漂わせている。黒っぽい木製のテーブルも同様の状態だ。

一人の女性がそのソファの上で仰向けになっていた。

濃いブラウンの髪はまっすぐ腰の下まで伸ばされているが、横になっているためあちこちに広がり放題になっている。また、その服装はなぜか灰色の作業用つなぎになっている、寝そべっているソファの雰囲気と全く合っていない。

「はー、疲れたー：デスクワークはもううんざりだよ」

溜息と同時に女性が独り言を呟いた。そして空中で足をぶらぶらさせ始めたが、それにも飽きたのか唐突にぱたりと落ちた。

「だらしないですよ」

「：あ、おかえりー」

ソファのすぐ横に、別の女性が立っていた。

髪はややウェーブした銀色で、後ろでまとめて首筋まであるポニーテールにしている。

こちらはフレンチベージュのシャツにグレーのタックスカートを身にまとい、それなりに場の雰囲気には合っている。

「だって一日中書類整理とかさ、行動派の私には絶対向いてないんだよ」

銀髪の女性に気力のない小言が飛来する。

「しょうがないじゃないですか、アーミルさんがいないんですから」
「：ていうか、代わりにやって？」

「私も忙しいんですけど…あ、そういえばアーミルさんから手紙が来てましたよ。明日の昼ごろ港に着くそうです」

銀髪の女性は思い出したようにシャツのポケットから封筒を取り出した。

封は切られているので、銀髪の女性がすでに読んだようだ。

「あー…帰ってくるのか」

「みたいです」

「：また去年みたいなことになってるかなあ」

「さあ…」

二人はお互いに苦笑いを見せあう。嬉しいには嬉しいが素直に喜べない、そんな表情だ。

妙な笑い声が二人分部屋に響く。

「そっか、帰ってくるんだあ…あはは…」

「ふふ…」

ほんの一瞬、時間が止まった。

「代わって！」

「すみません！」

体を起こした時には、銀髪の女性はすさまじい勢いで部屋を飛び出していた。

7話 青い鷹

ブルーイーグル。

アルモード州の東西の大都市、セントヘイムとテッドフォースを結ぶ急行列車で、セントヘイム駅に停車する唯一の国営鉄道の象徴でもある。

約五十時間をかけて一往復する。

開通当初はセントヘイムで採掘された銀を西方へ運ぶ運輸経路として利用されていたのだが、州の中心に広がるレンバルト砂漠を横断する貴重な手段としてむしろ一般人に喜ばれた。そのため、鉱山が閉山されて二百年が過ぎた今でも現役で州の端から端へと行き来している。

しかし、建設は難航し作業員に死者が出た経歴があり、その怨霊が乗客を砂漠へ引き込むという都市伝説もある。

普通なら利用客が少なくなっていそうだが、砂漠を疾走する姿がまるで青空に同化した鷹のようだと、その雄姿に憧れる者は少なくないという。

太陽が昇ってきたようで、世界は完全に夜の顔を失っていた。多くの人々が街の中を行きかい、雲の犇めく真っ白な空もなかなか明るい。

気温の上がる要素は一つもないはずなのだが、何が作用したのか朝の冷え込みが嘘のように暖かみがあった。

気味が悪いくらいに。

さすが有名急行と言うところか、朝早くにもかかわらず大勢の人

が青い鷹を見ようと集まり、ホームはなかなかの賑わいを見せていた。すでにホームで次の発車を待っている青い鷹を数々のフラッシュが照らしつけている。

ただし、実際に乗る人間はあまりいないと思われる。

というのも、最近になってからまるで都市伝説に合わせたかのように列車で妙な事件が発生するようになったのだ。幸い大事には至っていないが、大抵の人は砂漠を迂回して二点間を行き来するようになっているのである。

これに乗るのは、物好きか、よほど急いでいる人だ。

今回もこれに乗り込む人間はあまりいないようで、乗車する人影は疎らだ。

仲の良さそうな老夫婦。小さな鞆を一つ抱える男。ブロンドの女の子と、それより少し年上らしい男の子。紺色の髪の女の子とスーツの男の二人組。：目立つ乗客はこんなところだろうか。

発車時刻が近くなってきたころ、車掌の制服に身を包んだ二人の男が乗降口の前で話し合っている。

年は同じくらいのように、特に先輩後輩の関係は無いようだ。

「：ホントに利用客減ったなあ」

「まあ実際に妙な事件が起きてるわけだし、躊躇う気持ちは分かんんでもないよ」

「俺が子供の時は、これに乗るのが一つの夢みたいになってたんだけどなあ。当日に乗車券が買えるくらいになるなんて」

「：それってさっきの子供二人か？あの二人は個室じゃなかったはずだが」

「個室も空き部屋があるだろ。仕事じゃなかったら俺が使ってる」
「ああ、同感だ。：お、そろそろ時間かな」

腕時計を見た車掌が慌てたように乗り込むとほぼ同時に扉が閉じた。

外の景色が後方へと流れていく。

街並みがしばらく続いたが、その数が少なくなってきた次の瞬間には視界が急に開けた。列車がレンバルト砂漠に入ったのだ。

大地は黄色というより濃い茶色で、断層のような大地の階段が上り下りを繰り返しながら地平線の果てまで続いている。砂漠と言う名を冠してはいるが、その大地は砂漠と言うよりも乾燥地帯と呼んだ方がふさわしい。

曇っていたはずだが、空を覆っていたはずの雲はいつの間にか後方に去り、日が高く輝いていて外の暑さは想像し難い。

フィストは窓枠に頬杖をつき、ぼんやりと外を見ていた。その中に何も見出すことはできないが。

ちらりとユリスを見た。フィストと違って礼儀正しそうな姿勢で長椅子に浅く座り顔だけを窓に向けて外を見ていて、その形からまるで動かない。その様子からは、「嬉しい」は勿論人としての殆どものが欠けているのではないかという疑念が生まれてくる。

欠落というよりは、初めからそれがなかったのかもしれない。

フィストは、昨日にも増してユリスが被験体だった実験のことが気になっていた。

いったいその実験の果てには何が待っているのか。

人々の希望か、絶望か。

更にそれに加え、ユリスの行く末も気にしていた。

フィストは駅に着く直前、行くあてがあるなら送っていきと彼女に言った。

しかし彼女は、行くあては無い、フィストと一緒に行きたいと言った。

フィストも西へ着いたところで行くあてなど無いのであまり人のことは言えないのだが。

フィストは引っかかりを感じたが、仕方なく彼女も西へ連れて行くことにした。

二人分ともなれば列車の乗車代も座席分しか無かったが、二人ともそれに関しては特に何も思っていない。

母の残像がフィストの目に浮かんできた。昨夜の夢が嫌にはつきり思い出される。

最後に見せた笑顔を思い出すと、切なさかフィストの胸に込み上げてきた。

父も母もないまま、フィストはこの六年を生きてきた。

昔はよく泣いていたのだが、今はもうその現実には涙を見せることもなくなっていた。

忘れかけている親のぬくもりへの憧れがあんな夢を見せた。フィストは自身にそう言い聞かせていた。

しかし、夢の中にはユリスもいた。親のぬくもりへの憧れとは関係ないはずの存在。

会ったばかりの人が夢に出るのは逆によくあるのかもしれないが、母が自身に言った意図に対する納得のいく理由を見つけられずにいる。

深層心理が云々だと強引に理解したつもりでいるのだが、彼女が自分にとって特別な存在であるという思いも捨てられないでいた。

彼女を守らなければならない。

そんな使命感が、僅かだがフィストに生まれていた。

外の段差が高くなり低くなり、時に視界を塞いでは瞬時に後方へと流れていく。

一体自分とユリスはどこに向かっているのか。

そんな不安も、窓の外で遠のいていった。

フィストが頬杖をつきながら外を見ている。違うものを見ている可能性もあるが。

ユリスもフィストと同様の状態だったのだが、足に何かがぶつかる感覚で意識がそちらに行った。

ガラスのような透明感のある小さな玉。

摘みあげて覗くと、外からの光が屈折して見える。風景も車内も複雑に歪み、さらに辺りを見回してみようと横を向く。

広がった女の子の顔がそこに映った。

摘まんでいた手を下ろすと、大きな瞳がまっすぐにユリスを捉えていた。そして無言で、微動だにせず、その玉に意識を集めている。ユリスと同じ年くらいの見た目だが、妙に大人じみた表情をしている。

「…あ、ごめん」

少女の要求を察して持っていた玉を差し出す。

少女はしばらく動かなかったが、二、三步近づいて掬いあげるように両手を差し出した。だが、その瞳は相変わらずユリスを捉えて離さない。

摘まんでいた指を玉から離す。受け取った手はゆっくりと戻っていったが、なおも少女は固まったようにユリスを見続けていた。

ユリスは対処に困った。もう用事はないはずのユリスに、何かを求めるような視線を浴びせている。親のやってきそうなものだが、連れ戻しに來ない。

「…えっと、その…」

何か言おうとして口を開く。しかし、言葉がまとまらないうちに瞳の中の雫に気づいた。

頭が下を向き、無表情だったその形が一気に崩れた。すすり泣く声が耳に入る。

更に間を置かず、すすり泣く声が確かな泣き声…ようやく幼女ら

しい振舞いになった。

ユリスにとってそれはどうすればいいか分からない事態だった。ただ、泣き声の節々に聞こえる「死にたくない…」という言葉がユリスの心の奥の何かを大きく揺らした。

ユリスはひとまず自分の席に座らせて落ち着かせることにした。

座った後も少女はしばらく泣き続けた。体を小さくして、何度も目をこすっていた。

それでも次第に声が終息に向かっていき、大きな溜息を一つすると完全に泣きやんだ。

無論それまでの間、ユリスは何をすることもできずに少女の横に立っていた。一応は心配そうな顔をして彼女をずっと見ていたのだが。

こんな時にどうすればいいのか。ユリスは、その少ない知識の中を模索した。

「何で泣いたの？」

泣いた原因を取り除くという結論が出た。やや棒読みではあるが、その一言がユリスの精いっぱい心の遣いだった。

少女はうつむいたまま暫く黙っていた。列車独特のリズミカルな震動が沈黙に拍車をかける。

ユリスがもう一度聞き直そうとしたとき、ようやく口を開いた。

「私：死んじゃうの」

ユリスははっとした。

こうもあっさりとそんなことを口に出来るのか。そもそも、なぜ彼女はそんな事を言うのか。

少女は更に続けた。

「この列車で死ぬ：私が見えたの」

「：！」

「私、未来が見えるの、見えてしまう：信じてもらえないだろうけ

ど」

ユリスの中に、そこでどう返したらいいのかという答えは無かった。

あれだけ泣かれてしまうと、ユリスにはあれを嘘と言い切ることが出来ない。

「：名前を教えて？」

ベストな答えが見つからなかったのか、ユリスは咄嗟に名前を聞いた。その質問が意外だったのか、少女が顔をあげてユリスをじつと見つめた。

「：名前？」

いぶかしそうな顔で確認を求めてきた。名前を聞く理由が分からないといった内心が表情に表れている。

「うん、名前」

「：ルフィーネ」

少女：ルフィーネは、まだ目は赤いもののだいぶ落ち着いたようだ。

しかし、名前以降の言葉を発する気配は無い。名前から会話を広げるのはユリスには無理難題なようで、こちらも黙り込んでしまった。

二人とも若干下向きになったままそれ以降の会話を続けられない。定期的な揺れが時を刻む。

ルフィーネが長椅子から降りた。

「：ありがとう。あと、ごめん」

黙り込んでいたユリスは慌てて首を縦に振る。

それを見たルフィーネは一度にこりと笑うと、列車の後方へ歩き始めた。揺れる車内を重い足取りで歩いて行く。

「きっとあなたには：いいことがあるから」

小さい声だった。ユリスは何と声をかけていいのか分からず、去っていくルフィーネの後頭部をただ見つめていた。

沈黙の中、ルフィーネの姿は後続車両へと消えた。

大事そうに、透き通った玉を持って。

自分には何か欠けている。

ルフィーネとの会話を通して、ユリスは自身の無力さを痛感していた。

右拳を強く握りしめる。もやもやした胸の奥の何かが、ユリスにそうさせた。

余裕を持って配置された長椅子は殆どが空席になっている。

頬杖をついてうたた寝をする少年、背もたれに体重を任せて寝息を立てる少女のほかには、その二人と距離を置いて席についている男しかない。身をかがませて小さな鞆の中に手を入れている。

普通ならば財布や本などの入っていそうなものだが、中にはぎしりと雑巾のような布が詰まっているだけだ。

何かをくるむように押し込められた布の中へ男の手が入っていく。いくらかあさっていると、突然男の眉が鋭く反応をした。手を引っ張り出してみると人差し指に赤い筋が走っていた。

源泉のように赤い水が湧き出して静かに指を伝う。

それを見つめる男の顔は、終始無表情だった。
あまりにも哀しいほどに。

「あ、そういえば思い出したんだけど」

「何を？」

二人の車掌が話し合っている。

「トレンチコート着た男からお前に伝言頼まれたんだよ」

「…なんて？」

「えーっと：『柵から逃げた羊一匹、盗んだネズミ一匹の確保。詳細は追って報告』：って、どういう意味だ？」

「あー、なるほど：いや、なんでもない。ちょっとバカ騒ぎしないかって誘いだよ」

「へえ：：？」

青い鷹は茶色の大空を一直線に駆け抜けていった。

8話 青い心

外を流れる茶色い景色がゆっくりと飲み込まれていく頃、僅かな乗客たちは殆どが食堂車に集まっていた。有り余った空間のせいで、ただでさえ暗く寂しかった車内はますます闇色が滑り込んでくる。窓から射していた僅かな光も、今は地平線の彼方にあつた。

他の車両の静寂が嘘のように、食堂車は明るく賑わっていた。乗っている人数がもともと少ないので、通常よりも明るいことはないが。

それでも、食堂車には未だに闇が差し迫ってくる気配はない。人々はその不気味さを忘れようとするかのように、何ともなく騒いでいるようだった。

テーブルは沢山あるのだが、たった二人でテーブルを占拠するのは気がひけたらしい。

カウンターがあつたのでフィストとユリスはそこに並んで席についていた。

二人分の切符で所持金が底をついたわけでもないのだが、それでも二人ともあまり注文はしていない。頼んだのはこの食堂車でもかなり安いうちに入る二品だ。

今しがた目の前に置かれた料理を、二人はただ黙々と食べている。何も話さないでいるのはどう話し出しているか分からないからなのだが、ユリスはもともと積極的に話をしようとしただけだし、ルフィーネの言っていた事をフィストに話すつもりも毛頭ない。

フィストは、ユリスには実験の意味は知らされていないだろうと考えているので聞いても仕方がないと思っているようだ。

フィストの横にスーツの男が一人座ったが、二人とも気に留めな

い。

「兄妹で旅行ですか？」

フィストが自分の皿を空けると、カウンターの向こう側でコップを拭いていた車掌が話しかけてきた。

「いや、兄妹じゃないんですけど…まあ旅行みたいなものですね」

「羨ましい限りです。外の景色はつまらないかもしれませんが、満喫していただくさいね」

まだ若い男のようだ。コップを拭く姿は様になっているが、重ねた年月が醸し出す独特の雰囲気はまだ持ち合わせていない。

どうやら、二人が無言でいる様子を喧嘩か何かと勘違いしているようだ。

「きれいな列車ですね」

「そうですね。変な噂こそたっていますが、このブルーイーグルは私たちの誇りですよ」

「変な噂ですか？」

「あ…お客さんは知らなかったんですね」

車掌の顔に一瞬暗雲がかすめたのも合わせて、それはフィストの興味をそそった。

ユリスはまるで他人事のように何の反応も示さず、食べ終わった自分の皿をただ虚ろ気に見ている。車掌とフィストの会話を聞いているかは判断がつかない。

車掌はやや深刻そうな顔になって更に続けた。

「この列車の中で人が怨霊にさらわれるという都市伝説ですが、実は霊などではなくて、乗車した人間が無差別に殺して捨てているのでは、というものです」

「……！」

ユリスが顔をあげた。目が覚めたかのように驚いたような顔をして車掌の顔を見つめてきた。

ユリスが驚いたのは、やはりあの事との関連のせいだろう。先刻

からうわの空だったのもそのことがずっと心に残っていたからで、ちらと耳に入った車掌の一言が不安を一気に拡張させてしまった。

急に自分のことを凝視され、車掌も少し戸惑ったような素振りを見せた。それに追い打ちをかけたかったのか、ユリスは何かを言いたそうにしている。

「ユリス？ちよつと落ち着いて」

いつの間にか立ち上がっていたユリスをフィストがなだめた。不満そうな視線がフィスト、そして車掌にまで向けられたが、納得できない面持ちでゆっくり席に着いた。

「どうしたの？」

「：なんでもない」

気遣ったフィストも、ユリスはあっさり一蹴した。

ルフィーネは個室に一人で座り込んでいた。

自分の『監視』であるスーツの男も、先ほど食事を取るためににこの部屋を出た。

一緒についてくるよう言われたのだが、彼女はそれを断固として拒否した。彼はルフィーネへの影響力はそれほどもちあわせていないので、結局あまり出歩かないよう彼女に念を押してから出ていった。

ルフィーネは分かっていた。

彼が、もう戻ってこないことを。

そして自分の死期が近いことを。

彼女の頭には昼間にあった少女の顔が浮かんでいた。

決してにこやかとは言えない表情。だが冷たい印象は無く、むしろルフィーネを心から心配しているのがよく分かった。

良い人だったのかもしれない。しかし、慣れ合うことは死の恐怖を増大させる。だからあまり思い出したくない。

しかし、そう思えば思うほど結論は逆方向へ向かっていく。なぜこんな彼女に固執するのか…そう考えた時になって、ルフイーネは自分が彼女の前で泣き出してしまったことを思い出した。

「…もし、できるなら…」

もう一度会って話がしたい。

口に出して言うには、それはあまりに贅沢な望みだった。

「…あ」

フィストの視界が闇に閉ざされた。正確には、食堂車にいる全員の視界が一瞬真っ暗になったのだ。車内の賑わいは、不安の混ざるただの喧騒となる。

十秒ほどすると、先ほどと同じ視界が乗客の目に戻ってきた。食堂車の明りは何もなかったかのように平然と輝きを保っている。

消える前と何ら変わりなく、全てがそこにあった。

いや、あった筈だった。

フィストもユリスも、そのほんの十秒のせいで一瞬止まった。だが、それぞれが不思議そうな顔でお互いを見ただけで彼らの中でのその出来事は片付いていた。

「停電でしょうか？」

車掌が首をかしげる。

「今時珍しいですね。意外と誰かが電源を切っただけかもしれないかもしれませんよ？」

フィストが笑うと、車掌もつられるように笑った。そしてフィストは何の気なしにユリスと逆の方を向いた。

隣にいた男の。

首がなかった。

確かに、消える前にはあった。そこに座って酒を飲んでいた。そんな筈はない、と言いつけさせるフィストの足に何かが転がってきてぶつかった。

それは、そのことが事実であることをフィストに知らしめていた。むしろ、たった今、それがそこから降り落ちたという証明になった。

それをはっきりと目で確認した時、思い出したように切り口から赤いシャワーが噴き出した。

死の象徴そのもの。

いま聞けば、ルフィーネの予言を疑う者はいないだろう。むしろ、それ以上今の状況を的確に表している表現は無い。いつ自分の番が来るか、その一点のみである。

ユリスも、車掌に言おうとしていた言葉を口にするにはもう出来ない。

サイは投げられたのだから。

日の沈みきった荒地。悲劇と死は、その中を西へとひた走っていく。

大勢の人間の運命さえも道連れにして、無情なまでに休むことなく。

その道筋の延長線上、はるか西の海の上。これもブルーイーグルとあまり変わらない、運命の集合体。

東の赤いシャワーはおろか、この世のあらゆる地獄を忘れてしまったような馬鹿騒ぎ。

運命：そんなものは、今の彼らに伝わるほどの力を持たない。たった一人、東の水平線の果てを見つめる男を除いて。

彼は、今しがた見え始めた僅かな回る光の筋を見つけて心を躍らせていた。心臓の鼓動の高鳴りを確かに感じている。

彼が最後にそこにいたのは三か月前だ。

毎年のことだが、いきなり前触れもなくこうして旅に出ると皆に迷惑がかかるのは承知しているようではある。それでも彼は、今回ここにいなければならぬことが分かっていた。

彼の思いは、いつまでも同じ場所を巡回していた。

冷たい風が彼を巻き込んで突き抜けていったが、彼に伝わるものは無い。

仲間の顔、事の行く末が気になる、それが今の彼の全てだった。

ふとして左の掌を見た。

くつきりとある太い運命線。全ての運命が、その上にのせられている。

手を握りしめると、再び東の果てに視線を戻した。

船のやかましさ、西方の悲劇も、彼にとってはどうでもいいことである。

汽笛が鳴った。

彼は明日の朝にはその足でその大地を踏む「運命」にある。ただそれだけのことだ。

9話 夜想曲

信じることはできなかった。

目の前にいた人は、瞬時にこの世から消えた。

目の前から離れたのはほんの十秒足らずであつたにもかかわらず。断末魔のような殺しの音は何一つ聞こえなかったにもかかわらず。だが確かに、その人はその十秒足らずのうちに命を落としたのだ。奪われたのだ。

あんなに楽しそうにしていた人々も、今はもう誰一人としてにこりとも笑わない。カウンターに突っ伏している体を遠巻きに見つめて家族同士や夫婦同士でくつきあつて震えている。その惨状が自分たちのすぐ後ろまで迫っていると思い知らされている。

流石にユリスはフィストにくつついてくることはしなかったが、変わり果てた男を睨みつけて少し震えているようだ。

ユリスは勿論、フィストにとってもこんな人の死に様は初めてであることは言うまでもない。

「噂は本当だったんだ！」

乗客の一人が叫んだ。噂とは車掌の話していた物のことだろう。

それに呼応するように、集まっている乗客たちが絶望と悲しみの声を、そして集まっている車掌たちへあらゆる罵倒を口にし始めた。不安に駆られた人間としては当然とも言える行為だ。

それを車掌が何とか治めようと両手をあげてなだめている。

「皆さん、落ち着いてください！ 平常心を失うとそれこそ犯人の思うつぼです！」

「一人になると危険ですから、この車両から出ないでください！」
怒り、悲しみ、そして車掌たちの必死な叫びが狭い車両の中を交錯する。乗客の混乱がなかなかおさまらず、フィストとユリスは隅

でそれを見つめていた。

「ユリス：大丈夫？」

「……」

「怖いのか？…そうだよ、誰だって怖いよね、こんなの：」

「…これが…怖い。すごく不快で、嫌な感じ：」

自分でも分かっているのか、声が泣きそうなほど震えて出てきている。それを聞いていると、フィストにも得体の知れない不快感が覆いかぶさってくるように感じられた。

そこへ、一人の車掌が人混みをかき分けて出てきた。

フィストと話をしたあの若い車掌だ。そのまま寝台車の方へ向かっている。

焦っているような顔をしていたので、フィストは彼を呼びとめた。

「どこへ行くんですか？」

「個室に残っているお客様を呼びに行こうと思ひまして：」

「……そういえば」

ユリスが食堂車の中を見回す。

人が多くて見通しはあまり利かないのだが、そこにいる人間はあらかじめ確認することが出来る。

その中に、ルフィーネの姿がない。

「…ルフィーネ：」

ルフィーネが個室にいるのはすぐに予想が立った。そこから導き出されるユリスの行動は一つ。

「…私も行きたい」

いきなり言い出したものだから、車掌もフィストも驚いてユリスを見た。

「しかし…いや、まあいいでしょう。ただ、ちよつと数が多いので一緒に回っていただけますか？」

「…うん」

「あなたも」

「え？あ…分かりました。急ぎましょう、手遅れにならないうちに」

フィストもやや恐怖は残っているようだったが、力強く答えた。

夜が更け、月が砂漠を妖しく照らし出していた。

細い廊下は人ひとりがやっと通れるほど狭い。そこに個室の扉が等間隔で並んでいる。

外側の壁はガラスの面積を広く取っており、今でこそ夜なので空しか確認できないが、展望としては素晴らしい眺めを約束してくれる。

もつとも、今はそんな状況ではないが。

歩く度に足元の床が無駄に大きな共鳴を生み出す。三人の足音は、列車のリズムに合わせて不気味なまでのディソナンスを創り出していた。

明かりがちらつく。

幾つとも分らない扉を三人は一つ一つ確かめて回っていた。

あの混乱の中では、誰がいて誰がいないのかは確認が取れない。少々危険が伴うが、全ての部屋を見ておけばより確実に人の有無を確認できると思つてのことだった。

実際に、二車両を調べ終わった時点で三、四人を発見して避難させることに成功していた。

それでも終わりはまだまだ見えてこない。この列車はあきれるほどに長く続いていた。

フィストが慎重に扉を開け、僅かな隙間から中の様子を窺ってみた。そしてユリスがそれを心配そうに後ろから見ている。

簡素なテーブルが一つ、折りたたみ式の小さなベッドが一つ。ベッドが付属する壁にある窓からは漆黒の闇が見えた。それらの設備

でいっぱいになるほど部屋は狭い。

扉の隙間を少しずつ広げて体の中に滑り込ませる。そのフィストの姿を一瞬でも見失わないようにユリスもすぐに追って入ってくる。それを確認すると、フィストはすぐに部屋の様子を確認した。

あまり人が使っていたような形跡はない。荷物も置いていないし、未使用の部屋とも取れた。ただ、ベッドのシーツだけが人の潜り込んだ後のような乱れ方をしていた。

それも、無数の小さな何かを隠しているように見える。

気になったフィストは、シーツを開いた。

「……！」

「…なんだ、これ…!？」

鳥の物のような羽根が敷き詰めるように散乱していた。それも、そのあたりにいるような平凡な鳥の物ではなく、もっと巨大な、例えば人間が鳥のような翼をもっていた場合のその羽根ほどに大きく、気味が悪い。

鳥がシーツをかぶり、思い切り体を掻き回す情景がフィストの頭に映った。

「うわああああああ!!！」

車掌の声だった。

弾むように二人は部屋を飛び出した。そして、開いた扉の前で腰を抜かしている車掌の姿を確認した。

青ざめた顔をし、涙をにじませて『それ』を見つめている。

最悪の結果が先に見えてしまったように思え、『それ』がそうであるのか早急に確認したくなったフィストは、まず駆け寄って車掌を立たせた。頭を抱えて震える車掌の体重を壁に任せて、部屋の中を見た。

テーブルやベッドは勿論、部屋を形成する壁の下部までもが深紅のシーツで覆われている。

勢いよく、しかも一気に飛散したと思われる。

そしてその真っ赤なベッドのシートの上、最も赤の濃くなっている場所に、この部屋の客だったのだろう背の低い老夫婦がいた。

並んで横になり、恐怖にひきつった顔をして嘔然とするフィストを睨み返している。その腹部に、挟り取ったような大きな切り傷を抱いて。そしてその裂傷の中に、未だにとまらない赤の源泉をフィストに見せつけていた。

部屋に足を踏み入れると、赤いシートを波紋が伝った。靴が若干くつつくような感触とともに現状の恐ろしさが共鳴するように体に伝わる。

グロテスクな部屋にたまらなくなりフィストはすぐにそこを飛び出した。それでも、鼻を覆いたくなるような強烈な死臭がフィストにまとわりついていた。

この状況を最も深刻に受け入れていたのはユリスだった。死者の数が増えれば増えるほどルフィーネの生存は危ういものになっている。

「…車掌さん、一度食堂車に戻りましょう。まだ近くに犯人がいるかもしれません」

フィストが向きなおった時には車掌はだいぶ落ち着きを取り戻していたようで、フィストの提案に静かに頷いた。

「……」

フィストと車掌が来た道を急ぎ足で戻り始めたが、ユリスはその場に立ち尽くしていた。フィスト達の背中と通路のさらに奥を交互に確認している。

「ユリス？ 戻るよ」

「あ……うん……」

頷いたユリスはフィストの背中を追うが、その足はすぐに止まる。それから申し訳なさそうにフィストの背中を見つめ、逆方向に走り出した。

焦りのせいか、フイストも車掌もそれに気づくことは無かった。
列車が泣くように大きく軋んだ。

10話 望む未来

更なる犠牲者が出たことは誰にも伝えないことにした。これ以上の不安を増やさない方がいいという気遣いからだった。

食堂車の入り口まで来た二人は大きな溜息をついた。

「十時になりましたね…」

車掌が腕の青い時計盤を見て呟く。

短針が十を指していた。つまり、到着まではまだ七時間以上が確実にかかるということだ。

秒針がそしらぬ様子で時を刻んでいる。

「…あれ？」

フィストが後ろを見、そして辺りを見回してそわそわし始める。

「ユリスがいない」

フィストはてっきり自分たちの後ろをついてきているものだと思っていたのだが、目立つブロンドの髪はフィストの周りに見当たらない。自分のことで精いっぱいユリスにまで気が回らなかったのだと、先刻の油断を今更ながらに後悔していた。

「まさか、先程の車両ではぐれたのですか？」

一緒にいた車掌が声をかけてきた。年月を重ねた顔ではないが、この状況においても冷静な姿勢を保っている。

「大変だ…早く探しに行かないと…」

焦りで爪を噛んだフィストの肩に車掌が手を置いた。

「それなら私も一緒にします。お客様一人で危険な場所に行かせるわけにはいきませんからね」

勇気づけるような笑みをフィストに見せた。フィストもそれにきこちない笑顔で返す。

それから、今帰ってきた通路に再び向き合った。

「…？」

振り返る時に、袖から僅かに見える車掌の手首に赤い筋が走って

いるのが見えたが、駆け出す車掌にそれを聞く暇は無かった。

ユリスが見つけたとき、彼女はベッドに座り込んでいた。小さな部屋の中で、更に体を小さく縮ませている。そしてそのまま何をすることもなく、ただ遠くを見ていた。まるで何時とも分らない死の瞬間を待っているように。

ただ、ユリスが部屋に入ると少し明るくなった顔でユリスを迎えた。それを確認した時、ユリスは心を感じていた焦りが消えていくのが分かった。

「…ルフィーネ」

「あなたは…死ぬ前に会えてよかった…」

しかし、ルフィーネの様子は相変わらずだった。やはりその幼い顔は、いつでも泣き出してしまいそうなほど不安定だ。

そんなルフィーネにかけられるような言葉はユリスの知識の中には存在しない。だが、このままで良い筈がないということは分かっていた。

「大丈夫だって信じて…きっと生きていられるから…」

「ううん、もういいの。みんなに会えただけでも良かった。思い残すことは…ないよ」

そういった時の表情に、ユリスは一瞬哀の感情を見た。

「…本当に？あなたには、きっと何かある…と、思うよ」

そう言ったところで、ユリスは少し考えた。

思えば、自分の場合だったら思い残すことなどあるのだろうか。今までの殆どの時間はガラス管の中だった。その中に心残りらしいものは何もない。死ぬつもりは無いのだが、仮に死んでも後悔は無いのではないか。

それでも、普通の生活をしてきたであろう彼女にはきつと「生きる理由」があるはずなのだ。

彼女の生きる理由とは一体何なのか。知識をあさって適当なものを探した。

「えっと…将来の夢は何？」

「…将来の、夢…」

ルフィーネの表情が変わった。僅かだが、瞳に生への願望の輝きが宿る。それはまさしく、本来人間の持つべき光だった。

「…恥ずかしいよ…」

ルフィーネの視線がユリスから外れる。それでもユリスは自分の視線をルフィーネから外さない。

「恥ずかしくなんてないよ。大丈夫だから、ね？」

ルフィーネの頭が若干俯く。声がか細くなったが、そこから言葉が紡がれ始めた。

「……私…私ね……幼稚園の保母さんになりたいの」

「保母さん？」

それは、まだ幼い少女の無邪気な夢だった。ルフィーネは俯いたまま続ける。

「小さい子が好きだから…いっぱい一緒に遊びたいって思って…」

「…そう…いい夢だね…」

それから二人は喋るのをやめた。小さな部屋には線路の上を走る揺れと振動音だけが残る。

ずいぶんと間をおき、ユリスが口を開いた。ユリス自身も不思議に思うほど、その口は生き生きと言葉を発した。

「その夢、叶えよう。こんなところで死んじゃ駄目だから。あなたは生きるべきなんだよ」

ルフィーネは下を向いて動かない。また泣き出している可能性がある。

ユリスはそれから何も言わず、ルフィーネの返事を待った。

「でも私、もうすぐ…もうすぐ…」

「まずは自分から、生きようって思おう。その気持ちがあれば、未来はきつとかえられるから。あなたにはその力があるんだから」

ユリスはいつになく饒舌になっていた。ルフィーネを救おうと必死なのだ、その理由は本人が一番理解している。

「……」

ルフィーネの言葉が消える。ユリスはそれをじっと見守った。

「…ねえ、あなたのこと…もっと聞かせて」

それが、ユリスの次の一言だった。

「私の、事？」

「うん。ゆっくり話そうよ」

それからの時間は、とても長いものになった。

彼女の夢に始まり、好きなもの、嫌いなもの、今までの思い出…彼女の人生全てを彼女自身に思い出させようとするかの如く、ユリスはずっと話を聞いていた。

邪魔するものは、何もなかった。

「…あなたの人生って、すごく充実してるね。私、うらやましいよ…」

「そ、そうかな」

一通りの話が終わると、ユリスがそう言った。

「私やっぱり、あなたには生きてほしい」

「……」

ルフィーネはまた黙り込んだ。だが、その瞳にはもう死の色は無い。

代わりに輝くのは、その強い心。

「ありがとう」

「えっ……うん」

ルフィーネのお礼の言葉にユリスは若干たじろぎ、先程の饒舌が無くなっていることに気づいた。

「エヘヘ…本当によかった、あなたに会えて…」

しどろもどろになったユリスに、ルフィーネは明るい笑顔を見せた。今まで一度も見せなかった、可愛らしい顔だった。瞳からは雫が零れていた。

それを聞き、ユリスも嬉しそうにっこり笑った。

「…一緒に行こうか」

「…うん」

小さく頷き、ルフィーネが立ち上がる。

「…そうだ、まだあなたの名前を聞いてなかった」

名前を聞かれるのは二回目だったが、一回目のように嫌悪感を感じることが無かった。

彼女に教えられる名前がある。たったそれだけのことに、ユリスは深く感謝していた。

「ユリス」

優しい声だ。ユリスが生まれて初めて感じた感情が、自然と声をそうさせた。

「…ホントにありがとう、ユリス」

「うん」

軽いノックの音が二回。

「…?」

二人は顔を見合わせた。

フィストは車掌と別れ、手分けしてユリスを探していた。

丹念に調べて回っているが、今のところ入る部屋はどれも空き部

屋ばかりだった。今しがた入った部屋も、ベッドのシーツがきれいに整えてあったので空室と思われる。

できればユリスのそれは見たくない。そう思っていると、見つからなかった時も焦りばかりではなかった。

部屋を一通り見まわす。ユリスの姿は無い。すぐに部屋を出ようとしたが、振り返った途端頭に雑音が混じった。雑音はやがてまどまり、封筒を持ち出させたものと同一の『あの声』になって落ち着いた。

一瞬でフィストの頭には焦りが満ち溢れた。行くべき場所もはっきりと掲示された。

すぐに飛び出すと、一気に加速して全力で走り出す。

途中の扉はもう気にならない。まっすぐ、ただそこを目指す。

走りながら、懷に手を入れた。

汚れない、真っ黒な銃口。

美しかった青い車体も、今はもう見る影もない。ただそこには、醜い赤に染まった運命が積み込まれているだけだ。あるものは散り、あるものは未来を捻じ曲げられ、またあるものは散っていったそれに涙する。そこに命の輝きは、むしろ強く存在している。

運命は変えられる。だがこの車両に、自らの運命を変える強い覚悟を持つ者は存在しなかった。

たった一人を除いて。

11話 羽根が舞う（前書き）

今回は作者視点から残酷な描写が多いと思っています。

本当なら警告メッセージを出すべきなのでしょうが、とりあえず
ここで言うておきます。

11話 羽根が舞う

走っているフィストの目に、一つだけ開きっぱなしの扉が映った。おそらくは車掌の調べている部屋なのだろうが、そこは同時に頭の「声」の指し示す場所でもあった。

そこにユリスがいることは分かっているのだが、それと同時に『あそこ』で感じたどす黒い瘴気がより強くそこから流れ出ていた。全身でそれを感じ取っているフィストは、銃を持つ手に力を込める。彼はまだそれを使ったことは無い。

恩人の命を奪ったそんな物に、恩人の最後の形見に頼る。彼にしてみればそれは耐えがたいものでもあるのだが、もう迷いは微塵もなかった。

一気に扉との間合いを詰めた。

「車掌さん？」

扉を開けた先にいたのは、一緒に個室を回ったあの車掌だった。まったく動きのない笑顔でこちらを見ている。ユリスもルフィーネも、安心したように溜息をついた。

「ここにいらしたのですか。危ないですから早く食堂車に戻りましょう」

「：ルフィーネ、行こう？」

ルフィーネも笑って返したが、車掌が先ほどから辺りを見回しているのに気づいた。

何かを探している、というよりは何もないのを確認しているといった感じだ。何か聞こうとしたところ、逆に質問が飛んできた。

「ここには二人しかいないのですか？」

「一緒にいた人は：もう食堂車にいます」

ルフィーネが答えた。車掌はそれを聞くと、張り付いていた笑顔より少し深い笑みを浮かべ、唐突に「そうそう、お二人はフクロウの狩りをご存じですか?」と言った。

前触れもなく現れたフクロウの話。追いついていない二人をよそに車掌は続ける。

「フクロウは夜、獲物に気づかれないうにほぼ無音で飛び交うのです。勿論、攻撃の際も同様です。獲物はしばらくの間狩られたことにすら気付かないといえます」

二人にはこの話の真意が掴めなかった。だが、ルフィーネが車掌の右手が激しく震えていることに気づいた。

そして、服の袖に裂け目が入り、そこから見える腕：というより、腕の毛が緑色の羽根に変わり始めているのを確認し、言葉が途絶えた。

毛はすぐに変化をすすめていき、腕全体が濃い緑色になると、そこから長く鋭い爪が姿を現した。

ルフィーネはその光景に見覚えがあった。

車掌が一瞬、不気味に笑った。

「あ：危ない！」

ルフィーネがユリスををベッドに押し倒し、その上に庇うように被さる。倒されたユリスの視界はルフィーネの体に遮られ、一瞬真っ暗になった。

ユリスの耳に裂くような音が入った。ルフィーネの向こうに、腕が鳥のように変貌した車掌の凍りつくような笑みが見えた。

その巨大な爪には、明らかに紅い着色がされていた。

「：！」

ユリスの目に、それははっきりと映った。

自分を庇うルフィーネの背中から噴き出す紅蓮の飛沫が。

自身で支えていたのだらうルフィーネの体重が、ぷつんと切れた

ようにユリスにかかってきた。

「う……そ……ルフィーネ……！」

ユリスはすぐに起き上がり、その腕でしっかりとルフィーネを支えた。背中に走る裂傷にはその時によりやく気付いた。

ルフィーネは自身の意志による動きを持たず、ただ啞然とした顔でユリスに体重を任せていた。

背中への出血は止まらない。支えているユリスの両手はたちまち赤黒く染まっていった。車掌、いや怪物は、その様子を光悦の表情で見ている。

そこから音が伝わってくる。怪物の声だ。

「さあ、怖がらずに……あなたもすぐに、その子のもとへ送って差し上げますよ……」

次の爪が来る。何もできず、ユリスはただルフィーネを強く抱きしめた。

「……？」

一際大きな銃声だった。

ユリスには誰が撃ったか、そもそも銃声なのかさえ確認出来ないほど心の余裕がなかったが、目の前にいる怪物が胸のあたりを押さえて苦しんでいるのは分かった。

「ぐうっ……」

壁に手をつき、必死に体を支えている。

さらに二発、銃声がした。同時に怪物の左胸に二つの穴が空き、そのまま床に倒れ込んだ。その姿勢からもう動かない。

「ユリス、大丈夫……？」

部屋に飛び込んできたのはフィストだ。左手にまだ煙を吐く銃を持っている。ユリスの無事を確認すると安堵の息をもらっていた。

「よかった、無事みたいだね……その子は？」

ユリスがルフィーネに視線を戻した。

啞然としていた顔は血色が薄れ、目が閉じかけている。気がつく

と、ユリスの足元は完全に血に浸かっていた。支えている手からも、ルフィーネの体がどんどん冷たくなっていくのが分かる。

「フィスト…ねえフィスト！ルフィーネは助かるよね？まだ大丈夫だよね？」

その子の現状をようやく理解したフィストはすぐにルフィーネの状態を確認した。

フィストは素人だが、その背中の傷が致命傷であるのは誰の目にも明らかだった。俯き、ゆっくりと首を横に振った。

「そんな…ルフィーネ、ダメ…目を閉じちゃダメだよ！」

ユリスが強く揺すった。だがルフィーネの瞼は下がることはあっても、決して上がろうとしない。

揺するのをやめると、細々とした声が彼女の口から流れてきた。

「…これでよかったの…私も、その化け物とおなじ…」

「…違うよ、ルフィーネとそいつは違う！」

「同じ、なんだ…そいつも私も、実験台だったの…」

「実験台…？」

「そう…ううん、ユリスは気にしないで…」

声がますます小さく、聞き取りづらくなってきている。

その時が近いのは、誰から見てもおのずと分かる。

「…ユリス…あのね…」

「な、何…？」

「また会おうね、ユリス…」

死に顔は、明るい笑顔だった。

ユリスの涙は滝のように流れ落ち、彼女の頬を濡らした。幾つもの雫がルフィーネを飾り、その死を嘆いた。

「ユリス、この子は一体…」

少女の死体を抱いたまま動かないユリスに、耐えかねたフィストが聞いた。

「ひどいよ…ルフィーネは、将来、保母さんになりたいって…子どもとたくさん遊んであげたいって、あんなに嬉しそうに話してた…なの…なの…」

「……」

「うっ…うわあああああ！！」

ユリスはもう一度、ルフィーネを強く抱きしめた。そして、大声で泣き続けた。

フィストは、泣くユリスを初めて見た。会ってからまだ一度も感情らしい感情を見せていなかったのも、泣いているユリスを見るのはより一層心が痛んだ。

何とか励ましたくて仕方がなかったが、彼女にかけるべき言葉が見つからない。フィストはただ立っていることしかできなかった。

窓ガラスが割れた。鋼のような羽根が横殴りの雨のように車内を襲う。あまりに一瞬で、悲鳴が響いたのはいくらかの人間が串刺しになってからだった。溜まっていた恐怖心はこの時ピークを迎えた。「皆さん、落ち着いて！前の車両へ向かってください！まずはここを出て…！」

集まっていた車掌が指示を出しかけたが、その言葉が切れた。彼の首は緑の腕に切り落とされていた。

血の滴る爪が妖しく笑う。せいぜい三、四体だが、その足元には胴体と分離された首や串刺しの人間が幾つも転がっている。

それから逃げるように、残ったわずかな乗客が我先にと前方車両へ押しかけたが、その足も止まった。

前の車両からも爪の輝きが確認できたからだ。

次々と増殖するそれらに、人々の希望は消えた。
あとはもう、一瞬のことだった。

シックな模様を描く赤いカーペットは、踏むとにじみ出るほど血を吸い上げていた。今はもう、死体の山が血の海に浸っているだけだ。

その上に足が乗った。腕に緑の羽根を生やした男たち。彼らの腕の爪が既に真っ赤に染まっているのは言うまでもない。

男と言っても、顔以外は緑色の羽根が全身を覆っていて、人と言うよりは巨大な鳥だ。そこにいる男たち、その顔はどれもまるで焼き増したように同一で違いが見当たらない。

その眼光は、やはり獲物を狙う鳥のような鋭さに満ちていた。

「おい、これで全員か？」

一人が死体を足で転がしながら言った。その体内に残っていた血液が噴き出す。その左胸には、しっかりと羽根が突き刺さっていた。それを見る男たちの顔は、常に無慈悲な笑顔だ。

他の男が鍵爪のような手で死体を一つ持ちあげた。腕に力を入れると、何かの潰れるような嫌な音がして、液体にまみれた肉片が飛散した。一同がそれを低く下品に笑い飛ばす。

「まあ、たぶん全員じゃないだろう。まだ寝台車は確認してないしな」

「…：そういえば、俺らを呼んだやつが見当たらないな…：寝台車か？」
そう言い、分かりきったようにあたりを見回した。そして前方車両への扉を見つけ「お、あったあった」とわざとらしくはしゃいで見せた。そして再び一同が向かいあって低く笑う。

「やれやれ…：今朝からどうも様子がおかしいと思ったら、こんな事企んでたのか」

低い声だ。全員が笑うのをやめて扉へ向き直ると、一人の男がそこに立っていた。

閉めた扉に体をよりかけ、足元には小さな鞆が一つ置かれている。

男がその鞆の中に手を入れ、そして再び出すと、二十センチはあるだろう短剣のようなナイフが握られていた。

「何だテメエは？ やっぱり生き残りがいたか」

凄みを利かせて一人が近寄る。右手の爪をちらつかせているが、男はやや下を向いたまま微動だにしない。

「おいみんな、こいつは俺の獲物だ、手え出すなよ！」

冷たい視線が男に向けられる。それだけで人を殺せそうなほど鬼気迫るものがある。

「悪いな、今俺の爪は血を欲してるんだ。悪く思うなよ…死ね！」

「ふん」

「…!?!」

振りかぶる動作は一切なかった。しかし、その爪はナイフにしっかりと受け止められていた。金属のぶつかるような高音と、爆発と思わしき火花が散った。男が呟く。

「こっちこそ悪い。お前らみたいなクズに殺されるほど俺は愚かじやないんでな」

そう言い切ると、目の前の怪物を軽く押した。怪物はそれに反抗せず、そのあたりの死体のように床に倒れた。

その腹には、バツ印を描いたような裂傷ができていた。他の怪物たちはそれを見て少しひるんだようだ。

「こんなに殺しちまって…仕方ないのかもしれないが、到底許されないだろうな、これは」

「な…何を偉そうに！」

「偉そうも何も…実際偉いぞ、俺は」

「ハア？ 何者だテメエ！」

「…そうだな、俺は…」

そこで男の言葉が一度止まった。だるそうに溜息をつき、そして言った。

「通りすがりの、ただの死神さ」

男の姿が消えた。再び現れた時には、怪物の一人の前でナイフを

振り下ろしていた。

その怪物から赤い飛沫が噴出する。そして誰も何も言う暇のないまま、また男の姿が消えた。

それからは、それほど時間はかからなかった。

赤いカーペットは、もうどれだけ飲んだのか分からない。ただそこには、大量の人間の死体、そして巨大な鳥の怪物の死骸が転がっていた。

男は小さな溜息をついた。

「…むう、まさかこんなことに巻き込まれるとは…こりゃあ到着が遅れちまうなー。俺が最後の生き残りみたいだし」

独り言を呟いたあと、男は頭を掻きながら前方の接続部分に近寄る。

「こんな惨状、街に持っていけないよなあ…」

ナイフを振りかざす。

接続部に、その刀身が滑り込んだ。

「う……うえ……ふえ……」

もう大声で泣き叫ぶことはなかったが、泣き止んだわけではない。抑えきれない悲しみの声がいっまでも部屋を暗く染めている。その横でただ成り行きを見守っているだけのフィストに、出来ることは無い。

あえてあると言うならば、そこにいて彼女の傍にいてやることだけだ。

ユリスの涙はとどまるところを知らず、いつまでも流れ落ちていく。まるで、彼女が今まで蓄えてきた悲しみの感情をここで吐き出

しているようだ。

ユリスはそれを何かに当てつけることもせず、泣くことでしか感情表現を出来ていない。仕方のないことなのだが、フィストにとっては何よりも辛い。初めはユリスを直視していたフィストも、やりきれない気持ちに紛らわそうと窓に歩み寄った。

外の景色は相変わらず高速で後方に流れていく。地表は闇色に染まりシルエットでしか確認できないが、地面に触れている空に誰かがオレンジ色を流し込んでいる。オレンジは滲むようにそこから薄く広がり、闇色と混ざり合って暁のグラデーションを創り出していた。

「夜明けだ…もうすぐ到着かな」

それはユリスに言ったわけではなく、ただの独り言だった。今なお流し込んでいるように、オレンジ色はその面積を広げている。

その時、フィストは違和感を覚えた。

すぐに原因は分かった。外の景色がスピードを落としているのだ。まだ止まりそうではないが、駅はおろか街にも入りそうにない。

何が起きているのかフィストには分からなかったが、今のこの急行列車に乗ったまま駅で降りるわけにはいかない。なので、これはむしろ好都合である。窓を開けて外を見た。

やはりスピードは落ちているのだが、更にもうひとつ…後方の車両の様子がおかしい。こちらよりさらに早く減速している。

「車両が…離れていく…」

そう言ってみたが、その車両が戻ってくることは無く、みるみる減速していつて見えなくなった。

何故そうなったのかは確認のしようがない。だがフィストは、それによる危機を感じることは無かった。もはや危機は去っているのだ。

今のフィストの不安を仰ぐもの…それは、未だに泣き続けるユリス。

無論これから何をするべきかも不安ではあったが、フィストにとってそれはユリスのそれと比べてもひどく小さいものだった。

男は、かつてのつなぎ目から前方を見ていた。先行車両はとつくに姿が見えなくなっている。つい、溜息が洩れた。

「さて：ケーサツがくるまでここで待機かあ。朝には着くって言うちやったのになあ」

車両を出て、線路から離れて車両に向き直る。外見には全く問題なさそうだが、中は問題どころの騒ぎではない。

「：それまでこの惨劇と一緒に居ろと」

佇む車両を見て、思わず苦渋の意が言葉になる。頭を思いきり掻き、それから今の状況を見回してみた。

あまりにも静かだ。他に生物がいらないだけで、ここまで静かになるものなのか。

今あるのは、レールと車両だけだ。そこに立った一人の人間：感慨深い一言だけでは表現しきれない奇妙な感覚があった。

挿入話 数年前

父も母もなく、物心ついた時には白い服を着た無表情な人間たちに育てられていた。

しかし、彼女はそれを当たり前のことだと感じていたため特に悲しむこともなかった。

彼女：ルフィーネの記憶の中は、大半が物静かな研究所で占められている。

機械の起動音が絶えず耳に入る。薄暗く、誰一人言葉を発しないそこは不気味なまでに静まり返っている。数人の研究服たちが、その静寂の中で動き回って『何か』をしている。

大がかりな機械に向かい合う彼らは、まるで一切の無駄を省いたロボットのようその機械たちと向かい合って作業を進めていた。

まるで生き物がいるとは思えない空間。だがそこに、その空気にまったく馴染まない元気な声が響いた。

「おにーさん、あそんで？」

一人の研究服のズボンの裾を、その半分もない身長の小さな影が引っ張っている。首に雪の結晶の首飾りを下げた少女だ。殆ど機械と変わらなかったその研究服が、初めて人間らしい笑顔を見せた。

「ごめんね、今ちょっと手が離せないんだ」

その少女とかがんで話をしている研究服を、他の研究服も微笑ま

しそうに見ている。

「むー：ちえ」

少女は頬を膨らませると、すぐに振り返って部屋全体を見回した。他の研究服を見ると、それぞれが申し訳なさそうに苦笑いを見せている。つまりは自分たちも暇ではないということをお願いしたいらしい。

「：じゃあ、ここでみてもいい？ほかにいくところないし」

「：ああ、いいよ。でもルフィーネちゃんが入るかとはわからないけど」

振り返って笑顔で聞いてくる彼女に、研究服は再び笑みを見せた。

「あ：そうだ、ルフィーネちゃん。今日の実験はうまくいきそうか見てくれる？」

思い出したように研究服が聞くと、彼女はこっくり頷いてから目を閉じた。

意識を集中させる。すると次第に、真っ暗だった視界に脳からの映像が映り始める。

今いる場所と同じ部屋——目の前には巨大なスクリーンがあり、黒い中に三重の赤い輪が映っている。

一人の研究服が近くの機械をいじる。すると、三重の輪が乱れ始めた。乱れは一瞬で巨大になり、一本の縦線になってしまった。

映像はそこで消えた。

「：あかいわっかがみつつ：いっぽんのせんになった」

目を開けてそう言うと、研究服はやや残念そうな顔をした。

「：と言うことは、三次接触に問題があるのか：難しいところだな」
研究服は少し考え込んだが、目の前の少女の存在を思い出して再び笑顔になった。

「ありがとうね、ルフィーネちゃん。いつも助かるよ」

「うん」

頭をなでられ、ルフィーネは嬉しそうに笑った。

「実験は順調かい？」

いつの間に来たのだろうか、眼鏡をかけた研究服がルフィーネの後ろに立っている。その存在を確認するなり、ルフィーネと話していた研究服が表情を引き締めた。

「はい。ただ、今日の三次接触の部分で過触する可能性があります」

「…なるほど…」

唸るように言うと、その研究服は眼鏡を中指でかけ直した。

二人は真剣な表情でルフィーネの分からないことを話し合っている。いろいろと気に入らなかったのか、彼女はつまらなそうにして部屋を出ていった。

それなりに歩き、目にとまった扉に入った。扉に何か書いてあったが無視した。

壁に繋がれている人ではない何か。人型は取っているが、全身に生えた緑の羽根が人でないことを強調している。

それぞれが部屋に入ってきたルフィーネを睨みつけたが、すぐに顔を伏せてしまった。

「…こわいなあ」

そう言いつつもルフィーネは部屋の中に歩みを進める。『人もどき』達はもう顔もあげず、ルフィーネを睨みつけることもしない。その部屋の妙な感覚。恐怖をはるかに上回る魅力のようなものがルフィーネを引き付ける。部屋の奥…いちばん奥。そこに行かなければならない気がしていた。

「……？」

部屋の奥の壁にも、『人もどき』と同じように何かが繋がれている。ただし、左右の壁とは明らかに区別された一人がそこにいた。少女。ルフィーネよりも少し年齢の低い女の子。モミジのように赤い髪の毛を肩ほどまで伸ばし、新緑の瞳で正面を見据えている。

まるで感情がない。見ている、ただそれだけなのだ。

ルフィーネに気づいているのか分からないが、お構いなしと言ったようにルフィーネは彼女に近づいた。

「……」

瞳が僅かに動いてルフィーネを見る。感情不明のその子とは対照的に、ルフィーネは満面の笑顔をしていた。

「んー…あなた、なまえは？」

「……」

少女からの返事がない。表情も一切変化しないので何を考えているのか想像がつかない。

「ねえなまえは？」

「まだない」

「…ふーん？」

特に詳しく聞かず、ルフィーネはその少女に名前がないことで納得していた。

「なにしてるの？」

「分からない」

返答がこの上なく事務的だ。ルフィーネはそんなことは気にしていないのだが。

ふいに、後ろの扉の開く音がした。大きな男の声が同時に響く。

「あ！ルフィーネ、ここは駄目だよ！」

さっきの眼鏡だった。早足で近づくと、ルフィーネと少女をすぐに引き離してしまった。

「ここは入っちゃいけないよ。さあ、早く戻ろう」

「…むー…ちよつとまって」

まだ話足りなさそうなルフィーネは、眼鏡の腕をすりりとすり抜けて再び少女に向き合った。

「わたし、ルフィーネ！」

「……」

「おぼえててもらえる？」

「…多分」

眼鏡がものすごく焦っているが、ルフィーネは少女を放ってはおけなかった。自分を覚えてもらおうとしているのだ。

「じゃあ…これあげる」

首にかけていた雪の首飾り。それを外すと、少女の首にかけてあげた。

「わたしのたからもの。それでわたしのこともいだしてね」

「……」

少女は何も言わない。ただ、その首飾りを大事そうに握りしめた。
「首飾り…？ うーん…」

眼鏡が何かを考え込んでいる。しかし、大事そうに持っている少女を見て溜息をついた。

「まあ、実験に支障は出ないだろう。大事にきなさい」

少女の頭をなで、眼鏡はルフィーネを連れて部屋を後にした。

12話 『悲しい・楽しい』

定刻を過ぎても、青い鷹はホームに着くことは無かった。数十分ほどの遅れはたまにあるのだが、朝に到着するはずの列車が昼を過ぎててもやってこなければ当然何かあったと思うだろう。誰が言い出すでもなく、テッドフォース警察が搜索に乗り出していた。

列車は、殆どがそこで見つかった。もう街並みが目の前に迫る砂漠、砂漠の出口あたりで、死んだように停車していた。

乗っていたのは運転士が一つ——その胸部に羽根が突き立てられていなければ「一人」と数えたはずだが——だけだった。

それ以外は何もなかった。乗客リストのうちの誰一人、そこにはいなかった。

彼らが見つかるのは更に時が過ぎ去ったあとになる。怪鳥の死骸や血を飲み干した食堂車と一緒に。

少し高くなっているそこは眺望がよく、砂漠が近いにもかかわらず湧き出す水のおかげで緑が育っている。穏やかな時間が、街とこの間に大きな壁を作っていた。

緑の中に、哀しい色をした石が置かれていた。

砂漠の中で列車が停止したため、二人はそこで下車していた。

遅かれ早かれ、あの惨状は公のもとにさらされるだろう。その中で生還者ともなれば、どれだけ目立ち、奴らに居所を知られてしまいかかったものではない。

飛び降りて問題ないほどの速度になると、最後尾——切り離された連結部——から降りた。

勿論、三人で。

埋葬はフィスト一人で済ませた。あの部屋でなのがあったのかは分からないが、分からないなりに出来るせめてもの心遣いだった。

少女が石をのせた小さな土の山になったとき、そっとユリスを呼んだ。ユリスはふらついた足取りで石の前まで来ると、ペタンと膝をついた。後ろから見ていたフィストには確認が取れなかったが、また泣いていたのかもしれない。ともかく彼女は、膝をついた姿勢のまま動かなかった。

彼女にとってそれがどれだけ辛く悲しいものかは、勿論すべては無いがフィストにも分かっていた。

その姿はフィストの心の姿でもあるのだ。

「あんたら、そこでなにしてんの？」

後ろから声がした。一瞬研究服かと疑いはっとして振り返ると、研究服ではなく、灰色の作業着のようなものを着た女性が立っていた。瞳は銀、髪は濃いブラウン。そしてその髪はストレートに腰まで伸びている。邪悪な雰囲気は見取れず、心の底から二人を心配しているようだ。だが彼女はこちらの返答を待たないまますたと歩いてきて、全く反応をしないユリスの横で足を止めた。

「これ：誰かの墓だよね：」

やっと答えを見つけたように、哀しそうな声で言った。

「うん：えっと、僕らに何か用？」

フィストが突き放すように尋ねた。確かに邪悪さは無いが、急に話しかけてきた点を含めてまだ気を許せないことも多い。

「いや、なんか二人の後ろ姿が知り合いに似ててさ：あ、二人とも今、ヒマ？ちょっと手伝ってほしいことがあるんだけど、一緒に来てくれないかな？」

「：はあ？」

あまりに突発的な頼みに、フィストは隠しきれないほど驚いた。

これほど珍妙なものもそうないだろうが、何かがフィストに彼女を信用させた。別の意見を求めてユリスの方を見たが、ユリスの様子は相変わらずだ。また、その女性もユリスを気にかけているよう

だ。

「君たち、名前は？」

「僕はフィスト、彼女はユリス。あなたは？」

「私はティリア。で、手伝ってくれる？」

今のフィストに断る理由はない。：もちろん、受ける理由もないが。逃げるためにここまで来たが、これ以降の目的地は全くないのでこの上なく暇だと言えるだろう。フィストは小さく「まあ、ユリスがそれでいいのなら」と答えた。ティリアは、ふーん、と小さく頷いてユリスの方を見た。ユリスはまだ動きがない。

「じゃあフィスト。ここの先に私の車があると思うから先に行って待ってて」

「：ユリスは？」

「私が話をつけておくから。すぐ済むよ」

今のフィストは普段よりも疑り深くなっているのだが、それでもフィストはティリアを疑おうとは思わなかった。ユリスを奪取する罠の可能性もあったが、そう言った時のティリアの顔に疑う理由を見いだせなかったからだ。承知の意思を込め、ゆっくりと頷く。

フィストは墓を離れた。振り返って見ると、膝をつくユリスと、その頭に手をのせて何かを話しているティリアの姿が確認できる。改めて彼女が敵でない確信がフィストに湧いてきていた。

そして同時に、ユリスの元気がこれで戻ってくれないだろうかという期待も持っていた。

あまり過剰にユリスを心配する義理は無いはずなのだが、彼女の元気がないのはフィストの心を不安定にさせた。

歩いているフィストの頭でそんな考えがひとまとまりしたほどで、フィストの前に赤い乗用車が姿を現した。薄い緑の中で、それはあまりにも目立つ。他の車が見当たらないのでこの車で間違いはなさそうだ。

ふうと溜息をついて足を止め、二人が来るのを待つことにした。

ティリアがユリスに何を言ったのかは分からない。女同士でしか理解し得ないこともあるだろう。それにしても、あれほど落ち込んでいたユリスが、元気そうに——と言っても、まだ影の残る部分もあるが——ティリアの後を歩いてきたことにフィストは驚かされた。

「おまたせ。じゃ、行こうか」

ティリアはそれだけ言うと、素早い身のこなしで運転席に乗り込んだ。フィストはまだ驚いたまま動き出せていないが、エンジンの起動音で我に帰って慌てて後部座席に入った。足取りの軽いユリスもそれに続く。

その黒い椅子も少しは柔らかかったが、使い込まれたような多くの傷が付いている。使う分には全く問題は無いのだが、少なくとも一、二年でここまで傷がつくことは無い。それでも外見が新車のように感じられたのは、それだけ大切にされているということだろう。目に見えないこの車の長い年月を全身で感じたフィストは、椅子の端をそつと撫でた。

うつすらとした緑も、砂漠の赤茶も、窓からはすぐに消えていった。代わりに出てきたのはシックなデザインの民家。初めは申し訳なさそうに、そして次第に数を増やしていき、もうそこらじゅうが建物で埋め尽くされた。更にそれだけでは飽き足らず、今度は建物がその高度をみるみる増やしていった。シックなデザインも、どちらかというと機械的な灰色とガラスの組み合わせた単調なものに変わっていく。その変化はものの数分で起こった。州都・テッドフォースがどれだけ巨大な街か、どのようなところかはそれだけでいたい察しがついた。

外の景色は川のように流れていくが、ブルーイーグルで慣れた目には遅いようにも感じられる。ただ、今のフィストは外を見てぼん

やりしたりはせず、ユリスのことを気にしていた。

急に元気になり、むしろ以前よりも明るくなったように思える。その表情も笑顔が少しのぞいている。瞳に生まれた輝きが彼女を華麗に照らしていた。

「：あのさ、ユリス。ひとつ聞いていい？」

そう聞くとユリスは、それはなにか、と問いかける顔でフィストを見てきた。何も言わないが、確かな明るさがある。

「さっきティリアと何話してたの？」

「それは内緒だよ。ね、ユリス」

そう答えたのはティリアだ。バックミラー越しに二人を覗いている。ユリスもそれに同調するようにこっくりと頷いて見せた。

内容は気になったが、ユリスが元気になっただけでフィストは十分だった。それから、また外に視線を移した。

今は停車していて、外の景色は流れていかない。少し前に道を横切る歩行者が見える。寒そうに身を縮込ませたり、二人ほどで話をしたりしながら歩いて行く。数え切れないほどの人間がそうやってどこかへ向かっていく。

それによって気づいたが、辺りはすっかり大都会になっていた。セントヘイムも決して小さな街ではないのだが、それとは比べ物にならない。座った姿勢のまま外を見ても、立ち並ぶ巨大な建築物の足元に阻まれて遠くは見えない。

詰め込んだように人の数が増し、その代わりに街路樹のような間に合わせの緑さえどこにも見当たらない。石畳の上に乗っているのは、感情を忘れたような歩行者だけだ。

緑がない。たったそれだけのことでこの街はどうにも暗く、地味な印象を持っていた。フィストは身を低くして空を見ようと試みたが、摩天楼の先に見える空も排気ガスのせいだろうか、薄い灰色が溶かしこまれていた。

「そんなに外ばかり見て、フィストはまだまだ子供だなあ」

車の発進と同時にティリアが言ってきた。少しムツとして低くし

ていた姿勢を元に戻したが、ティリアは可笑しそうに小さく笑った。笑われることでフィストの顔も少し赤くなったが、横でユリスも僅かに笑っていることに気づいた。ティリアほどではないが、その表情はにこやかになっていた。

「ユリス：笑った？」

「あ：ごめん。なんだか、つい」

ユリスは気に障ったと思ったようだが、そうではない。むしろ、ユリスが笑顔を見せたことでフィストの気分もずいぶん良くなった。ユリスの顔を見つめると、フィストも思わず笑みをこぼした。フィストは、自身の心にずっとのしかかっていた重い枷が急になくなったのを感じていた。

二人揃って微笑む様子を見たティリアが「二人とも言いねえ、楽しそうで」と嬉しそうに言った。二人の顔がそれで真っ赤になる。そのまま暫く三人で笑っていたが、ユリスが一瞬驚いたような表情を見せた。

「……そっか：これが楽しい、か…」

それだけ言った。ティリアは聞こえなかったようだが、ユリスが「楽しい」と思っているのは分かっているはずだ。ユリスはもう一度、ニッコリ笑った。

13話 困惑の再会

ずいぶん走り、外の景色が都会でなくなってきた。視界を高度のある建築物が遮ることは無くなったし、空も開放感を感じられるほどに広がっていた。

しかし、フィストはそれらを満喫することはできなかった。

調子が悪くなっていた。列車は平気でも車は駄目だったようだ。少し下を向き、青ざめた表情をして微動だにしない。時折悲痛なうめき声が漏れてくるのをユリスは心配そうに見ているが、ティリアは運転したまま苦笑いをしていた。

「大丈夫？もうすぐ着くからしっかりしなよ」

ティリアの励ましは飛んで来る。が、街の中心街からはずいぶん外れてしまったらしく、外の景色の広まった代わりに横揺れがかなり激しい。今のフィストにはこの上なく酷なことだった。車体が揺れる度にどんどん顔色が悪くなっていく。ユリスは黙ってその背中をさすった。

ふと外を見たユリスが、あっと声をあげた。

「海だ」

立ち並ぶ家と家の間から、少しずつではあるが日の光を受ける青い水面が見え始めた。現われてはすぐ隠れてを暫く繰り返したが、道が下り坂になると眼下に一気に海が広がった。道の延長線上の海と陸の境界線には巨大な船舶が停泊していて、大勢の人間を抱える港の存在を確認できる。

「いまからあそこにいくんだ。ほら、あとちょっとだから頑張っ
て！」

ティリアがアクセルを深く踏み込んだ。車はそれに呼応し、坂道を転がるように下っていった。

「おいおい、大丈夫？乱暴に運転しすぎたね、ごめんごめん」

ユリスと一緒にティリアも背中をさすった。膝に手をつき、道の隅の方を向いて動かない。幸いまだ最悪の結果は迎えていないようだが、いつその時が来るとも分からない。

「……だ…大丈夫……」

その声はちつとも大丈夫そうではなかったが、一度大きく深呼吸した後、体を起こした。

体に響くような重く低い汽笛が耳いっぱいに入ってきた。雑踏の先に、豪華客船なる代物が見える。名前は知らないが、今もその通路にはおびただしい数の人間が行き来している。それらは皆ゴマ粒程の大きさしかなく、そう見せている「豪華客船」がいかに大きいか分かる。そこから降りる人、乗る人、見送る人、出迎える人で、港はこの上ない混雑に見舞われていた。ティリアが辺りを見回す。

「えーっと、この船で帰ってきてるはずんだけど…」

独り言としてそう呟き、人の間をかき分けて船に近づいていく。二人も後を追おうとしたが、その間に瞬時に人が入り込んで姿が隠された。その人をどかして視界を広げたが、もうティリアの姿はそこには無い。

見失ったようだ。

「…フィスト、どうしよう。頑張って探す？」

うーん、とフィストは唸った。少しは気分も良くなってきたいるが、まだこの人混みの中を動き回るほどの体力は回復していない。

「ここでティリアを待とう。下手に動き回るとかえって迷子になるかもしれない」

「それもそうだね。待とうか」

「……」

返答も忘れ、フィストははっとさせられていた。

今もそうだった。ユリスの感情が格段に豊かになっている。初めて会った時より笑顔の数が増える。ただでさえあの列車で耐え難い経験をしているはずなのに、今はむしろ楽しそうに見える。

それに気づいたフィストは、列車で見たあの涙は嘘だったのか、

と一瞬疑ってしまった自分を責めた。墓の前で見せたあの姿を思えば絶対にそれは無いと言い切れる。

彼女は絶対に、その時に心に深い傷を負っているはずなのだ。何が彼女に笑顔を与えたのか、気分のすぐれないフィストにもすぐに分かった。

ティリアだ。ティリアと話した直後からユリスは変わった。

あの時一体何を話したのかはどうでもよかった。フィストからすれば、ユリスをここまで元気にできたティリアは——今ちょうど姿を見失っていることも重なって——ずいぶんと上に立つ人間に思えた。

それと比較して、自分はまだ子供なのだ、そんな考えが浮かび、フィストの心は串刺しになっていた。

フィストは、何もできなかった自身が憎かった。

辛そうなユリスを見ているのは自分も辛いと感じていたのに。

いきなり後ろから肩をたたかれる。

「おう、久しぶり！」

急に声をかけられ、驚いたユリスはフィストの後ろに隠れてしまった。

フィストの五、六歳ほど上に見える、若々しい男だ。丈の長い革のマントをはおり、小さな箱をその背中に抱えている。久しぶりと言われたが、フィストはその顔をどうにも思い出せないでいる。

「あれ、人違いかな？」

男は首をかしげ、二人に顔を近づけてきた。被っていたマントのフードを脱ぎ、その短い茶色の髪を出しながら。十センチほどまで顔を近くしてきたが、その首を引っ込めると一人納得したように笑った。

「やっぱりそうだ、フィストじゃないか！っていつでも、お前まだまともに喋れてなかったし覚えてないか」

「僕のこと知ってるんだ？」

「ああ、よく遊んだもんさ！最初は俺の顔見て泣いてばっかで、クレアさんに笑われてたなあ…」

フィストには妙な話だった。確かに彼の母の名はクレアだ。彼がフィストのことを知っているのも事実と分かった。しかし、その言い草から察するに彼は自分よりもずっと年上のはずだ。なのに、彼の見た目はせいぜい高校生ほどしかない。間違っても大人には見えない。

彼の弾む言葉がフィストの思考回路にそれ以上考える暇を与えない。

「こんなところで会えるなんて奇遇だな！そっちの子は妹？」

急に呼ばれたユリスは一瞬体をびくつかせた後、怯えるように彼の顔を見上げた。

「違うよ。ちょっといろいろあって一緒にいる、ユリスって子なんだ」

「え？ユリス？」

殆ど分からなかったが、その一瞬彼の表情が驚いた様子を見せた。

「どうかした？」

「いや、なんでもない。それより、何しにここに来たんか？確かお前、クレアさんとセントヘイムに暮らしてたんじゃないか？」

「…それもいろいろあって、ね」

ここに至るまでのあらゆる出来事を話す気はフィストには無く、すぐに話題をそらした。

「そういえば、女の人に何か手伝ってほしいって頼まれてここに来たんだけど…」

わざとらしく辺りを見回す動作をする。彼はそれを暫く見ていたが、一度小さく溜息をついた。

「……なんだ、はぐれたのか」

「…」

何も言わずに頷いた。その後彼が小さく笑ったのは言うまでもない。

「仕方ない、俺も探してみるよ。それってどんな人？」

「えーっと・・・」

ティリアの特徴を頭で思い浮かべたフィストは、まずその服装から述べることにした。この人混みの中でも、灰色の作業着を着た女性にはほばいないに等しい。

「えっと、茶色くて長い髪で、灰色のつなぎを着てる人」

「……ん？それ、ひよっとして……」

そこで唐突に横の人混みが分かれた。見失っていた茶色い髪がそこからひよつこりと顔を出した。

「ああ、こんなところにいた」

「……あ」

男が間の抜けた声を出した。ティリアもそれに反応した。

「……あ、アーミル」

「……なんだ、一緒に来た人ってティリアのことだったのか」

「え？二人とも知り合い？」

「まあね。こいつはアーミルって言って私の兄なんだ。ここに連れて来たのもアーミルの荷物を運ぶのを手伝ってもらおうと思ったからなんだけど……しかし、何も言っていないのによく見つかったね？」

ティリアが首をかしげた。

「向こうから話しかけてきたんだよ。僕が昔あったことがあるらしくてね、その……アーミルと」

自身の口から出してみて、フィストもアーミルと言う名前を記憶の中で見つけた。ずっと昔に聞いて以来忘れたままだった名前だ。

「それで……手伝ってほしいことって？」

やっと警戒を解いたのか、ようやくフィストの後ろから前に出てきたユリスが思い出したように言った。ティリアがそうだったと承知した顔をし、それからアーミルに何か目配せをした。アーミルもうんうんと頷き、それからひらひらと手を動かして三人を呼んだ。

その笑顔は、むしろ不安を煽る。フィストがちらと横を見ると、ティリアは妙な苦笑いを浮かべ、ユリスは何も疑っていないように

「ティリアの」笑顔を見ていた。

船の足元、とでも言うべきだろうか。泊まっている船の後方までアーミルは呼び寄せた。この船はすでに次の出航準備を進めているらしく、乗り込む人の数もかなり多い。それでもその周辺は船の搭乗口から離れていて人数はまばらだ。

ただそこには、船から下ろしたのであろう大量の荷物が山積みになっている。どれも嚴重に包装されていて中身は分からないが、今も船員らしいごつい男が数人、船内の荷物を運び出す作業に追われていた。

アーミルが先に立ち、手を振って三人を呼ぶ。後ろには、まさしく山のような荷物の箱が積まれている。箱に書かれている言語はまちまちで、あらゆる地域から集められたのが分かる。それを見たとき、ティリアが「やっぱり…」と失笑を漏らした。

「…何？これ」

見上げるように箱の山を眺め、無邪気にユリスが聞いた。本当に分かっていないらしいが、すでにフィストはまたがっくりと俯いている。

「俺の荷物だよ。これからこれを車に運ぶから、それを手伝ってほしいんだ」

「…それって全部？こんなにあるのに？」

明らかに気落ちしたフィストが聞いた。アーミルは何も言わず、ただ笑顔でこくと首を上下に動かした。ティリアの様子からすると、どうやらいつもこんな調子らしい。

折角よくなっていた気分がまた悪くなったように、フィストはだるそうな溜息をついた。

ユリスだけが、なんでもなさそうにじっと箱の山を見ていた。

「：俺は犯人じゃねえよ。いや、この鳥みたいなのを片づけたのは俺だが：」

明らかな『使用済み』ナイフを持った男がまるで説得力の無い弁解をしている。それを聞いている警官はあまりにも落ち着いていた。「それは分かってますよ、羽根が致命傷になっているのは見れば分かりますからね」

「あ、じゃあ俺もういいかな？ 今日人と会う約束してるんで」

線路に沿って走りだそうとした男を、その警官が腕を掴んで止めた。

「待ってください。ここから街まで歩いて行くと結構かかりますよ？ 私たちが街まで連れて行きますよ」

「おお、そりゃあ助かる！」

「ただし」

警官の張り付いた笑顔に、男の歓喜は一瞬にして消え去った。

「何が起こったのか署で私たちに説明してもらってからです。もちろん犯人ではなく目撃者としてですが」

腕を掴む力は強く、男はそれを振りほどくことはできなかった。

「大丈夫、三日ほどしか掛かりません」

「：泊まりがけかよ！」

約束に大幅に遅れるのが決定した瞬間だった。

14話 採用事情

結局あまりの荷物の多さに、荷物とティリアだけが先に走り去ってしまった。あの中心街にある事務所まで持って行かなければならぬらしく、乗ることのできなかった三人はほかの交通手段で戻らなければならぬ。暫くは固まったように佇んでいた。

「ホントにごめん、おかげで助かったよ、じゃっ！」

フィストの頭には、去り際のティリアのその一言がいつまでもエコーしていた。

「あー：去年もこんな感じだったなあー！」

頭を掻きながら恥ずかしそうにアーミルが言った。更に「二人ともありがとな。おかげでいつもより早く済んだ」と笑って見せた。

ヘトヘトの二人の耳に入ったかどうかは別として。

「俺はバスで帰ろうと思うんだが：どこか行くところがあるなら送って行くぞ」

それは手伝ってもらったものとしては然るべき一言だが、二人にはそんな物は無い。フィストはユリスのことが気になって、この後のことは全く考えていないのだ。

更に遠くへ逃げられるのならば逃げるべき。だが無計画に逃げることに追い詰められてしまうかもしれない。それなら、この周辺で暫く身を隠す方が利口と言うものだ。

勿論フィストはこの親切な人たちを巻き込むことは避けたかったのだが、彼の中の幼い部分がどうしても離別を拒んで抑えきれなかった。

「：実は、どこも行くあてがなくて：」

「なんだそれ？行くあてもないのにこんなところまできたのか」

「：それで、出来ればもう少し一緒にいたいんだけど：」

小さく言ったが、アーミルは喜んだように「ああ、勿論いいよ」と言った。

「もう少ししてどのくらいだ？」

「うーん…分かんない」

「……ま、お前にもいろいろあるだろうから詳しくは聞かないが。なら、暫くでいいから俺んトコで働かないか？俺は歓迎するぞ」

豪快に笑い飛ばすアーミル。つまり二人は、就職する——居場所を得ることになるらしい。

実感のわかないまま、フィストは恐る恐る頷いた。ユリスもそれに反応して頭を下げる。アーミルがそれを可笑しそうにして見えた。

「じゃあ、行こうか」

風が潮の匂いを含んでいる。吹き抜ける風に、海鳥の影が乗って走り抜けた。

さほど大きくもないビルの二階。観葉植物の鉢植えが幾つかあるが、どれもあまり元気がなく、そこにある本来の意味をあまりなさないでいる。蛍光灯はしっかりとついているが雰囲気はやや暗い。長く歩き回れるほどの廊下ではなく、スモークガラスをはめ込んだ扉がすぐに見つかった。その横には、大量の箱が。

机が五つ。四つは向かい合うように置いてあり、少し間を置いて奥に一つが置いてある。手前の机のうち二つには電気スタンドが一つずつ置いてあり、本がその横に並べられていて、余ったスペースには文字ばかりの紙が散乱している。

先に入ったアーミルがいちばん奥の机の前で止まった。机の上の紙を乱暴にかき回し、一枚の紙を引っ張り出す。

「あれ、なんでこの二人がここに？」

二人の後ろから声がした。振り返ると、扉からテイリアが入ってきて二人の真後ろに立っていた。奥のアーミルがすかさず返事をす

る。

「いやあ、行くあてがないって言うからさ。ここで働かないかって聞いてOKもらったから」

ティリアはクスツと笑って「へえ、後輩か」と言い、入口の前で立ち止まっていた二人の間を通り目の前の机に座った。

ティリアも乱雑な机の上をあさり始める。それと同時に一枚の紙をつかんだアーミルが立ち上がって二人を見ていた。

「じゃ、改めて。よろしく、フィストにユリス。俺はアーミル・ローアン。この商業事務所の所長だ」

鋭い眼をして笑った。机に片手を置き立ちあがっていたティリアも二人に向き直る。

「私はティリア・ローアン。この事務所の所員ってトコだね」

二人の笑顔はフィストとユリスを確かに迎えていた。

懐かしい暖かみ、隠したままの自分たちの現状。全てが重なり、嬉しさと申し訳なさでフィストは今にも泣き出してしまいそうになっていた。

「うん…よろしく」

震える声を出すフィストを二人はしっかりと受け止めていた。フィストとユリスを受け入れている笑顔。必死に涙を見せまいとするフィストの横でユリスも嬉しそうにっこり微笑んだ。

「…兄妹で同じ仕事してるの？」

ユリスが口を開いた。ティリアがそれにこたえる。

「うん、そう。まあアーミルは卸し作業ばかりだし、私は年中ここで雑務だけだね」

兄妹で一緒の仕事をする…そんな概念を知らないユリスには分かり得ないことだが、二人の様子を見る限りではユリスはそれほど悪いものとは感じなかった。二人に見とれるユリスは、その心に浮かんでくる感情が「羨ましい」であるのには気づいていない。

ひとまず二人は、勧められるまま背の低いソファについた。いきなり来てしまったのだから彼らの邪魔をしてはいけないと思い、ま

だ仕事もないと言われたので二人ともじっとしていた。

座ったところから見えるのは、何かとにらめっこをするティリアに、外と中を何度も往復するアーミル。往復するたびに部屋の隅に大きな箱が増えていく。が、何故だかそれは仕事をしているというよりも遊んでいる印象に近い。

質問をぶつけるのにフィストの気持ちに弊害は無かった。

「…気になったんだけど」

「？」

アーミルが扉の前で立ち止まった。

「もう一つ机使ってるみたいだけど、誰の？」

「ああ、それは――ぐわっ！」

扉が勢い良く開いてアーミルの口を塞ぎつつ弾き飛ばした。机の影にアーミルの姿が隠れる。

「ご、ごめんなさい！慌てていて、気付かなくて…！」

扉の裏から銀色のポニーテールが覗いた。重々しく立ち上がったアーミルの肩ほどまでの高さだ。

「…この人だよ、机の主。リメールだ。リメール・シュルト」

頭をさすりながらアーミルがポニーテール――リメールの頭を撫でた。撫でられた彼女は一瞬不思議そうな表情をし、それから二人に気づいた。

「アーミルさん、あの方たちは？」

「あー、いろいろあってここで働くことになった子たちだ。男の子がフィストで、女の子がユリス」

アーミルの解説を受け、へえ、とリメールは頷いた。二人より年上のようなだが、赤くくりくりした瞳はどうしても幼い印象を与える。そして子供のような笑顔で一言、

「よろしくお願いしますね！」

と言った。返事をするでもなく、フィストはただ啞然としていた。

リメールが参加しても彼らの様子に何ら変わりはなかった。リメ

ールもティリアと同じく何かとにらめっこをしている。もしかしたら、という気持ちを捨てきれないので二人とも声をかけられない。何もない時間が二人に重くのしかかりながら流れていた。そのうちにじわじわと、意識が遠いものとなっていた。

「…あれ、二人とも寝ちゃったのか？」

ソファで寝息を立てている二人の姿を確認すると、アーミルは一息つくように自分の机に座った。

「まあ、何もしていなかったわけだし…あの荷物も運んでもらったし…」

ティリアが笑う。自分たちでさえ苦労する荷物を懸命に運ぶ少年少女の姿を思い出しているようだ。

「…そういえば、ダルタは来てないのか？」

アーミルがリメールに尋ねる。

「ダルタさんですか？来てませんが、来るって言ってたんですか？」

「ああ。今朝着く予定だったブルーイーグルに乗ってるはずだったんだが、まだ来てないのはさすがに変だな」

有名急行が大惨事になっているというニュースは、まだ街には知らされていなかった。

15話 竜とは

「おーい、起きろ。さすがに疲れたか？」

いつの間に寝ていたのだろうか、フィストはアーミルの呼ぶ声とゆさぶりでようやく意識が戻った。隣のユリスも座った姿勢のまま寝息を聞かせている。

「…ん…？ 僕、寝てた…おわわわわわ！」

ふいに、フィストの肩を掴んでいたアーミルの腕が思い切り前後に振るわれた。寝起きのフィストの体はそれに伴って振り回され、頭がそれに引っ張られる形で前後に大きく揺さぶられた。

「フィスト、ちょっと話をしたいんだが…屋上に行かないか？ きっと星もよく見えるぞ」

「…話？」

安定しない頭を支えながらフィストは窓の外に目をやった。

窓の外にはすでに太陽の光は無かった。立ち並ぶ建築物のせいだろうか、その痕跡すら隠されてしまい足跡を発見できない。話をするのは構わないのだが、如何せん気温が低いように見受けられる。

「別にここでもいいんじゃないかな…外は寒そうだし」

言葉は柔らかく表情は露骨に嫌そうにしてそれを断ったが、アーミルはやや真剣な顔になってそれを却下した。

「いや、あんまり他の人には聞かれないんだ…特にユリスには」
ユリスはまだ夢の中にいる。少し考えたが、ここで自分の意見ばかり主張してもそれはわがままとしかとられないだろう。第一、アーミルがこれを断らせるつもりはないのは明らかだ。諦めも含め、まだ薄い意識のままフィストはゆっくりと立ち上がった。

真っ暗闇だ。蛍のように街灯やイルミネーションが見えるが、形

をなさないままぼんやりとその存在を示している。天と地の境目はなく、その闇はすぐそこまで迫ってくる。横にアーミルがいなければ、フィストは何も言わず駆け出していたかもしれない。迫りくる闇は、どうしてもフィストを落ち着かなくさせた。

それでも、横にアーミルがいる。その安心感を確かめつつ、フィストは天を仰ぐ。

空ともつかぬ空に満天の星が：なかった。

「：曇って見えないな」

アーミルがうっかりしたといったように頭を掻いた。その息が白い濁りとなって闇の中に広がる。いつから曇っていたのか眠りこけていたフィストには分かりかねるが、日光のもたらすはずの暖かみがあまりないことから、だいぶん前から曇っているらしい。そのため、体に裂傷ができていると思えるほど寒さで体が痛む。加えて、予想をはるかに超えた威力の寒風も二人の体に何度も切りかかってくる。

「やっぱり：中に入ろうよ」

フィストが身を縮ませる。

「大丈夫、すぐ済むから：寒いけど」

二人の体は震えていたが、アーミルもまた硬直した体の具合を気にしているようだ。だがなお、中に入る気は無いらしい。

しばらく沈黙が続いた。

強風の音が屋上のタイルを叩く。

アーミルが懷に手を入れ、一枚の紙をフィストに手渡した。風に持って行かれそうになったが、フィストは何とかそれを握りしめる。

「見るのは後でいい、まずは俺の話を聞いてくれ」

今までにない真剣な態度を向けられ、特に反抗もせずフィストはアーミルと顔を合わせた。

「あの子：ユリスのことだが、初めて会ったときから俺の中で何かが引っ掛かっていたんだ。はつきりしなかったからその場はすぐに

忘れたんだが、昼にその紙を俺の机から見つけて確信した。俺は以前にユリスのことを知っていた：正確には、その名前を知っていた」

フィストにはまだ言っている意味が分からない。その直後にアーミルが目で合図を送ってきたので、手元の紙に視線を落とした。

「辛いかもしれないけど、見ておいたほうがいい。もしかするとユリスのそれと関係があるかもしれない」

題は「生物錬成」だった。

おぞましい記憶が、そのたった一語で翻ってきた。見ることにすらフィストには辛いのだが、アーミルに促されるままその文面を凝視してみた。

盗んできたものとは少し違う：実験のレポートのようだ。文字は雑でうまく読み取れないが、横の挿絵が目にとまった。

実験器具らしい巨大なガラス管の中に人が浮いている。数字と記号の羅列がその人に挿入され、そこから導かれた矢印の先にはこの実験の結末であろう挿絵が載っていた。

魂の抜けたような人。その背中にはうっすらと影のように翼が描き加えられている。彼の腕も、硬いウロコと隆起した表面が影となつて重なり描かれている。それはもう人ではなく、犬猫のような一般的な動物でも熊やライオンのような猛獣でもなかった。

「俺の知る限りのことを教えよう」

反応を待たずアーミルが言った。

「俺がユリスの名前を聞いたのは半年前だ。暇つぶしに知り合いの情報屋に会いに行った時、セントヘイム近郊の研究所で妙な取引があったと聞かされた。わざわざ国王が直々に、それも秘密裏にその所長と会って何かの契約を結んだらしいとのことだった。他の仕事の資料と合わせて、その契約と関連していそうなレポートのコピーを俺は一応もらったんだが、軽く目を通しただけですぐ机の上に放り出してそれきりだったから、殆ど記憶には残らなかったんだな」

今ファリストに渡されたのはそのレポートの内の一枚だそうだ。聞けば聞くだけ、たった今まで華奢で可憐と感じていたユリスの後ろに黒い影が伸びて見えた。

取引、契約、国王……このレポートは、オルディアの触れてはいけない裏側の存在を静かに示唆している。

「あ、生物錬成の説明をしようか」

急にアーミルの話すテンポが変わった一度この話は忘れろとも言いたげな、あまりに急な路線変更だ。

「もともと生物錬成ってのは、錬金術である『ホムンクルス人工の人』から派出したものだ。そのホムンクルスの実験ってのは、先代の国王フェラートの妃・ホムリが亡くなった翌年から王の勅命で始まった。王は大勢の科学者、錬金術師を集めて、死者を蘇らせる秘術を探し始めた。って言っても、もともとホムンクルスは人を創り出す術であって死者の蘇生は意味が違ったんだが」

ユリスのそれほどではないが、ファリストにはなかなかショッキングな話だ。幻想の話としか思えないが、嘘だとしても真になりそうなくらいのリアリティを感じる。

死者の蘇生。魔法の存在する世界なら神父がロザリオに祈って起こしそうなその奇跡とは、現実でいえばすなわちこういうことだ。

「……アンデッド」

「聞こえは悪いがそういうことだな。フェラート王の愛妻家は結構有名で、無論生物錬成の研究もホムリを蘇らせるためのものだった。……王は、狂っていたのかもしれない」

切なそうに遠くを見て、溜息混じりに呟いた。

今の二人は夜の深淵に包まれ、何も遮るものがない。二人が出している嫌悪感、憤慨感、虚無感はどこに行きつくでもなくその闇のどこかへ消えていく。

しばらくの無言がどうしても耐えきれず、アーミルの話を待たずにファリストが口を開いた。

「でも、死んだ人を生き返らせるなんて……僕は、自然の摂理に反し

ていると思う」

語尾の弱々しい言葉が流れ込み、ようやくアーミルも続きを話す気になったようだ。

「そうだな、そんなこと……みんな分かってたはずなのに……。まあどっちにしろ、もともとそんなことは不可能だったんだ。いろいろやったらしいが、とうとうその努力が実を結ぶことは無かった。王は諦めなかったらしいが、そのうちに死んだ。世間一般には単なる病死と発表されたが、事実はどうなのか……知る術は無いな。それでまだ若かったフェラートの一人息子が王に即位したんだ。勿論それは形上だけで実際の政権は『側近』が牛耳ってたけどな。ただ王としての自覚はあったみたいで彼はその名目上の『王』の勅命として再び生物錬成の研究がすすめられた」

「それってまさか、王と王妃の蘇生……？」

「いや、彼はお前と同じように死者を蘇らせることには反対していた。彼が興味を持ったのは研究過程だ。人体蘇生を探す途中で見つかった幾つかの資料……彼の眼にはどう映ったんだろうな……」

再びアーミルが黙り込んだ。考え込んでいるというのか、とにかく不可解な表情をしている。小難しい話を聞いているフィストの方も不可解な表情を取りそうだったが、話の末恐ろしさに体を震わせるにとどまった。動きを見せないまま、次の言葉が出るのをフィストはじっと待った。

「物質の変換、記憶操作、超エネルギー……錬金術に不可能は無かった。あらゆる物事を錬金術は可能にした。そして、ついにたどりついたのが……人間離れした、戦力」

「……！」

「ただの歩兵に始まり、狙撃兵、特攻兵、操縦士まで、錬金術は化け物に変え得た」

震えるアーミルの言葉に、フィストは耳を塞ぎたくて仕方がなかった。だが、聞かねばならない。このことは嫌でも知らなければならない。自分のためにも、ユリスのためにも。

「それにより、フェラートの息子ハーゲンティは飛躍的に国家戦力を上昇させた」

「…ハーゲンティって、まさか…」

「ああ。現在のこの国の王、ハーゲンティ・エノクのことだ。つまり、今の話は決して大昔の話じゃない。現在もお進んでいる、人間の黒い進化ということだ」

フィストの予想は正しかったようだ。あの報告書のサインもハーゲンティの名をしっかりと語っていた。

髪を乱した風が、氷のように冷たく感じられた。

「風が冷たいな…そろそろ戻ろうか」

アーミルが切り出し、扉へと歩き始めた。話のスケールのあまりの大きさに、フィストはその誘いに反応できずただそこで固まっていた。

扉の前でアーミルの足が止まり、振り返った。思い出したこと——言いそびれたことを言いたそうにしているが、固まった様子を見てまた少し悩んでいる。全てを教えていいのか、そんな重々しい悩み方だ。だがだいぶ時間をおき、意を決したように顔をあげた。

「えーっと、最後にひとつ…さっき見せたあのレポートだがな、あれは生物錬成の中で最高位に匹敵するものだ。それも、戦闘向けの」

「…戦闘…」

「汚れ無き人の体を寄り代に、絶対的破壊力を持つ生物兵器を作り出す。その前に立って無事でいられる者は一人としていないとまで言われている」

今のフィストはそれに対し何か言う元気がない。それはアーミルも分かっているようで、黙っていることを確認するとさらに追い詰めるように真実を突きつけた。

「テロ・ダクティル…コードネームだ。古来からの呼び名は『翼竜』。人知を超えた破壊の力、つまりは竜の力ってことになるんだろうな。たぶんユリスは…その被験体だ」

扉が開き、そして閉じた。

冷たい風はフィストの心をも串刺しにしていた。

15話 竜とは（後書き）

読んでくださっている方、ありがとうございます。

やっと題名の理由を出すことができました。はい、無理矢理です。反則的に強いといったらなんだろう、と考えた時に竜の名前が浮かんだので使うことにしました。

これで夏休みの作業を終了したいと思います。また更新がゆっくりになってしまおうと思いますがよろしくお願いします。

16話 決意表明

背の低いテーブルの上には絶え間なく湯気を発生させているティーカップが置かれていた。茶色に近い半透明の飲み物が申し訳なさそうに注がれている。

椅子にアーミルが座り、それと同じ柄のカップを手を取っている。その落ち着いた様子からは先刻の話し合いを殆ど感じさせない。その横ではアーミルと同じ顔をしているリメールが、ティーポットを手にしてフィストと視線を合わせてきた。入ってきたフィストに屈託のない笑顔を見せ、それから「外は寒かったでしょう。紅茶を淹れましたから飲みませんか？」と勧めてくれた。体の芯まで凍りきっていたフィストには有難い熱源と言える。その熱が心を解凍してくれることは無いと思われるが。

「じゃあ、いただこうかな」

リメールに笑顔で返事をしてから、一息つく意味でフィストは傍の椅子を引こうとした。が、思いのほかその椅子は重くフィストが引いても動かない。

見ると、背もたれの裏に隠れるようにユリスがいた。今だに夢の中にいるようだ。

「だいぶ疲れてるみたいだし、そのまま寝かせといてあげなよ」

机で何かしていたティリアがやってきた。そう言った後、リメールに紅茶を催促した。

「そう、だね：起こしたらかわいそうだからね：」

やや困惑しながらも答えると、その寝顔を見つめた。

物静かで、まだ幼い。ゆったりとしたリズムで小さな寝息を立てているのが聞こえる。

何の変化もないが、フィストはユリスを見続けた。

この小さな体のどこにそんな大それた不幸を背負っているのだろう。聞いた当初はユリスに対して恐怖こそ覚えたが、この寝顔に対

しては何の恐ろしさもなかった。

彼の中でぐらついていた自信が、今再びしっかりと立ち上がる。

「…どうした？何か言いたそうな顔だな」

アーミルだった。茶化しているような笑みをこぼしている。一瞬はどきりとしたのだが、強い意志が彼の中に生まれていた。

気持ちが表れているかのように、フィストの口は堂々と言葉を紡いだ。

「僕…決めたよ。相手がどんな奴らだろうと、ユリスを守る。守ってみせる」

アーミルが何を考えているかは表情からは汲み取れない。だが少し間をおき、その決意に対してしっかりと頷いた。

たとえユリスがどんな宿命を背負っていたとしても、どんな存在だったとしても、自分はユリスを見捨てない。

フィストの瞳、そして心。そこには特別な色の輝きがあった。

——強くなりたい。

純白の世界はどこまでも続いていて果ては見えない。不思議な霧の中に、ユリスは立っていた。ただその霧は、心の氷すら溶かしそくな温かみがあった。

音は一つも耳に届かない。自分が一歩足を踏み出しても、その踏み出した音、自分の息使い、そんな音も響かない。声も出そうとしてみたが同様の結果だった。それに対する不安は全く無いのだが、何もないそこでは誰かを欲してしまう。

誰かいらないものかと、ユリスは辺りを見回した。

一面にミルクをこぼしたような白。空間と思えないほど透明感のない視界の曇りにより、自分の存在以外は何一つ確認を取ることが出来ない。音もなく、視界も封じられ、死の世界と混同してもおかしくは無い空間だ。

ユリスはその空間に見覚えがあった。どこで見たのかユリスは思
い出せない。

遠くから小さな声が聞こえた。無音の世界に、それは確実にエコーして聞こえる。だんだん大きくなっていき、次第に耳を澄ます必要も無くなってきた。それにつれ、その声の正体がだんだんと伝わってくる。それは会話のようなはっきりとした言葉ではなく、もっと感情的な単なる『音』に等しい声だ。

後ろだった。

（赤ちゃんの泣き声……？）

それがそうだとはっきり分かったところでユリスは人の気配を感じた。泣き声と同じ方向だ。すぐに振り向こうとしたが、その動きが止まった。

人がいるのならすぐに会いに行きたかったのだが、あっさりとその人を目で見るのがもったいないような気もしていた。

ゆっくりと振り返る。

女性が立っていた。発音源である赤ちゃんを一人抱いている。

ユリスはその顔にも見覚えがあった。いつどこで見たのか覚えていないのだが、それはひどく懐かしく感じられた。

「……？」

声が出ないことも忘れ、その女性を呼ぼうとする。勿論音にはならず、二人の間につながっている者は目で確認できるその存在だけだ。しかし、女性には何かが伝わったようで優しそうな笑顔をユリスに与えた。

そして、霧の中に消えた。

「……？」

椅子に座って休んでいたフィストが目を覚ますと、その視界は闇

に包まれていた。どうやら全員が寝静まった深夜に目を覚ましてしまったようだ。

物の形は判断できるが、歩き回するには多少の危険が伴う。別段動き回る必要もないのだが、なんにせよフィストは下手に動き回ることを早々に諦めて再び瞼を閉じることを選択した。

「むーん…」

目を閉じかけたフィストの耳に、曖昧な寝言が入り込んできた。

思わず目を開くと、テーブルを挟んだフィストの向かいの椅子で複雑な表情をして眠っているユリスが映った。暗闇の中に、窓からの光の当たるユリスが浮かび上がっている。

その姿は優雅であり、妖艶であり。

ユリスの顔は見慣れたはずのフィストでさえ、それには思わず見とれてしまった。

その口から寝言が洩れる。

「…泣き声が…」

喝舌が悪い。寝言だからそれは仕方がないだろう。悪いと思いながらも、フィストはそれに聞き耳を立て続けた。

「…だれ…?」

不安そうな顔をして言葉を紡ぎだしている。暗闇の中でそれは実際以上に目立つ。

（…あれ? そう言えば…）

以前にも似たようなことがあったな。ふとフィストは、出発の朝のことを思い出していた。

思わず返事をしたこと。自分の名前が出たこと。くだらないことがフィストの頭によみがえっていた。

「また同じ夢でも見てるの?」

問いかけるが、その返答は当然無い。フィストの質問は空しく闇に吸いこまれて消えた。フィストもそれは予想していたことなので別段気にはしていない。

「…フィスト…フィスト…！」

「えっ…ちよっと、ユリス？」

ユリスが突然フィストを呼び始めた。切羽詰まった表情で名を呼ぶ様子に、フィストはたじろいでしまった。

「フィスト…助けて…！」

「…！」

助けて、の一語がフィストを立ちあがらせた。暗闇のなか足元もろくに確認せず、フィストはユリスの傍に近寄る。何が夢の中であったのかは不明だが、ユリスは泣きそうな顔になって助けを求めている。

「ちよっと、ユリス…！」

フィストがユリスを揺すって起こそうと試みる。

刹那。

「う…え…え？」

ユリスが、揺すっていたフィストの左腕をしっかりと抱き寄せていた。

思わず離れようとするフィストだったが、腕を抱きかかえるユリスの力は思いのほか強い。暫く奮闘したが、結局彼の腕が解放されることは無かった。

「は、離してよ」

懇願するが、ユリスから返答は無い。芝居などではなく、本当に眠っているらしい。

「フィスト…」

またもフィストを呼んでいる。しかしそれは、しっかりとその手で掴んでいることに対する喜びのようにも聞き取れる。ユリスの表情はいつの間にか安らぎに満ち溢れていた。

「…フィスト…待ってよ…」

「まったく…なんなのさ…」

繰り返される自分の名前にフィストは顔を赤くする。恥ずかしさからユリスと距離を置こうとするが、腕を抱え込まれているので叶うはずもない。

「……どこにも…行かないで…」

「…っ！」

フィストの動きが固まる。ユリスはそれきり黙っているが、その沈黙はフィストを余計に困窮させた。

「…もう…」

呆れたような顔になりながらも、フィストは彼女を引きはがそうとするのをやめた。ユリスの望むまま腕を抱かせる。

「どこにもいかないよ、だって僕は――」

聞こえている筈はない。しかし、フィストは言った。

「ユリスを守るって、決めたんだから」

腕につかまっているユリスの頭を優しくなでると、椅子の横に体重を任せて瞼を閉じた。

17話 『その日』 朝

驚くほどに晴れ渡っていた。昨夜からこうならよかったのに、とフィストは溜息をついた。

朝の冷え込みの中では日差しの暖かみが熟睡を誘う。連日の疲労も手伝い、フィストも深い眠りの中に身を委ねている。椅子の横に寄りかかっているという不安定な姿勢だが、フィストの眠りはとても深いものだ。

誰かがフィストの体を揺すっている。夢の中から引きずり出されて重々しく体を支えた。瞼が重くなかなか目が開かないが、少しこすってなんとかこじ開けるとそこにはアーミルの顔が映った。

「おはよう、フィスト。：朝からなにやってんだ？」

「：何が？」

寝起きのフィストはアーミルの言う意味が分からなかったが、立ち上がろうとしたときの腕の強い抵抗で昨晚の記憶が目覚めた。

腕を羽交い絞めにしているユリス。椅子の手すりから若干身を乗り出し、半ばフィストに寄りかかったような体制になっている。

フィストの二の腕にユリスの握りしめる感覚が伝わり恥ずかしさで振りほどこうとするが、逆に握りしめる力が増して離れなくなってしまった。

「ちよつと：起きてよ、ユリス：」

フィストが参りきった様子で腕を引っ張ると、ようやくユリスに反応が現れた。

「：うー…んー…」

嫌がる顔をし、握る手に更なる力がこもる。負けじと引っ張りかえすと、腕が少しずつ拘束から解放され始める。

更に引っ張る。ユリスの手が掴み直そうと伸びてくるが、フィストは再び掴まらせることを許さない。次第にフィストの腕が自由に動くようになってきた。

「…ん…」

フィストから完全に引き離されると同時にユリスが目を覚ました。何かを求めるように伸びていた腕もそこで活動を停止し、何事もなかったかのように手すりの上で静かになった。

まだ眠いのか、ユリスは目をこすっている。手すりに片手をついて体を支え、手で隠しながら小さな欠伸をした。その手が顔から離れた時には、ユリスはもう普段通りの顔をしていた。

「おはよう、フィスト」

立ちあがったユリスは挨拶をしたが、フィストが苦笑いをしているのに気づいたようだ。

「どうしたの？」

「覚えてないのか…いや、まあ大したことじゃないから」

「…そう」

寝ている間のことでいろいろ言われるのは恥ずかしいだろう。そう思い、フィストは話をはぐらかすことにした。もう少ししつこく聞かれることを予想していたが、ユリスはあまりにも素直にフィストの言葉をそのまま受け入れていた。

「…あれ、おはようございます、アーミルさん」

奥の部屋から、寝起きにもかかわらず喝舌の良い声が聞こえてきた。よく通るその声は、フィストもユリスもよく印象に残っているものだ。

「おう、おはようリメール」

アーミルが返事とともにに右手を挙げた。リメールはにっこり微笑んだ後、出てきた所とは別の部屋に入っていた。リメールは毎朝紅茶を淹れてくれるんだ、というその時のアーミルの言葉から察するに、そこは給湯室のようだ。直後、紅茶の深い香りが三人の鼻に漂ってきた。変に興奮していたフィストもその香りがリラックスさせた。

ユリスがフィストの横に歩み寄ってきた。

「…ねえ、フィスト」

「うっ！」

近くに来ると、名前を呼びながらフィストの脇腹をつついた。身長差からそこはちょうどつきやすい高さらしい。やはりくすぐったかったフィストは体をのけぞらせてしまいアーミルに変な目で見られた。

「な、なに？」

顔を赤らめながらユリスの方を向くと、今のフィストがおかしかったのか含み笑いを必死に手で隠そうとしていた。

「ユリス…」

「ん、ごめん。…笑ったら何言いたかったか忘れちゃった」

「あ、そう…」

何が言いたかったのかフィストは気になったが、ユリスはすぐに椅子に戻ってしまったので早々にあきらめた。

「お茶淹れましたよー」

三人が椅子に座って暫くすると、奥の部屋からリメールが戻ってきた。昨夜使用したものと同一のカップが五つと、それに合わせたデザインのティーポットをお盆に乗せて持っている。そのポットの注ぎ口からは盛んに湯気が上り、淹れたてであるのがよくわかった。「待ってくださいね、いまテーブルに置きますから——きゃっ！」
「うわ!？」

特に落ちているものもなかったのだが、リメールが突然つまずいた。持っていたお盆は持ち主の行動に合わせ落下運動を始める。

「——っと、危ない」

それらと一緒に床に倒れるかどうかのところでアーミルがお盆を拾いあげていた。カップが多少倒れたりはしているが、大惨事は免れたようだ。…床に顔から倒れたリメール以外は。

「…大丈夫か？ すまん、お盆で手いっぱいだった」

「あはは…大丈夫です、毎朝のことですから」

恥ずかしそうにするリメールにアーミルも笑って返している。まさか毎朝こんなことが起きているのか、とフィストは素直に驚いていた。初めて会った時もその雰囲気を漂わせていたが、彼女はフィストの感じていた以上におっちょこちよい、もとい慌て者のようだ。立ち上がると彼女はすぐアーミルからお盆を受け取り、テーブルの上にそれを置いた。そしてポットを手にとると、一つ一つに紅茶を注ぎ始めた。

「…なんか悪いよ」

「気になさらないでください。いつもしていることなんで、気が向いたときに飲んでくだされば結構ですよ」

次々とカップに紅茶が注がれていく。その時のリメールも、終始人当たりの良さそうな笑顔だ。ユリスの時もそうだったが、フィストは他人の笑顔を見るとその人をすぐに信用してしまいがちのようだ。

「リメール、分かりきったことを聞くが：ティリアは？」

渡された紅茶を口に含みながらアーミルが聞く。

「あの、いつも通りです。そろそろ起きるころだと思うんですけど」苦笑いしながらもその手は正確に紅茶を注いでいく。今注ぎ終わった紅茶をフィストが受け取り、そっと口に運んだ。

かなり熱く、舌を火傷しそうだ。フィストのすぐ後に受け取ったユリスも何とか冷まそうと悪戦苦闘している。

カップを置く音がした。アーミルがカップを置き、袖で口を拭いている。カップはすでに空になっていた。

「フィスト、ユリス」

「？」

二人はそろって名を呼んだアーミルを見る。

「二人はもううちの所員な訳だし、そろそろなんか仕事もしてもらおうと思う。もう少ししたら詳しく説明するから、いいか？」

二人は一度顔を見合せ、それから向き直ってうんうんと頷いた。追われているという事実はあるが、それはまだアーミルには話し

ていないし、ただ居候するわけにもいかない。フィスト自身も、そろそろ何かしたほうがいいと考えていたので、ちょうどいい機会にも思えた。

「ふーん、二人の初仕事ってことか」

今朝はまだ聞いていない声と同時に、フィストの横から手が伸びてきてまだ飲まれていないカップを持っていく。見ると、椅子の上からティリアがフィストを見下ろしていた。

「ティリア、おはよう」

フィストが微笑む。

「ああ、おはよう」

ティリアも微笑む。

ティリアのカップはいつの間にか空になっていた。

「……ご協力ありがとうございました」

制服の男が会釈をした。それを受けているもう一人の男は、笑顔を保ちつつも明らかに怒りを表している。

「いやあ、結局夜が明けちゃったなあ！どんだんその制服が嫌いになっていくみたいだ」

「それはすでに承知しています」

制服は笑顔を崩さずにもう一度会釈し、さらなる男の反感を買った。だが男も笑顔を崩すことなく、黙ってその場を去った。

「……ったく、会う約束してるってーのに融通の利かない連中だ。お気に入りナイフも証拠品とか言って取られちゃったしな」

彼の独り言は早朝の街角に静かに染み込んでいった。

挿入話 出発前

「おはようございます、ユリスさん」

仕事に出かける準備をしていたユリスに、リメールが話しかけてきていた。にこやかに、そして子供のように丸い瞳でユリスのことを見つめている。

「あ…おはよう」

ユリスはまだリメールに慣れていないのか、言葉がしどろもどろだ。それでもあまり他人行儀な様子はなく、リメールのことは立派な仲間としてとらえているようだ。

「これからお出かけですか？」

「うん」

見た目が二十ほどのリメールはあきらかにユリスよりも年上だが、リメールが年下のユリス相手に敬語を使っているのは見ている側に違和感を感じさせる。常に敬語を使うのはリメールのこだわりらしく、アーミルやティリアがそれを気にした時も断じてやめなかったという。

「フィストさんはどこですか？一緒だと思ったんですけど」

「…隣の部屋で準備してるよ」

ユリスが奥の扉を指さす。納得したようでリメールも頷く。

「お二人って兄妹なんですか？」

フィストがアーミルにされた質問。ユリスも隠れてこそいたがそのことはよく覚えていた。

「ううん。いろいろあって、私フィストの連れ添いになったの」

ユリスは自分の中で最も適切な語句を選択したつもりなのだが、その言葉はかなり面倒な方向で誤解を招く言い回しになってしまっている。ユリスはそれを全く分かっていないが。

「…連れ添い、ですか？」

リメールが訝しげな表情をして、ユリスはそれに「うん、連れ添

い」と肯定する。普通なら誤った方向に思われそうなのだが、常人以上に鋭いのか逆に鈍いのか、リメールは「なにか特別な事情があるんでしょね」と都合よく納得した。

「じゃあ、ユリスさんはフィストさんのことが好きなんですか？」

「…ふあっ？」

意表を突かれた質問にユリスはたじろいだ。自分の言ったことが原因なのだが、細かい意味を知らないユリスには分かるわけがない。まずはなぜそんなことを聞いたのか聞こうとしたが、自分はどう思っているのかのほうにユリスは気になってしまった。

「えーっと…その…」

どう答えようか迷っていると、急にリメールは可笑しそうに笑いだした。

「うふふ、やっぱりまだまだ若いですね。よくわかりました」

何も答えてない、とユリスが言うよりも早くリメールは給湯室に入っていつてしまった。そしてそれと入れ替わるように奥の部屋からフィストが出てくる。

「ユリス、おまたせ」

「ひゃっ！」

声をかけてきたフィストにユリスは悲鳴を上げる。

「なっ何！」

「……ううん、気にしないで。早く行こう」

はぐらかすようにユリスは急かしたが、フィストが腑に落ちないでいるのは明らかだった。

18話 『その日』 本屋

二人の初仕事。それは、本を買ってくることだった。『オーニア神話』という本を探してほしいとのことだ。他にミルクや紅茶葉なども一度に頼まれて少し困惑したが、とにかく地図と代金をもらって事務所を出た。まるで子供のお遣いのような仕事だが、フィストは自分が子供に扱われる歳であるのは理解しているし、仕事をもらえるだけでありがたくもあったのであまり気にしていない。

ユリスに大した変化はなかったが、初仕事というだけあってフィストの気持ちはやや高ぶっていた。まだよく分からないことは多いが、目の前のすべてのものが明るく映っていた。かつてのように行きかう人々すべてに疑念を抱くような心の闇は、フィストにはもう残っていない。

「…フィスト」

大通りから外れたところで、隣を歩くユリスがフィストに話しかけてきた。

「ん？」

短く返事をしたただけだったのだが、ユリスは何か慌てたように黙ってしまった。

「…なに？」

「…なんでもない」

ユリスは顔を真っ赤にして前を向いている。それは少し怒っているようにも見受けられた。

「いや、呼んでおいてなんでもないってことは…」

「なんでもないっ！」

ユリスがはっきりと拒絶を表明したのでフィストもそれ以上の言及はできなかった。

一見するとただの家だが、地図ではそこその本屋で間違いはないようだ。経済発展時代の忘れもののような建物で、シックな色合いが本屋らしい落ち着いた雰囲気を感じさせる。その空気だけ周りの時代とは明らかに違い、まずは入ることを躊躇させた。

ドアの数メートル手前で一旦足が止まった。歩調が遅くなり、それでも少しずつ近づく。

神話をモデルにしたらしい模様つきガラスがはめ込まれた木製のドア。恐る恐る開くと、ドアについていた鐘がカラカラと鳴ってその空間を裂いた。

鐘の音に驚いたファーストは極力音をたてないように入り、ユリスもそれに続く。中は思いのほか広いようだ。本棚がドアと垂直に無数に並び、左右の壁まではなかなか遠い。明かりがほとんど消えかかっていて薄暗い上に何の音もせず、不気味だ。濃い埃の匂いが二人の鼻を刺した。

「…いらっしやい」

奥からしわがれた声がした。背筋が固まりそちらを凝視すると、レジに座る老人の姿が本棚の間から確認できた。髪は決して薄くはないがその色は白く、顔のしわは深く、かつ数が多い。老眼鏡をかけ、大きく開いた眼で古ぼけた本を読んでいる。まるで音のしない空間に一人でそうやって座っていると声をかけづらい。

「…じゃあ、探そうか」

「うん」

老人を避けるように右側の壁の方へ歩き出し、ユリスもそれに続く。本棚の側面にその蔵書の種類が記されているが、埃を深くかぶっていてよく読み取れない。そしてどの棚も同じような本ばかり

が並んでいて見分けがつかないのだ。

フィストは一通りその様子を見ていたが、奥の壁に行きつくと大まかな場所の特定をあきらめ端から一つずつ背表紙をなぞり始めた。上から下まで、一つの本棚の間を何度も往復する。一列見終わると下の列に移り、一面を見終わるとその反対側に映る。その繰り返しが続いた。

本棚の端にきて次の本棚に移ろうとしたフィストを壁が妨げた。店の中を一通り見終わってしまったらしい。

「やっぱり：あの人に聞かないといけないね」

ユリスがそう言うのを聞くまでもなく、フィストは老人の方へ向き直った。老人は時が止まっているかのように変化がない。

ゆっくり近づいた。本を読むその姿勢から全く動かない。時折右手を起こしてページをめくるだけだ。

レジのすぐ手前で止まる。老人の反応は無い。声を出すのも恐ろしいが、とにかく本のことを聞こうとした。

「見ない顔だね」

ぎょろりとした目が初めてフィストを捉えた。老人の口からそんな一言が洩れる。そして本に視線を戻しながら「今時新顔とは珍しい。まあ、氣にいるものなんか一つもないだろうがな」と言った。

フィストは少しムツとしたが、渡されたメモを開いて本の名前を確認した。

「あの：オーニア神話という本を探しているんですけど：」

その一言を口にした途端老人の態度が変わった。片眉をぴくりと動かし、それを問うようにフィストを睨みつけた。

「オーニア神話：と言ったか？」

「は？：はい」

「そんなものを：そうか、アーミルの使いか」

老人は一人分かったような顔をして本を閉じると、レジから出て

きてのろのろと歩きだした。

床に立つことでその身長の高さが露見している。それに加えて、背中が丸まった猫のように曲がっているせいで実際よりも更に小さく見えた。

頭を掻きながら本棚の間に隠れていく。そしてその姿が完全に見えなくなっただけからフィストは小さくため息をついた。彼の目の前にいるだけで、得も言われぬ緊張を二人は体感していた。

「なんだか…やりにくい人だね」

声をひそめてユリスに言った。ユリスも小さい声で返す。

「でも、これでその本も見つかりそう」

それ以降の会話は控え、老人の消えた辺りを見つめていた。時折本を動かす音が聞こえるだけの静かな時間が続く。

鐘の音がした。外の音がほんのわずかだけ入ってくる。二秒ほどで今度は乱暴に鐘の音が響く。

一体どんな人が入ってきたのか確認するように二人の視線は入り口に向けられた。

二人が見たもの。

それは、きらめく銃口。

両側に分けられると同時にレジのカウンターに無数の穴があいた。絶え間のない射撃音が耳を裂く。

カウンターが硝煙で見えなくなったところで一旦音が止まった。本棚の影から辺りの様子を窺うと、反対側でユリスが足を震わせて本棚に寄りかかっていた。音は抑えているが、荒くなった呼吸はフィストに直接かかっているのではと疑うほどよく伝わった。

一步、踏み出す音がした。お互いに呼吸を止める。少し間をおき、また一步。

更に一步。音の間隔がだんだん短くなる。この近距離でフィストが銃を使ってもおそらく間に合わない。横の本棚に手を掛け、体重をかけて大丈夫か確かめる。本棚を軸に蹴り上げる体制に入った。

頭が見えた。その瞬間手に体重を思い切り移し、足をその頭めがけて振り上げた。体は完全に宙にあった。

足が止まる。あとわずかで当たるところでその手にしっかりと掴まれていた。空中では振り払うこともできず、そのまま床に叩きつられる。すぐに起き上がろうとしたが、上げた顔の目の前に銃口が向けられており行動を許していない。おまけに足がそれに掴まれたままになっていて、動こうにもそれが出来ない。

薄い灰色のコートで全身を隠し、同じ色の中折れ帽を深く被りこんでいるので顔も分からない。一切の素肌を見せていないのでその中身があるのかも不明に等しい。息遣いも全く伝わってこず、足を掴む手からもひと肌の温度が伝わってこない。

少なくともまともな人間ではない、と直感がそう伝えた。

「お前は誰だ！」

大声で言ったが、それに対する反応は無い。一発で仕留めるために、その銃口でフィストを捉えているだけだ。

「フィスト……！」

向こう側からユリスの怯える声が聞こえたが、足の震えのせいで体重を本棚に任せなければ立っていることもできないらしい。コートにとって、今のユリスはまるで眼中にないようだ。

顔は見えないが、その眼はしっかりとフィストに標準を合わせていた。

引き金にかかる指に力が入った。

覚悟を決め、目をつぶる。

鐘の音、それに続く銃声のあと、銃弾がファISTの頬をかすめた。ファISTがその小さな痛みで目を開くと、今さっきまで自分に銃口を向けていたコートがカウンターに向こうまで吹き飛んでいるのが見えた。大量の煙がカウンターもろともコートを覆い隠す。

足を掴まれていたためファISTもいくらか引つ張られていたが、その手も既に離れていた。

数秒、啞然とした。足にきちんと力が入らないが、ゆっくりと立ち上がる。

煙は晴れてきているが轟音の余波がまだ十分に感じられる。細かい振動が体中をいつまでも廻っていく。

何が起こったのか、二人には想像もつかない。

「よかった…間に合ったみたいですね」

「…少しばかりやりすぎちゃったようだが」

聞き慣れた声、と聞き慣れない声。それにより破裂しそうだった恐怖がゆっくりと終息に向かっていくのがファISTにはよく分かった。

19話 『その日』 初見の男

フィストが振り返って見たのは、銀色のポニーテールとブラウンのトレンチコート。そのポニーテールが赤い瞳を持っているのは二人にとっても既知の事実だった。

フィストと同じように気持ちが悪く落ち着いたらしく、何とか体重を足に戻したユリスが二人の方へ歩いてくる。

「…リメール…」

その姿をはっきりと確認し、ユリスが感嘆の声を上げた。

「リメール、なんでここに？…いや、まずはお礼を言うべきかな。ありがとう」

フィストが頭を下げると、リメールは恥ずかしそうに視線をそらした。

「いえ、そんな…お礼ならこちらの方に言ってください」

自身の姿を隠すように、リメールはその男の横に下がった。代わりにその男が一步前に出る。ユリスはそれに驚いたのか、怯えたようにフィストの後ろに隠れてしまった。

巨大な体。アーミルよりも頭一つは抜けているだろう。体つきは決してごつくは無いのだが、かといって細いわけでもない。フィストが見上げると、男は不敵に微笑んだ。

「…えっと、この人は…？」

「お？自己紹介がまだだったな」

リメールに聞いたのだが、男の方が反応してきた。見た目に合わない軽い雰囲気の声だ。

「俺はダルタ。リメールの働いてるトコと親しくさせてもらってる商人だ」

「…はあ…」

見た目とのギャップにフィストははっきりとした返事ができなかったが、そんなフィストの頭を男——ダルタは豪快に笑いながら

かき回した。

「ははは、見た目通りの性格してんなー、おまえ」

掻きまわす力はやはり強く、フィストは逆らうこともできなかった。ただ、その手はずいぶんと優しさが込められていた。やはり悪人ではないようだ。

「ダルタさん、こちらの二人が先ほど話したフィストさんとユリスさんですよ」

リメールが嬉しそうに三人の間に入った。フィストとユリスをダルタに見せるようにして名前を教えている。

「ほー、この二人が？まさかこんなにすぐ会えるとはなあ」

ダルタが驚いたように頷く。どうやらリメールがここに来る前に二人のことを話していたらしい。

「とにかく、ありがとう。ちょっと危なかったかもしれない」

フィストが胸をなでおろすと、リメールは嬉しそうに笑った。だがユリスは二人の方を向かず、吹き飛んだコートで破壊されたカウンターの方をフィストの後ろから不安そうに見つめている。

「…死んだかな？」

カウンターからは煙が上がっている。一点を中心に放射状に亀裂が広がり、その中心になにかが強烈な勢いで飛び込んだのが分かる。それが人間だとしたらまず生きてはいないだろう。

人間だしたら。

「…そうか、まだ敵の生死を確認したわけじゃねえしな」

ダルタがつぶやくと、大腿でカウンターに近づいていた。カウンターだった瓦礫をまたいで、その奥を覗き込んでいる。

「危なくない？」

思わずフィストが声をかける。

「大丈夫、大丈夫…あ？」

ダルタが声をあげる。ユリスがびくついた。

「おいフィスト、ちょっと来な」

「僕？」

フィストは自分が呼ばれたことに気づき、しぶしぶダルタの後を追った。ユリスをリメールに渡し、ダルタよりも慎重に、いつでも逃げられる姿勢で近づく。

自身の思う限界まで来ると、瓦礫の中のそれが目に入った。コートと、中折れ帽。できるだけ距離を保って帽子のつばをつまむ。少しずつ、覗くようにあげ、中を覗いた。

帽子の下には、何もなかった。

驚いてコートの中も確認したが同様になにもない。

確かに二人との会話で暫くの間は空いた。その間に逃げることも可能だったかもしれない。だとしても、帽子とコートをそこに置いていく理由がない。

「…どういことだろう」

「…おい」

「？」

落ちていた声だった。全員が驚いて振り返ると、店主である老人が一冊の本を持って本棚の影から現れていた。それによりフィストは自分が本を買いに来ていた事を思い出し、はっとして辺りを見回した。

正確に並んでいた本棚たち。だがその一部、特に出入り口からカウンターにかけての直線上の物が大破し、その棚の本のページが無残な姿となって足元に飛散していた。

絶句、などと言う言葉では済まされない。ユリスだけは「ひどい壊れ様」としか受け取っていないようだが、事の重大さの分かっている三人は顔を真っ青にして沈黙の中に沈んでいる。

「…あの、えっと…」

フィストがなんとか言葉を紡ごうとする。

「代金」

「え？」

「本の代金だ。銅貨七枚」

老人の差し出した腕には、妙に古ぼけた分厚く赤い本が一冊握られていた。凍りついた頭がようやくその意味を飲み込んだフィストは、慌てて渡されていたお金を引っ張り出した。

髭の長い大昔の国王の横顔を携えた銅貨が十数枚。それから七枚をつまみだし、そっと渡した。

「ほれ、これがその本だ。用が済んだのなら早く帰れ」

簡素な売買が済むと、もう老人は二人に興味がないかのようにカウンターの方へ戻っていく。カウンターはほぼ原型を留めていないが、そこに落ちている本を一冊拾いあげてそれについている埃をはたいた。周りの様子が見えていないはずがないのだが、それに関心してはまるで何も言っていない。

「…でも、片付けぐらいは…」

「静かにしてくれ。本を読んでいるんだ」

老人の言葉は短いが威圧感があり、フィストの背中を思い切り強く押した。誰もそれ以上何も言うこともなく、追い出されるように店を出ることとなった。

「…なんだったんだ、あの爺さんは」

「さあ…」

リメールとダルタが店を出るなり首をかしげた。それとは無関係に、フィストは扉の前から辺りを見回す。

「……」

まるで置き去りにされたような感覚。ほんの数十分の間に外の子がずいぶん様変わりして見えた。一瞬どうしていいか分からなくなつたフィストは、ただ啞然として空を仰いだ。

「そういえばリメール」

空気の色の悪さを換えようとフィストが振り返った。

「なんでしよう？」

「あのコートだけど、一瞬であんなに吹き飛ばすなんてどうやったのか気になってね」

「あ…それは」

リメールが何か言おうとしたのを、ダルタが止めた。

「それは、俺がこいつを貸してやったんだよ。で、ドーンとね」

「…って」

フィストは何を言っていていいか分からなくなった。どこから突っ込むべきか、と言ったほうが正しいだろうか。

ロケットランチャー。

大げさな表現ではない。事実、そこにあるのはそのものなのだから。

フィストも実物を見るのは初めてだった。せいぜい軍機の類の読み物に載っている写真くらいだ。少し小さいので威力はそれなりに減っているそうだが、本物に間違いない。

強大な破壊力を誇る、一発限りの兵器。

「…これって…」

「ん？ロケラン。ま、たまたま持ってたからな、使ってみた」

「みた、って…」

「あうう、フィストさん」

呆けるフィストに、リメールが慌てて補足説明をした。

「すみません。ダルタさんはアーミルさんと古いお友達なんですけど…武器とかがすごく好きで、いろんな種類のものを持っているんですよ」

「…そう…」

やすやすと肯定出来ない話だった。

多少武器が好きで集めている程度ならまだしも、こんな物騒なものを平気で持ち歩くのは流石に常人の出来る業ではない。目の前に

いるこの男が、フィストの目にはどうにも危なっかしく見えて仕方がなかった。

「どうした？何か問題でも？」

「ありすぎるよ」

これで無いと言う方がおかしい。まずフィストはそれ自体の攻撃範囲の広さから攻めた。

「ほう？」

「なによりも、これつかったら僕らまで巻き込まれてたかもしれないじゃ…」

「ええええ！そ、そんな！」

その一言にリメールが過剰反応した。ユリスが再び反応してびくつく。

「…リメール？」

「す、す、すみません！私、こういうものの扱いには慣れてなくて…あの、ごめんなさい！」

「…いや、慣れとかそういう問題じゃないと思うんだが…」

「すみません！本当にすみません！私の力不足でした！」

ダルタが冷静に突っ込むがリメールの耳にはまるで入っていない。二人に対してひたすらに頭を下げている。下げたまま決してあげようとしなない。石畳に滴る雫も確認できた。

必死に頭を下げて本気で許しを乞うリメールへの対応はフィストもだいぶ困ったようだが、とりあえず落ち着かせて涙を拭いた。

「まあ、大丈夫だったんだからさ。リメールももう気にしないで」

それ以上の言葉が出てこない語彙の無さがフィストにとっては何とも情けなかったが、リメールはとりあえず謝るのをやめた。

「……」

黙っているリメールにユリスが近づく。明らかにしよげているリメールの顔を見ると、ユリスは何も言わずにその頭を撫でた。

年の差からすれば奇妙な光景だが、それはまるで姉妹のようで見ていて安心感があった。

「ユリスさん？」

「こうしてると…落ち着くよ」

暫くユリスが撫でていると、リメールに元の笑顔が戻り始めた。それを確認してから、ユリスはようやく撫でるのをやめた。

「…すみません、もう大丈夫です」

「よかった。じゃあ僕らはもう問題無いから、リメールは先に戻ってて」

「はい、でも…何があったんですか？急に襲われるなんて」

「…うーんと」

リメールがもつともな疑問を口にする。フィストには明らかな『心当たり』があつて正直に答えようか困ったのだが、その前にダルタが口をはさんできた。

「まあまあ、倒したんだからいいじゃねえか。他の奴がいた形跡もないし、もう心配する必要もないだろ」

楽天的なそれはあまり良いようには聞こえなかったが、リメールはそれで納得したようでそれ以上の追及をしてくることは無かった。

「ダルタさんは、すぐにうちに来るんですか？」

リメールが尋ねる。

「いや、市場で少し買い物してから行かせてもらうよ」

「じゃあフィストさんたちと同じところに行くんですね。だったら、途中までで良いのでお二人をお願いできますか？」

リメールが聞くと、ダルタは気前の良さそうな笑顔で承諾した。

それで安心したのか、リメールは「本当にすみませんでした」ともう一度お辞儀をしてから事務所へと帰っていった。

「…さて、お二人さん。そろそろ行こうか」

リメールの姿が見えなくなると、ダルタが再び大きな声で笑った。ユリスはまだ怯えているようで、フィストの後ろから顔を覗かせてそんなダルタの様子をうかがっていた。

20話 『その日』 桃

太陽がかなり高い位置まで昇っている。目的地に着くまでの人の数もかなり多い。本屋でのこともあったのでフィストは常にあたりを気を配っていたが、明らかな殺気は感じられなかった。もう大丈夫だろうということにして、ダルタはフィスト達とは逆の方向へと歩いて行ってしまった。

人の数が頂点に達したと思えるほどになると、ほどなくして露店の商店街が見えてきた。簡素な白い布を骨組みの上にかぶせて屋根にしただけの簡素な店ばかりだったが、並んでいる品物はどれもなかなかのものようだ。探索も兼ねて、フィストはのんびり歩きながら目当ての物を探すことにした。

「フィスト、何かいっぱい並んでる」

ユリスが斜め前方を指さした。

鮮魚が並んでいた。葉っぱの上に何尾かまとめて並んでいるが、発泡スチロールの箱に大きな魚——特に旬のマグロやブリがその大半を占めている——も多く顔を並べている。小魚が量り売りされている様子も見受けられ、杓のようなもので小魚の海を掻き回して袋に詰めている女性の姿が見えた。やや生臭い匂いがするが、それが逆に魚の誘惑を引き立たせている。

「フィスト……ここ何？」

ユリスがフィストの後ろから魚を見つめている。

「魚屋だよ。ユリスは魚知らない？」

「あんまり」

返答は早く、何の迷いもない。本当に知らないんだと心の内で驚きながら、フィストは魚についての説明をある程度施した。

基本事項しか教えなかったのだが、ユリスはそれで納得したように、うんうんと頷いてから再び歩き出した。

漁夫らしい店主の威勢のいい声が響いていたが、通り過ぎるとそれが次第に後方に流れていく。

反対側に目を移した。

「…あそこは肉屋かな」

肉の塊がじっくりと焼かれている。その香ばしい香りが辺りに漂う。生の肉から加工肉まで、種類ごとに分けられて山積みになされて並んでいる。牛、鶏、豚、山羊、羊、馬…見た目では判断がつかないが、札を見る限りでもこれだけの種類が揃えてあるようだ。フィストはあまり肉が好きではないので、焼いている香ばしさにもあまり誘われずに通り抜けていく。

「…うわっ」

横を山羊が通り抜けた。首につけられた首輪の鈴がカラコロと鳴る。おそらく食肉用ではなく、酪農用だろう。あとからミルク用の缶を二つ抱えた少年が慌てて追っていた。

後を追えばミルクを売っている店にはすぐつけるだろう。だがフィストは、それほど焦ってミルクを買いに走る必要はないと判断した。もしミルクを最初買って茶葉がなかなか見つからなかった場合、ミルクが悪くなってしまう恐れがある。

それに、フィストも自身の所持金はあるのだ。興味をそそるものがあるかもしれないと考えたと、フィストはすぐに買い物を済ませることが勿体なく思ってしまった。

次に目に飛び込んできたのは、樽に積まれたリンゴ。果物の専門らしく、その横にはリンゴの赤ばかりではなく、黄色、青、ピンク、黄緑、そんな色がそれぞれ樽に詰め込まれて道行く人を誘っている。そこに集まる人には子供も多い。少ない小遣いでも果物は買うこ

とができるし、何よりおいしい。

確かに魅力的ではあったが、この人だかりの中に割り込んでまで何かを買う気力はフィストには無く、早々に先に行くことにした、のだが。

ユリスの足が止まっている。はぐれないようにずっと手をつないでいたのだが、その握っている手が急に止まった。振り返ると、積みまれている果物をその瞳でじっと見つめていた。

「…ユリス？」

「…うん」

口では一応の反応をしたが、その視線は陳列する商品の方に向けられたまま動かない。

「どうかした？」

「…いい匂い…」

「…」

フィストはこの反応に覚えがあった。

自分をもっと幼いころ、母と買い物に行った時。

欲しいものがあった時に、その前で足を止める自分。

苦笑いをしてこちらを見る母。

それは、全くと言っていいほど同じ反応だった。

ユリスの視線の先を目で追ってみる。リング、オレンジの先の小さな樽。そこにその匂いのもとが積みまれているようだ。

「…あ」

思わず声が出してしまった。

それは、桃だった。

桃はフィストの好物だった。長い間食べていなかったのだが、久しぶりにその姿を見た途端フィストの脳裏に突き通った甘味がよぎる。

本来、この季節には桃はあまり出回らない。だが、この周辺の国境付近では特殊な温室を利用して季節外の作物を作っている。その

ため、この街では常にあらゆる季節の作物が手に入るようになっていた。フィストもそのことは知っていたのだが、桃が並んでいることは予期せぬことだったらしい。

「…」

ユリスは未だにそれを見つめている。食べたい、という感情が全身から染み出している。声が出たことには気づかれなかったらしい、フィストは鼻で溜息をついた。

「ユリス、あれが好きなの？」

「…私、食べたことない。けど、すごくいい匂いがする…」
返答に気がこもっていない。心ここにあらずといった様子だ。

「…いい匂い…」

繰り返し発せられる匂いの感想。言いたいことがあるが悪い気がして言えない、そんな心境まで手に取るようにフィストに伝わってくる。待っていても自分からは絶対に言わないのは目に見えているので、フィストから言ってやらなければならない。

「それが欲しいの？」

「…うん」

恥ずかしいのか、ずいぶん小声だった。それでも欲しいという思いは半端ではないようだ。こうなると、買ってやらなければいつまでもそれを惜しんでしつこく言ってくる。

食べ物への恨みは何よりも恐ろしい…つまりはそういうことだ。

フィストは自分の所持金を確認した。

銀貨が六枚、銅貨が十二枚。桃を二つならば銅貨だけでもおつりがくる。無駄遣いは控えるべきだとフィストも分かっているのだが、ユリスに買ってやらなければ後が恐ろしいし、フィスト自身も食べたくなっていた。

気がつくと、二つの桃を手にとって店主へと渡していた。

「…フィストはこれが好きなの？」

二つの桃を買う様子を見てか、ユリスが尋ねてきた。

「…うん、大好きだね。傷みやすいから保存もできないし、最近は

食べてなかったから無性に欲しくなっちゃってさ。はい、どうぞ」

「あ：ありがとう」

フィストから桃を受け取ると、ユリスは恥ずかしそうに、しかし嬉しそうに笑った。

ユリスと自分は何だか似ているな。そんな思いがフィストの中に湧いていた。

「お嬢ちゃん、ここで食べるのかい？」

店主が話しかけてきたことにユリスは一瞬驚いたようだが、よほどすぐに食べたいのか素直に頷いた。心得たように店主はその桃を受け取り、慣れた手さばきで桃の皮を剥いて行く。

「フィスト、これなんていうの？」

ユリスが今まきに向かっている桃を指さす。

「桃って言うんだよ。この香りは確かにいい匂いだよね」

「モモ：」

ユリスがうつとりとそれを見つめていると、気を利かせた店主が剥き終わった桃を布でくるんで食べやすくして渡してくれた。皮が無くなったことで遠慮がちだった桃の香りが一気に周囲に広がり、歩行者の何人かが誘われるように振り返った。フィストはその視線が気になったので自分の桃は剥かないでもらったのだが、ユリスはそんなことお構いなしと言ったように早速それにかぶりつく。いくらか時間をおき、フィストに満面の笑みを見せた。

「：おいしい？」

返答がどうかは聞かなくとも分かった。だが、その無邪気な様子を見ているとフィストはどうしても聞きたくなったのだ。

「：うん。私、これ好きかも」

案の定、喜びに満ちた顔がフィストに向けられた。

そのままフィストはしばらく、ユリスが桃を食べるのを嬉しそうに見つめていた。

「：フィスト」

笑ったままだが、ユリスが少し真面目に戻った顔でフィストを見ている。

「どうかした？」

「えっと…ちょっと待って」

何かを言いたいらしいのだが、桃を食べる手を休める気もないらしい。ちよつと待ってと言うまでに桃は半分ほどまで減ってしまっている。

「…ふう、ごめんフィスト。えーっと、気がついた？」

「え？」

フィストの目には、ユリスは桃に夢中でそれ以外見えていないように映っていた。いったい何に気づいたと言うのか、フィストにはさっぱりわからない。フィストも常にあたりを意識を張り巡らせているが、特に気になることはない。

「何だろう？僕は気づいてないよ」

その一言に、ユリスは意外そうな顔をした。フィストなら当然気づいているとも思っていたのだろうか。

「近くからお茶の葉の匂いをするの」

「…あつ」

指摘されたことで、フィストもようやく気づいた。

ずっと桃の香りがフィストも鼻を占めていたが、嗅覚に意識を集めると、確かにどこからかお茶らしい香りが漂ってきた。だがそれもほんのわずかで、かなり集中しないと果物に隠されてしまつてその存在が希薄になってしまう。

ユリスは明らかに殆どの意識を桃にやっていたのだが、それでもその匂いに気づくことができたのはフィストもただ驚くだけだった。

「…ユリスって、鼻がいいんだね。桃の匂いで全然分からなかった」

「そうかな？…うん、ありがとう」

すると、話の一部始終を聞いていたのか、先ほどの店主がこちらに寄ってきた。

「茶葉を探しているのかい」

「あ、はい。どこか分かりますか？」

「ああ。この通りを真っ直ぐ行った三つ目の露店で買えるはずだ」
一つ一つの店が思いのほか広く長い。三つ先と言ってもそれなりの距離がある。

茶葉の香りは一般的に強めで、三つ先の露店まで届くのは変なことではない。ただ、桃を目の前で食べているのに嗅ぎつけることは普通の人間にはまず無理だ。ユリスの鼻にはかなわないとぼやきながら、フィストは店主にお礼を言って歩き出した。

21話 『その日』 茶葉

隣の店は、視界に入るなり妙に光を放ってきた。それが品物である宝石、アクセサリーの類によるものだと分かるには暫くの時間を要した。集まっている人間も富裕層ばかりであるのは見ただけで分かる。

まさかこれも、と思いファISTは気づかれないように横のユリスを見たが、彼女はそれらには何の興味も持っていないようで夢中になって桃を口に押し付けている。少しホッとしたファISTは、ユリスが桃を人にぶつけないように注意だけして足早に通り過ぎることにした。

「…ねえ、ファIST」

歩きながらユリスがファISTの袖を引っ張ってくる。

「あのキラキラした石、みんな羨ましそうに見てるね」

確かに通りを行く人は、多かれ少なかれそれらを見て切なそうな表情になっている。欲しくても手が出ない、という悔しそうな顔をそろってしていた。

「ユリスはああいうの好きじゃないの？」

どこか他人事に聞こえたので、ファISTは思わず尋ねた。

「…『きれい』ってよく分からないの」

「…そっか」

安心したような悲しくなったような、複雑な気持ちを紛らわすかのようにファISTは足を速めて店の前を離れた。

宝石類の端が見えると、一層茶葉の香りが増してきた。更に、コーヒーと思われる苦味のある香りも感じられるようになってきた。鼻でじっくり味わうと、疲労が抜け落ちてファISTに落ち着いた気分を与えた。意識せずに足取りが軽くなる。

織物、だろうか。紺や藍といった色の布の生地が丁寧に巻かれて、束になってそこに並んでいる。樽に差し込み、もしくは台に積み重ねられ、良い物はその上に広げて色や模様を人々に見せつけている。ディスプレイと言うべきだろうか、店員は店の生地を使用したような丈の長い服を着ている。他ではあまり見ない装飾品も付けていて、異国からの売り込みと見受けられる。すぐ近くに貿易港があるので、それもあまり珍しいことではない。

店員は通行人に呼び込みをしているが、子供は商売対象ではないようで、すぐ前を通り過ぎた二人に声をかけることはなかった。

「あ、そうだ」

フィストが足を止めた。

「僕らってこれ以外服持っていないよね。ここで新しい服でも買おうか」

あまり安い服は売っていない印象だが、いつまでも同じ服で過ごさせるのはフィストもあまり気が進んでいない。

ユリスも女の子なのだ。服装にも気を遣ってあげなければならない。い。

「…服…」

ユリスは少し俯き、自らの着ている服をまじまじと見つめた。

ベージュのチュニックと、ブラウンのTシャツ。ずっと着ているため汚れが目立っているが、今のその服はユリスにだいぶ馴染んでいて、ユリスの服と言って疑う者はいないだろう。

「…うん、いい」

ユリスは首を横に振った。

「…でも、そんなぼろぼろの古着じゃ…」

「私、この服がいい」

胸を張ってそう言うと、フィストは頬を赤らめて黙った。

「…ユリス…その服気に入ってくれたんだね」

「…」

ユリスは何も言わない。恥ずかしそうにしているユリスと嬉しそ

うに目を合わせると、フィストは笑顔で歩きだした。

まず目に飛び込んできたのは、小さめの樽一杯に詰まったコーヒー豆たちだった。

産地ごとに別商品として扱われていて値段も全く違う。それを真剣に見つめる客は、どれも少し歳を重ねたような男ばかりだ。一部は煙草を吸い、もしくは髭をたくわえ、威圧感を持ってそこに立っている。二人とも煙草の匂いは苦手だったので近寄ることを躊躇っていたのだが、この店に茶葉が売っているのは確かなので避けることはできないようだ。わざとらしく咳きこみながらその人たちの間をぬけて店の奥へ入った。

お茶とコーヒーの混ざった匂い。入り口は狭いこの店も、奥には小休止が可能な椅子とテーブルのセットがいくつか並んでいる。この商品をすぐ飲めるようにしているようで、何人かそこでかぐわしい香りとともに穏やかな時を過ごしている。

その手前に見えるカウンターではコーヒー豆の焙煎を行っているらしく、どこよりも強く苦い香りがそこから流れてきていた。それが商売戦術なのだろう、この香りは通りのかなり遠くまで届いて人を掻き寄せている。

探している紅茶葉がどの銘柄なのか、二人は聞かされていない。アーミルは「俺の使いで来たと言えば伝わる」とだけ言った。よほど顔が知れているのか、とにかくそのカウンターでそう言わなければ探しようもない。

今カウンターには若そうなタキシードの男が一人。本当に伝わるのかという不安があったが、まずは聞いてみなければ始まらない。「あの」

おそるおそる声をかけた。男は今まさに豆を煎っている最中で、まだ色が変わっていない豆を何度も転がしながらその色を変えている。それでもフィスト達に気づくと、接客用の明るい笑顔をすぐに作った。

「いらっしやいませ。何かお探しですか？」

店番の決まり文句のようなセリフが第一声だった。

「あ、えっと、僕ら、アーミルの使いの者です」

とりあえずは言った。あとは、伝わるかどうか。

一瞬訳の分からないような顔をされたので、フィストの心臓は破裂しそうなほどにまでなつた。だが男は数秒考え込んだのち、

「ああ、そうですか。分かりました、少々お待ちください」

そう言ってカウンターの奥の棚に並ぶ袋を見比べ始めた。安心して溜息が洩れた。

それほど待たないうちに、男が一つの袋を持ってきた。生まれたばかりの赤ちゃんくらいの大きさで、表には商品名と産出国、そして内容量が記されていた。フィストの知らない言語で、内容量以外はまるで分からないことばかりだった。

「こちらですね。銀貨三枚になります」

「：銀貨三枚、ですか：？」

男はにこやかに言ったが、フィストは全く笑えていない。

銀貨三枚とは、それこそフィストが完全に埋まってしまうほどの量の桃が買える金額だ。それを、この僅かな茶葉一つで使い果たしてしまう。渡された金できちんと買うことは出来るのだが、やはりフィストはすぐに信じることはできなかった。

銀貨を渡すと、男はフィストにしっかりとその袋を渡した。見た目以上に重く感じたのは言うまでもない。

あとは、ミルク。通りの人の数もどんどん増えてきているので、早いうちに済ませたほうがいいのは二人ともよく分かっている。

「あの、ミルクはどこで売っているか分かりますか？」

果物屋の時のように、豆の焙煎に戻ろうとした男にフィストが尋ねた。

「ミルクですか？ここの向かいの店で売っていますよ。山羊がたくさんいるのすぐ分かかると思うのですが」

外から絶え間なく聞こえる山羊の鳴き声に気づいたのは、そう言

われてからだった。

「…ふう、買えてよかった」

帰り道で、ユリスが感嘆に近い呟きを発した。

「ま、初仕事としては上出来だよね」

フィストはちゃんと相槌を打とうとしたのだが、少し棒読みになつていた。

「でも、私…知らないものがたくさんあったな」

「そう」

それはフィストもうすうす感づいていた。

店に陳列している商品。ユリスはその殆どを名前で呼ばなかった。名前を知らず、呼ぶことができなかったと考えるのが妥当な線だ。

事実、ユリスはなにか興味を引かれるものがあるたびにフィストにその名を尋ねていた。

「今度来るときは、もっといろいろ教えて」

「うん」

フィストには、そう返すしか出来なかった。

横に並んで歩くユリスの顔をちらりと見た。複雑な感情が交錯する。

彼女は『翼竜』になるはずだった人間だ。なぜ研究所から出てきたのかは知らないが、今まで希薄だった感情、偏った知識、それらはそれが原因だと思われる。今こそ一般人の感情にかなり近づいてきてはいるが、感情に限らずまだ欠けている部分も多い。

彼女はまだ『翼竜』になる条件を満たしているかもしれない。彼女が狙われている理由もそこにあるのだろうとフィストは考えてい

た。

「どうかした？」

ユリスがフィストの顔を覗き込んで不思議そうな顔をしていた。

「え？あ、いや別に…」

自分がどんな研究に関わっていたか知っているとは思っていないのだが、フィストは焦って目をそらした。

まだ彼女にこのことは話してはいけないと、フィストは心に決めていた。はっきりした確証はないが、何も知らないまま幸せになつてほしいと自身が望んでいるのは自覚していた。

「ねえ、フィスト」

ユリスから話しかけてきていた。前方の石畳の方を見たまま、恥ずかしそうに笑っている。

「なに？」

「あのね……ありがとう」

「……」

フィストの人生の中でも、その言葉は幾度となく言ってもらっていたし、言ってきたいた。だがその『ありがとう』は、そのどれよりも重い意味をもった『ありがとう』だった。

まずはどう返していいのか分からなくなり、黙る。ユリスは今の一言にかなり勇気を使ったらしく、恥ずかしそうにしたまま何も言わない。何か反応した方がいいとフィストは思ったが、辺りに人がいないか気になっていた。見まわしたが人影は無い。

「…急にどうしたの？」

とりあえず出た一言。フィストは、何故感謝されているのか分からないでいる自分に気づいた。それに気づくのさえ多大な時間を要するほど、彼の頭は真っ白になっていた。

「……なんだか…言っておきたくて。いろいろお世話にもなったし」
そう言ったユリスの横顔は、照れくさそうに微笑んでいた。

「これからも、ずっと一緒にいてね」

「…うん、勿論」

ユリスの顔を見ていられなくなったフィストは、視線を前に戻した。くらくらするほど顔が火照り、赤くなっているのを自身でも分かっている。そして、それとは対照的な冷たく暗い石畳がずっと奥まで続いていた。

お互いにそれ以上の会話をする余力は無く、何も言葉を交わすことなくその道をたどっていく。殆ど回転しなくなったフィストの頭でも、その道はずっと長く感じた。

(どこにもいかないで…ずっと一緒に、かあ…)

朝のことも同時に思い出し、フィストは喜びか憂いか分からない溜息をついた。

いやに静かだった。

その銃声も、よく聞こえた。

22話 『その日』 目覚め

とっさに身をひるがえす。それと同時に、フィストの左肩がえぐられた。鋭い痛みに一瞬顔をしかめ、肩を手で押さえてそのまま敵の姿を確認した。

中折れ帽をかぶったコートが、一丁の拳銃をこちらに向けて立っている。

本屋のものと全く同一と言っていいほど、それは変化のない姿で立ちふさがっていた。

血がたれた。体から溢れたそれは地面に流れ落ち、石畳の溝に吸い込まれていく。妙に静かな空気は、その存在をはっきりと押し出している。二十メートルほどの間も、二人まで届く硝煙の香りが短くしていた。

「…！」

「…離れてて」

悲鳴を押し殺したユリスに、フィストは離れるように促した。戸惑った様子を隠そうとしないユリスだったが、フィストから二、三步離れてフィストとその様子を震えながら窺い始めた。

すでに拳銃を構えた相手と、まだ抜いてもいない自分。どちらが劣勢かは一目瞭然だが、フィストは勿論コートの方もそのまま動こうとしない。

静止。

時間が硬直する。

瞬時に懷に手を入れ、拳銃を掴んだ。だが、フィストに照準を合わせた銃口がそこから銃を抜き出すことを許さない。

はつきりとした銃声。それを横に飛び出してかわし、同時に懷から銃を抜き取って反撃を試みる。

飛び出しながらの発砲だったため、それはコートの右脇をかすめただけだった。

倒れなかったその瞬間は無防備だ。今、次の一撃が来るとかわすことは出来ない。ユリスが思わず手で視界を塞いだ。

フィストもその一撃が来ることを予想したのだが、いつまでもそれがこない。

コートはそこに出来た小さなかすり傷を必死に抑えている。構えられていた銃もガシャンと音を立てて下に落ちた。何をしているのか分からず、フィストは倒れたままの姿勢でその成り行きを窺っている。

暫くもがいたあと、その手が不意に傷口から離れた。そしてその傷から水蒸気のような空気が噴き出し、コートは中身を失ったように崩れ落ちた。

それは二人にとっても訳の分からない結果だった。

立ち上がったフィストがユリスを連れて駆け寄り、その状態を確認した。そこにあるのは、脱ぎ捨てたように乱れて落ちているコートと中折れ帽だけだ。ユリスが袖をつまんで持ち上げたが、中身はやはり消え去っていた。

それは、本屋での一件と何ら変わらない結果だった。

「どこかに逃げたのかな？」

「でも、僕が撃った後に逃げた様子は無かったよ。あれは、なんて言うか……」

まるで、蒸発したみたいだった。あまりに非現実的で、言葉にはなかった。フィストの頭の中だけで予想は次々と発展していく。

——蒸発した、ということは奴らは人間じゃないのか？

人間じゃないとしたら、列車にいた怪鳥みたいな化け物の類？

もしそうなら、その正体が何となく見えてくる。

……まさか、もう敵の罠に……

「……っ！」

通りを吹き抜ける冷たい風。フィストはその中に、強烈な殺気を感じた。すぐにでも自分たちを殺しかねないような恐ろしさがある。

ユリスは不思議そうな顔をしているが、フィストはすぐに身構えた。自分を取り囲むあらゆる物へ、方向へ、あるだけの神経を張り巡らせた。そして、まだこちらに殺気を放つ存在に気づいた。二人、三人……もつと多い。

「：フィスト、どうしたの？」

ユリスが問いかけるが答えず、フィストは動かない。いつ相手が動くのか、そこに全ての力を注いでいる。フィストから放たれる殺気で何か感じ取ったのか、ユリスも黙って警戒心をあらわにした。

振り返り一発を放つ。今度はしつかりと中心を貫通した。今度は傷口を抑える暇もなく、コートは着用者を失いその場に崩れた。

それを皮切りに、わだかまっていた殺気が一斉に形を成して姿を現した。何倍もの銃声が凝縮されてフィストに帰還する。

二人は身を低くし、脇の小さな路地に滑り込んでそれをかわした。入ってようやく気づけた事なのだが、その路地はほんの十数メートルで行き止まりになっていた。その事実には逃げ道がなくなった事を意味するのだが、それは逆にその入り口だけを集中して守れるという事にもなる。

少し奥まで入るとユリスはそのまましつかりと地面に伏せ、その手前でフィストが銃を構える。通りから足音がいくつも近づいてくるのにつれて鼓動がはつきりと大きくなる。

二つのコートが見えた。すぐに標準を合わせて一つを貫通する。それはすぐに崩れたが、もう一方から銃弾が襲い掛かりフィストの頬を掠めていった。一瞬表情を歪ませ、すぐに撃ち返して貫通する。それが崩れて間もなく、更にコートが姿を見せた。頬から血を流して銃を構えなおすが、すでにコートが三、四体は出現していた。

一体を貫通したが、その途端に銃がはじかれた。はじけ飛んだ銃はユリスよりもさらに奥に滑っていく。そして何を言う間もなく、腹部を鉛の弾が貫通していった。

「うぐっ！」

痛みが小さな声になり、膝が地に着く。その声が耳に入り、伏せていたユリスがこの状況で初めて顔をあげた。

「フィスト…血が…！」

「……っ」

大丈夫。その一言は痛みにかき消された。フィストの腹部から流出した血が足を伝い、地面を這って広がる。それ以後のフィストの言葉は無く、ただ下を向いて呼吸を荒くしていた。

ユリスはすぐに起き上がり、フィストの体を支えた。奇しくもルフィーネの時と同じ姿勢で。

その向こう側に、今回は何体ものコートが銃を構えて並んでいた。その銃口はあまりに無慈悲で、その瞬間にもフィストにとどめを刺しかねない。

フィストと、記憶の中のルフィーネの姿が重なる。

また大切な人が目の前で死にかけている。なのに自分にはどうすることもできない。

ユリスの心は、強い悲しみとコートへの怒りで満たされていた。

「……う……」

涙の溢れ返る瞳でコートたちを睨みつける。コートたちは瀕死のフィストに標準を合わせたまま、だんだんと距離を詰めてくる。

一步。腕が震え始めた。

一步。何も考える余裕がなくなった。

一步。目に映るものすべて、怨恨の対象に見えた。

いっぽ。体が熱くなる。

いっぽ。フィストをそつと下に寝かせる。

いっぽ。体中に力がこもった。

「うああああああああああ！！」

大きく叫んだあと、ユリスの姿が一瞬でそこから消えた。

現われたのは一番手前のコートของすぐ前、飛びかかった態勢で足をふりかぶっている。

その浮いた姿勢で回し蹴りを喰らわす。コートは瞬時に通りの向こうまで吹き飛んで向かいの壁に激突した。回し蹴りから一回転したユリスは、その空中での不安定な姿勢から何事もなかったように着地する。そしてしっかりと立ち上がり直すと、残りのコートたちを睨みつけた。

「……………」

その視線、烈火の如く。

ユリスの体からは、今までは全く無かった闘いの威圧が暴風として溢れ出ていた。

「…ユリ、ス…？」

激痛で薄れゆく意識の中で、フィストはユリスを見た。

圧倒的な力を見せつけるその背中には、うっすらと巨大な翼が確認できた。

コートたちがユリスに向けて発砲を開始した。幾多もの銃弾が正確にユリスに向かっていったが、ユリスが右腕を突きだすと傘の形を描くように八方に飛び散った。

残像を残しユリスの姿が消える。現れたのは、コートの遥か上方、十メートルほどの所。

真下のコートを目で確認すると、その小さな拳を握り締めて振り下ろす。その途端にユリスは砲台から発射されたように急降下し、振り下ろされた拳がコートもろとも地面を叩き割った。石畳の破片がその余波で飛散する。大きく浮かび上がり、その力の強さが表わされていた。

流石に残りのコートたちは少しひるんだらしく、数歩あとずさった。だが、ゆっくりと立ち上がって拳を引いたユリスの放つ瘴気は、一人のコートも残さず捉えていた。その鋭い視線が全てのコートに等しく死を与えている。

「……………」

ユリスの手が大きく払われると、まるで首が刎ねられたように帽子が一斉に飛んだ。いくつもの中折れ帽が、力なくひらひらと舞い降りていった。

激痛に耐えてフィストが立ち上がった時には、残っていたコートがすべて崩れ落ちていた。

その手前に、肩で息をするユリスを残して。

「っ…ユリス…」

人の心配をするべき状態ではないが、フィストはユリスの様子が気になっていた。背中を向けたまま振り返らず、その背中には力の具現であった翼がなくなっている。そこにいるのは、今までずっと一緒にいた弱々しい女の子の背中。

背中がゆっくりと倒れ込んだ。ユリスがうつ伏せに倒れていた。

フィストはすぐに近寄って助け起こそうとしたのだが、急にぼやけた視界のせいで歩くことすら困難になっていた。体が軸を失い、不安定にふらつく。

「ユリス！フィスト！大丈夫か！」

通りから一人、誰かが入ってきてそう叫んだ。それがアーミルの声だと分かると、安堵感を覚えてフィストの意識が遠のいていった。

22話 『その日』 目覚め（後書き）

読んでくださっている方、ありがとうございます。

読者数が伸び悩んでいるのはなぜでしょうか？

宣伝活動を全くしていないから？それとも：作品がつまらないから？

うう、精進します。

23話 『その日』 夕方

痛みは引いていた。記憶をはっきりと探し出せず、半分ほど開いた眼でただ天井を見ていた。

しばらく時間を消費した後、体を起こした。朝とは違い、弾力のある布に寝かされている。どうやら、また事務所に寝かされているようだ。

腹部に手を当ててみると、撃たれた箇所は包帯で隙間なく巻かれていた。それを手がかりに慎重に記憶を掘り出していく。

「ユリスは!？」

思い切り立ち上がると腹部に刺すような痛みが走った。急にやってきたのでそこを抱えてうずくまってしまふ。その声を聞いてか、リメールが慌ててフィストに駆け寄ってきた。

「ああ、まだ動いちゃダメですよ! 傷が開いちゃいます!」

そして押さえつけるように、フィストを無理矢理横にさせた。

「リメール：ユリスは無事だった?」

心配そうなフィストに、リメールは「大丈夫、隣で寝てるじゃないですか」と笑顔で答えた。

反対側を見ると、少し間を置いて自分のそれと同じような布があった。そこからブロンドの髪の毛が覗いている。平和そうな寝息も同時に聞こえてくる。

「お。気がついたみたいだな」

ティリアがリメールの横にやってきて座った。気がついたフィストを見て静かに笑う。完全に目が覚めたことにより、フィストの頭はようやく現状を理解し始めた。

「：一体、何が起こったんだろう」

独り言のようにフィストが呟く。

「こっちが聞きたいくらいだよ。外から銃声が聞こえたんで行ってみたら二人が倒れてた：ってアーミルが言ってたんだ。その様子じ

やだいぶやられたみたいだね」

そう言うとティリアは後ろを向いた。アーミルとダルタが部屋の入口に立っていた。心配そうな顔をしたままアーミルが口を開く。

「確かに…何があったのか話してほしいな。場合によっては、俺たちの思っている以上に二人に危機が迫っていることになる」

冷静な声だが、追い詰めている様子ではない。フィストが隠し事をしていることに気づきつつあるようで、それでも責める様子は見せていない。

「まさかあの後にまた襲われるなんてな…俺も読みが甘かったってわけか」

ダルタが真剣な様子で頭を抱えていた。途中で別れたことを後悔している、といった感じだ。

「…コートが」

「え？」

ユリスが起きていた。体を起こし、遠くを見たまま言葉を紡ぎ始めている。

「帽子をかぶったコートが、たくさん…フィストがけがをして、それで私…」

そこで言葉が止まる。無表情のまま、その目から涙がにじみ出ていた。

「私、どうしちゃったのかな…」

涙の量が増え、とうとう本格的に泣き出してしまった。ティリアとリメールが立ち上がってすぐなだめに入る。

アーミルもユリスの事を気にしているようだが、その場に立ったままフィストから視線を外さない。

「…思い出してきた…僕が撃たれたあと、ユリスが、助けてくれたんだ」

慎重に言葉を選んでいく。横で泣き崩れるユリスに気を遣いつつも、記憶にさかのぼってくる理解できない恐怖を的確に伝えようと試みる。

「すごく、強かった：僕もびっくりしたよ。何があったのかは分からないけど、それは多分：」

多分『翼竜』錬成の名残、と言うのはさすがに出来なかった。横のユリスのことを考えると、なおさら教えて刺激を与えるわけにはいかない。他の四人の追及を恐れ、フィストはとっさに別の方へ話をそらした。

「コート：あいつら、コートがひとりでに動き出したみたいだった。コートに穴が空いた途端、空気が抜けるみたいに跡形もなく消えたんだ。少なくとも人間の類ではないよ」

「：本屋にいたあのコートと同じ奴だったか？」

ダルタがその話に興味を持ったようで、顔をあげてフィストと視線を合わせてきた。

「いや：最初は、同じ奴がまた襲ってきたのかと思った。けど、同じようなコートがたくさん出てきたから違うって分かったんだ。見た目の変わらないやつらがたくさんいるって考えるべきかもしれない」

「：そうか」

アーミルが小さく頷き、それからフィストを呼ぼうとしたが、傷のことを気にしたのかすぐにやめた。そして代わりに「まずは早く怪我を治しな。言いたいことも言えやしない」とだけ言い、ダルタとともに部屋から出ていった。

「ごめんなさいね、フィストさん。あれでも、お二人のことすごく心配していたんですよ」

フォローするようにリメールがすぐに付け加える。

「あ、そうそう」

アーミルだ。

「本、ありがとうな。おかげで助かったよ」

明るめの声だった。リメールも嬉しそうに笑い、フィストは自分にかけてあった布に深く潜り込んだ。

顔まで隠していると、リメールも「じゃあ、ゆっくり休んでくだ

さいね」と言い残し離れていった。ティリアも「次の仕事だってあるからね」と離れていく。ユリスはまた眠ってしまったのか、時折鼻をすする音しか聞こえてこない。

フィストの周りだけ、妙に静かになる。眠気を感じることができずにかぶった布の柄を目で追っていた。

コートたちを薙ぎ払ったユリスの背中……

フィストもまた、あの威圧感に恐怖していた。あれほど殺気だったユリスは初めてだった。普段の彼女の人格とはあまりにかけ離れていて、到底彼女本来の人格とは思えない。

それこそ、あのコートたちと変わらないような。

（これが……『翼竜』の錬成？）

確信は無い。だが、思い当たる節が多すぎる。

やはり実験の名残は彼女の中に残っていたのだ。

ユリスは竜だ。今更ながらフィストは、その現実に打ちひしがれていた。

「フィスト」

アーミルの呼ぶ声がした。この部屋の中にはいないようだが、その声は誰にも聞かれないかのように小さく、それなのにフィストにまでよく届いている。

「お前の体調にもよるが……もうすぐ日が暮れる、また屋上で話したいんだが」

フィストは、どこかで覚悟をしていた。

自分たちが追われている身だと打ち明ける瞬間を。

なぜ襲われるのか、襲われる覚えはないのか、そう聞かれるだろ

う。

フィストは、その時になって嘘をつけるような人間ではない。おそらく、何もかも包み隠さず話すだろう。彼自身のしたことも、ここまでにあったことも、全て。

「……分かった、僕は大丈夫」

逃げてはいけない。逃げても話は進まない。

フィストは布から顔を出し、体を起こした。

いつの間にか、外はすっかり暗闇に包まれて闇色に染まっていた。

24話 『その日』 屋上

今日は雲が無い。都会のまぶしさにかすれてはいるが、それでも星がよく見える。消えかかった月が、かろうじて単調な空にアクセントを添えていた。

「空気が抜けるみたいに、か。お前らしい表現だなあ」
手すりに手を掛け、アーミルが言った。わざとらしく笑ってみせる。

「見たままを伝えただけだよ。間違いじゃないし」
手すりに顎を乗せてフィストは遠くを見ていた。疲れきったような声だ。

二人ともそれからしばらくは口を開かなかった。はっきりしない意識で、ただ街を見て無言の時間を保っている。その景色はどんなに煌めいても、二人には届かない。

それでも、闇よりはましだ。

始まりを告げたのは、アーミルだった。

「……お前、襲われた理由に心当たりがあるんじゃないのか」
フィストも聞かれると分かっていた質問だが、それはより一層嘘をつけなくさせた言い回しになっている。もとより嘘をつく気はなかったのだが、フィストにその聞き方は重荷になっていた。

「……」

「何があつたのか、話してもらえるな」

言葉を発することなく、フィストの首はゆっくり上下した。

明かすことに対する抵抗は無いはずなのだが、フィストの口はなかなか話しださない。やはり気まずい思いがどこかにあつたようであり、いざ話すとなるとなかなかの勇気が必要としている。

「何も気にするな。本当のことを話せばいい、それだけだ」

そんな言葉が届いた。奥底にしまいかけていた言葉が喉元まで登

ってくる。

「…実は…」

後は長いようですぐだった。

自分のしたこと、ユリスのこと、列車のこと…話せることはすべて話した。

「…なるほど」

粗方聞き終えたアーミルの反応はフィストの予想よりもずっと希薄なものだった。フィストの方を一度も見ずに遠くを見ている。

「迷惑はかけたくないんだ」

フィストはアーミルと顔を合わせられないでいる。その勇気すら、たった今使い果たしたところだ。

「…迷惑、ねえ」

「あんまり長居もしないつもりだよ。今すぐにだって…」

「は？ちよっと待て」

「…僕と一緒にいたから、あの人は…」

フィストの瞼には、今はっきりとバステイルの顔が浮かんでいた。あの時、どれだけ自身を責めたか。どれだけ苦しんだか。

彼だけではない、彼女も。ユリスと一緒にいた、ルフィーネという女の子。

自分に関わった人が、すでに二人死んでいる。これ以上そんな人が増える、それがどれだけ辛いことなのか、フィストは身にしてみて分かっていた。

「おいフィスト、ちよっと俺の話を」

「もうこれ以上、余計に人が死んでほしくないんだ！」

声を荒げる。

「僕だって、いろんな人と出会って、一緒に過ごして、嬉しかった！楽しかった！……でも、だからこそそんな人たちを巻き込むのが怖い！」

「……フィスト……」

アーミルは特に何も言わず、フィストの言うことに耳を傾けている。

「……僕は、弱い……誰一人守れない……！ユリスを守るって誓ったそばから、僕は逆にユリスに守られてた……何もできなかった！」

倒れる自分と、その前に立つユリス。フィストにとっては何より情けない構図だった。

「僕は、大切な人を守れない！守る力が無い！」

フィストの手は震えていた。前を見ていた顔が下を向く。

「……強く、なりたかった……！」

思いの程をすべて言葉に託し、言い切ると額を手すりに押し付けて泣き声を押し殺し始めた。手すりに何滴もの雫が伝って下に落ちていく。

恐ろしさで情けなさに追われる小さな少年の姿が、そこにあった。

「フィスト」

アーミルがフィストの顔を起こした。

フィストは、何を言われても構わない覚悟だった。すぐに出て行けと言われれば出ていったし、黙っていたことを怒られるのなら甘んじて受け入れるつもりだった。

そして、フィストに与えられたものは――

「――っ！」

全く力の入っていない、しかし耐えかねるほど痛いアーミルの平手打ちだった。

威力は皆無であったにもかかわらず、フィストはいくらかよるめ

いた。これが罰か、とフィストはむしろ安らぎを感じていた。

「…フィスト…今まで大変だったんだな」

だが次の一言は、あまりにもその一撃とギャップがあった。優しさと同情の滲む、小さな一言。

「アーミル…？」

「…これ以上、逃げるな。辛いかもしれないだろうが、向かい合う勇気を持つんだ」

「…向かい合う勇気…」

「強くなるのを諦めるのが一番 अच्छا いけないだろ。敵がどんなに大きくても、それに立ち向かう。それが強さだ」

フィストは思い返していた。

自分が逃げることにしかしてこなかったことを。

何の解決にもならないことは、どこかで分かっていた。

「俺たちは巻き込まれたなんて思っていない。人と人が出会うつてのには必ず意味があるんだからな。それでも怖いって言うんなら、怖くなくなるまで強くなればいい」

「……アーミル…」

「俺達に出来ることは何でもするさ。俺たちは、もう他人じゃないんだ。今まで一人で悩んで辛かっただろうが、今は俺たちがいる。遠慮せずに頼ってくれて構わないからな」

「…う…うわあ…！」

それ以上は、フィストも堪えることはしなかった。

アーミルにしがみつき、声をあげて泣いた。恥ずかしがることも、強がることもせずに。ずっと溜めこんでいた恐怖や悲しみを残さず吐き出すように。

その泣き声は、夜の街にゆっくりと染み込んで消えていき、二人以外の誰の耳にも入ることはなかった。

どれだけ時が過ぎただろうか。

フィストはゆっくりとアーミルから離れた。泣き声はしばらく前に止み、今は息遣いを元に戻そうと深呼吸をしている。

「…ありがとう」

フィストが笑った。納得したようにアーミルも笑って返す。

アーミルの信念、フィストの決意。それらはお互いにしっかり伝わったようだ。

「もう中に入るか？」

アーミルが聞いた。まだフィストの体をいたわっているのだろう、フィストの腹部に巻かれている包帯を意識している。

「いや、もう少しここにいるよ。先に戻って」

まだなめらかな文を発することはできないようで、明るくしようとしてぎこちなくなっている。アーミルもそれは分かっていたが、あえて気付かなかったふりをした。

「じゃあ、早いうちに入りな。お前、今日腹を撃たれたんだからな」扉が開き、そして閉まった。張っていた空気が緩み、また一度溜息について街の明かりを虚ろ気に眺め始める。

「フィスト？」

扉の方から声がした。ティリアの声のようだ。軽快な足音をさせてフィストの方へ歩いてくる。

「あ、ティリア」

「下にいないから探したよ。アーミルと何話してたの？」

何の気なしに聞いてきているが、それが微妙に答えにくいものであるのも事実だ。僅かに返答を考える。

「…もう逃げないって話」

「へーえ…」

ティリアの返事には何故だか張りが無かった。手すりに体重を掛け、フィストの方を向かずに遠くを見ている。雰囲気がいつもと違い、隣にいても持ち前の明るさを感じさせない。

「あのさあ、フィスト」

話し出したのはティリアだった。

「話したいことがあってさ…」

声の調子からは深刻そうなイメージがある。重大な悩みを抱えた、低い位置の声だった。

「僕に相談？」

「ああ：ユリスが、あれからずっと落ち込みっぱなしなんだ」

自分より人生経験豊富な人間の悩みなど答えられるのか、とフィストは不安だった。ユリスの名前が出てティリア自身の悩みでないと分かった時には、その意味ではホッとしていた。

それでも、他人のことでこんなに悩めるものなのか、とフィストは少し驚いていた。

「…そっか、ユリスが…」

「うん。話をするときとか、顔は笑っているんだよ。だけど、心の中で苦しんで泣いているのが見えるんだ。何があったのかよく分からないから私からは何も言えなくて…」

フィストには、ティリアが他人のことでこれほどまで落ち込む人間には見えなかった。他人のことを自分のように考えられるのは人生経験が豊富である証拠だと考えている。

「ユリス、ずいぶんあなたになついてるみたいだから、あなたから声をかけてほしいんだよ」

「うん、それはいいけど…」

最初はフィストも、ユリスを元気づけようと考えた。だが、自分が一度落ち込んでいるユリスに声をかけられなかったことを思い出した。

ルフィーネの墓の前で、ユリスが泣き崩れていたあの時。

ティリアさえ元気にしてやれないのに、自分に出来ることはある

のだろうか。彼にはその自信が無かった。

「：僕じゃ、ダメなんじゃないかな：」

思わず出た本音。ティリアがムツとして少し怒った様子になった。「逆だよ、逆！：むしろ、あなたじゃないといけないんだ。確証はないけどさ、ユリスは：」

諭すようにフィストを見ていたティリアの視線がその瞬間それた。言葉が暫く詰まって出てこない。

「ユリスは？」

「：いや、なんでもない。でも、ユリスのことは頼むよ」

「：うん、やってみる」

それを聞くと、すぐにティリアの表情がいつものものに戻った。それ以上のフィストの追及を逃れるように駆け足で屋上を離れていく。明るく戻ったのは、フィストにしっかりと伝えることができたからだろう。

勢いよく扉が閉められた。フィストに遅れた孤独が残る。

「ユリス：どうしたらいいのさ：」

星空に答えを求めるが、返答は煌めきだけだった。諦めて手すりから離れ、扉に向かう。

その視線は、自信を得られないように下向きになって屋根のタイルを見つめている。ティリアのように明るくこの場を離れるのは、彼には無理な相談らしい。

だが彼は、もう逃げ出すことは無かった。
迷わず、向かい合うことを選んでいく。

25話 『その日』 二人きり

部屋に入るなり、紅茶の香りがいつもより強く流れてきた。椅子に座っているユリスと、その横でティーポットを持って立っているリメール。どんな状況か、それだけでおおその見当はついた。

ポットを持ったままユリスに微笑みかけていたりリメールがふと顔を上げ、フィストに気づいた。

「フィストさん、あなたもどうですか？」

満面の笑みでポットをフィストに意識させてきた。ユリスも持っていたカップを置いて同じようにフィストを見ている。

「…いや…僕はいいや…」

焦ったように目をそらし、そそくさと二人の死角へと逃げた。どうしてもユリスの笑顔が、フィストの心を潰してしまうように映る。フィストの体が無性に震えていた。声をかける勇氣は、とてもではないが彼には持ちきれなかった。

「…フィスト」

肩をたたかれた。アーミルだった。

「…うん」

それで勇氣を得たようで、フィストは逃げかけていた自分の足を止めて後ろに向き直った。

フィストは今一度自分に言い聞かせていた。ユリスを守ると誓ったことを。

それは敵からも、不安からも。

その視線は、まだフィストを見ていた。精一杯のままもう一度その前に立つ。

「…はい、わかりました」

何も言っていないが、リメールがなにか了承したようにそう笑った。

注がれる紅茶。湯気が盛んに上っているが、それを口元に運ぶ心の余裕がない。理由も分らず心拍数が増える。

「：フィスト、外に行こうか」

見かねたらしいユリスの方からそう持ちかけた。

「何か話したいみたいだし：」

「うん、まあ：」

あいまいな返答しかできなかったが、話をするにはここよりは良い状況だろう。

カップを置き、ユリスが立ち上がる。一度フィストに笑顔を見せ、それから扉をくぐって先に行ってしまった。一瞬見えたそれは、フィストの目にも泣いているように見えて仕方がなかった。

どんな言葉をかけていいのか分からないまま、フィストも追って扉を開けた。

「：アーミルさん、あの二人に何か言いました？」

ポットを置き、二人の様子を不審に思ったリメールが聞いた。答える前にアーミルはフィストに注がれていたはずのカップを手にする。

「大したことは言っていないさ。あとはフィスト次第、かな」

「そうですか：」

それを聞いてもリメールはさっぱり分かっていない様子だ。

「あとは俺らの入れる問題じゃない。辛いかもしれないけど、自分たちで越えないといけないんだよ」

そう言って紅茶を一気に飲み干した。

ついさっきまでアーミル、ティリアと一緒にいた屋上。扉を開くと、先刻よりも更にはつきりと星が自己主張をしている。タイルも手すりもシルエットでしか存在を確認できず、その暗夜には小さな光の屑と月しかないようだ。

安全を確かめるようにゆっくり足を進めて手すりに寄っていくフ

イストに、ユリスも続く。

「月がきれいだね」

手すりに寄りかかり、フィストはそう切り出した。

「うん。なんだかちょっと赤いけど」

そっけない返答だった。話が続き、次に何を言い出したらいいいのか分からずにいる。言いたい事も、言うべき事も、たくさんあることはフィストも分かっているのだがそれらが口から出ない。

フィストの視線はどうしても上に上がらない。月を見ているユリスの足元しか映らないでいる。

「あ…あのさ、ユリス」

残っていた最後の勇気を使ってフィストが声をかけた。この話が途切れてしまうと、もうフィストには次の話を切り出す勇気が残っていない。

「大丈夫だよ。誰もユリスのことは悪く思っていない。気にすることないよ」

唐突な切り出しだったが、すぐに用件を言わなければ言い出すタイミングがなくなる気がした。それだけでも、ユリスにはフィストが何を言おうとしているのかは伝わっているだろう。

「……」

ユリスが黙りこんだ。月を見上げたまま表情は分からない。だが、少なくともこの話が終わってしまった訳ではなさそうだと判断したフィストは返答を待つことにした。

「私…」

あまりに小さく、二人きりでなければ聞き逃しそうだった。

「私、やっぱり…人間じゃないのかな」

「……やっぱり…?」

一瞬言葉を失った。

今回のことで実験のことに気づいたのだろうか。気づいていなかったとしても、あんなことがあればそう言いたくなるのも仕方がな

い。だがユリスは以前からその違和感を感じ取っていたらしく、その悩みも今日に始まったような軽いものではないようだ。

「…ユリスがよく分からない実験をさせられていたのは知ってるけど、だからって…」

「分かったようなこと言わないで！」

言葉がフィストの体を勢いよく貫いた。突き放すような一言に、自分の持っていた気持ちが崩れるのを感じずにはいられなかった。

フィストは、ユリスを守るなどと軽々しく考えていた自分がひどく虚しく思えた。暗くてよく見えないが、強がりの笑顔はもうそこには無い。

「…分かるわけないよ…：自分が何なのか、分からないんだよ…？」

ユリスはフィストのようにいつまでも声を荒げることはしなかった。だがその気持ちは先刻のフィストと変わらず、答えを見つけれずに彷徨っている。

「フィストは…人間だよ…：そう分かってるんだから、いいよね…」

フィストは何も言わずにいる。次の言葉を考えているわけではなく、ただユリスの本当の気持ちを聞いて反省しようとしているだけなのだが、結局自分を責めることしかできない。

手すりにかかっていたユリスの影がそこから離れた。

横を向いていたその体がフィストを向いたと思うと、次の瞬間にはフィストの胸に飛び込んできた。フィストの服をしっかりと掴み、そこに顔を埋めながら泣いているのが分かる。

「私…わたし…：自分が怖い…」

服を掴む手も、体に当たる顔も、震えていた。フィストの目には、いつにも増してユリスが小さく見えた。

今フィストにすがりついているのは、一人の彷徨う少女。

決して、竜などではなかった。

「…でも」

考えることはなく、フィストの口からは自然と言葉が溢れてくる。

「ユリスは、何があってもユリスだよ」

笑顔で言い切った。顔を埋めたままのユリスには見えていないのだろうが、おそらく伝わっただろう。案の定、すぐにユリスの顔がフィストを見上げて見つめていた。

うるんだ瞳。赤い顔。それは何か気付かされたようにハツとしている様子だ。

「自分が何であつたとしても、人間じゃ…なかったとしても、ユリスがユリスであることに変わりはないよ。僕たちは皆、それは分かつてる」

ユリスを優しく撫でる。髪に沿って、何度も、なだめるように。

「……」

「ユリス…」

「…そう、だよ、ね…」

その一言の後、ユリスはようやくフィストから離れた。それにより、フィストは自分の鼓動がいつもの倍ほどにまで早くなっているのに気づいた。顔の火照りも実感する。

それ以降の言葉は無く、完全に会話が途絶えた。

「…もう寒いし、中に入ろうか」

フィストがそう言ったことで、二人は屋上を離れた。

見ていたのは、月のみ。

「…で、これからどうすんだ？」

けだるそうに、アーミルがフィストに聞いた。

「まあ、アーミルの思っている通りのことを」

淡々と答えたフィストは、横になったまま目を開いている。他の

四人はすでに眠ってしまったらしい。

「…フィスト、おまえはあいづらが憎いのか？」

フィストの言葉が感情的になっているのに気づき、アーミルはやや不機嫌そうな顔をした。

その質問に、フィストは答えなかった。無言の時間が流れていくが、それはすなわち肯定を示している。

「ユリスと何を話したんだ？」

質問を変えた。再び黙り込んだが、無視したわけではなさそうだ。

「僕は…」

「ん？」

「僕、ユリスが可哀想で仕方ないんだ。僕より小さい女の子が、あの研究所でどんな目に遭っていたのか…ユリスは何も言わないけど、辛かったと思う」

「…」

アーミルは返事をしない。フィストはユリスとの話で感じた事をすべて打ち明けるように続けて口を動かす。

「ユリスは、自分が怖いって言ったよ。励まそうと思ったんだけど、分かったようなこと言わないで、だって…そうだね、一番辛いのは、ユリスなのに」

まだアーミルは何も言わない。フィストが本当に言いたい事をまだ聞いていないからだ。

「僕、強くならなきゃね…ユリスを守る意味でも、奴らと決別するためにも」

「…つまり？」

「…奴らが許せない。償いをさせたい」
「焦るな」

ぴしゃり、と一蹴した。フィストも少し啞然とした。

「別に焦ってるわけじゃ…いや、焦っていたかもしれない」

フィストはアーミルの言いたい事をくみ取り、すぐに発言を撤回する。

「そうだな、まずは一呼吸置いた方がいい」

それから時間が空いた。アーミルがフィストに落ち着くための時間をくれていた。

再び切り出したのも、アーミルだった。

「俺は、今はそれを止めておこう。とりあえず、復讐は何も生まない。それだけは言っておく」

「でも、何もしないのも…」

「ああ、勿論。列車の怪鳥といい、そのコートといい、待っているだけじゃやられるのを待っているようなものだからな」

「…出来るだけ早く…時間はかけたくない」

「そう思うのも分かる。確かに、奴らは許されざる罪を犯した。お前が起こるのも当然。だがな、今発生しているその感情だけで行動するのはあまりに危険だと思わないか？ 敵を打つ必要があるのなら、勢いだけで突っ込むよりしっかりとした準備をしないといけない」

「…うん、確かに。今の僕だとまだダメな気がするよ」

自分が今は『弱い』のだと再認識し、フィストは焦っていた自分を落ち着かせた。

「まずは、お前が納得のいくまで強くなって見せな。ダルタが明日から暫く、古い知り合いのところに行くんだ。で、その知り合いってのが銃なんかの扱いに長けているんだそうだ。俺から連れて行ってもらえるよう頼んでおくよ」

「…ホントに？」

フィストが起き上がって喜びを表す。

「協力するって言ったろ。ダルタもそいつも断りはしないさ」

フィストを苦笑しながら寝かせると、アーミルは声のトーンを一気に落とした。

「さ、今日はもう休もう。いろいろあって疲れたろ」

何故だか可笑しくなり、二人して小さく笑った。心境はかなり落ち着いていた。言葉では言い表せない安堵感の中で、フィストはよ

うやく目を閉じた。

「あ、フィスト。もう一つだけいいか？」

アーミルだ。目を閉じたままその質問を待った。

「お前って、ユリスのことどう思ってるんだ？」

「どうって？」

半ばあきれたようにフィストが尋ね返す。いきなり振られたその質問だが、フィストはあまり動揺していない。

「二人は兄妹じゃないって言ってたよな」

「…道端で助けた人を兄妹って呼ぶ？」

眠ろうとした矢先の質問だったためか、フィストは若干不機嫌な様子だ。

「…兄妹じゃないんなら、お前にとってユリスはどんな存在なのか。それが気になっただけさ」

「…突拍子もない質問だね…確かに、妹みたいに思ってるよ。年の差もそんな感じだし、まあ、その…可愛いとも…思ってる…」

言いにくそうにしているのを、アーミルは隠さずに笑った。

「…そうか。いや、いいんだ。確証はないし」

「え？」

「なんでもない。忘れてくれ」

（自分から言い出したんじゃないか…）

文句も言おうとすれば出たが、それよりフィストはさっさと寝てしまいたかった。それ以上何かを言うことはせず、布に深く潜り込む。

「お休み、フィスト」

その一言が、フィストが夢に沈むまで彼の耳に張り付いて響き続けた。

挿入話 王城内

机の上の写真。そこには、仲の良さそうな兄妹が映っている。二人とも笑顔でこちらを向き、妹の方は兄の腕にしっかりと掴まっている。

妹の映っている写真はこの一枚きりだ。彼が知り合いに頼んでこっそりと撮ったもので、両親には内緒にしていた。

日は沈み、すでに辺りは暗闇に包れている。部屋の明かりをつけていないので、その写真を見るのも窓から差し込む月光に頼っている。

幸せそうな笑顔。ずっと一緒にいられると信じていたあのころ。

彼——現オルディア国王ハーゲンティは、過ぎ去った思い出を懐かしみ溜息をついた。

「なに、一緒に写真を？」

フェラートはいつになく怪訝そうな顔をした。

「はい、考えてみたらまだあいつと一緒に撮った写真が一枚も無かったのだ」

父親とはいえ、敬語を欠かすことは無い。それが両親の教育方針であり、一国の王になるという重大な未来に向けての準備だった。

フェラートは顎に手を当てて考え込んでいる。たかだか一枚の写真にそこまで悩む必要があるのかハーゲンティは疑問に思ったが、あまりせかすことはせずに返答を待った。

当然構わないだろうと、そう信じていたからだ。

「駄目だ」

なので、その却下はまさしく予想外だった。

「…え…」

「写真は駄目だ。一緒などもつてのほか」

「な…なぜです、お父さん！写真を撮ることに、そんなに重大な意味があるとは…」

「くどいぞ、ハーゲンティ」

「…！」

それ以上は何も聞くことができず、ハーゲンティはただ黙ってそこに立ち尽くしていた。

だが、彼は諦めなかった。

たった一枚の写真。彼はどうしてもそれが欲しかった。

多くの財産も、美しい芸術品もいらない。

彼はただ、妹との思い出を残したかったのだ。

一国の王としてではなく、一人の兄として。

「…え、カメラを？」

王宮に時折訪れる男。彼は王宮の近くにある研究所の管理を任せている、という説明を以前フェライトから受けていたハーゲンティは、彼に写真を撮ってもらえるよう頼むことにした。

彼との仲はそれなりに良かった。いずれは何度も顔を合わせることになるだろうという、これも父親の提案から仲よくしていた。

「はい、それで僕と妹を撮っていただきたいのですが」

「妹…？はあ、分かりました。では王に話を…」

「父には、内密にお願いします」

歩いて行こうとする男をハーゲンティは慌てて止めた。男は一瞬訳のわからなそうな顔をしたが、ハーゲンティのすがるような表情を見て「分かりました。では、来週の火曜日にまたここに来ますのでその時に」と笑った。

兄妹で中庭の芝生に並んで立つ。その少し離れた所に、カメラが構えられている。

「ほら、すぐ終わるって」

「…えっと…私、写真って初めてで…」

「…そうなのか？」

自分と一緒に限らず、彼女は写真を撮られたことがないらしい。ハーゲンティも初めて知る事実だった。そのせいだろう、彼女は妙に緊張していた。

「大丈夫、怖くないよ」

「あ、いえ…そうではなくて…」

彼女もまた、ハーゲンティと同じように敬語を駆使した。王族たる自覚の表れなのかもしれないが、それだけではないようだ。

「嬉しいんです、お兄ちゃんと映れるのが」

「…恥ずかしいこと言うな」

「はい、撮りますよー。お二人とも笑って」

男がカメラを構え、二人は向き直って笑顔になる。

フラッシュの光る直前、彼女はハーゲンティの腕をしっかりと握りしめていた。

「…もう何年会っていないか…でも、もうすぐ…もうすぐなんだ…」
研究の完成が近い。それはすなわち、妹との再会が間近ということ。

写真の中の成長していない妹を見つめ、一人の兄はぐっと表情を引き締めた。

26話 緑の夢

そこは、針のない時計盤。ローマ数字たちがそこから浮かび上がり、ゆっくりと回っている。全ての針の集まる場所であろうその中心に、彼は立っていた。

風の流れる音が聞こえる。逆にいえば、それ以外は何も聞こえない。やっと気づいたのは、風が下から吹き抜けていること。そしてその風が、柔らかな緑をまとっている事。

時計が彼に問いかける。

「あなたは、何なのですか？」

「…僕は…」

「風？木？石？水？そもそもあなたはものなのですか？」

彼の中に答えは無い。ただ黙って、緑の背中を見上げる。

「探さない、あなた自身を。この小さくも大きな世界で、あなたを知る者を探さない」

声が切れた。

一体、僕とは何なのか？

人。それは間違いない…はずだ。

男。これも当たっているだろう。

子供。それは分からない。子供かどうかは判断する者によって変わる。ある人は子供といい、ある人は大人といった。そもそも、これは僕だけで結論を出すべきではないのではないか…？

善。それはおそらく、違う。では悪か？それも違う。善でも悪でもない、それは何であるのか。

たった一つ、思い当たる言葉があった。

偽善。

そうだ、僕は偽善者だ。善でも悪でもない中途半端な存在。それ

が一番しつくりくる。

思い返してみると、確かに僕の生き方はどっつかずの半端な人生、半端の集合体のようなものだった気がする。僕のせいでどれだけの人間が無意味な死を遂げたか。そしてそれにもかかわらず、僕は今ものうのうと生きている。

——ああ、これは偽善じゃなく、立派な悪ではないか。

僕の目の前でバステイルが殺されている。彼は何もしていない、ただ僕と出会っただけだ。つまり、彼は完全に巻き添えを食った形になる。これは僕の責任ではないかもしれないが、少なくとも僕の時間はそこで足を止めてしまっただけ動かない。

そして同時に、もう動くことはないだろう。針が動かないのではない、針がないのだ。それこそ、この足元の時計盤のような。

…そうか、これは僕の心か。

言いようのない脱力感に襲われ、目を閉じ、下を向いた。この時計にあった針は、全てあの日に落としてきた。拾いに戻ることではできないということは、彼自身が一番よく分かっていた。

「あなたの時計は止まりました。動くことはありません。ですが、あなたのすべきことは決まりました。下を見ないで、周りを見て。あなたの出来る事、あなたのすべき事、時間を落としたあなただからこそ、それが見えるのです」

時計盤の言葉は何より重く彼にのしかかった。だがそれ以上の加重は無く、あとは独りにされた。

しばらくは下を向いていたが、緑の中の僅かな気配に顔を上げ、辺りを見た。

上っていく緑。そこに新しい何かは無かったが、新しい何かが見えた。いや、それは新しいのではなく、ずっとあったのに彼が気付かなかっただけだ。

時計は、一つではない。いくつもの不思議な時計がすぐ周りに存在していた。

一番近くにあるひと際小さな時計を見て、そして気づいた。その時計にも針がついていないのだ。

それが誰なのかはすぐに分かった。同時に、自身のすべきことにも気づいた。

彼は自分自身の針は拾いに行けないが、その時計はどこにあるのか知っていて、かつ取りに行けるかもしれない状態なのだ。それは勿論、彼が拾おうとすればの話だが。

彼は暫く考えた。あまり時間はかからず、結論はすぐに出た。右手を持ち上げ、そしてその掌を見た。

そこには何も無い。彼はてっきりそこにあるものだと思っていた。あるはずなのに。

「…そうか、そうだったんだ」

一人、呟いた。そして右手を固く握る。全ての答えはそこにあった。

「僕は針なんだ。…僕が、針なんだ」

彼の体が大きく傾き、そして時計盤に倒れかかった。時計盤はそれを全く受けとめようとせず、彼の体は時計盤の下へとすり抜けた。しかしその表情にはある種の喜びすら存在していた。

落ち行く先からは、緑の風が上に向かって無数に吹き去っていく。風よりもずっと深く濃い緑色が、どこまでもそれを埋め尽くして無限の広がりをも彼に味わわせた。

それは、まるで海。

「知らない、自身の力を。感じない、自身の使命を。たとえばあなたの時が止まっても、あなたは独りではないのですから」

今朝は今年一番の冷え込みだったと、テレビの中の眼鏡が単調な説明をしている。確かにフィスト自身、目覚めた時に自分が布にくるまって震えているのに気づいた。リメールの出した紅茶を飲みながら気象情報を見ている今も、体の解凍はまるで進んでいない。カップを置くと、くしゃみが飛び出した。

「風邪でも引いたか？」とアーミルが笑って見せた。逆にリメールは「大丈夫ですか？体調管理には気を付けてくださいね」と心配そうにし、ダルタは何も言わずにひたすら紅茶を口に運んでいる。

フィストは自分自身不思議でなかった。そこまで冷え込んだにもかかわらず、寝ながら掻いたのであろう大量の汗が体を濡らしている。

ぼんやりとしか覚えていないのだが、朝の夢を思い出そうとすると体が震えた。何があったのか思い出したいのだが、体が思い出すことを拒絶している。決して恐怖などではないのだが、フィストはひとまず忘れることにした。わだかまった思いも混ぜ込み、もう一度紅茶を流しこむ。

「あ：おはよう」

ユリスが起きてきた。引きずるようにテーブルに歩いてくる。フィストの座っている椅子のすぐ横で止まり、まだ眠そうに目をこすった。

「ユリスさん、こちらで紅茶をどうぞ。今朝は冷えたでしょう」

まず一番にリメールが声を掛け、新しいカップに紅茶を注ぎ始めた。

「うん、ありがとう」

ユリスはフィストの向かいの椅子に座るとカップを受け取った。そこで紅茶をすすするユリスは、フィストの目には何も変わっていないように映った。結局昨晚の話し合いは何の意味も持たなかったのか、やはり自分は何もしてやれなかったのかと、フィストは諦めに似た寂寥感に苛まれた。

それを悟ったのか、カップを置いたユリスがフィストと視線を合
わせてきた。

「あ…ユリス」

「フィスト、あのね…」

言いだそうとした言葉が重なり、お互いにしばらく固まる。

ゆっくりと時間が流れていく中で、ユリスから話を始めた。

「…フィスト、ありがとう。それから、ごめん」

ユリスは申し訳なさそうに苦笑いをした。

「え、何で謝るの？」

フィストがその謝罪の意味を理解できずにいると、ユリスは少し
息を深く吸って一気に話し始めた。

「だって…昨日だってそうでしょ？ フィストは私のこと心配して声
をかけてくれたんだよね。そうやっていつも気にかけてくれるのは
すごく嬉しい。だけど、もしかしたら私のせいでフィストが辛い
思いしてるんじゃないかって思って…昨日も思わず辛く当たっちゃ
ったし、悪いなって…。ずっとお礼が言いたいって思ってたし、
謝りたいと思ってたから…」

ユリスは片言で、しかし今までになく言葉を大量に並べた。それ
ほど言いたいことがたくさんあるのか、まだフィストへの語りかけ
は止むことなく続いている。

「…でもやっぱ、フィストには私のこといつも気に掛けていてほ
しいの…私ってわがままだよ。本当にごめん」

これまであまり喋らなかったことも含め、ユリスはずいぶんと言
いにくそうに話していた。そして言い切ったことに安心したのか、
ぎこちなく笑って見せた。その笑顔の中に、フィストは少しずつ元
の元気なユリスを見出していた。

「ユリス」

フィストが呼ぶと、ユリスは頬を赤くしてフィストを見つめ返し

た。

「そんなに謝らないで。僕は今まで一度だってユリスのせいで辛い目に遭ったことは無いし、むしろいろいろ楽しいことがあったと思う。ユリスが思ってるほど僕は無理もしてないし、心配しなくていいよ」

フィストもぎこちなく笑ってみせる。ユリスは笑顔が解けていて、フィストの言葉を一字一句逃すまいと耳を傾けていた。

「…あのさ、もっと笑ってよ。ユリスが幸せなら僕はそれでいいんだ。それに僕の方こそユリスから元気をもらってたんだと思う。…だから、改めて言わせてほしい」

少し間を開ける。フィストはユリスの表情を確認せず、はっきりと言った。

「ユリス…ありがとう」

ユリスは一瞬、驚いた表情をした。

それから、照れくさそうに笑った。

「それからさ、僕も…」

「？」

「僕の方こそ、謝らなきゃいけない。…僕さ、いい気になってたのかもしれない。ユリスとずっと一緒にいて、ユリスのことは何でも分かってるような気でいたんだ。ユリスは僕の考えてるより何倍も苦しんでたのに…ごめん、ユリス」

一気に言い終わり、それから俯いた。

だがユリスは、哀しげな表情でうつむくフィストに恥ずかしそうな笑顔のまま一言、

「何で謝るの？」

完全に二人の世界に入っている。割って入る余地はどこにもない。

「実際、若いっていいなって思うよ」

淋しそうにアーミルがつぶやく。

「大丈夫だ。俺らだってまだ二十代だろ」

励ますようにその肩にダルタが手を置いた。

「これからどうなっていくかな？」

「楽しみですね！」

ティリアとリメルがそんな談話に花を咲かせている。

置いてある紅茶から出る湯気は、いつの間にか姿を消していた。

「楽しみって、あの二人は別に：聞いちゃいけないか」

アーミルは何か言おうとしたが、盛り上がっている二人の耳には到底届かないだろう。ふう、と溜息をついた。

「仲良いじゃねえか、あの二人」

「：ああ、本当にな」

明らかに分断された二つの部屋。ブルーイーグルの運航再開を告げるキャスターの声が、いささか場違いに空気を取り巻いていた。

「やっ：やめてくれえええ！頼む！もう失敗はしない！」

体を震わせる男。年甲斐もなく涙を目いっぱいににじませ、小さく両手を上げている。

その額に押し付けられる、銀色の銃口。

「私は：憂いているんだ。仲のいい兄妹が会えなくなってしまったなんて現実を。この研究はそれを解決する唯一の方法。お前はそれを妨害しようとしたのか？」

「ちが、違う！」

「あれほど『兵士』を使わせたにもかかわらず処分に失敗、逆にあれの力を目覚めさせた。そののどこが妨害でない？」

「…く、狂ってる…！」

本来ならあまり逆上させるような言葉を発するべきではないのだが、その男の目に彼はまさしく狂って見えた。

「完成が遅れば遅れるだけあの方が悲しむ。私は…それが辛い」
男の言葉に別段怒る様子もなく、銃口は冷静に標準を合わせ続けている。

「…まあ、チャンスをやろう」

チャンス、という言葉に男の目に若干生気が戻る。

「この銃の装填数は六、しかし今は一発しか入っていない。確率六分の五…これで不発なら許してやってもいい」

それは決して良い賭けとは言えない狂気に満ちた提案だった。男の震えは止まらない。

もういちどしっかりと銃口が額に押し付けられ、ひい、と小さな悲鳴を上げる。そして目を堅くつぶった。

大丈夫、六分の五なんだから、絶対大丈夫、大丈夫、大丈夫…

祈った。

祈った。

祈り続けた。

——そして、踏みにじられた。

「私は…この研究を邪魔する者は許さない。誰であろうと…」

煙を吐く銃を下ろし、シリンダーを開く。

今撃って飛び出した薬莢に、未使用の五発の弾がこぼれ落ちてぶつかった。

しかし、その男の眼にははっきりと悲しみの色が浮かんでいた。

27話 少女は俯いて

ダルタが手提げ鞆に荷物を詰めている。その表情は彼が上機嫌であるのをありありと示していた。周囲の人間にまで聞こえてくる鼻歌の理由を知っているのは、アーミルの他にはフィストしかない。

「…」

ユリスが何も言わずに荷物の詰められていく様子を見つめている。タオルや地図のほか、丁寧に磨かれたような銃や銀の輝きを持つナイフなど、なかなか物騒なものも荷物の山の中に納められていく。「…お、ユリスか。どうした？」

荷物に向けられている視線に流石に気づいたのか、ダルタが手を休めていた。気さくな様子なのだが、ユリスは話しかけられるとまづ一步後ずさりした。

「…どこか行くの？」

「どうでもいいけど、ユリスってまだ俺のこと警戒してる？」

ユリスはダルタの性格とどうにもウマが合わないらしく、一定以上の距離に近寄ろうとしない。敵と思っているわけでもないのだが、どこかで気の許せない部分があるらしい。今もまた、いつでも逃げ出せる態勢でダルタに話しかけている。

「これからちよつと、な。もっと南の…フォルクコートのあたりかな？ その辺に俺の知り合いがいてな、買い物がてら顔を出しておこうと思って」

「フォルクコート…」

彼らの今いるテッドフォースから南に行くと、都会の風景が消えて深い森が急に姿を現す。空気もがらりとその様子を変えて、同じ国の中にいることを忘れてしまうほど特異な雰囲気醸し出してい

る。

その辺りが、フォルクコートと呼ばれている街だ。

他のような開発の手はそこに限ってあまり及ばず、その自然に魅せられた富裕層の人間がそこに住居を多く構えている。森の中に豪邸が建ち並んでいる街、といった印象が世間にはあるようだ。

いわば『一般人に無縁の区域』といった場所。ユリスも被験体の頃に教えられていてその名を知ってはいるが、どんな場所かはまるで知らない。

「俺はこの事務所の所員じゃないしな、あんまりここに留まるのも悪い気がするし。ま、フォルクコートから戻ってきたらまた少しお世話になるが…長居はしないさ」

明らかに自分を怖がっているユリスに気を遣っての一言なのだが、ユリスはそんなダルタの気遣いをくみ取ることができず、それとなく聞き流してしまった。

知りたいことは聞けたので、ユリスはそれ以上何も言わず逃げるようにダルタから離れていく。ダルタは僅かに残念そうな素振りを見せたが、すぐに嬉々とした表情に戻り荷造りを再開した。

「おう、ダルタ。ずいぶん嬉しそうだな」

アーミルがユリスと入れ替わりにダルタの荷物の前に立っていた。「当たり前だろ？二年ぶりだしな」

「それもそうだな」

二人は子供のようにふざけ合う。どれだけ長い付き合いなのか、仲の良さはそのやり取りがなによりよく表している。

「ああ、そうだ。水差すようでなんだが、ちよつと相談があるんだ」「ん？」

アーミルはそれほど真剣な様子でもなかったが、ダルタは荷造りを休止してその相談へと耳を傾けた。ダルタの方もあまり固くなつた様子はなく、右手で鞆の持ち手をいじくって遊んでいる。

「たしか、あの人って銃の扱いが上手かったよな？」

「ああ。俺もあの人に教わったようなモンだしな」

「そこでだが、実はフィストを連れて行ってその人に少しばかり鍛えてもらいたいんだ。あいつ起つての希望だ、お願いできないか？」

突然出た名前にダルタは勿論、ダルタから離れて二人の様子を窺っていたユリスも驚いていた。遊んでいた右手も静止する。

「フィストを？なんでまた？」

「まあ、詳しい理由は本人から聞いた方がいいだろうが…強くなりたいたんだそうだ、大切なものを守るために」

「…大切なもの、か。…それはまた」

ダルタが面白いものでも見つけたように笑い、そして一瞬ユリスに目を合わせた。今度は更に強く驚いたようで、ユリスは机の影に隠れてしまった。

「いいよなあ、それ。実に美しい人間の姿じゃないか。…俺にはあんまり慣れてくれないけど」

「そういう話好きだよな、お前」

アーミルが茶化すように笑い飛ばす。

「ユリスのこといじめてやるなよ」

「はは、努力する」

その時のダルタの笑顔はユリスにはあまりに恐ろしく映った。印象があまり良くないことも手伝っているのだろうが。

しかしユリスは、その恐怖をなんとか抑え込むと、隠れていた机から出て二人に近づき始めた。

フィストがダルタとともに行ってしまふのか。その確認だけは、どうしてもユリスは取っておきたかったのだ。行ってしまふのだとしたら、ユリスは心の支えを一つ無くしてしまう。

期間の長さなど彼女には関係ない。別々になるのは、たとえ数日でもユリスの不安を強く煽る。

「で、連れてってもらえるのか？」

「俺はいいが、一人で行くつもり言っちゃってるぞ？」

「なら、俺からも連絡を入れておくよ——ん？」

アーミルの服の裾が引っ張られる。見ると、ユリスがダルタから隠れる位置でアーミルの服を掴んだまま見上げていた。

「：フィストも、行くの？」

「あ？ああ、そのつもりだが」

「どのくらい？」

「二、三日か：長くて一週間くらいだな」

ユリスが何を気にしているのか、二人ともすでに分かっていた。次に彼女が何というのかは考えずとも見当がつくというものだ。

「：私も一緒に：」

「ダメ」

二人の声が揃う。

「男ってのはな、強くなる過程は女に見られたくな——ぐはっ」
軽口を叩くダルタに拳が落ちた。

「ユリスはあまり外を出歩かない方がいい。昨日のことも忘れたわけじゃないだろ？」

「：フィストと一緒にいたい」

フィストにだけは相当なついていようで、アーミルも一瞬は了承してしまいそうになった。が、その考えをすぐさま自身で否定する。

「ユリス、気持ちは分かるが：それでまた昨日みたいになったら、今度こそ助けられないかもしれない」

「……」

まだ諦めきれしていない様子だ。何とか断念させようとアーミルの頭が回転する。

「：フィストは外を出歩いても大丈夫なの？」

「ダルタがついてるからな。けど、いくらダルタでも二人同時に守るのは難しい」

「ああ？俺は別に——いでっ！」

拳が落ちる。

「…この事務所の所長として所員のユリスに伝える。今は忙しい時期でこれ以上人手がなくなるのは避けたい。ユリスのその休暇願は受理できない」

「……」

「…分かったか？」

「……うん、分かった」

所長の所員への命令、それがいかに強制力が強いかわかっているらしい。ユリスはぼそりと答えると、ひどく落胆した様子でとぼとぼと歩いて行ってしまった。

「…少しかわいそうだったかな」

ユリスに聞こえないようにアーミルが呟く。

「…この時期ってそんなに忙しかったか？」

「そんな訳ないだろ、この上なく暇だ」

直後、ダルタの拳がアーミルに落ちた。

二人揃って頭を押さえながら笑いあったのはその直後のことだ。

ユリスがその姿を見つけた時、フィストもまた荷造りを進めていた。ダルタほど大きな鞆ではないが、しばらくここに戻らなくても問題なさそうな装備は整っている。ダルタと共に出発するという話はフィストも既に承知しているようだ。

本当に、しばらく会えなくなる。可能ならばそれは、ユリスは避けたかった。

無理だどこかで分かっているけど気持ちでは否定をしたい。しかしその願いは、アーミルに却下されている。つまり、すでに不可能と確定している。それはどこかで分かっているのだ。

複雑に悩んだまま立ち止まっていると、ユリスはフィストと目が合ってしまった。

慌てる。まだ彼女の考えは全くまとまっていない。

「…フィスト」

名前を呼ぶと、フィストは今一度しっかりとユリスと顔も向かい合わせた。ダルタのように浮かれたものではなく、何か決意を秘めたような表情をしている。

「ユリス、どうしたの？」

疑問符なのだが、聞いていない。ユリスが何を言いたいのかわかっていて確認を取っているようだ。

「フィスト、ダルタと行っちゃうんだね」

「…うん」

ユリスはフィストに何かを言おうとしていた。しかし、本人を前にした途端にそれらがすべて言葉として口に出せなくなってしまう。まるで本能的に、言ってはいけないと悟っているように。

自分も連れて行ってほしい。

そんなお願いが。

「…気をつけてね」

代わりに出た一言が、それ。ユリスが今の自身に出来ると思った、最良の行動だった。

「うん。ありがとう、ユリス」

フィストが笑顔を見せると、ユリスはわがままを言わなくて良かったと安心していた。自分がフィストの足を引っ張ってはいけない、そう考えて。

「おーい、フィスト」

ダルタが鞆を持って立ちあがっていた。そろそろ出発すると目で伝達する。

それを受け取ると、フィストも自分の鞆を掴んで立ち上がった。

「じゃあ、行ってくるね」

「…うん…」

フィストが背を向けて歩き出すと、ユリスはやはり自分が我慢しているのを実感していた。二人が離ればなれになるのは出会ってからこれが初めてだ。それで不安を感じるのも至極当然のことと言え

る。

「…フィスト、待って」

ユリスは思わず呼び止めていた。

「…フィストは…なんで一緒に行くの？」

「…なんでって？」

「フィストが行っちゃうのは、私はホントは嫌…一緒にいたい」
フィストは黙る。

何を言おうとしているのか、フィスト自身の表情も曇りがちだ。

「…ずっと一緒にいるって約束したのにね…ごめん」

「……」

「でも僕、強くなりたいんだ。強くなって、ユリスも、みんなも、大切な人を守るようになりたいんだ」

「……」

「僕、弱い自分が嫌いなんだ。誰も守れないし、誰も救えないから。
…僕、自分勝手だね」

「……そんなことないよ」

フィストが強い意志を持ってそれに臨もうとしていることを、ユリスは感じ取った。約束を破る結果になっていることもあまり気にならなくなっている。

「…これ、さ。預かってもらえるかな」

フィストが胸ポケットから何かを取り出し、ユリスの掌に握らせた。

「…？」

「僕の代わり、なんて大したものじゃないけど」

そっと掌を開いて確認してみる。彼が家を出る時に持ち出していた、花の彫られたペンダントがそこにあった。

「……ううん、分かった。預かってくね」

ユリスは首を振り、そのペンダントを服のポケットに納めた。それを確認すると、フィストは安心したように再び歩き出した。

「ダルタさん、フィストさん、いつてらっしゃい」

「気をつけてねー」

「よろしく伝えといてくれ」

各々が送り出す言葉を重ねると、二人はそれぞれに返事をしながら扉に向かっていく。

「…僕、絶対強くなって帰ってくるよ」

扉の閉まる直前、フィストはそんなことを言った。

「……フィスト……」

二人の姿が見えなくなると、ユリスは言いようのない孤独感に苛まれた。

フィストの必要性。それは、一度離れなければユリスには気づくことのできないものだったようだ。

28話 森の街へ

良い天気、と断言できる。雲の姿は一つも見当たらず、遮るものもなく降り注ぐ日光の中ではあまり着込んでいると逆に暑く感じられる。

幸い二人ともあまり厚着をしていないので、比較的快適な旅路となっていた。道が石畳から土になり、両側の家も小さなものが疎らに建っている程度に減っている。前方には葉を落とした枝の木々が確認でき、残りの道のりがどのくらいかはおよそ見当がつく。

「ダルタ、向こうに着く前に聞いておきたいんだけど」

軽い足取りで歩いて行くダルタ。フィストはその軽快さに引っ張られるような形で必死に並んで歩いている。

「その銃の扱いが上手い人ってどんな人？」

「ああ、そーいや何も説明してなかったな」

これからお世話になるであろう人のことはある程度知っておいたほうが失礼にもならない。だがフィストは、その人物についての情報を全くと言っていいほど持っていないのだ。

「そいつはファルって名前で、主に銃火器類を取り扱っている俺の同業者みたいなやつだ。あ、国の許可を貰ってるから違法じゃないぞ」

「国もそんな許可を出すんだ」

フィストにとってはあまり他人事に出来ないのだが、国家として堂々と銃などの扱いを許可しているのは確かに珍しい事態だ。

「ああ。結構いろんな方向からの信頼が厚くて、フォルクコートに住めるほど金持ちになったらしい。少し前に結婚もしたそうだ」

銃火器の専門家で、お金持ちで、既婚。フィストの中で『ファル』の人物像が組みあがっていく。

「あと…自慢じゃないが、俺って銃とか刃物とか好きなのは知って

るよな？リメールから聞いてるみたいだったが」

「ああ：そういえば、本屋の前でそんなこと言ってたね」

やや大袈裟に呆れてみせるが、そうされ慣れているのかダルタはまるで気に留めていない。

「だが、ファルの銃好きは俺なんか比にならない。自分じゃあんまり使わないんだが、家には大量の銃とか剣が置いてあるぞ。銃の雄々しさ、剣の美しさを日が暮れるまで語りつくすんだ。俺もその影響で好きになったんだが：流石にあそこまではならねえな」

「……ふーん……」

フィストの人物像は完成しなかった。途中まではダルタのような見た目に無口な性格の人間を想像していたのだが、今の説明はそれまでの印象と全くかみ合わない。当てはまる場所のないジグソーピースのように、未完成のパズルの前でそれだけが残ってしまった。

「普段は礼儀もわきまえる奴なんだが、その話になった時にはな：それなりに覚悟決めといった方がいいぞ」

「：それ、なんの覚悟？」

その質問にダルタは答えず、不安を誘うような妙な笑顔をあげながら歩いて行く。

あたりに枝ばかりの樹木が増え始めていた。

視界いっぱい枝ばかりの木々が溢れている。葉の付いていない木のシルエットが地面で重なり、どこまでも日影が続く。道としてはやや幅広な土のものが申し訳程度に続いているが、それ以外の大地は多量の落ち葉が積もっていて歩くには適さない。

人間が住んでいるにもかかわらず、その自然はまさに手つかずといった雰囲気だ。

いくら森の中とはいえ、舗装された道くらいあるだろうとフィストは考えていた。しかし、舗装はおろか真っ直ぐな道すらあまりない。

「ずいぶん曲がりくねった道が続くね」

百メートルと直線が続かず、フィストが道の先を確認しようとしてもその先は木々の裏に回り込んで見えなくなってしまう。

「枯れた川を利用した道だからな、おかげで自然への負荷が少ないって話だ」

「へえ…」

この地域の人間は金に物を言わせるだけの成金ばかりではないようだ。富裕層の住む地域というだけでフィストはある種の嫌悪感を持っていたのだが、その気持ちもどうやら見当違いだったらしい。

未だに家らしいものは見えてこないのだが、もう街まであまり遠くないとダルタはフィストに教えた。

進行方向から人が歩いてきた。茶色っぽい顎鬚を蓄えた初老あたるの男だ。

テッドフォースですれ違う人々とは明らかに服の質が違う。露店で見かけたようなアクセサリーをいくつか身につけているが、それは決して見せつけているわけではない。

派手すぎず地味すぎず、宝石が服を、服が宝石を引き立てている。よく洗練された組み合わせだ。

「：おや、ダルタさんじゃないか」

男はダルタの姿を確認するとすぐにお辞儀をした。ダルタも返礼し、つられてフィストも頭を下げる。

「ずいぶん久しぶりだね」

「お久しぶりです、ラックヤードさん。相変わらずお元気そうで」

「いやいや、とうとう四十を超えてしまっただね。最後に会ってから二年経つのかな」

ラックヤードと呼ばれた男が謙遜とともに朗らかな笑みを浮かべる。それは優しそうで、かつおおらかなものだ。ダルタとは顔なじみらしく、そのおかげでフィストも必要以上の距離感を感じずにいられた。

「今日はファルさんのお宅へ？」

「はい。折角近くに來たので、会っておこうと思ひましてね。新しいナイフも必要になりましたし」

「そうかい」

その返答は予想出来ていたのだろうか、ラックヤードは特に驚く様子もなく納得して見せた。そして、これが本題だと言わんばかりにフィストに顔を向けた。

正面から見るとその輪郭線はまるみが無く、堅そうな凹凸が顔に深い影を塗り込んでいる。髭の量は顔とバランスが取れていて、しかもそれはしっかり手入れされているらしく、僅かな日光を受けて鈍い輝きを放っている。

肖像画を描くと上手くまとまりそうな顔をしていた。

「そちらの子は？まさか、君の息子だったりするのかい？」

「あ：フィストです。初めまして」

フィストはとっさに挨拶をし、もう一度頭を下げた。まだ初見の人間相手の礼節に慣れておらず、それはしどろもどろになっている。「まさか、俺はまだ独身ですよ。知り合いの子で、ファルに銃の特訓してもらいたいので」

ラックヤードの表情が緩む。一瞬吹き出しそうになってしまったらしく、フィストに見えないように口元を押さえた。

「ああ、そうかい：フィスト君、ファルさんの特訓はいろんな意味で大変だから、くれぐれも気をつけるんだよ」

凄みを利かせてラックヤードがフィストに苦笑いを見せた。冗談などではなく、本心からフィストを心配している。

『ファル』とはどんな人なのか。フィストの頭では『変わった人』以外の的確な言葉が見つけれられない。聞けば聞くほど、その人物像は常人を逸していると言う他なくなってくるのだ。

「では、私はこれで。ダルタさん、お氣をつけて。フィスト君、頑張るんだよ」

「はい、お元気で」

ラックヤードは軽くお辞儀をすると、二人のやってきた道を歩いて行った。その姿は湾曲する道にすぐに隠されてしまう。

暫く会話が弾んだためか、急に森の中が静まり返ったように感じられた。不気味さはないが、一人だったり夜だったりする時にここを通過するのは危険が伴うだろう。

「気をつけるって：どういう意味？」

フィストはラックヤードの消えた道の方を見つめてかたまっている。

「あー、具体的に言うのはやめておくが：もう少し多感な時期にあるの特訓されると、俺らと同趣味になる可能性が高い。で、時期を外したお前見たいな奴には単なる苦痛になる。そんな感じか」

あえてなのか、それは的をはずしているような返答だ。その特訓の内容は向こうに着くまで教えるつもりはないのだろう、おそらくこれ以上質問しても満足のいく答えは得られない。

「分かったような分からないような」

「そんなもんだろうな。俺も詳しく覚えてないし」

ダルタもその特訓を受けたのか、という質問はあえて伏せた。聞いたところで先ほどのような返答が返ってくるだけなのはフィストにも分かっている。

「じゃ、行こうか。もうすぐ街が見えてくると思う」

「うん」

ダルタは再び上機嫌になり、軽快な様子で歩きだした。

29話 過去を彼女に

すでに二人が出発して数時間がたつ。ティリアに尋ねたところ、もうそろそろ到着しているくらいだろうと教えられた。去り際に「もう恋しくなった？」とからかわれて恥ずかしがってしまった。

確かに、ユリスは恋しくなっていた。横にフィストがいないだけで、すでに落ち着くことができなくなってそわそわしているのだ。

新たなよりどころを見つければあるいは落ち着くこともできるかもしれないが、今いる人間のなかで唯一それらしいのはティリアだけで、ユリスにとっての彼女はそばにいて落ちつける存在という位置づけではない。

窓際の椅子に座ると、外の様子がよく見える。

この街は建築物ばかりで、最低限必要な設備以外は殆どが省かれている。人間の数は目が回るほど多いが、生活感はまだあまり感じられない。それほど周りの景色を意識して見てきたわけではないのだが、やはりその情景は見ていてなんの面白味もない。それも手伝ってか、フィストの向かったというフォルクコートなる街がどんな所なのか、ユリスには気になっていた。

わずかに聞かせてもらった話によると、そこはテッドフォースとはまるで違う『自然』が広がっていて、人はそれほど多くない。空気が澄んでいて、深呼吸をすると体の毒素が抜けていくような錯覚も覚えてしまうほどの場所らしい。

『自然』とはどんなものなのか。植物がどんなものかくらいは知っているユリスも、皆が口をそろえて素晴らしい場所と言うほどのそこはどんな場所なのか気になっていた。

諦め切れていない、と言えそうだろう。行けないと思えば思うほど、フォルクコートという高嶺の花を欲してしまうのだ。無論、フィストがそこにいるというのが大きな要因なのだろうが。

「…あの」

振り返ると、リメールがユリスを心配そうに見つめて立っている。手にはティーセットをのせたお盆があり、それでユリスを慰めようとしていると窺える。

「紅茶、飲みませんか」

おそるおそる、といった様子だ。余計な気遣いかもしれないという思いがあるのだろう、普段よりも距離を取って話しかけている。ポットからはすでに湯気がたっていて、断ってしまうとリメールが今のユリスよりも落ち込んでしまうのだろう。

「…うん、飲む」

精一杯の笑顔を見せると、リメールは喜んだ様子でお盆をテーブルの上に置いた。逆さに重ねてあったカップを一つひっくり返し、そこにポットの中身を注いでいく。芳醇な香りがユリスの鼻に泳いできてその表情をほころばせる。硬い笑顔は朗らかなものへと変化した。

「はい、どうぞ」

テーブルの上に湯気を放つカップが差し出される。近づいてそれを受取り熱い液体を口に運ぶと、柑橘類の香りが鼻を抜けていった。「…いつもと違う香り」

「分かりますか？今回はちょっとだけレモンを使ってみたんです。レモンの香りには気持ちを落ち着かせる効果があるらしいので、今のユリスさんにはちょうどいいと思いますよ」

カップを一度置くと、ユリスは自分が言われた通りリラックスしていることに気づいた。無意識なものだが、その爽やかな香りが焦っている自分をなだめてくれたようだ。

リメールもそのユリスの様子に安心したようで、カップを更に一つひっくり返して自分の分を用意し始めた。

「私、少しですけど…ユリスさんの気持ちが分かる気がするんです」リメールが注がれる様子を見つめながら幾分か淋しそうに口を開いた。

「…え？」

「私も昔、とても大事な人が遠くに行ってしまったことがあるんです。まだ小さい時でしたけど、今でも思い出すと涙が出そうになります」

紅茶を注ぎ終わると、リメールはポットをお盆に載せて椅子に座った。

「少しだけ、昔話を聞いてもらっていいですか？」

ユリスが黙ってうなずくと、リメールは僅かに切なそうな表情をよぎらせた。

「私が本当に子供…六歳にもなってなかったころだと思います。お母さんとお出かけすることになって、買い物をするためにテッドフォースを歩いてたんです。いつもよりお母さんが優しく、雪も降ってきて、すごく楽しかったのを覚えてます」

静かな語り出しだった。ユリスはカップから手を離して聴覚に集中する。

「私、きつと悪い子だったんですよ。お母さんも表向きは私に優しくしてくれましたけど、きつとどこかで私のこと邪魔に思ってたんです。私、何も気づいていませんでした…なんて、今言っても仕方ありませんが」

「……」

「……結論から言ってしまうと…私、お母さんに捨てられたんです、その日に」

「…！」

リメールが淋しそうな顔をしていたのは言うまでもない。

「人の少なくなったあたりで、お母さんはそこで待っているように私に言ってどこかに行ってしまったんです。すぐに戻ると言うので私は待つことにしました」

「……それで、お母さんは…」

「…朝にそこで別れて…気がついたら日が暮れ始めていて…」

「……」

「…結局、お母さんは夜になっても帰ってきませんでした…」

何も言うことはできない。ただ聞き手として、ユリスはそこに座っている。

「私、ずっと待ってたんですけど…寒くて、お腹も空いて、淋しくて、暗くて、怖くて…気がついたら、泣きたくないのに泣いてました…」

カップを持つリメールの手が僅かに震えている。それがいかに辛く思い出したくないものなのかを端的に表している。

「それでお母さんを探そうと思って、人の多いところに出て…そこでも泣いてたんですけど、アーミルさんが、そんな私に声を掛けてくれたんです。私を拾ってくれて、義妹ってことにしてもらって…それ以来、ここで暮らすようになりました」

「…そんなことが…」

いつも明るく振る舞っている様子からそんな過去を想像することはできない。その隠匿されていたような事実、ユリスは氣まずそうに目線を落とした。

落ち込んだようなユリスに気づいたのか、リメールがはっとして無理矢理笑顔を作った。

「あっあの！ですから、ユリスさんがフィストさんと別れてしまった辛さも、私少しは分かると思うんですよ」

リメールの話が明らかにユリスより重苦しいのだから少しどころの話ではない。ユリスの方が氣を使ってしまうくらいの内容なのだから。

「フィストさんが近くにいなくて辛いとは思いますが…きっと、きっとすぐに帰ってきますよ。ユリスさんが待っている限りは」

「…うん。私も、それは信じてる…けど、なんだか…フィストが特別扱いされてるような…そんな氣がするの」

フィストにだけ遠出が許される、それがユリスにはどこことなく悔しくもあり、羨ましくもあったのだ。フィストについていきたいと

願ったのは、そんな思いも含まれていたらしい。

「…きつと皆さん、ユリスさんのことすごく気にしてると思うんです」

「…気にして…?」

「ユリスさんが傷つくと、皆さんも悲しいんです。体の傷だけでなく、心の傷にもそう言えます。フィストさんは苦難に負けない強い人に、ユリスさんにはそんな傷を負わせたくないと思ってこんな形にしたんじゃないでしょうか」

「…そう、かも…」

それを裏付ける事象はそれなりにあった。思い返して、ユリスはそれによりやく気付いた。

「辛いでしょけど、ユリスさん。フィストさんの無事と一緒に、皆さんのことも信じていただけませんか?」

「…:うん」

リメールの懇願に、ユリスは何の不安も感じさせない笑顔で頷いた。リメールの表情が途端に満面の笑顔になる。

「ユリスさん、ありがとうございます」

「…:うん、私ばかりわがまま言ったら駄目だね」

置いてあったカップを口に持っていくと、紅茶はいくらか冷めて飲みやすくなっていた。喉が乾いてしまったユリスは少し多めに流し込む。

「…ユリスさん。私、明日買い物に行くんですけど、良かったら一緒に来ませんか?」

ユリスを更に元気づけたいらしく、躊躇うことなくリメールがユリスを外出に誘った。

「…いいの?」

「ティリアさんも一緒だから大丈夫だと思います」

つまり、そのくらいいいれば守れるだろうと言いたいらしい。その好意がユリスにはこの上なく喜ばしいことだった。

「…じゃあ、ちょっとだけいい?」

ユリスが言いにくそうに言葉を紡いだ。

「はい？なんですか？」

「それなら明日、ちょっと行きたいところがあるの」

30話 薔薇の館

特別に大きいわけでもなく、派手な装飾がなされているわけでもない邸宅。同じ規模の建物が間隔を置いて点在しているので、それほど目立ってはいない。

しいて特徴らしいものをあげるとすれば、低い生垣の向こうに覗いている庭の薔薇だろうか。淡いピンクや赤、黄色や白の点在する花壇は、隅々まで手入れが行き届いていて清廉なイメージを与えている。枝の広げ方や種類のバランスなど、決して出しゃばらない程度に家を彩っていて、その家の住人が造園に精通しているのを示唆しているかのようだ。

「…うわぁ…」

フィストが感嘆の声をあげる。

同様の建物が連立しているとはいえ、これから自身がお世話になる家の規模の大きさは相当なものだ。フィストの持つその住人の情報とそれは大きなイメージの差があるのだが、フィストはすでに予知していたようで、その豪華さに感動しつつもそこに銃火器のエキスパートが住んでいるということを全く疑っていない。

「すげーだろ？ここがファルの住んでる家だ」

「…フォルクコートってだけで何となく予想はしてたけど…」

もう一度その屋敷を見上げた。数多の花壇に彩られたそこは、まさしく『薔薇の館』と呼ぶにふさわしい出で立ちだった。

「おお、ダルタ様ではありませんか」

花壇の中から細身の老人が顔を出していた。ダルタの姿を確認するなり、老人は花壇から這い出て門まで足早に出てきた。それでようやく確認できたのは、その老人は上半身が執事らしい服装をしていること、先ほどまで土をいじっていたということ。

上半身はそれらしい黒のスーツに身を包んではいるが、下半身は

園芸作業をこなすのに適していそうな白いズボンと長靴を履いている。そのズボンも、ついさっきまで作業をしていたらしく下の方が土色に変色してしまっていた。

「ファル様からお聞きしました。本当にお久しぶりです」

「まあな。来る途中にラックヤードさんにもあったが、アンタはそれ以上に昔と変わってないみたいで安心したよ」

老人はすでに髪も髭も一本残らず白く染まっていて、顔のしわも数が多く、かつ深い。おそらくダルタが最後にあったという二年前もこのような容姿でいたのだろう。長い奉公期間があるようで、老人にはその手の貫録が備わっている。

「あ、ダルタ様。いらっしゃったばかりで申し訳ないのですが、薔薇について少しお聞きしたい点がございまして…」

老人が言葉を濁す。

「ん？なんだ？」

「詳しく説明しますので、こちらへいらしていただけませんか？」
言うが早いか、老人は薔薇の中に身を埋めて見えなくなってしまった。

「…フィストが見えてなかったのか？まさかそんな訳ないよな…」

「…ダルタ、あの人は？」

「ああ…あの人はドルイズ。ここで長年ファルに仕えてる熱心な執事だよ。前に俺がガーデニングを教えたらハマっちゃってさ…ここに来るたびに質問されんだよ。まあ、これだけ手入れしてあるなら殆どのは問題なくこなしてるみたいだけど」

ダルタを呼び出したわけを簡潔に説明し、ダルタもドルイズの消えた辺りにかがんで株の間に身を滑り込ませた。

「フィスト、お前は先に入ってくれ、俺もすぐ行くから。大丈夫、ファルにはもうアーミルから連絡が来てるだろうからお前のことも知ってるはずだ」

「でも、いきなり僕だけで行ったら…」

フィストの意見はまるつきり無視され、ダルタは花壇の中に消え

てしまった。

呆氣にとられていたが、まずは呼び鈴を鳴らそうと門の外側に出た。呼び鈴なら相手の顔が分からないので少しは気が楽だろうと考えたのだ。

が、その考えはもろくも崩れ去ることになる。

アーチを確認する。白い石で形作られ、金網のような門と相まってどこかの城の入り口を連想させる。だがその白い石垣がどこまでも続いていることはなく、門以外は低めの背の針葉樹からなる生垣が伸びている。他に入り口は無いようだ。

押せそうなものを探すが、アーチにはそんな機械的なものは見当たらない。横に紙が貼ってあって、何か書いてある。

「…故障中、って」

インターホンらしいものが見当たらない。

外観を損ねるのであえてつけない家が多いらしいのだが、ここはただ壊れただけらしい。用事のある人間は玄関まで直接行ってノックをする必要がある、ということのようだ。現に、その紙にはその旨を知らせる内容が記されてあった。

初見の人間にとってここまで厳しいシステムは無い。知らない人の家のドアをノックする、それはなかなか勇気のいる行動だった。張り紙に書いてあるにしても、どんな人間が顔を出すのか全く分からないのだ。

庭に他の人間の姿はない。遠くで男が二人話し合う声が聞こえるが、それは助けにならない。一步一步を踏みしめ、玄関に近づく。

扉は木製のようなだが、通常よりも色が黒に近い。はめ込まれているガラスには植物のツルのような曲線が彫られていて、扉全体に荘厳な雰囲気を持たせている。扉に近づくことすら躊躇ってしまいそうになるが、フィストは決して後ろを向かない。

彼の覚悟は、この程度で諦めるものではない。

守ることのできる強さを。その誓いの大きさは、たかが雰囲気程度で防げるものではない。

ユリスの顔を思い出し、フィストは扉の前で足を止めた。
大きく、深呼吸をする。

ファルがどんな人間か、最悪の場合まで想定しておく。
なんとなく、結婚相手の人が出てくれることに期待しながら。
左手を握りしめ、それで扉を二回、軽くノックした。

数秒ののち、扉が開いた。

ドアノブを掴んでいたのは、巨大としか言いようのない男。太っているわけでも痩せているわけでもなく、平均的な体形をしている。まっ黒な髪の毛は短く適当に切りそろえられていて、紳士という雰囲気は持ち合わせていない。服装こそこの家の主らしい身なりをしているが、見た目とのギャップはこの屋敷自体よりも数倍大きい。

「…君は…」

地の底から響いてくるような重圧感。

ただ固まるのではなく、完全な硬直。呼吸一つするだけでも恐怖を感じさせる。

「あの…ダルタの連れの者です」

上手く舌が回らなかったが、ダルタの名前をкаろうじて出すことに成功した。それを伝えなければ、自分が不審者でないことを証明できないのだ。

「…ああ、話は聞いているが…彼もドルイズも、今は庭か…」

男は数秒考えた後、扉を更に大きく開いた。

「先に入って待っていないさい。お茶でも出そう」

家には入れてもらえるようだ。僅かながらフィストの緊張がほぐれ、体が自由を取り戻した。

おそらくは、彼がファルなのだろう。途中まで組みあがっていた人物像とあまりにも酷似しているので、フィストは逆に安心していった。頭の中で想定していた『彼のような人』との会話の構成が通用する、と考えているからだ。

一瞬の隙も見せないように用心しつつも、その家の中に足を踏み

入れた。

彼の背中を追いかけていくと、やや大きめの部屋に通された。床全体が絨毯のような紅蓮の毛に覆われていて、その上に客用のソファとテーブルが並んでいる。ソファの皮の色もテーブルクロスの色も床と同じ紅蓮に統一されていて、部屋としてはなかなかまとまっている。赤い色ばかりであり落ち着けないだろうが。

どうやらそこは客間のようなのだ。赤色の中には不釣り合いな森の自然を描いた絵が一枚、申し訳なさそうに飾られている。

勧められるがままソファに腰を下ろすと、ほどなくして目の前に紅茶が準備された。リメールの淹れたものとはまた違う、やや酸味の強そうな香りがしている。

「ドルイズもすぐに来るだろう。ここで待っていなさい」

「…はい」

ドアノブが回ると、彼の姿はドアの向こうに消えた。

静かになる客間。視界が赤色に覆われていて精神が少々高ぶってしまうが、それほど居心地も悪くない。

紅茶を口に運ぶと、葡萄に似た酸味が舌を流れていく。リメールのものと茶葉が違うのもあるだろうが、それは今まで飲んでいたものと似た味の中に大きな差が生きている。慣れた味のはずなのにフィストは新鮮に感じていた。同じ紅茶でここまで差が生まれるものか、と一口飲むたびにフィストの感心を誘う。

気がついた時には、カップは空になっていた。それほどおいしかったということなのか、空になった事に気づくと、フィストは残念そうに溜息をついた。

ソファから立ち上がり、部屋の中を見まわし始めた。その部屋に置いてある調度品は、フィストにはどれも物珍しく映ったのだ。壁に掛けてある絵にまずは目が行く。

描かれている森の中にはちらほらと家の姿が確認できる。よく茂った緑の中に建物の赤い屋根が点在し、単調な緑だけの絵ではない。しかし、赤の割合が少なすぎるために緑だけとさして変わりはない。しかしその森は、絵とは思えないほど繊細に描かれていた。日の光を受けて輝く部分と影になって暗い部分。そのコントラストは全体を引き締め、見ていて飽きさせないメリハリを生んでいる。葉っぱの一つ一つは丁寧に描写され、そこを吹き抜けていく風までもがその絵に切り取られて収まっている。

その森の中に一人で立っているような錯覚を見ている者に与える、不思議な絵だった。

しばらく見とれていたフィストだが、ふと部屋を見回してみる。この絵以外にも置物や壺が棚の上に置いてあったりするのだが、絵と比べるとそれらはひどく味気ないものにしか映らない。わざわざ近寄ってまで見ようとは、フィストは考えなかった。

することも無くなったフィストはソファに座り、背もたれにもたれかかって天を仰いだ。

秒針の時を刻む音が時間の経過を確かめさせる。

気がつくと、目を閉じていた。瞑想に近い状態で自然と聴覚が研ぎ澄まされる。

遠くで騒ぐ声——おそらく庭にいる二人のもの——が聞こえる。何を話しているかまでは聞き取れないが、珍しいものを見つけたようにはしゃいでいる様子が見えている時と大差無く目に浮かぶ。

フィストの頭の中に、先刻見た森の風景がよみがえる。

木々のざわめく音がフィストの耳に少しずつ流れてくる。静かであることを、この上なくフィストはありがたく感じていた。

フィストは今まさに、その森の中に立っているのだ。

ドアノブの回る音が森の景色をかき消した。彼か、もしくはダルタだろうか？フィストは顔を上げる。

「…あれ？ダルタさんはまだですか」

それは女性だった。

雪色の髪を肩辺りで切りそろえ、金色の瞳をその中に覗かせている。黒を基調にしたジャンパースカートに袖の広がっている白のブラウスを着て、レースやフリルのような飾りがその袖を始め服の要所に施されている。そのせいか、一般的なものとは違う不思議な幼さを感じさせた。

アンティークドールが歩き出したと比喻できる、そんな容姿。

「てっきりもう済ませたと思ったのですけど…あ、はじめまして」

「あ…どうも」

慌てて立ち上がり、フィストは深々と頭を下げた。

「僕、フィストです。ファルさんに鍛えてもらうために来ました」

「ふふ、話は聞かせていただきましたわ」

女性は楽しそうに笑う。

「あなたは、ファルさんの奥さんですか？」

何の気なしに聞いた。左手の薬指に指輪が見えたので、そう判断したのだ。

が、女性は呆けたように固まってしまった。

「…あの？」

「…なんと言いますか」

次第に苦笑いがにじみ始める。

「自己紹介がまだでしたね。私はファル。ファル・レッドルートと申します」

女性——ファルは、フィストよりも深く頭を下げた。

31話 Redroot

森に囲まれた街、薔薇のあふれる館、そしてその服装。そこは、今までフィストの居た何処とも違う世界。時間軸を遡ったような錯覚に囚われる。

ほんの一瞬、フィストはそんな全く関係のないことを考えていた。

玄関でファルの結婚相手が出てほしいというフィストの祈りは、一応叶っていたようだ。残念なことに、その願いは叶わない方が良かったらしいのだが。

「うふふ、きっと私のことを男だと思っていらっしやったのでしょうね」

的確に言いあてられ、フィストには返す言葉もない。恭しく頭を下げ、やりにくそうにその顔を見た。

白っぽい雪色の髪といい、保ち続けている笑顔といい、リメールと印象が似ている。アーミルの肩ほどのリメールよりは身長が高いらしく、あまり近くに寄ると見上げなければ顔を見ることが出来ない。

「えっと…僕てっきり、玄関に出た男の人がファルさんだと思って…」

「やはりそうですか。初めていらっしやる方は皆さん間違えますわ。彼ももう少し人と話してくれればいいのですけど…」

気がつくと、ファルは紅茶を新しく注いでくれていた。格好のせいか、それは家の主というより仕えているメイドに近い印象だ。

「その人は私の夫で、ガルバート・レッドルートといいます。あ、夫婦ですから姓が同じなのは当然ですね。ちよつと手が離せなかったので代わりに出てもらったのですが…やはり私が出るべきでしたね」

自分の分だろう、二つ目のカップに紅茶を注いでいく。フィスト

は自分の紅茶に手を出したかったのだが、ファルの動向を気にしてまだ出さずにいる。ファルが自分のものを飲み始めるのを待った方が失礼にならないと考えているのだ。ただでさえ失敗しているのに、これ以上失礼を重ねるわけにもいかない。

「何か：本当にすみません、間違えてしまつて」

「いいえ、とんでもない。自己紹介もしない彼にも非がありますものの」

なおも恥ずかしそうにしているフィストを前に、ポットを置いたファルは口元を押さえて笑った。

落ち着いたその様子は、銃火器のエキスパートらしい雰囲気を全く持ち合わせていない。リメールとはまた違った淑やかさを持っていて、フィストはやってきた目的を忘れそうになるほどの安心を感じていた。

「そういえば、フィストさん：でしたっけ？ 話だと、私に銃の扱いを教わりたそうですね」

ファルが紅茶を手にとったので、フィストもそれを確認してカップに手を伸ばした。

「あ、はい。ファルさんがそういったことに詳しいと聞いたので、いろいろお聞きできると思いました：え？」

紅茶を飲もうとしたフィストの手が止まる。

ファルがフィストの手をしっかりと握りしめてきたのだ。

「聞いていただけますか！？」

目が輝いていた。

「ついでてきてください！」

「うわ！」

フィストに何か言う隙を全く与えないまま、ファルはその手を掴んだまま走り出す。何とかこぼさないようにカップを置いたフィストは、それに逆らうこともできずに引っぱられていった。

ダルタのいつていた事を、フィストは今更ながらに理解した。

そこは地下室だった。窓から射していた光がなくなり、その部屋での視界は照明に頼り切っている。それなりに広さのある部屋なのだが、部屋中に置かれている『モノ』のせいで実際よりかなり狭くなってしまう。その部屋以外からは全く感じられなかったものが、その部屋に全て詰め込まれていた。今まで信憑性のなかった話が、それを前にすると一気に信じられてしまう。

部屋に入るなり、ファルは子供のように駆け出していた。

「一週間前に手に入れたばかりの、すごいものがありますよ！」

まだ困惑しているフィストを尻目に、ファルは壁際の台に置かれている『モノ』を手を取った。

まず、その形状をうっとり眺めまわす。細部にまで目を通し、その精巧な作りに見とれている。フィストもゆっくりと近くに寄ったが、そこまで眺めまわして面白いものなのかという疑問しか出ない。

何をするかと思っているうちに、ファルはそれをしっかりと抱きしめていた。

「ああ…！なんてきれいなんでしょう…！」

「…あ、あの…？」

フィストの声は全く聞こえていないようで、光悦な表情でそれを抱きしめている。フィストには理解できない領域だが、口出しする余地はないので黙って待つことにした。

「…あ、すみません！少し興奮しすぎてしまいましたね…」

「…いえ、いいんですけど…本当にお好きなんですね」

フィストにはそう言うしかできなかった。だが、ファルの勢いはまるで収まっていないうだ。

「フィストさんも、ご覧になってください！」

一メートルほどにもなる巨大な黒い銃がフィストの目の前に突き出される。奥には輝くような笑顔も付いている。

「このフォルム！使用者が対象を見やすくするために他では見られないこんな独特な形に加工されているのです！」

フィストには他の銃との差が分からない。

「他の銃には見られない特徴ですわ：でも、面白い形ならもつと興味をそえられるものがありました：ちよつとこちらへ」

駆け足で陳列された他の『モノ』に駆け寄っていく。どこに何が置いてあるのか熟知しているらしく、何の迷いもなくそのうちのひとつを手にとってフィストに見せてきた。

「フィストさん、どうでしょうか！これはきつとフィストさんにも分かっていただけると思います！」

よろよろとついてきたフィストの前に、再び大きな銃が現れた。

「それまでは不可能と言われていた銃のスマート化に成功した、記念すべきウシャッドタイプのフィティロー・ガンなのですわ！無骨に飛び出したシリンダーが逆にその美しさを引き立たせていて、私：見ただけで幸せです！」

飛び出したシリンダーこそ見れば分かったが、それを美しいと感じられる感性はフィストには無い。知らない単語までもが頻出し始めたので、ファルが再び自己の世界に陶酔し始めているのが分かる。「このフィティロー・ガンはですね、そもそも三国戦争時代にラードパッド卿が開発したと言われる一品で、ルバディックサイドの戦いにおけるベルトニア連合軍の勝利はこの銃の影での活躍があったからこそだと……」

そこから先は、殆ど頭に入っていない。フィストの記憶の最後に残っていたのは、ひと際大きな溜息だった。

「フィスト、おまたせー…って、あれ」

客間にダルタが入ると、その声が虚しく部屋に響き渡った。フィストの姿はどこにも見当たらない。その部屋に来ていたのはガルバートから確認を取っているの間違いなのだが、テーブルの上に放置されている紅茶はすっかり冷え切ってしまった。

「どこ行っただ？…まさか、ファルに捕まっちゃったのか…？」

見ると、紅茶を注いであるカップは二つ並んでいる。ガルバートは一人分しか注いでいないということなので、必然的にもう一つが誰のものは判明してくる。ドルイズはずっとダルタと一緒にいたので、残る人間は一人。

「フィスト…ご愁傷様…」

ダルタは、黙って合掌した。

豹変したファルに連れられてフィストがこの部屋に入ったのはどれだけ前になるのだろう。地下室のため、時間の経過を実感しづらい。

「…つまり、一般の銃よりも初速度が増加していて射程範囲が…」

「…なるほど…」

「…なので、一分間の発射数が三百六十発を超えた最初の機関銃であるので…」

「…はあ…」

「…の技術が銃の軽量化に貢献したともいえるわけでして、特にこのマルチタイプは…」

「…あの、ファルさん？」

恐る恐る声をかける。

「これも三国戦争時代の産物で、ベルトニア連合軍司令部が多額の

開発費を掛けて……」

聞く耳を持っていない。隠すことなく大きな溜息をついたが、それもおそらく彼女には聞こえていないだろう。

ダルタの言っていたとおり、それはフィストの苦痛でしかなかった。ファルがあまりにも楽しそうに話すので無理に話を終わらせるのも気が引けてしまうのだ。彼女がフィストを無理矢理引きとめているのなら、止めるのがどれだけ楽だっただろう。

誰かやんわり彼女を止めてくれと、困窮した頭の中でフィストは叫んだ。

扉が勢い良く開く。

暴走していたファルも、一旦説明をやめて開いた扉の方を向いた。

「おい、ファル」

地の底から響いてくるような——フィストにも聞き覚えのある

——声。

「いつまで話し込んでいる。ダルタが見えたぞ」

ファルの夫——ガルバートの姿がそこにあった。

「あら、ガルバート。今この子に基本事項を説明していたところでしたのに……」

基本事項、らしい。どんな人間に対する『基本事項』なのかフィストは聞かなかったが、少なくともフィストのような人間ではない。「客人を待たせるのは何より失礼なことじゃないのか？」

「……そうですね。すみませんフィストさん、続きはまた次の機会に」ファルは残念な気持ちを全身で表現しつつも、その地下室から出て駆け出していった。その様子を男二人が無言で見送っている。解放された実感から、フィストはふうと一息ついた。

「……すまんな。武器のこととなるとあいつは人が変わってしまう。特に自分のコレクションの説明をする時は周りが全く見えなくなってしまうのだな」

「……そうですか」

ガルバートはフィストの方を見ず、ファルの走り去った部屋の外を見つめたままぼそりと謝罪の言葉を口にした。

静かになった部屋で、フィストはようやく自分の意識がはっきりしてきているのを確認した。夢：悪夢に似た時間がほんのわずかな間に思えてくる。

「私たちも戻るとするか」

「あ、はい」

ガルバートが部屋を出ていったので、フィストも追って部屋を出ていった。

戻る途中の廊下で、ガルバートが初めてフィストの顔を見て話しかけてきた。

「私の名前はもう聞いたか？ガルバート・レッドルートだ、よろしく」

歩きながら右手を差し出す。

「あ：フィストです」

体同様大きなその手に、フィストも右手を重ねる。少し上下させるとガルバートの方からその手を放し、すぐに前を向いてしまった。その間も全く表情が変化しないので感情が読み取れない。

「そうか：君がフィストか：」

小さく低い声で言ったその一言はフィストにはよく聞き取れなかった。

長い廊下の先に大きな扉が見える。フィストにも見覚えのある扉だ。

そこにはもうダルタもファルもいるのだろう。遅れたことを申し訳なく思いながら、フィストは歩くスピードを速めた。

「私は：君をどこかで見た気がするな。そして同時に、君を追い求めていた気がする」

「？」

前を見据えたまま、ガルバートが意味深な言葉を紡ぎ始めた。

「君を探し出さなければならぬ、そんな気がしていたのだが…これは夢か？」

「…さ、さあ…？」

はいともいいえとも言えない、微妙な質問。フィストは表情をうまく変えさせているが、ガルバートは一貫してポーカーフェイスだ。

「…あの、僕とガルバートさんってどこかで会ってましたっけ？」

「君は私を知らないだろう。だが、私は知っている。報告書に君の顔が載っていたからだ」

「…報告書？」

飛躍する話に、以前感じたような嫌な感覚が蘇る。

「セントヘイム郊外の研究所、レポート盗難事件、被験体脱走…とまで言えば伝わるか？」

「！！」

フィストの足が止まり、少し遅れてガルバートも歩くのを止めた。フィストの顔が青ざめているのを確認すると、ガルバートは初めて表情を緩ませた。

笑顔を見せていた。自分が強者であると見せつけるような、嘲笑が如き笑顔。

恐怖、そして戦慄。

ガルバートがフィストに向き直る。つられてフィストは数歩後ずさった。

「私はその研究所の人間ではないが…テッドフォースにある同種の研究所の所長をしている。レポートが盗難被害に遭ったその日に私も犯人の捜索に駆り出されてな、君のことも調べさせてもらった」
絶望が頭をよぎる。

ここにきて、追手が目の前に。

「：僕を、連れて行くつもりですか」

言葉を絞りだす。

自分は弱い。それは彼自身が一番よく分かっているのだ。弱いなりにみんなを守る方法、フィストはそれを必死に考えている。

アーミルを、ティリアを、リメールを、ダルタを、そしてユリスを。大切な人たちに迷惑をかけないために今の自分ができることは何なのか、考えた。

「：約束してください。僕を連れて行くのなら、僕と関わった人たちには手を出さない」と

かろうじて、言葉が意味をなした。

平気で人殺しをする連中がその約束を守ってくれるという保証はどこにもない。だが、フィストにはそれ以上のことが出来ないのだ。というより、する力がない。フィストなりに考えた、『自分が最後の犠牲者になる』方法。

ガルバートは何も言わず、フィストに歩み寄る。フィストはもう後ずさりすることなく、黙ってガルバートを見つめていた。

31話 Redroot (後書き)

話がだらけてきてる…！

もう少し筋書きを推敲してから書き出せばよかったと、今更後悔。
読みにくいとは思いますが、最後までお付き合いお願いします。

二人がけのテーブルには、湯気をあげるコーヒーが置かれている。山と積まれた角砂糖から一つをつまみあげてその中に放り込み、スプーンでかき混ぜる。

虚ろ気なアーミルの前で、角砂糖はその身を次第に小さくしていく。もともと小さい上に、コーヒーはまだ口に出来ないほど熱い。完全に消えてなくなるまで、それほど時間はかからなかった。

「やあ、おまたせ」

張りのある声とともに、向かいの席に少年が座ってきた。眠りそうになっっていたアーミルの意識が舞い戻る。

少年は、郵便物の配達をしていそうな格好をしていた。動きを抑制しないようやや余裕を持たせたジャケットに、体にフィットしたシャツを内側に着込んでいる。肩には袈裟がけに大きな鞆を掛けていて、中に大量の紙が詰まっている。

もう肌寒い季節にもかかわらず、少年は薄着だ。その姿は季節を全く感じさせないが、彼はその服のまま寒がることもなくアーミルに笑顔を向けている。低い気温も彼の行動を抑制する要因にはならないらしい。

「ああ、アレム。すまないな、急に呼び出して」

アーミルは近くを通りかかったウェイターを呼び止め、オレンジジュースを注文した。

「アーミル：俺ももういい歳なんだし、あんまり子供扱いしないでほしいな」

アレムが頬杖を突きながら不満を漏らした。オレンジジュースを飲むのが嫌らしく、その眼差しは角砂糖一つを飲み込んだコーヒーに向けられている。

「なら、これをあげるよ。砂糖が入ってるから少し甘いが」

相手を子供扱いしたことを悪く思いながらアーミルはコーヒーを差し出した。

「いやあ、俺無糖はまだ飲めないよ」

「…そうか」

やはりまだ子供だなと内心で苦笑しながら、フィストは目の前にいる少年――腕利きの情報屋『アレム』の笑顔を嬉しそうに眺めていた。

「じゃあ、本題に入るぞ」

やってきたオレンジジュースを一口のみ、アーミルは姿勢を正す。

「うん」

アレムは話に耳を傾けながらも、高温のコーヒーと必死に格闘している。かき混ぜながら冷まそうと息を吹きかけるその姿に、街一番の情報屋の面影は無い。

「…いいか？」

「大丈夫だって！俺は今まで仕事で失敗したことないし、アーミルもそれはよく知ってるだろう？」

「…お前、いつか壁にぶつかる日が来るぞ」

「？」

「いや…とにかく、一つ知りたいことがあってな」

ようやく冷え始めたのか、アレムがコーヒーを口に運んだ。やはりまだ熱かったのか、少し含んだだけでカップを置いてしまう。

「…本当に大丈夫か？お前を見てると不安しか感じないぞ」

また強がりでも言うだろう。アーミルはそう思ったのだが、アレムの表情は思いのほか余裕がなかった。

「…出来ないことはないだろうけど…なかなか難しいかもしれない」

「と言うと？」

「その手の『情報』は、大概は少なからず公に公開されるんだ。けど、俺はそんな話聞いたことがない。つまり公開されていないってことだな」

「：だろうな。だからこそお前に頼んでいるってことになるが」

「公開されている部分が少しでもあれば、そこから手繰り寄せることはできる。けど、手繰り寄せるための糸から探さなきゃいけないってのはかなり難しいんだ。公開されてないってことは、大きな圧力が掛かっててもみ消されたんだと思う。だとしたら探すのは至難の技だね」

「：無理か？」

諦めたようにアーミルは溜息をついた。

「とりあえず、一週間くれ。どんな所が隠蔽してるかにもよるけど、そのくらいあればだいたい調べはつくと思う。もちろん、全くつかない場合もあるけど」

アレムの顔はすでに情報屋としての風格を漂わせている。自らの仕事に真剣に向き合っている証拠なのか、コーヒーにはもう関心を示していない。

「：でも、珍しいね。アーミルが訪ね人だなんて」

依頼内容が特異だったので、アレムが僅かに驚いた様子を見せた。

「ちよっと訳ありでな。：これ以上の詮索はやめてくれ」

「分かった」

ジュースを飲みきり、アーミルは代金を置いて立ち上がった。

32話 気まぐれ

「…君は何故、それ程強い眼をしている」

ガルバートはフィストの顔を覗き込んできた。フィストの眼をじっと睨みつけ、フィストもそれから目を放そうとせず、睨み返している。

「何故だ、何故自身を犠牲にしてまで仲間を守ろうとする」

ガルバートは困惑しているのか、やや早口になっている。フィストは手を突き出してそんなガルバートを制止し、自信に満ちた眼でその顔を見つめた。

「…命を捨てても惜しくない、そんな人たちだからです」
フィストの眼には一片の迷いもなかった。

沈黙が続いた。奥の扉から楽しい会話が聞こえてくるが、廊下はそんな雰囲気とは隔離されている。お互いの息がかかりそうな距離で、ただ睨み合っている。

「…興味が湧いてきた」

「え？」

「最初は、連れて行くつもりだった…だが、君は何か大切なものを見つけようとしているらしい。私にそれを邪魔する権利はない」

先に視線を外したのはガルバートの方だ。フィストがはっとした時には、背を向けて扉に向かって歩き始めていた。

ガルバートが背中で話を続ける。

「私が探すよう命じられているのは、レポートを盗んだフィストという少年。そしてここにいるのは、ファルの客人であり、仲間を守る決意を抱いた少年、フィストだ」

「……」

「君の決意がどの程度のものか、私自身興味がある。君が強さを望

むのなら、私も協力しよう」

ガルバートはそれ以上何も言わず、黙って目の前の扉に入っていた。

フィストが一人、そこに残された。

廊下は果てしなく、世界の果てまで続いているかのように長かった。目の前にあるはずの扉も、フィストの手の届かない遙か先にあるような錯覚に囚われる。フィストの足はそこから一步も動き出さない。

危機が去ったのか、その判別が出来ない。彼の言葉をそのまま信じる事ができず、その部屋に入る勇気が持てない。

彼がフィストに手を下さなかったのは事実だ。だが、それで安心して背中を任せるのはあまりに危険だ。すぐにそこから逃げ出すことも考えたが、それではダルタやアーミル達がどうなってしまいうのかが分からないのだ。

そこに入るべきなのか、フィストには決断できなかった。

「フィスト？ そんなところで何やってんだ？」

「…ダルタ？」

ダルタが部屋から顔だけを出してフィストを見ていた。表情が緩み気味になっているのはついさっきまで笑っていたかのようだ。

「フィストも来いよ。また紅茶淹れてもらったし」

「あ…うわっ」

部屋から飛び出したダルタは、そのままフィストの腕をしつかりとつかんで引っぱり始めた。呆けていたフィストは逆らうこともできず、引きずられる形で部屋に飛び込む。

フィストの意志ではなかったが、逃げるという選択肢はもう存在しないらしい。

最初に印象に残ったのは、鼻を抜ける紅茶の香りだった。

テーブルに向き合って並んでいるソファにはファルとガルバートが並んで座り、紅茶のカップを手に出している。ファルは満面の笑みで、ガルバートは無表情に部屋に飛び込んだフィストに視線をやっている。赤にまとめられた部屋の中では、二人の存在は飾られた絵のように見事に浮かび上がっていた。

「ああ、フィストさん。遅かったですね」

カップを置き、ファルがフィストに微笑みかける。フィストも恥ずかしそうに笑って返した。隣にいるガルバートのせいだろうか、その視線はどうしてもファルを真っ直ぐに見ることができずにふらつく。

部屋の明かりが先刻よりもだいぶ明るく映った。不思議に思い窓の外を見ると、すでに外は暗闇に包まれている。実感がたかったファルの重火器演説の長さが目に見えて表れていた。

「フィストさんの銃の腕は、明日見せていただきますわ。今日は長く歩いて疲れたでしょうし」

ファルのその一言は、フィストにはたまらなくありがたいものだった。

「どのくらい：僕たちはここにいますか」

「ダルタさんからは一週間滞在する予定と聞いています」

「よかったな、いろいろ見てもらえるだろ」

フィストの横でダルタが笑いかける。一週間という長さは、どうやらフィストのために撮ったらしい。

笑顔で話すファルの横で、ガルバートが僅かに笑った。

それは嘲笑のようなものではなく、何か喜んでいるような印象のものだ。

「ファル」

ガルバートが口を開いていた。

「彼の銃の腕を見るのか？」

「ええ、そうです。ガルバートも手伝ってもらえますか？」

ガルバートは黙って頷いた。フィストには喜んでいいのか分から

ない事態だが、ファルは何も知らない様子でそれを喜んでいる。

二人がどのような訓練をさせてくるのか、当然フィストは知らない。言うまでもなく厳しいことが続くだろうが、フィストはすでに決意を固めているのだ。

絶対に強くなる、と。

夕食は豪華だったが、フィストの記憶にはあまり残っていない。気持ちが悪まってしまって味に集中できなかった、といったところだ。ダルタが見兼ねて積極的に話しかけてはきたが、全て曖昧に返事して受け流してしまった。変に疲れを感じ、フィストは寝室に通されるなりベッドに倒れ込んだ。

「ハア：一週間、持つのかなあ：」

ダルタは別の寝室を使うことになっていた。この部屋はフィスト一人が使うことになっているらしい。

余分に広いことはない、青を基調とした部屋だ。やや大きめのベッドが一つ、その横にはキノコのような形のランプが置いてある。小さな椅子が恥ずかしそうに部屋の隅に置かれ、それ以外に物は置いていない。

寝る以外に何かできるわけでもなく、フィストは溜息をついた。窓の外は暗闇に覆われ、何かあるのか確認することは不可能だ。青いカーテンが両側にまとめられているが、それは黒い絵が飾られていると表現できるほどに窓らしくない。

半分目を閉じ、天井を見つめる。部屋の明かりを消し忘れたが、フィストはそのまま眠りについてしまいそうだ。

「：フィスト」

声が聞こえる。

「まだ、私のことを信用出来ないようだな」

ぼやけた意識の中で、その言葉の意味を拾い上げていく。

誰が話しているのか、考える余裕がない。気持ちとは裏腹に、フ
イストはみるみる意識の中に沈んでいく。

「私はそれで構わないが…」

部屋の電気が消される。

「…頑張ることだ」

その一言だけは、薄い意識の中にもはっきりと響き渡った。

自分と呼ぶ声。

視界の記憶はない。

彼の名前を呼んでいる。

優しく、抱きしめるような声。

何も見えない。

また、名前が呼ばれた。

その声は、彼に何かを伝えようとしていた。

32話 気まぐれ（後書き）

…えーつと。

乱文失礼しました。次から、もっと頑張ります。

33話 疑心暗鬼

真っ白に思えていた空も、日が沈んで殆ど闇と化していた。塗りつぶされたそこからは白い結晶が相変わらず遠慮がちに降り注いでくる。街全体に等しくやってくるそれは、外にいる人々の頭や肩も若干の白色を含ませる。傘をさす程の雪ではないということなのか、雪から身を守ろうとする人間はあまりいない。

足を一步前に出す。さく、と心地よいほどの音がして白味がかつた地面に足跡がつく。その上から更に白が重なり、次第にその跡が薄らいでいく。

嬉しかったはずのその雪は、今はただ淋しさを助長させる負の輝きと成り果てていた。

頭に冷たさを感じて首をふると、ポニーテールに積もっていた白い塊がべしゃりと下に落ちた。シャーベット状になったそれは、薄く積もっている雪の上ですぐに溶けようとせずくすぶっている。溶けるまで見つめていれば、頭には再び同じ量の雪がかぶさってくるだろう。

母はもう帰ってこない：幼いリメールの頭でもそれは確信を持つことができた。

同時に、涙をこぼしていた。

暗い。闇の中から悪魔が手をのぼしてくるのではないかと思うほどだ。

寒い。靴にしみ込む水は冷たく、足先の感覚は既に殆ど残っていない。

空腹。母と別れたのは朝の事で、それからずっと何も口にしていない。

怖い。未知の土地に独りきりというのは、この上ない不安に駆られる。

淋しい。もう一度母に会いたい、それが彼女の初めてのわがままだった。

ゆつくりと歩き出す。リメールがいるのは人の気配のしない路地裏であり、不気味に静まり返っている。このあたりに母親はいないし、来ることもない：それは確かだ。

少しずつ、人のいる方へ。どこに何があるか分からない彼女は、わずかに耳に入る雑踏の騒音を頼りに進んでいった。

歩いている間、何度も目を袖で拭った。心が折れそうになる度に、泣き言を言いそうになる度に、決して諦めてはいけなさと自身に言い聞かせていた。

自分が『悪い子』だから捨てられたのだ、もう嫌われることはしない――そう考えて。

建物の間から盛んに人の行きかう様子が見えた。大通りに出た、ようだ。

喜びは全く無い。知らない人ばかりのそれが見えたところで、安心などという言葉は遥か遠くで響く。

そこに出るなり、何より先に母の姿を探した。自分が悪かった、いい子になるからと謝ってまた一緒になれる事を望んで。

右の道は、どうやら大きな駅に続いているようだ。多くの人間が奥に向かって歩いていき、その姿が他の人間に隠されて見えなくなる。その一つ一つを慎重に確認していくが、母の姿はない。

左を見ると、郊外に続く石畳が真っ直ぐに進んでいるのが分かる。こちら側にあまり人はおらず、脇の建物に人が出入りするのがいくらか確認できる程度だ。

母の姿は、やはり無かった。

視界がぼやける。いくらふき取っても世界はぼやけたままで、しばらくしてリメールは拭うのをやめた。

頬が何かを伝っていく。それが溶けた雪だろうとそうでなからうとリメールにはどうでもよかった。

首筋に温かい感触が走る。露出していた首に、人肌程度の温度を持つマフラーが巻かれていた。鼠色の、ややゴワゴワしたマフラーだ。

「大丈夫か？」

男の子の声。振り返ると、ブラウンの髪に大量の雪をのせて鼻を赤くする少年の姿があった。

「……」

何も言いだせない。首のマフラーを急いで返そうとしたが、少年はそれを無理矢理止めた。

「いいよ、それあげる。使い古しで悪いが、そんな軽装じゃ寒いだろう？俺は別に寒くないから、気にするなって」

少年の服装もリメールに負けず劣らず薄着だったが、彼は平気そうに笑って見せた。寒いのだろう、その体は小刻みに震えている。罪悪感が生まれ、リメールは再び首からそれを外そうと試みる。

「おいおい、別にいいってば！」

「わっ…悪いです、そんなの！あなただって震えてるじゃないです

か！」

これ以上『悪い子』になりたくない。人に嫌われる行為は、彼女にとってたまさしくそれに当てはまる。

誰かに嫌われることが、彼女にはたまらなく恐ろしいのだ。

「あなたの物なのにあなたが我慢してまで私が使うなんて、なんか失礼な気がします！」

「渡されたものを使おうとしないのも失礼なんじゃないのか？」

「……！」

言葉に詰まった。少年の言うことももつともだとリメールには思えた。

黙り込む。マフラーを外そうとしていた手が止まった。

「……じゃあ、ありがたく……」

首元がすっかり隠されるそれに顔をうずませる。まだ申し訳ない気持ちがあり、頬が赤くなっていた。少年の顔を見上げると、寒さで顔を赤くしながら平気そうに振る舞っている様子が見える。ここで無理にマフラーを突き返そうとしても、おそらく彼は受け取らないだろう。

「……ありがとうございます」

「気にするな。そんな律儀にならなくても」

少年は笑った。リメールの不安が、その瞬間だけ和らいだ。

「迷子か？まだ目が赤いぞ」

少年がハンカチを取り出し、リメールの目じりを拭いた。まだ涙が出ていたらしい。

「迷子といえますか、なんと言うか……」

説明することは、リメールは気がひけた。まるで人の同情を誘っているような、そんなことをしている気になってしまうのだ。

「……訳ありっぽいな。まあまずは、どこかで落ち着いて座ろう」

「え？あ、あの」

困惑するリメールを差し置き、少年はリメールの手を掴んで歩きだしていた。

しっかりと掴まれている手首は、首よりも更に温かった。

目の前に広がる白は、おそらく雪ではなくシーツの色だ。真っ白いシーツで体を丸ませているその姿勢はあまり人に見せられるものではない。先ほどまで見ていた夢に気持ちを持っていかれたまま、もそもそとベッドから体を引きずり下ろす。シーツから出ると、身を貫く猛烈な寒気に襲われた。

「…寒いですね…」

独り言を漏らし、給湯室へ移動する。この習慣ももう手慣れたものだ。

戸棚から茶葉の袋を取り出して数人分を摘み取ると、水と一緒にポットに入れて火にかけた。どのくらいでちょうど良い温度になるのか、リメールは熟知している。

ここに来ることになったあの日の夢。ユリスに話したのがきっかけなのか、それは久しぶりに見る鮮明な記憶の再生だった。その時の感情から温度の感覚まで、細かく再現されていた。

事情を彼——アーミルに話すと、彼は彼女を受け入れてくれた。全て承知した上で、共に暮らすことを許してくれたのだ。その日の感動を、リメールは忘れたことがない。

その日から今まで、ずっと何事もなく——いざこざがなかったわけではないが——『兄妹』として暮らしてきた。それは彼女にとっても疑いようのない『幸せ』そのものだった。

だからこそ、いつかこの日常が崩れ去ってしまうのではないか、

とりメールは不安になる。自分が必要とされていないのではないか、そんな恐怖に似た感情が常に思考にまわりついてくるのだ。

不要の烙印を押されないように。彼女はその一心で、あらゆる事柄を器用にこなした。料理や紅茶の知識も、彼らの役に立てるようにと手際よく覚えてきた。実用経験こそ殆どないが、例えば武器の使用方法も知識の中にはある。それがなければ、本屋でフィストとユリスを助けることはできなかっただろう。それらは誰かに強制されたわけではなく、全て自分から進んで身につけていた。言われたことだけをこなしては必要な存在にはなれない、そう考えて。

だが物事を覚えれば覚えるほど、ますます疑心暗鬼に陥ってしまう。まだ足りないのではないか、もっと何かを身につけるべきではないのか、そんな不安が離れることなく彼女を握りしめているのだ。いつ握りつぶされるか分からないほど、強く。

リメールは、恐れている。

自分が必要とされなくなることを。

自分の居場所が無くなることを。

「そろそろですね」

ポットの火を止めた。すでに紅茶の香りが給湯室に溢れかえっている。カップを複数取り出し、お盆の上に並べた。ポットから一つずつ注いでいくと、香りの深みは倍増した。

「リメール、おはよう」

アーミルが給湯室に入ってきていた。

「あ、アーミルさん。おはようございます」

その姿を確認するなり、リメールは満面の笑みを浮かべた。その笑顔を見る限りでは心に抱く恐怖は全く感じない。

「毎朝ぐくろうさま。いつも悪いな」

「いえ、そんなことはないです。私が好きでやってることなんで」

「…まあ、そうだけど」

アーミルはリメールに朝の紅茶を頼んだことはない。あくまでリメールが自発的に、誰よりも早起きして紅茶を準備するようになったのだ。アーミルはそんなリメールのために、茶葉をそこに買い溜めをしている。

「……あの、アーミルさん」

夢の影響か、ふとアーミルを呼び止めていた。

「ん、どうかしたか？」

「あの……私って……」

ここに必要なのか。アーミルに直接聞きたいが、それは卑しいのではないかという葛藤に襲われる。あと一言なのだが、リメールはどうしてもそれを聞くことが出来なかった。

「……なんでもないです！すみません、呼びとめてしまつて」

「いや、いいけど」

きっとアーミルは自分を必要と思っている。リメールはそう信じることは出来なかった。

「そういえば、今日は三人で出かけるんだって？」

「ええ、そうです。ユリスさんにもいろいろ買ってあげたいと思いますして」

「俺に声をかけなかったのは……」

「ダメですよ。神聖な女の子の集いなんですからっ」

「…そうか。ま、楽しんで来てくれ」

苦笑いを浮かべながら、アーミルは給湯室を出ていった。気分を害したわけではないのは、長い付き合いのリメールにはよく分かっている。

始めのうち、リメールは冗談の一つも言うことはなかった。常に他人行儀でアーミルやティリアと接し、絶対に気分を害さないよう

に精神をすり減らしていた。

先程のような茶化しと言えるようになってるのは、アーミルの人柄がそれなりに良かったからだろう。いつの間にかリメールは周りの人間と気軽に話し合うようになり、そこに打ち解けていた。それがリメールには、嬉しかった。

だがなお、恐怖は払拭されない。どこかで邪魔に思っていないか、本当に『兄妹』になれているのか、それは不安でたまらなくなる。

「アーミルさん…私、ここに必要ですか…？」

小声で言ったが、隣の部屋にいるアーミルには聞こえるはずもない。

34話 「会いに来たよ」

ユリスが要求した場所は、テッドフォース駅の近くにある小さな丘だった。目の前が砂漠であるにもかかわらずそこは緑色に包まれていて、どこからか水の流れ出る音もしている。リメールはまだ分かっていないようだがティリアは何のためにそこに来たのか気づいたようで、途中からずっとユリスのことを心配そうに見ている。

二人から何かを聞いたわけでもないのだが、その丘に入ると同時にリメールはそこがどんな場所なのかを感じ取っていた。

丘全体を、やや冷たいような、しかし穏やかな雰囲気包んでいる。そして三人のうち、ユリスを取り囲むように空気がざわめいているのだ。それは、丘がユリスを歓迎していると表現したくなるほどだ。しかし、その影には常に悲しみに似た様子がちらつく。

「……これは…なんなのでしょうか…」

「何が？」

ティリアはその雰囲気を感じ取っていないらしく、リメールが困惑しているのを不思議そうにしている。

「丘に…悲しみと喜びが渦巻いているんです。それも、ユリスさんを中心にして」

「……だろうね」

表情を若干曇らせたティリアが丘の上に視線をやった。

小さな石が、三人を出迎えていた。

「ルフィーネ…会いに来たよ」

ユリスが石に向かって笑いかけた。遠慮しているのか、二人は遠巻きにその様子をうかがっている。ティリアは初めて会った時にあ

る程度の話を聞いていたのだが、それでも部外者であることは否めない。リメールに至っては、その場にいることすら躊躇っている。

「…私ね…たくさん友達ができたんだよ」

返事のないユリスの会話。小さな声だが、その声は丘全体にまで響いて二人の耳にも入ってくる。返事はないが、代わりに温かな風が丘を吹き抜けた。

「…今はもう、寂しくない。きっとそれも、ルフィーネのおかげだと思う」

後ろ向きで、二人にユリスの表情は分からない。しかし、笑顔で会話をしていることは確かだ。

「それから…直接は来れなかったけど」

そこまで言うユリスは、ポケットから小さなペンダントを取り出した。そしてそれを見せるように石の前にゆっくり差し出す。

「フィスト…ルフィーネだよ」

石とペンダントを見比べ、ユリスは静かに目を閉じた。

風でペンダントが揺れる。見えない手がペンダントを包み込んでいるかのようだ。暫く風に任せた後、ユリスはペンダントをポケットに戻した。

「…ねえ、二人も」

「…え、私ら？」

ユリスが振り向き、ティリアとリメールを呼んだ。居心地の悪そうにしていた二人は呆氣にとられていたが、ユリスが手招きしたので恐る恐る石に近づいていく。

吹いている風が、二人を包む。ゆっくりと大きな手に引き寄せられるようにして歩み寄り、ユリスの横で止まった。

「ルフィーネ、まだ全員じゃないけど…」

ユリスが二人に目配せする。困惑していた二人も、笑顔を含めて頷いた。

「ティリアと、リメール。私の友達だよ」

「…はじめましてだな、ルフィーネ」

「はじめまして」

恭しく二人は頭を下げた。目の前に、お辞儀をする少女の姿が一瞬過ぎていった。

「ルフィーネ…もつとたくさん…たくさん大切な人が増えたんだよ。また今度、連れてくるね」

ユリスが石を優しく撫でると、再び風が吹いた。ユリスに同調するかのように、ひと際強く吹き抜けていった。

ユリスはしばらく、ルフィーネと会話を続けた。ティリアやリメルも混ぜて、他愛もないような世間話をしていた。リメルがふと見たとき、ユリスは今まで見せたことのないような笑顔だった。

「…あのね、二人とも」

ユリスが振り返っていた。何か言いたそうな様子で、まごついた顔をしている。踏み切れないような表情はいつものユリスのようだが、その中にどこか決意をもったような雰囲気を感じさせている。

「聞いてほしいことがあって…」

「…悩み事？」

「…うん…フィストにはもう話したんだけど」

ユリスは胸の前で指を絡ませつつ視線を遠くへやったが、やがて三人に向かって、はっきりと大きな声で話し始めた。

「私は…多分、人間じゃないの」

思いつめた声ではない。なので、聞いている二人はそれを聞いても動揺は見せなかった。

ユリスがその結論に至った理由も、二人には目星がついている。本人がそれをどう受け止めているのかを見極める意味でも、二人ともあえて何も言わずにユリスを待った。

「襲われたあの日に：私の中の何かが目を覚ましたの。フィストが殺されそうになって、いっぱい敵が来て、どうしようもなくなったと思ったんだけど…」

言葉が切れた。続けるのは何かしらの苦痛が伴うのか、ユリスは唇をかみしめている。

「：はつきりと、覚えてる。：自分が何をしたのか。体の中から力が湧き上がってきて、夢中でコートたちをやっつけてた。身長よりずっと高くまで跳べたし、叩いたら石畳も壊せた」

シンプルで分かりやすい説明。詳しい内容を二人が聞くのはこれが初めてだったので、その説明でリメールは僅かに反応してしまう。

「：今はそんなこと出来ないよ。私の中の力は眠ってる：でも、いつまた目を覚めますか、分からない：それが、私は怖い」

「……その気持ち分かる、とは言わないけど」

ティリアがユリスの肩に手を置いた。そのまま背中を摩ると、ユリスは恥ずかしそうに頬を掻いた。

「無意識とかそういうの関係なくてさ、自分が持つてる力ならそんなに怖がることないんじゃない？きつと今はまだコントロールできてないだけで、すぐに制御できるようになるんだよ。：まあ、分かったようなこと言うのもなんだけど」

「そうですよ、ユリスさん」

リメールがユリスの手を取っていた。

「もつと自分に自信を持つてください。その力がどんなものなのかは分かりませんが、きつとユリスさんならそんな怖さに打ち勝てると思います。あなたに秘められた力なら、絶対に使いこなすことが出来ますよ」

啞然とした様子でユリスは聞き入っている。彼女の不安を残さず摘み取るために、二人は出来る限りの笑顔をユリスに向けていた。

「：私：今度は無意識のうちに、この力でみんなに襲いかかるかもしれない…」

「大丈夫だって。その時は、ユリスの中にいる化け物だけやっつけ

てユリスを助けてやるからさ」

「…その化け物が、私だったら…？」

「多分、そういうのは関係ないですよ。例えばユリスさんが…えー、例えば…竜とかだったりしても、その竜であるってことも含めて、全部がユリスさんですから。そしたらそれを全部まとめて助けます。ユリスさんがユリスさんでいられない原因を取り除く、それだけです」

「だからさ、ユリス」

「これから一緒にいてくださいね」

この二人は僅かな嘘もついていない。今言ったことは何もかも本当のことだ。——自身を見つめる目を見れば、ユリスも簡単にそれに気づくことができた。

「…ありがとう」

その時のユリスは、すっかり元の調子に戻っていた。やや不安そうな表情をして、二人を交互に見まわしている。もう用事は済んだと言いたいらしく、どちらかの出発の合図を待っているようだ。

「次に来るときは、花を買って持って来ましょうね」

「…そうだね」

「よっし、じゃあ街に行ってショッピングだ！」

ティリアが勢い良く叫び、先頭に立って歩き始めた。苦笑いをしたりメールと呆けた様子のユリスも、それに続く。

「……ルフィーネさん、ですよ。あそこにいたのは…」

「…うん」

リメールは列車のことについてまだ何の話も聞いていない。何があったのが気になっていたが、それ以上の質問は控えることにした。触れてはいけないものに触れてしまうのは、ユリスもリメールも望んではいない。

「フィストさんも連れてきたかったんじゃないですか？」

「…うん、まあ…」

ユリスがやや俯いている。どうやら直接聞かずとも、次第にその時の記憶がよみがえってきてしまったらしい。リメールは慌てた様子で話題を変えた。

「あ、あの、えーっと、ユリスさんって、フィストさんのことどう思ってるんですか？」

言いながらリメールは、以前にも似たようなことを聞いたのを思い出していた。その時は疑問詞を使わず、もっと直接的に聞いたのだが。

「…どうって？」

「ユリスさんにとっての、フィストさんの位置づけですよ」

「…位置づけ…」

ユリスは考え込んでしまった。真剣に考えているのだろうが、出てくる答えはすでに定まっている。

「…これって、前にリメールに言われたような…」

「…そうでしたっけ？私はよく覚えてませんが」

多少いじめてみる。ユリスはその言葉をそのまま信じこむと再び考え込み、歩くペースが落ちてしまった。なかなか言葉にせず、複雑な表情をしている。

「…うーん…位置づけ…」

考えながら、そんなことを呟いている。もしかして、とりメールはユリスを見つめた。

その胸中では、ひょっとしたらとつくに答えが出ているかもしれないのだ。それに自分から目を背けていて、そのことにも気づいていないのかもしれない。

「ユリスさん？」

「…？」

「もしかして…自分の本当の気持ちに気づいてないんじゃないですか？」

「…本当の気持ち…？」

ユリスは驚いた様子だ。リメールは真剣な顔になっていて、しかしそれ以降は何も言わずに黙って歩いている。

「…それってどういう…」

「それは…自分が一番よく分かっていると思いますよ」

それだけ言うと、リメールは前に行くティリアに走り寄って行ってしまった。少し立ち止まったユリスは、思わず溜息が出た。

「…また、言うだけ言って逃げちゃうんだから…」

気がつくと、ユリスの前を行っていた二人は立ち止まっていた。丘のふもとに停めていた車が目の前までやってきていたのだ。ティリアが鍵を開けている間に、ユリスはリメールに追いついて横に並ぶ。

「ああ、ユリスさん。分かりましたか？」

「…うーんとね」

まだはつきりしないユリスを見て、リメールは残念そうに苦笑した。鍵の開く音がしたのはその直後のことだ。

扉が開いたのを確認すると、ティリアは二人に向きなあった。

「じゃあ、行こうか。今度は私が運転するからリメールは後ろに座ってて」

「あ、はい」

ティリアがせかすので、二人は背中を押される形で後ろに入り込んだ。席に座ると、間をおかずにティリアが運転席に入り込む。

「…リメール」

ユリスだ。

「はい？」

「…私の本当の気持ち…何となく分かったような…」

「…言ってみてもらえますか？」

「フィストは、私の大切な人。それ以上は、よく言い表せない」

「…そうですか。気付けたのならそれでいいですけど」

リメールがユリスの頭を撫でたが、ユリスはまだしっくりこない

様子で眉をひそめている。

「…なんかこれ…前にリメールが言ってたのとは違う気がする…」
「…?」

「もう少し、考えてみるね。すぐには分からない気がするから…」
「そうですか。その方がいいでしょうね、ふふっ」

リメールが嬉しそうに笑いかけると、ユリスは安心したように頷いた。

ふと、小さくなりつつある丘に視線をやった。

斜面に生えている木が風に揺られ、手を振っているかのようだ。

「…また来るね、ルフィーネ」

車が勢いよく丘を離れていった。

見送るような風が、最後に優しく吹いた。

35話 ある弾の軌跡

その一言は、朝食のすぐ後に言い渡された。

「フィストさん、このあと支度を整えてから客間に来ていただけますか？」

ナプキンで口を拭きながらファルがフィストに言った。何のために、というのは愚問だろう。

「ガルバートが練習用にいろいろ準備してくれたそうです。実践に近い特訓なのでコツを覚えるのも早いと思いますよ」

フィストが見渡してみると、ガルバートはすでに朝食を済ませて部屋から姿を消していた。彼が食べた跡だろう、空になった数枚の皿だけがそこに残されている。

その皿を片づけようとしたドルイズと目が合い、お辞儀をされた。

ガルバートとファルに連れられてフィストが来たのは、前日の部屋の近くにあった別の地下室だった。たどり着くまでその存在に気づかなかったのだが、確かにファルに連れて行かれた部屋のすぐ横には別の扉があったのだ。

中は隣よりもずっと広かった。照明は一つだけだと全体を照らせないのだろう、等間隔で幾つも吊り下げられている。そこに浮かび上がるのは、生活感をほとんど感じない奇妙な物体。

「ここは：私たちが銃の練習をしたり、客に商品の試し撃ちをしてもらったりする部屋だ」

ガルバートが説明を施す。

部屋にある物体は、試し撃ちならば的を置く台になり、練習ならば身を隠す障害物になるらしい。その意味ではそれらも強ち奇妙と言いつけることはできない。それでもその幾つもへこみや傷のついた

それらは、見慣れていないフィストにとっては見ていて良い気分になるものではなかった。

ガルバートが一丁の銃をフィストに渡す。

「この銃も相手の銃も実弾は入っていない。空気の塊がぶつかるから多少痛みはあるだろうが」

「：はい」

それを確認するために渡された銃のシリンダーを開こうとしたのだが、そもそもシリンダーらしい部分が無い。確かにそれならば、実弾の装填は不可能だ。

「用心深いな。まあ、そのくらいがちょうどいいだろうが」

入念に渡された銃を調べるフィストを見て、ガルバートは僅かに笑って見せた。

「じゃあ：まずはどんな感じなのか、ファルにやってもらおうか」

「はい！」

ガルバートの横にいたファルが、フィストと同じ形の銃を持っていた。構えてその感覚を確かめるなど、なかなか本気のようなだ。

幾つかある障害物は、黒光りを持つ無機質な箱状のものばかりだ。銃の練習が目的ならそこにこだわる必要はないのだが、一切の無駄が排除されたその空間は立っていると嫌悪感を覚える。

ファルが嬉々とした表情で踏み込む。銃の使用がそれほど嬉しいのか、それでも構えや注意の配り方には僅かな無駄もない。熟練した銃の使い手の雰囲気が——表情以外からだが——ようやく感じられるようになった。

「：フィスト」

少しずつ奥へ進んでいくファルの背中を見据えたまま、ガルバートが口を開いた。

「一応言っておくが、今回の特訓に合わせて研究所から相手役を持つてきておいた」

「相手役？」

「君になら『コート』と言えば効率良く伝わるだろう」

「……あなたは研究所と関わりがあるんでしたね」

フィストも忘れていたわけではないが、日付変更線を挟んだせいかその事実が気にならなくなっていたようだ。敵が自分の協力をしているというのは未だに不可解な気持ちになるが。

コートという言葉に連動して引き出される記憶の影響か、不快な感覚がフィストの全身を駆け巡る。

「先程も言ったが、奴らに持たせているものも空気銃だ。それに私の命令には逆らわないから、練習以外で襲ってくることはない」

「：そうですか」

安心できるはずだったのだが、本心からそれを鵜呑みにすることが出来ない。やはりすぐには信用できないんだなと、フィストは昔と変わってしまった自分に気づいて溜息をついた。

「：始まったぞ」

はっとして前を見ると、丁度ファルが銃を構えて引き金を引くところだった。

——そして、彼女の舞台が始まった。

銃声。

音に重みがないのは、空気銃だからだろう。発射された弾の姿は全く見えないが、銃の向けられた先にそれが飛んでいくのはよく分かる。その先に確認できるのは——コート。

ファルの放った弾がそれに当たったのは崩れるコートを見れば分かった。その確認と同時に、ファルはすぐさま次の動作に移っていた。それまでとは比にならない俊敏性を持ち、喜びだけだった表情もいつの間にか引き締まっている。

発砲。

フィストからは見えない位置でコートが崩れる。そことは別の方向からファルに向かって銃声が聞こえたが、踊るように身を翻してそれをかわす。飛んできた弾も正確な軌道は見えないのだが、ファルに当たった様子は見受けられない。

発砲。

どこに対象がいたのかは不明だ。だがそれは確実に、寸分の狂いもなく相手を仕留めている。

二発。

ファルのジャンパーズスカートはその長い丈を大きく振りまわしていて動きにくそうだが、ファル自身はそれを意に介していないようだ。動きに合わせてたなびくそれは、舞台に立つ彼女を誰よりも輝かせている。

まるで遊ぶかのように、華麗にステップを踏む。

一発。

休む暇なく、立ち位置を移動する。まさしく舞台のように、全ての動きが台本になっているかのように無駄なく立ち回り、見る者の心をとらえて離さない。

二発。

時間が目まぐるしく過ぎていくように感じられる。それだけ目の前の『ヒロイン』が素早く動き回っているということだろう。

一発。

そして、幕が下りた。

「ふう…このくらいでしうか」

にこやかな顔で、ファルが戻ってきた。その笑顔は満足感以外の何物でもない。フィストは間違いなく今の神業が如き一連の動作に圧倒されていた。だが、賛美の言葉が口にできなかった。

啞然などという簡単な言葉では表しきれない複雑な心境に陥っていた。

「…フィストさん？　どうかなされましたか？」

「…あつ、その…ファルさんのイメージとずいぶん違っていたので…やっぱり言うか、銃の扱いも上手なんですネ…」

「どうしてそんなに落ち込んでいるのですか？」

ファルの言う通り、フィストの声には張りがなかった。彼がファルのことを認めているのは事実だが、フィストにはそれがどうしても理解しきれないらしい。

「…あの、失礼ですけど」

「？」

「…ファルさんは…まだ動いている…人とか動物とか、そういうのを撃つことに、喜びを感じたり…するんですか？」

それは確かに失礼な質問だった。それでも、実践して見せるときの嬉しそうなファルを見ていると聞かずにはいられなかったのだ。

ファルは黙った。怒ったのかもしれないが、その判断はつかない。「…そうですね…私は確かに、銃を使うときはすごく楽しいです。

でも、決して命を紡ぐことに快感を覚えているわけではありませんわ。確かにこれはそのための物ではありませんけど、それに振り回されて身勝手に摘み取っていいほど命というものは軽いものではありませんから」

手にしている銃を、今回はやや哀しそうに眺めた。それからフィストに笑顔を見せてからガルバートにそれを返す。怒ったわけでは

ないらしい。むしろ、そう質問されたことをどこかで喜んでいるのではないかと思わせる態度だ。

「…安心しました」

「それは何よりですわ。さあ、次はフィストさんの番ですよ」

ファルが背中を押すと、フィストは先ほどまで光り輝いていた彼女の舞台に押し出された。

「…そこまでだ」

ガルバートが終了を指示し、同時にフィストは疲れ果てたようにその場に座り込んだ。

右手と右肩に鈍い痛みが残っている。それは相手の弾が当たった場所で、フィストの考えているよりはひどい痛みではなかった。だがこれがもし実弾だったならば、確実にフィストは死んでいただろう。相手のコートの数はファルと全く一緒だったらしく、崩れているコートの数は先ほどと変わらない。ファルがどれだけ凄腕の持ち主なのか実感できた。

踊っているかのような彼女の動作。それは常人以上の反射神経と、判断力と、銃の腕前がなければなせない業なのだ。比べてしまえば、フィストの時はまるで喜劇のようだった。

最初のうちはフィストも奮闘していた。的確に現れたコートたちを撃ち抜いていたのだが、次第に一度の出現数が増えてくると攻撃が間に合わなくなっていくのだ。撃つのに集中すると相手の弾が当たる。回避を優先すると攻撃が当たらない。そのジレンマが、フィストの場合は見る者の印象に残った。

息を切らせているフィストにファルが手を差し伸べた。

「お疲れ様です。こちらで休みましょう」

平然とした様子で立っているファルの姿は、フィストの目には後

光が射して見えた。

「えー、一通り見たところ…射撃の精度は素晴らしいのですが、構えてから発射までに時間がかかりすぎていますね」

フィストの実力を見てどのように感じたのか、ファルはどちらともつかない様子で長所短所を述べた。

「確かに…最後の方はまるで追いついていませんでした」

自身が思い返してみても、言われた通り構えてから撃つまではずいぶんと時間が空いているのが分かった。コートを撃ち抜こうとすると、フィストはどうしてもその程度の時間を必要としてしまうのだ。短く収めた時の弾はコートに直撃していない。

「フィストさんの場合はそこがネックですね…これは何と言いますか、瞬時の判断力が要求される話です。実戦で培われる能力ですの、それを一週間で身につけるといえるのは…」

「…無理、ですか」

「できるだけのことはしますわ。一瞬でも後れを取ると致命傷につながるのが銃撃戦ですから、少しでもその感覚に慣れておいたほうがいいでしょう」

簡単な診断結果ではなかったが、それはある意味でフィストの求めているものでもあった。専門家というだけあって、今までフィストの不足していたものをしっかりと見つけてくれたのだ。喜ばしいことに違いはない。

「とりあえず今はここまでにしましょうか。そろそろお昼にしましょう」

「…もう終わりですか？」

あっさりと終わってしまったのでフィストは驚いて見せた。今のフィストの体も疲労が蓄積されているが、世に言う猛特訓の直後の人間とは歩くことすら困難になるのでは、というのがフィストの予想だった。

「長く続けると集中力が持ちませんわ。焦らず、慎重に行きましょう」

う」

ファルが言うと言得力がある内容だ。長くこの道に携わっているからこそその判断なのだろう…そう考えたフィストは、特に異論を唱えることもなくそれに従うことにした。

36話 ある盾の古傷

ひと際大きな溜息の後、フィストは荒々しくソファに座り込んだ。弾性力で体が多少上下するがすぐにおさまり、部屋の変化が急激に減少した。

午後の訓練は、午前に見つかった問題点を重点的に克服するような内容だった。銃を構えずに待ち、三百六十度どこから来るかわからない相手を処理していく。どうしても攻撃が相手より遅れてしまうので、必然的に発砲は銃弾をかわしながらになってしまいうのだ。構えてから撃つまでの時間はごくわずかになり、午前よりも全身に鈍痛を残す結果となっていた。続けていくうちにだんだんと感覚を掴むようにはなっていたのだが、それでもフィストの弾の当たる場面はわずかだった。思い通りにならない苛立ちが、今更になってフィストにのしかかる。

「…まあ、ずいぶんと良くはなっていたと思うぞ」

隣にガルバートが座っている。フィストのそれとなく彼との間に若干の距離を置いているが、それは気休めにもならない程度のものだ。

「まあ：銃を手にしてからそんなに経ってるわけでもないんで：」

「好きで手にしたわけじゃない、ということか」

反応をしない。誰のせいなのかな、という言葉は発せられることなくフィストの内に消えた。事の発端は自分にあるのだが、銃を持ちたくてそんなことをしたわけでもないのだ。

ふう、とついた溜息が二人分重なる。神経を苛立たせる時計の音が二人の耳に流れ続ける。

「…あの」

時計の音に耐えられなかったのか、フィストはガルバートに顔を向けていた。

「もう一度、聞いておきたいんですけど…」

「…」

フィストの方を向くことはなく、しかしフィストの言葉に耳を傾けている。

「あなたは、どうして僕に協力してくれてるんですか」

協力：それは偽りのないものだった。少なくとも今日の特訓の中で彼は、間違いなく本心からフィストに協力していた。『自分に興味がある』、『邪魔する権利はない』：フィストには、それは子供が無理に考えた言い訳のようにしか聞こえなかったのだ。

「昨日言っただけだ」

淡泊な返事だ。それもまた大人の言い訳としては不十分だ。

「一研究所の所長ともあろう人が、個人の意思でそういうことをしているとは思えないんですけど…」

言っていて気が変わられるのは恐ろしいが、納得がいく説明をされなければこのままずっと彼を信用することが出来ないでいてしまう。それはさまざまな意味で避けておくべきだろうと考えたのだ。

「人の上に立つ者は、それだけ自分を犠牲にする必要がある、そう思います。：僕がそんなこと言うのも変な話ですが」

「…」

考え込んでいる、といったところだろうか。頑強な表情は相変わらずだが、今の発言を否定しなかったのはやはり凶星だからなのだろう。全く変化のない顔の皮の内側で、さまざまな思考が交錯する様子が見て取れる。

「：確かに、その意味では私は、人の上に立つべきではないのかもしれない。だがそうである以前に、私は一人の人間だ。間違いと認めたことを正そうとする：人として、それは当然のことだろう」

「…？」

ガルバートの真意が分からず、それは彼も自覚していたようですぐに立ち上がった。

「…喉が渴いたな。紅茶を淹れよう」

紅茶が湯気を上げる。二人ともカップを手を取っているが、それを口に運ぼうとはしない。掌にほんのりと熱が伝わり、フィストの神経が若干和らぐ。

「君がレポートを盗んだのは、セントヘイムの研究所。その所長が、今も君と被験体を追っている――ヴェクス・ラムフィールドという男だ」

ヴェクス…もはや逃げることでできないであろうその名を頭の中で復唱する。

「私は、彼と古くからの知り合いだった。共に同じ道を歩み、同じ立場まで上り詰めた。そんな彼の考えることは何でも分かると、思っていたのだが…」

「……」

「…いつだったか、彼は豹変した。危険な人体実験に手を出すようになり、まるで御伽話のような『錬成品』を生み出すようになった。それは人工生命体然り、兵器然り」

「…はい」

無意識に返事をする。かつてアーミルから聞いた情報と噛み合わせ、隙間を無くしていく。

「彼はそんな人間ではなかった…研究熱心ではあったが、決して人の不幸を望むようなことはなかった。他人の手助けをして、自分は裏方に回る…そういう人間のはずだった。何があったのか聞いたこともあったが、結局教えてはくれなかったな…」

そこで一度、ガルバートはカップを口元に運ぶ。その小休止はフィストにも必要で、合わせるようにして紅茶を口に含ませた。その透き通った香りも、やや酸味のある味も、じっくり楽しむ余裕はどちらも持っていない。

「今も私と『彼』は良い友人という関係を保っているが、もう私には『彼』を理解することが出来ない。そして出来るのなら、昔の彼

に戻ってほしいと願っている。…そのせいだろうな、君を『彼』に差し出すことがどうしても躊躇われた」

合点のいく説明ではないが、それ以上に信じられるものもまたない。ひとまず了解した意思を持ってフィストは頷いた。

「君を見逃すことで…君が強くなることで『彼』が変わってくれるなどと期待はしていない。だが、『彼』の被害者は少しでも減らしたかった。私のできる、ささやかな『彼』への裏切りだ。…これなら、君に協力する理由としては十分だろう」

「…：ガルバートさんは、本当にその人の事を大切に思っているんですね」

不思議とフィストの緊張は和らいでいた。目の前の男の持つ人間らしさを見つけたせいだろうか。

「以前よりは、信じられるようになった気がします」

「…：そうか」

二人の間に空いていた僅かな隙間も、いつの間にか姿を消していた。あれほどフィストの耳に刺さっていた時計の音も、今は棘がなくなっただだ無機質に部屋を漂っている。

「さて、私はそろそろ」

ガルバートが立ち上がると、フィストはその影にすっかり隠れてしまう。それに恐怖することはないにしても、どうしても圧迫感を感じる。

「…：あの、もう一つだけ、いいですか」

「…：ん？」

何事かといった顔で立ち止まった。彼の考える『話せること』は全て話し終わったらしく、答えられる自信がないようなしぐさをしている。

フィストも一度は聞くことを躊躇した。彼に聞いたところで知っているとも限らないのだから、ここで時間を取る必要性があるのか

は疑問だった。それでも聞くべきだと、彼は判断した。

「ユリスは：被験体の女の子は、人間なんですか？それとも、人ではない何か：？」

愚直な質問ではあった。その時ガルバートの見せた渋るような表情も仕方のないことだろう。そうと分かっている、フィストから溢れる疑問符は尽きない。

「あの子のことか：。私も、事実は分からない。ヴェクスが単独でどこからか連れてきていたから、それを知っているのはヴェクスだけだな」

「：：そうですか」

あからさまにフィストが落胆する。やはり知らないのかと、半ば分かっていたはずの事がひどくショックだった。それを見かねたのか、ガルバートが更に続きを発した。

「：だが、人として大切なのはその出生などではないだろう。その存在、その在りようが人かどうかを決めるのではないのか？」

「在りよう？」

「人の定義がその姿形だけなら、彼女は間違いなく人間だ。しかし、彼女が人としてあるべきものを持っているか、あるべきものをなくしていないか。彼女を人とするのなら、重要なのはそこにあるだろう」

「：……そうですね」

フィストの心情を氣遣ったのか、ガルバートはやや足早になって部屋を出ていった。

そこまで救われたわけでもない。おそらくユリスは、それにはすでに気づいていた上であれほど思い悩んでいたのだろう。

それでも、フィストが改めて気を引き締めるのには充分な助言だった。

「：お、これはいい感じだな。握りやすいし、重すぎず軽すぎず。前のナイフと似てるし」

テーブルの上にはディスプレイのようにナイフが並べられている。それらから一つを持ち上げたダルタが、刀身を見つめて嬉々とした様子で笑った。その横には、それを上回るほど喜んでいるファルが付いている。

新しいナイフを求めたダルタにファルが持ちだした選択肢――それが、今日の前に広がっている整然とした刃の鍵盤である。もつとも、ダルタにとってもそれは喜ばしい光景であるのだが。

「『Blue-Blood』かあ：このブランドは確かに：でも：」
「お高いですよ？それだけの価値はありますけど」

ファルが小悪魔のように笑いかける。無理に買わせようとしているのではなく、ただ単純にそのナイフの魅力を伝達しようとしているようだ。

Blue-Blood――ナイフは勿論、家庭用の包丁から戦闘向きの長剣まで、刃物全般を取り扱うブランド名だ。製品の強度や軽さなどが評価されている有名な大企業だが、その高品質故どれもべらぼうに高い。ダルタが握っているナイフもまた、鈍なまくらナイフを十数本ほど買えるだろう価格を誇っている。

ダルタが顎を撫でる。その仕草には上下する天秤の揺らぎがありありと浮かんでいて、ファルをより一層喜ばせている。：ガルバートがそこに来た時の二人は、おおよそそういった状況だった。

「：ファル」

声をかけると、夢を見ているかの如く虚ろ気だった金色の瞳が即座に彼の方を向く。

「：あら、ガルバート」

「楽しそうだな」

「ええ、すごく。ガルバートもどうかしら？」

「遠慮させてもらう」

皮肉のようなそれに全く動じない様子で笑う。そもそも、それを

皮肉とも受け取っていないのかもしれないが。

「明日は仕事で出かける。遅くなるだろうから夕食は用意しなくていい」

付き合いきれないと考えたのか、ガルバートは用件だけを伝え、ファルの返事を待たずに部屋を出て行ってしまった。

「ガルバートも見ていけばいいのに……」

「……ファルって、実は鈍感なのか？」

ダルタが苦笑する。ファルはよく分かっているらしく、腑に落ちない様子で首をかしげていた。

37話 アローン・ガール

薔薇というものはなかなかデリケートで、与える水や肥料の分量を僅かに間違えただけでも可憐な花を咲かせない。見栄えが良いからと言って半端な知識で育てようとすると、かえって見栄えが悪くなることすらある。その点でいえば、この屋敷の薔薇が鮮やかな色の花を咲かせていることは簡単なことではないのだろう。

ダルタが庭に出ると、ドルイズの薔薇の剪定をしている様子を目にすることができた。屋敷の主である二人はフィストの特訓に付き合っているので、今日はあまり仕事がないようだ。屋敷の掃除や買い出しといった日常的な雑務は既に済ませているらしい。

「流石だな。これだけの薔薇を管理するのは並大抵なことじゃないだろ」

ダルタが近づくと、その手を休めないままドルイズが会釈をした。彼の手によって昨日まで飛び出していた枝が切りそろえられ、見た目もだいぶ落ち着いている。

「おや、ダルタ様。私などまだまだ…」

「教えたのは俺だけだよ、数年でここまで作り上げて面倒もちゃんと見るってのは俺でもできる自信がない」

近くに咲いていた一輪の薔薇を見つめる。黄色い薔薇——ペルシャン・イエローのようだ。

昨今出回っている黄色系統の品種の原種とされている。つまりは品種改良がされておらず、人の手による耐性付与は一切ない筈なのだ。

温度の変化に敏感で夏・冬に弱い。特に耐寒性は他の薔薇に比べても無いので、この冬に咲き誇っているというのは普通では不可能だ。また病気にも弱く、黒点病にとってもかかりやすいので株の維持自体が高難易度とされている。植えてあるにしても、大抵は黒い斑

点を持つ葉が見え隠れしているものなのだが、この株に限ってはそれがない。

「…ドルイズ、才能あるな。というか、才能でどうにかなるものなのか？」

「ははは、まあその維持は確かに大変ですよ。おかげで私は病気になる暇ありません」

「そっか。それはなにより」

目の前の老執事に心配は必要ないことが分かり、もう一度庭一面の薔薇を見回して溜息をついた。彼がどれだけこの花々を慈しんで育てているかは、それを見れば充分伝わった。

「あらダルタさん、それにドルイズも」

その声に振り向くと、すぐに金色の瞳が目に入った。次いで雪色の髪、黒のジャンパースカートと続いて映る。

「ファル様。これからお出かけですか？」

「ええ、少し散歩に行こうかと思ひまして」

お互いに敬語を使っているとどちらが主人か分からなくなる。やはりファルの服装がややこしくしているのだろう。

「そうですか。それではお氣をつけて、いつてらっしゃいませ」

「ドルイズも、薔薇の手入れを頑張ってください」

一度頭を下げるとにこやかに歩いていった。蔓薔薇をからませたオベリスクが立ち並んでいて、その姿もすぐに見えなくなる。対象を失った視線は自然とその薔薇に行ってしまう。

「ファルは元気だなあ。なんかこう、金持ちっぽくないって言うか」「…まあ、お金以外はあまり恵まれない環境でしたので」

剪定バサミを動かしたままドルイズが呟く。それでダルタが思い出したのは、初めてファルと会った時のことだ。

知人から聞いた、武器を扱う商人の存在。それは富裕層が暮らしているフォルクコートに住んで取引をしているという、とにかく変わった印象しか受けない人物像だった。だが実際に会ってみると何

ということはない、物腰の低い若い女性が老執事を一人連れてダルタを迎えたのだ。

屋敷の前で立っている一人の女性。初めてそれを目にしたダルタには、彼女がひどく寂しそうに見えた。豪邸に執事一人だけを連れ、他の家族の姿もない。ちよつとやそつとのことではそのような事態にはならないだろう。

「ファルは、いつからここに暮らしてるんだ？」

口にする前から、ダルタにも若干の罪悪感があつた。――それは、やや言いにくそうにしたドルイズが一層助長した。

「：ずっとです。ファル様はこの家で生まれ、現在に至るまで住居を移したことはありません」

「：ドルイズもか」

「はい。ファル様のご両親の代からお仕えさせていただいています」
「ファルは：いつから一人になったんだ？」

ハサミが止まる。

あまりに分かりやすい反応だった。

「あ：いや、聞いちゃまずかったかな」

「：私の口から申して良いものかどうか：」

それでも話し出したのは、どのような考えによってなのか分からない。ただ、自らの主人を想う彼の強い意志の存在は確かなものだった。

「ファル様にご両親と死別されたのは、わずか五歳の時―――交通事故でした。倒れているお母様にすがって泣くファル様の姿を思い返すと、今でも胸が締め付けられる思いです」

何があつたのかは詳しく話そうとしない。他人の踏み入れない領域であることを悟り、ダルタもそこを聞きこむようなことはしなかった。

「それによってファル様は、家族で暮らしていたこの屋敷に独りき

りで暮らすようになりました。私も執事として付き添っておりましたが：執事は執事、ご両親の代わりになることはできません」

「ああ：子供には親が必要だしな。五歳っていったら甘え盛りだろう」

道で見かける、親と並んで歩く子供の姿。ファルには、それがすべて苦痛に映っているのだろうか。思いがけない過去にダルタは口が重くなる。

「多くの方がファル様を気遣い、そして励まして下さいました。特に近所に住む方々は私の及ばない部分までファル様の生活を援助して下さい、ファル様も皆さんに笑顔を振りまいて心配をかけないようにはしておりました。：しかし、どれほど多くの方がファル様と接しようと、誰もファル様の『家族』になることはできないのです。どれほど仲良くなろうと、『他人』であることに変わりはありません」

ある意味当たり前のようなことだが、それがひどく残酷な現実に聞こえてしまう。『家族』という存在がどれほど大きなものかが再確認された。

「十七歳になった頃：ファル様は、自ら生業となる道を見つけてお金を稼ぐようになりました。ご両親の遺産はありましたが、ファル様はそれに頼らず自力で生計を立てようとしていました。誰の力も借りず、一人努力を重ねていったのです。もちろん、それを褒めてくださるご両親はおりませんし、『他人』の褒詞は、ファル様は望んでおりません」

ドリイズの足元に剪定した枝が広がる。ファルが出かけた時と比べると、その量は二倍ほどに増えてしまっていた。

「頑張れば頑張るほどに親が恋しくなるのでしょうか、時折そのような仕草をお伺いすることもありました。そんなとき、私は何もして差し上げられなかったのです」

それは後悔の念なのだろうか、ハサミを持つドリイズの手が小刻みに震えた。

「ドルイズが悔やむことはねえだろ。出来ることはしてきたんだから」

「…ファル様がなにより欲していたものは『家族』だったのです。もっとも欲していることを、私はかなえられなかったのです。仕方がなかったとしても、それでは私は納得できませんからね」

パチンと音がして、かがんでいたドルイズが立ち上がった。ハサミをしまうと屋敷に向かって歩き出す。

「ガルバート様とご結婚なされた時は、私も本当に安心いたしました。ファル様に『家族』ができたことは、幼少のころから見てきた私にとって何より喜ばしいことですから」

僅かに笑って見せたドルイズの表情は、確かにその喜びがよく表れている。彼のファルに対する敬意が窺えた。

「ファルは…もう一人じゃないんだよな」

「私もそろそろ…お役御免といったところででしょうか」

ドルイズが髭を撫でる。その視線は、心なしか遙か遠くを見つめているようだ。

「おいおい、今のドルイズにはこの薔薇もあるだろ。それに、ファルはきつとドルイズの事必要にしていると思うぜ」

明るく言うと、ドルイズは足を止めてダルタと目を合わせた。

その老輩の心境がどのようなものなのか、一瞬見ただけの眼からは汲み取ることができなかった。

37話 アローン・ガール（後書き）

テストも無事(?) 終了しましたので、またちよくちよく更新していこうと思います。まあ、焦って内容を進めたりはせずのんびりと。

38話 光子の翼風

油断は隙を生む。そして危機を招く。だからこそ『油断大敵』と言う四字熟語が生まれたのだろうが、四六時中そこら中に気を配るのも殆ど不可能な話だ。日々の生活の中で、人間は少なからず油断している瞬間がある。なにより無防備になる、その瞬間が。

大半はその油断も災いすることなくやり過ごされる。統治された街中でそうそう危機に直面することは、まず無いと言ってもいいだろう。

ただ彼女の場合、そのタイミングがいささか悪すぎた。

一般人の姿はない。戦闘しながら移動している間に、殆ど人が入り込まないような裏路地にまで来てしまったようだ。ある意味でいえば、それは好都合とも言える条件なのだが。

「つりゃあ！」

ティリアのつま先がこめかみを挟む。脳に衝撃が走り、その勢いのまま石畳を荒々しく滑って行く。だがその勢いが止まると同時に、わざとらしくこめかみを擦りながらにやついて立ち上がった。余裕があることをアピールしているらしい。

「…はあ、ゴキブリみたいなやつらだなあ」

「ずいぶんと頑丈なんですね…」

呆れ果てたように二人が呟く。今しがたのような攻撃ももう幾度となく叩きこんでいて、常人ならば気絶どころか頭部が変形しているだろう。

「…大丈夫…？」

二人の後ろからユリスが不安そうにしている。

「なに、問題ないって。もう少ししたら終わるから、ユリスはそこから動いちゃ駄目だよ！」

蹴とばしたばかりの足をティリアがぶらつかせる。多少は疲労がたまってきたのかもしれないが、重心を戻すと再び前を睨みつけた。その向こうにいるのは――二足歩行をする狼の群れ。

度重なる二人の攻撃でいずれも流血しているが、戦闘不能になっているものは一体もない。どれも薄ら笑いを浮かべて余裕を見せてつけている。ティリアも張り合うように笑みをこぼしているが、息がすっかり荒れていて仮にも余裕があるとは言えない状態だ。

一体が駆け出す。合わせてリメールが前に出ると、両手のナイフを交差させて構えた。

距離が一瞬で詰められると、狼の手が振りかぶられる。光沢のある爪がその先端で輝く。

「うくうっ」

交差させたナイフでそれを受け流すと、続けざまにナイフを×字に振り下ろした。瞬時に後ろに下がられたため直撃はしなかったが、下がったその腹には赤い交差が確認できる。殆どただのかすり傷程度のもので、余裕の笑みは崩れていない。

他の狼はまとめてかかってくるようなことをせず、二人の抵抗する様を見て楽しんでるかのようだ。駆け出す一体以外は絶対に手を出そうとしない。一体で十分と考えているわけではなさそうだが、あえて人海戦術をとらないでいるのは間違いない。

それは、弄ばれているかのようだった。

「…私も、手伝う」

ユリスが、一歩前に出た。

「…ユリス、下がってなって」

「ユリスさんは無理をしない方がいいですよ」

口をそろえてユリスを押し戻そうとするが、ユリスは頑として聞き入れない。さらに一步を踏み出し、前方の狼たちと正面から向かい合った。

「ユリス……! ? まさかつ」

彼女がこれからしようとしていることを予期し、ティリアが慌ててその肩を掴む。振り払われることはなく、いくらか堅くなった横顔が向けられる。

「…もう、私怖くないの。私の力だから、使いこなさないと」

わざとらしく笑って見せ、再び前方へ向き直ってしまう。近くにいるな、と無言で言われ、威圧とも違う逆らい難い力に促されたティリアは、その手を降ろして数歩離れた。

突然前に出てきたことで、狼たちも何事かと様子をうかがっているようだ。それが子供だったからだろう、油断というよりは単なる見世物を見るような表情だ。

「————っ」

意識を集中させる。自分の奥底へ飛び込んでいくようなイメージが浮かんでくる。深部の暗闇の中でその扉を見つけるのに、それほど時間はかからなかった。

扉越しにでも感じる、強大な力。前に立つだけで圧倒されてしまいそうになる。

やはりまだ、どこかで恐怖を感じていた。その扉を開けた瞬間に自分を見失ってしまうのではないかという不安に駆られる。

全てを巻き込み、破壊活動にいそしむ自分の姿が想像される。悪寒を感じたユリスは、思わず足を止める。

(…フィスト…)

『大切な人』の顔が浮かぶ。同時に、彼から言われた一言が蘇る。そして続けざまに思い出されるのは、自分を迎えてくれている人たちの顔。そのどれもが、今のユリスに笑いかけていた。それがどういった意味を持つのかは確認するまでもなかった。一歩前に出る。そして、扉を思い切り押した。

それは以前にも経験のある感覚だった。

体中が火照るように熱くなる感覚。

感情的な何かが湧き上がってくる感覚。

血の巡りが異常に早くなる感覚。

寝起きのように、頭のぼんやりとする感覚。

深く考えることのできなくなるような感覚。

しかし、呪縛から解き放たれたような感覚。

無限の解放を具現化した感覚。

——しかし、一つだけ違う点が。

前は、力が氾濫して扉が押し破られるようだった。

今回はそうではなく、自らの意思を持って扉を開けようとしている。手には開くための鍵があった。

わずかな扉の隙間から力は押し流れてきている。体が反応し、次第にその流れの中に理性が飲み込まれていく。体中が温かな氣に包まれ、そして体に流れ込む。だがその氣には何とも言えない心地よさがあり、ユリスは抵抗することなく——それを受け入れた。

まるで、別人。

着ている服、身長、髪の色：何も変わっていないはずの彼女の変貌ぶりは、狼たちの余裕をひっくり返すのに充分すぎるほど唐突で急激だった。

体から溢れかえる強大な力。それが彼女を取り巻き、巻き上げられた埃がその流れに乗って円を作っている。彼女のいる路地はそんな形の風など吹き得ないほど狭い。埃の円陣がそこで巻き起こるなど普通ではありえない話だ。

しかし、なによりもその存在を疑うべきであるのは『それ』だろう。

ゆつくりとその姿を出現させた、実体のない輝き。彼女の背中から生えているそれは、ただ単純に今の彼女の力を表し、解放の瞬間を待ちわびているかのように小さく開閉を繰り返している。例えるとすればそれは、竜が呼吸しているかの如く。

余裕を見せつけるわざとらしい笑み。この状況でそれをする者がいたら、それは『愚者』と呼ぶべきだろう。

「……ユリス…」

目の前で起きたユリスの『覚醒』。実際に見るのは二人とも初めてだが、フィストから聞いていたよりも穏やかな印象がある。破壊の限りを尽くさんとする威圧が印象的だったと言っていたフィストだが、今回のユリスはそのような荒々しさは持ち合わせていない。

「………」

狼たちを見ていたユリスが、首だけを二人に向けた。

完全に感情の欠落したような顔をし、瞳に生気が感じられない。全てを吸い込みそうなその瞳が、何かを訴えようと二人を見つめている。

「……ユリス…」

「ユリスさん…」

「………」

返事をしないままその首が前を向いてしまう。喋ることも表情を変えられることも、今は思い通りにならないらしい。

それでも、二人は確信した。何も言わなくとも、表情を変えなくとも、間違いはなかった。

今のユリスは暴走しているわけではない。薄らぐ理性の中で、それでもその力を自力で制御しようとしているのだ。前回の覚醒とは確実に違う、そう言い切って全く問題はない。

タン、と地を蹴る。力を込めた様子はなく、スキップをしたのかと見える程度だ。

だがその直後、ユリスの姿は残像もなく消えた。

「……………」

ティリアが間の抜けた声を上げた。

突き出されたユリスの手。ほんの一瞬前にはそこに狼が一体いたのだが、その手と入れ替わったかのように音もなく姿を消してしまった。何があったのかだれも理解が追い付いていない。おそらくユリス自身も、よく分かっていないだろう。

「……………」

余韻を持たせる間もなく、逆の手を突きだす。そこに他の狼がいるわけではないが、その延長線上に複数の狼を捉えている。

その掌から細長い光の筋が走ったかと思うと、数体の狼を貫通していった。手から出たレーザー、と形容できるような光線が幾つもの風穴を作り出す。現実のものとは到底思えない、非科学的なものだ。

笑顔の消えた狼たちが布陣を整え始める。余裕はすでになく、集団でユリスに攻撃する魂胆のようだ。目を血走らせた狼たちに気づき、呆けていた二人がハツとして駆け出し、ユリスの横に並んだ。「あいつらが全員でくるって言うんなら、こっちだって総力戦だ。ユリス一人に任せたりしないよ」

「微力ながら、お手伝いします」

二人に多少思考の差はあるようだが、戦う意思を持って敵と対峙している。

「……………」

二人のことは見ず、にこりとも笑わない。だが二人の意思は伝わったようで、背中の輝きが二人をよける形で広がった。

塊と化した狼が突進を始める。脇の二人は身構え、ユリスはゆっくりと手を前に突き出した。

「このっ！」

ティリアの踵が後頭部を直撃する。それによって、最後の一体も戦闘不能となった。

「…全滅しましたか？」

ナイフをしまい、リメールが辺りを見回す。

散乱する獣。多少流血の後もあるが、何も知らない人が見れば多少乱闘があったとしか思わない程度にとどまっている。それはある意味で言って奇跡だろう。

ユリスが僅かでも理性を持っていたからでもあるだろうが、二人が協力して戦ったことで必要以上に暴れまわる必要がなかったことも一因に挙げられる。ティリアは額の汗をぬぐい、戦闘中に見たユリスを思い出していた。

フィストの言うとおり、普段のユリスはおろか普通の人間でもできるはずのない身体能力を彼女は発揮していた。だが、明らかに二人のことを意識し、二人の及ばない部分の敵を優先して相手にしていたような印象があった。ユリスが二人に干渉したのは、多数が一度に襲い掛かり押され気味だった時くらいだろう。

ふとユリスを見ると、ちょうどその輝きが収まっていくところだった。背中に入り込むように収縮していき、完全にその姿が消えると同時に瞳に生気が戻った。

「……………あ……？」

驚いたような表情をし、自分を見る二人と目を合わせる。

「ユリス！」

「ユリスさん！」

二人が駆け寄る。自らの意思で力を行使したためか、気絶するとはなかったようだ。

「…大丈夫？」

「…私……うん……何となく……覚えてる……」

ユリスが記憶の糸をたどると、以前よりはっきりと自分のことが

思い出された。暴走という印象はなく、力のもたらす高揚感の中ですべきことをこなした、それだけがユリスの印象に残っている。

ただ、以前のような感情的なものは全く無かった。高揚感の中といっても、多少冷静になれる部分もあったのだ。なので二人が協力した分は力の抑制もでき、極度の疲労を感じることもなかった。

「……二人とも、ありがとう……手伝ってくれて」

二人が自分と並んで敵と向かい合ってくれたことも、ユリスははつきりと覚えていた。嬉しいという感情を感じていたのだが、それを表現することが全くできずにいたのだ。

「い、いやあ気にしないでよ。ホントに助けになったのか微妙だったし」

「助けてもらってばかりだった気がします……」

「……そんなことない。私……すごく嬉しかったよ……」

ユリスが頬を赤らめると、二人は照れくさそうに笑った。

「……じゃ、そろそろ帰ろうか」

言うが早いか、ティリアが歩き出す。

「もう一人でどっか行っちゃ駄目だよ」

「……ごめん……」

ユリスが申し訳なさそうに呟いた。買い物途中に僅かながら気を緩めてしまい、一人で路地裏に入り込んでしまったことが思い出されていた。

39話 自身を変えるために

「あのね…いろいろ考えたんだけど」

ユリスが自分から話しかけていた。そこにいる全員の耳に届くような大きめの声だ。

「私：自分が何であつたとしても、もう逃げない。人とかそうじゃないとか、そんなことで迷わない」

リメールとティリアは彼女の意志をすぐさま理解して力強く頷く。アーミルもまた、彼女の言わんとしていることを汲み取って真剣な顔つきでその話に耳を傾けている。

「…でね、それで私：お願いがあるんだけど」

一瞬の間を置く。その空欄は、後の言葉をよりはっきりと強調した。

「逃げないっていう意味で…自分の正体が知りたい。だから、みんなに、手伝ってほしい」

「……」

「自分が何なのか…それを知って、それが何であつたとしても、私のこととして受け入れたいから…」

迷い。そんなものは、彼女からはとくに消え去っている。自身を恐れ、自身に怯えていたかつての姿はその様子からでは全く連想できない。

リメールが感動したらしく、喜びに満ちた表情で立ち上がった。

「すごいです、ユリスさん。自分が人でないと思った時って、それを知ろうと思える人はなかなかいませんよ」

「…フィストのおかげ」

「フィストの？」

そう聞き返したティリアに、言葉にはせず小さく頷いて肯定する。乗り気ではないのだろうが、その場の全員が詳しい説明を求めている。

ることに気づいたようで、とぎれとぎれに話し始めた。

「…この間、フィストと二人きりで話をしたの」

「あの襲われた日だな」

「…あの時は、本当に怖かった…自分が化け物なんじゃないかって、すごく不安だった。いつか自分を見失って、大好きな人達に手を出しちゃうかも、って…」

目覚めたユリスが泣いたところは全員が確認しているし、その後の心の中での苦悩もティリアは気づいていた。だが、彼女がそれを必死に隠そうとしていたのは、フィストと屋上に行った後に感じることはなかった。見込んだ通りだったな、とティリアは内心で安心していたのだ。

「フィストは…何があっても私は私だって言ってくれたの。ティリアとリメルにも似たようなこと言ってもらったけど…」

二人は名前を出され、ルフィーネの前での会話を思い出す。相談の内容の割にユリスがあまり思い詰めた様子ではなかったのは、フィストとの会話である程度の決心がついていたからのようだ。その上で二人に相談を持ちかけたのは、より多くの意見を聞いておきたかったからなのだろう。

「今日、はつきりした。みんなと一緒にいる私も、一人でいる私も、私の中にある力も、全部含めて『私』なんだ、って」

曇っていた空に光が射してきたように、ユリスの表情は一気に明るくなった。暗く沈んだ曇天は自ら払拭することに成功したようだ。「…もう、私が何であっても怖くない。本当の自分の姿、それを知りたい」

空間が一つになる。あらゆるものが同調し、一つの生き物のようにまとまる。

「協力するぞ」

「きっと見つかるよ」

「頑張りました」

三者三様の励ましに、ユリスは力強く頷いて答えた。

自分は人間でないかもしれない。不可解な実験で生み出された化け物かも知れない。

それがどうしたというのだろう。

彼らの絆の前に、そんな事実は何の問題にもならない。

「…何かあったのか？」

アーミルがリメールにそう切り出したのは、夜。ユリスが眠ったことを確認してからのことだった。起こさないように声をひそめている辺り、気を遣っているらしい。

「…ユリスさんのこと、ですよ」

勢いよく走っていたペンが、ぴたりと止まっていた。顔もあげず、リメールは目を合わせないようにしているようだ。

「あれだけの決意を持ったんだ、余程のことがあったんだろう？」
アーミルはすでに分かっている。買い物に行った時、ユリスに何があったのか——正確には、ユリスが何をしたのか、を。あえて聞かないでいたようだが、自分から話しに来なかったことに対して嫌悪のようなものを示している。

「…嘘、つけませんね」

聞き取れるかどうか怪しいほど小さな声だったが、アーミルは間をおかずに頷く。

「お前は嘘つけるような人間じゃないだろ」

「：それは：」

皮肉のようにも聞こえる言い回しだ。リメールはそれを純粹に褒賞として受け取りたかったようだ。今以外で聞いたのなら彼女は確実に喜んでいただろう。

「：今日も、襲われたんです。コートではなくて、二足歩行する狼みたいな姿でしたけど」

「ほお、そんなことが」

表向きには、アーミルは何があつたか知らないのだ。あえて棒読みでアーミルが驚いて見せる。

「情けない話ですけど、私もティリアさんも苦戦してました。数もありましたし、一体一体の実力も高かったんです」

「二人の怪我の具合を見ればそれはなんとなく分かるが：まあ、大事に至らなくて良かったよ」

「：見ていられなかったんでしょうか：ユリスさんが前に出てきて『手伝う』と言ったんです。それからしばらく黙って、意識を集中させて：それからすぐに、大きな翼が背中に生えてきました。光でできた半透明のものでしたけど」

翼。力の象徴。それを初めて目にしたりメールが今思い返して浮かんでくるのは、莊嚴で神々しいという印象を持つ光の結晶だ。その当時は溢れ返る力を肌で感じていたのだが、記憶の中のそれに威圧感を感じられない。

「今日のユリスさんは、自分で力を制御できてるみたいでしたよ。多分、フィストさんの言ったことが大きかったんだと思います」

ソファで眠っているユリスに視線をやると、警戒心を全くもっていないような安らかな様子で寝息を立てている。その笑顔の中には、自らの進歩に対する喜びも含まれているのだろうか。

「：きつとそれだけじゃないさ。ティリアとリメールの言ったことも、フィストと同じくらいユリスの支えになったはずだ。確かにフィストはユリスへの影響力が大きいだろうけど、ユリスを支えてる

のはティリアもリメールも一緒だろ？ユリスも分かってるはずだよ」
「……」

黙ったままりメールが席を立つ。書きかけていた書類もそのままに、その姿が寝室へと向かう。

「…リメール？」

足が止まる。

「…あの、アーミルさん」

「ん？」

「…私って本当に……」

「？」

「…いえ、やっぱりいいです」

「…そうか」

リメールは振り向こうとしない。見れない理由があるのか、アーミルには判断がつかない。

二人とも沈黙する。この状況でうまく方向転換できるほどの話術は、あいにく二人とも持ち合わせていないのだ。

「…先に失礼しますね」

「ああ、おやすみ」

寝室に入っていくリメールはややうつむいているようだ。結局一度もアーミルの方を見ることはなかった。

「…いつも悪いな、リメール」

ぼそりと呟いたため、それが聞こえたわけではない。

ユリスがそこに立つのも何度目だろうか。ただ今回が特別だったのは、ユリスの思うままに体が動き、声も出せることだ。

無限に広大な白の世界。自分が何の束縛も受けていないことを確

認すると、ユリスはゆつくりと歩きだしていた。

目的は一つ。あの女性と、会話することだ。

親近感の湧いてくる不思議な女性だった。いつもユリスの夢枕に立ち、声の出ないユリスに何かを伝えようとしている。何を言っているのか、何を伝えようとしているのか。それはユリスに届くことのないまま夢が終了する。

少し見まわしてみる。ハイライトもハイダークも存在しないその世界では空間認識があやふやになる。

その中に、いつも女性立っている。今日もまた、どこかに立っているのだ。

「……あ……」

それもまた、いつもと変わらない姿だった。

赤ん坊を抱いた女性。惜しみなく与えられる笑顔の抱擁に、ユリスも安堵を覚えた。

「……」

どう声をかけていいのかが分からず、女性の言葉を待つ。山のようであった言いたいことを思い出すことが出来ないのだ。そこだけが夢である欠点だとユリスは苦笑いする。

「ユリス」

「……」

女性がユリスの名を呼んでいた。しとやかで、それでいて芯のある声だ。返事をするにも忘れるほど、ユリスはその声に心を奪われていた。

自分の名前を呼んだだけなのだが、その声がユリスには神格化されて響いた。単なる人のものとは思えないほど濁りがなく、透き通っているのだ。

「ユリス：今、幸せ？」

「……」

またしても聞き入ってしまったが、その質問を頭で理解すると慌

てて返事を考える。

「…えっと…うん、幸せ…」

「どうして幸せなの？」

女性の抱く赤ん坊は眠っているのか、全く声を上げない。いちいち気がそがれながらも、すぐに返事を探す。

「…私の周りには、たくさん人がいるの。みんな、私のことを認めてくれる…それが、すごくうれしい」

「じゃあ…あなたは皆のこと好きなのね？」

自分のまわりの人たちを思い出す。そして頬を赤く染め、小さく頷く。声で返事をするのが躊躇われた。

女性も黙る。赤ん坊を抱えているので手は自由になっていないが、何かを考え込んでいるようだ。

「…フィストのことも？」

「…！」

ユリスにとってはあまり聞いてほしくない質問だ。だがこの女性に嘘を言うことも黙り込むことも、ユリス自身することを躊躇っていた。

「……フィストは、ちょっと違う。でも、フィストのこともすごく大切」

「…そう」

女性は隠すように微笑み、そして頷いた。

「フィストのこと、もっと分かってあげて」

「…え…？」

ますます訳が分からず思わず聞き返す。それに女性は答えず、その姿が白の中に薄らいでいく。霞んでいく中で、ユリスに向かって笑顔を見せていた。

「あ…待って…！あなた一体…」

その声が、虚しく白の中に吸い込まれていった。

またこんな理不尽な形で夢が終わるのかと、隠しもせずに溜息をつく。彼女と話をした以外はいつもと変わらない結果となったこと

が、ユリスには残念でならなかった。

ふいに耳に入ってきたのは、赤ん坊の泣き声。
聞き覚えのある泣き声。

おそらくはあの女性の抱えていた子供だろう。
その姿は、どこにも見えない。

挿入話 勤務先

いつも彼の訪れていたそこは、以前来たときとはまるで違う様子に変わっていた。ガルバートが最後に来たのはほんの一週間前だが、たったそれだけの間に起こった変化としてはあまりに異常だと形容せざるを得なかった。

何の所為なのか、言われるがまま作り続けていた被験体のガラス管が全て空になっているのだ。ガルバートは殆ど関与していなかったで、それらの存在が彼の研究にどれほど役に立っていたのかは知らない。だが、少なくとも何かの事故ですべてダメになったというわけではないらしい。

そう確信したのは、そこにいた旧友の存在を見つけたからだだった。

「ヴェクス」

「ああ、ガルバート。いつもご苦労」

「…お互いにな」

ヴェクスの顔は、ガルバートの記憶よりも遙かにやつれていた。

「…で、搜索の方は上手くいつているのか？」

「…あの被験体と少年のことか？」

「ああ。いい加減見つかってもいいころだろう」

ガルバートの脳裏に思い出されるのは、フィストの眼だった。目の前の友と彼の眼の光を天秤に掛ける。

「………」

「……いたのか？」

「……いや、まだだ」

「…そうか」

元がポーカークフェイスのため、ヴェクスもそれを疑おうとはしなかった。心の中で、ガルバートは申し訳なさそうに彼に頭を下げる。

「…それより、これはどういうことだ？」

あたりの変化が彼の仕業であることは確かなのだ。国直属のこの研究所を動かすことができるのは、最高責任者であるガルバートとヴェクスの二人しか存在しない。

「もう必要がなくなっただんだ」

「必要ない？」

そもそもあまり気の進んでいなかった『何か』がいらなくなったと言われても、それほど気にはならない。思わず聞き返していたが、本心から返事を求めているわけではない。

だがそれと同時に、ヴェクスの後ろ——正確には彼の脚の後ろ——から一つの視線がガルバートに向けられた。

男性の中でも高い身長であるガルバートを見つめるには、殆ど見上げる形になってしまう。ガルバートを見上げているその瞳は新緑の色をし、背中にそって伸びている髪の毛は紅葉の如く真っ赤だ。そしてその首には、雪の結晶をモチーフにした首飾りが下がっていた。

その子がこういった子なのかは、ここで分からないガルバートではない。

「…完成、したのか」

驚きのあまり、言葉がうまくまとまらない。

「あとは最終テストを済ませるだけだ。殆ど完成と言っている」

「この子が『テロ・ダクテイル』…例の実験の完成品…」

「この子は『翼竜』じゃない」

ヴェクスが制する。じゃあ何だと聞こうとしたのも手で止めた。

「もはやこの子は『テロ・ダクテイル』の枠には収まらない。更に進化したんだ。そうだな、この子のことは……『闘竜』…『ティアマト』と呼ぶことにしよう」

嬉々とした様子のヴェクス。啞然とするガルバート。その間に立っているその女の子だけが、全く表情に変化を見せずに何処か遠くを見つめていた。

40話 駆けつけた情報屋

何日経ったかなどとイチイチ数えている者はいない。始めのうちは寂しがっていたユリスも、フィストのいない生活に慣れてきたようだ。早く帰ってくることを切望する様子は相変わらずだが。

彼らが帰ってくるまであと二日。アーミルもまたファルの人格は知っているので、フィストがどのようになって帰ってくるか気にしていた。

何か見つけるものがあればよいのだが、ファルのようになってい
る可能性も否定できない。ユリスのためにも、それだけはあつてほ
しくないと祈るばかりだ。

「紅茶淹れましたよ」

山のような書類に目を通してしていると、空いていたスペースにカッ
プが置かれた。ユリスに頼まれて以来休みなく調べ物を続けている
アーミルに気を遣っているのだろう。

「ああ：ありがとう」

「あまり無茶はしないでくださいね？アーミルさんが倒れたら元も
子もないんですから」

「：そうだな」

返事をする、自身でも項垂れるほど声に疲労が感じられること
に気づいた。

リメールの言うとおり、この数日の無茶は相当なものだ。そもそ
も、国の最高機密に匹敵するほどの情報を集めようとすること自体
に危険が付き纏う。ティリアやリメールもいろいろ調べているらし
いのだが、簡単に集まるような物ではないのはアーミルがよく分か
っている。だからこそ、アーミルがしていることは無謀とも呼べる
ものののだ。

「そうだな：少し休もうかな」

大きく伸びをすると、全身が久々の活動に悲鳴を上げる。

「うぐ、痛たた：」

「あらら：湿布出しましょうか？」

「いや、それは大丈夫だけど」

腰を押さえながら立ち上がり、首を回す。鈍った筋肉が伸縮し、わずかながら疲労が抜けていく。それから置かれていたカップに手を出そうとしたのだが、唐突に開いた入口の扉の音に遮られた。

「アーミル、ちょっと失礼するよ」

相変わらずの薄着に、袈裟がけの鞆。彼が何者であるか確かめるのは、顔よりもそちらの方が早く済む。

「おう、アレム。どうした、おまえからここに来るなんて」

「仕事を頼んできたのはアーミルだろ」

ぶつぶつ言いながらアーミルの前まで近寄る。心なしか、鞆のふくらみが以前よりも増しているように見える。

「あ、じゃあ：アレムさんの分も紅茶用意しますね」

「あ：いや」

給湯室に急ごうとするリメールをアーミルが止めた。

「リメールは、ちょっとはずしてもらえるかな」

「：：？分かりました：：？」

すっきりしない様子で頷くと、あとは何も言わずに部屋を出ていった。

「別に聞かれても問題なさそうだけど」

リメールの姿が見えなくなっただけからアレムが呟く。

「この間頼んだ『情報』のことだろ？あれに関しては、他のみんなをあまり巻き込みたくないからな：」

その心情を察したのか、アレムも頷いてそれ以上追及はしなかった。

「じゃあ、聞かせてもらおうか。わざわざ直接伝えに来るほどの『訪ね人』のこと」

「：アーミル、実は分かってたんじゃない？この『情報』がそういうものだったこと」

「確証がなかった。それにどの道お前に頼むつもりだったんだよ。今丁度俺も訳あって調べ物してるんだが、それ以上に集めるのが困難なものだと思ったからな、今回のそれは」

「：そうだよ。調べてて俺も驚いた」

そう言って鞆をまさぐると、数枚の紙切れがそこに取り出された。

「：…すまなかったな、危ない橋をわたらせて」

渡された書類を一通り見終わり、アーミルが再びアテムに視線をやる。

「いや、もともとそういう仕事だしそれはいんだけど：」

アーミルが書類を読んでいる間暇だったのか、机に積まれていたアーミルの『調べ物』に目を通してしている。子供には理解しがたいような複雑な言葉が乱列しているが、アテムは仕事の関係で例外となるのだろう。

「これ：調べるの大変じゃない？」

「まあ、な。でも大事な仲間のためだ、投げ出すわけにもいかなないよ」

「俺が調べてこようか？『訪ね人』ほど難しくはなさそうだし」

軽はずみな一言だったが、アーミルは言葉を詰まらせた。

「これは：うーん：いや、やめておこう」

「え？でもこれ、素人が調べるのは難しいと思うんだけど」

「：お前はまだ若い。これにはまだ手を出すべきじゃない」

アーミルがなにを考えてそう言ったのかアテムには分からない。ただそれは決して浅はかな判断ではないことだけがはっきりしている。

自分のことを思ってそう言っているのが分かると、異論を唱える

こともなくなつた。

「…ま、頑張つてな。なんか相談があればのるよ」

「ああ…」

情報料を取り出し、アレムの手握らせる。かなり無理があつたらしいのでその金額は普段よりも多くなつていた。アレムはそれに関して特に喜びもせず、ただアーミルの事を心配していた。

「……あのさ…」

手に金を握つたままアレムが立ち尽くしている。何かをアーミルに言おうとしているようだが、かなり迷っているようだ。

「ん？まだ何かあるのか？」

「…これは…話しておこうか迷つただけど…」

「……そうか」

彼の持ってきた別の『情報』。聞き終わったアーミルは、横の力ツプに口をつけた。

「いや…ひよつとしたら関係ないかもしれないけど…知った時は怖かった…入っちゃいけない領域に踏み込んだような気がして…」

「それで俺に話しておきたくなつた、そういうことか」

アレムは何も言わない。おそらくは本人も自覚していなかった程の凶星なのだろう。

「…ごめん…なんか俺…」

「気にするなよ。それで少しでも気が楽になつたんならそれで充分だ。ほら、追加の金」

一度しまった財布を再び取り出して口を開く。だが、それをアレムの方から止めた。

「いいよ、金なんて！俺が勝手に教えただけだし、アーミルには関係ないことだしさ」

落ち込んでいるように見えるのは、自分の知ったことの大きさを

痛感しているからだろう。アレムがまだフィストほどの歳の少年だということ、アーミルは改めて思い返していた。

「アレム：情報屋という仕事は、いつも自分の持つ情報に翻弄されるものだ」

「：アーミル？」

「一流の情報屋ってのは、そんな攪乱に負けずにそいつらを操らなきゃならない。アレムは、そんな情報屋になるんだろ？」

その小さな頭を撫でる。いつもの彼なら恥ずかしがって嫌がっただろうが、今はただされるがままになってそれを受け入れている。

「：ホントにありがとう」

「ああ、頑張れよ。金持って行け」

改めて数枚の硬貨を取り出すと、アレムはまだ申し訳ないような様子でそれを受け取った。

「アーミル：俺、頑張るよ。また次もよろしくな」

事務所を出る時に、そんなことを言い残していった。

「あとう、アーミルさん…」

隣の部屋からリメールが顔をのぞかせていた。アレムが帰った後も暫く声をかけなかったので、そろそろ気になってきていたのだろう。

ただ、その行動は控えるべきだったのかもしれない。

「：リメールか……」

困憊しきった顔をしている。単なる疲労ではなく、何かに押し悩んでいることも加わっているようだ。

「大丈夫ですか？ 顔、真っ青ですよ？」

「：ああ、大丈夫だ」

明らかな嘘だ。体調を誤魔化すかのように近くの書類を手にとっているが、それに目を通してゐるわけではない。そんな余裕はないと口で言わずとも、持っていた手がすぐに机に落ちたことではつき

りとリメールに伝わった。

「何があったんですか？」

「何があったと思う？」

リメールは渋い顔をしたが、アーミルがアレムから聞いたことは全く分からないので言葉にはしない。

すると、アーミルが急に辺りを気にし始めた。

「あー：ティリアとユリスは？」

二人がこの部屋にいないことを気にしているらしい。もしくは、いないことを再確認しているとも考えられる。

「ユリスさんはまだ寝てます。ティリアさんは：ちょっと市場まで、ただけ聞いてますよ」

「そうか」

何に納得したのか、やや安心したような笑みも浮かべつつ溜息をついた。一人で話を進めているので、リメールには何が納得できるのかまるで分からない。

「アーミルさん、本当に何があったんですか？茶化さないで教えてください」

「……まあ、他に誰もいないならいいか……」

ぼそりとそんなことを言ったものだから、逆にリメールの方が後込みしてしまった。

「な：なんでしょう」

「まあ座りな。少し落ち着いておいたほうがいい」

自分も落ち着こうとしたのか、横のカップを手取る。湯気も全く立っていないのもう冷めきってしまったのだろう。新しい紅茶を、と言いかけたリメールは、諭すようなアーミルの笑顔に求められるまま自分の席に着いてしまった。

「……」

もうリメールからは何も言えない。言えるような雰囲気ではないのだ。

「大事な話だ。本当に冷静に聞いてほしい」

カップを置き、手を机の上で組んでいる。思い悩んでいるときのアーミルの癖だ。

「…ついさっきアレムから聞いた話だ」
その口が、重々しく開いた。

41話 散歩

初日は終了とともに床に座り込んでいたフィストも、銃を使う様がだいぶ板についてきていた。課題とされていた瞬時の判断力も、ファルの予想を上回る上達速度を見せていた。

飛来する弾をかわす。そして瞬時に構え、放つ。かつてはかすっていた程度の弾がそのコートの中心を直撃する。おお、とファルが歓声を上げた。

「……ふう」

終了の合図を確認すると、陰鬱な溜息がフィストから漏れた。多少息が荒くなっているが、さして何事もないように立ち尽くしている。

「……どうしましたか？」

溜息の正体が気になったのか、歩み寄ったファルはまずそう聞いた。

「……僕、強くなってますよね。実感できてるので間違いはないと思うんですけど」

「そうですね。ここまで上達するとは、正直なところ私も予想していませんでしたわ。でも、それに何か問題が？」

フィストはまさしく『力』を求めてここに来ているのだ。その願いがかないつつあるというのに、何故それほど悲しそうにしているのかファルには理解できなかった。

「強くなったことは確かに嬉しいです。……けど、今の僕が抱えている問題が解決出来たら、この『力』はもう必要なくなるんじゃないでしょうか。むしろ、どこかで僕の足を引っ張ってしまいそうない……」

はつきり述べられていないのは本人の意志が宙吊りになっているということだ。どうすればいいのか、何よりもそこで迷っているだろう。

「……」

ファルが考え込むと、フィストはもう一度溜息をついた。その懊
悩がどう転ぶのか、不安でならないのだろう。

「フィストさん」

フィストの顔が上がる。

「…少し、外を歩きませんか？お昼までまだ時間もありますし」

「…分かりました」

やはりファルには敵わないのだろうなと、頼もしく笑いかける彼
女を見てフィストも笑った。

「一つだけ、教えてください」

歩きながら口を開いたのはファルだ。

「あなたは、どうして強くなりたいと思ったのですか？」

「…あまり詳しくは話せんけど」

どこまで話すべきか。ファルに迷惑がかからない程度に説明でき
るよう言葉を分別していく。夫が関わっている研究も一枚かんでい
ると知ると、ファルがどのような心境になるのか予想がつかないの
だ。

「僕は…力がなかったせいで、今まで大切な人を守ることができま
せんでした。もうあんな悔しさは味わいたくないんです。人を守れ
る強さが欲しい…それだけです」

「……」

バステイルが死んだこと、ルフィーネが死んだこと、ユリスの
こと。フィストはその詳しい部分をすべて伏せた。ファルはそれ以
上詮索するような無粋な真似はせず、神妙な面持ちでゆっくり頷い
た。

「フィストさんは、名誉のためお金のために銃を持つ人たちとは根
本的に違うものを持っていच्छるようですね。あなたのような

方に使ってもらえるのならその銃も本望でしょう」

フィストの持っていた黒い銃が、上着の間から鈍く光ってそれに答えた。

「本望……？そう、なんででしょうか……」

懐の銃のしまっている辺りをさわってみる。多少歪な形が上着越しに手の感触として伝わる。

フィストもそれが聖杯のような神々しさを持っていると考えることはない。フィストにとってそれは死神の鎌であり、血の滴る妖剣であり、禍々しい戒めにもなる枷であることに変わりはないのだ。

「フィストさんにはあまり縁の無い話かもしれませんが。でも、聞いておいてください」

ファルの眼には、その枷がどのように映っているのか。もしかしたら聖杯のように見えているのかもしれないが、フィストが分かるはずもない。

「私：よく思うんですけど、この子たちは、本当は人の命を奪いたくないのではないのでしょうか。銃として生まれておいて変な話かもしれないですけど」

ふと、視線が懐に落ちる。服の間から僅かにちらつく黒光りが、それを懸命に主張していた。

「たとえ綺麗に着飾ったとしても、この子たちが人殺しの道具であることには変わりありません。大切なのは、使う側の私たちがどのような思いで、どのように使うかなのです」

「僕がどう考えて、どう使うか……」

オウム返しに呟く。そうすることで、頭に言葉が染み込んでいく。「あなたが大事な人を守りたいと願うそのために使うのであれば、きつと答えてくれますわ」

「……そうでしょうか……」

ファルが自身をつけさせるように笑いかけていたのだが、フィストはそれに応えようとせず俯いてしまった。

道の脇に小川が流れている。その前で二人は足を止め、その川面に視線を落とした。

川底までよく透き通って見えるほど澄み切った水が日光を反射し、白色じみたうねりが茶色の枯葉を運んでいく。鳥がさえざっているかのような僅かな水流の呟きに、同調しようもしないフィストの溜息が混ざり込んでいった。

二つの視線がうねりを見送る。

「僕の恩人は…」

フィストから語りだしていた。

「僕を助けてくれた人は、僕を庇って銃殺されたんです。それも使った人の問題だと分かっているんですが…それでも、僕はどうしても銃のことを認められないんです。認めてしまったら、一緒にその人の死を認めてしまうような気がして…」

「……そうですか」

お互いの顔を見ようとしないう。どちらともなく、流れる水に視線が逃げてしまっている。

少し足を動かす。足に蓄積した疲労感がなんとなくそうさせたのだが、鉛が吊り下がっているのではないかと疑うほど重く、すぐに足を慣らすことを諦めた。

「この銃もその人からもらったんです。相手が人でなかったにしろ、これを使って生物を殺したこともあります。身を守るためとはいえ、僕はそれがどうにも辛くて…」

ぴしゃり、と水がはねた。

岸の石に引っかかっている黄色い花びらがフィストの目にとまった。流れに乗ろうとするがうまくいかず、いつまでもそこで立ち往生している。横を流れていく枯葉たちとどちらが喜ぶべきことなのか、予測の立てようもない。

「……すいません、こんな話を聞いてもらって」

「いえ、そんなこと」

それが表面上だけの返事であるのは、はっきりと出てしまったファルの表情が何より良く語っていた。

返答しやすいようにと、フィストは視線を川から外してファルの顔を見ようとした。だが、彼女の輪郭が視界の端に映った途端にその勇気がしぼんでいってしまった。自身を情けなく思いながら、視線をゆっくり戻していく。

「フィストさん」

なので、ファルから声をかけてきたことは何ともなくフィストを安心させた。

だが、フィストのしている世界は動かない。僅かでも動かそうものなら自身が音をたてて崩れてしまふ、そんな気がしてならなかったのだ。

「力というものは、二つの種類があるのです」

「二つの…？」

映っていた世界が動き、対岸の森の緑が現れる。

「一つは奪う力。そしてもう一つは、守る力です」

「……」

ファルの姿が映った。やはりその笑顔は、見ている人を安心させるものだ。

「どちらの方が大切なものなのか、フィストさんは分かりますよね？」

「…はい」

ようやくフィストにも、笑顔を返す余裕が生まれる。

「殆どの人は、それに気づくことはありません。私が見てきた人中でそれに気づくことができたのは、あなたとダルタさんだけですわ。大切な分、それに気づくことができる人は少ないのです」

「……」

呆気にとられている、と表現すべきだろう。何に驚いているのか、フィスト自身分かっていない。

「守る力は、必ず奪う力に勝ります。その気持ちを忘れないでくだ

さい」

暫く沈黙する。頭の中でそのまま復唱し、そしてファルに正面から顔を向ける。

「……はい」

力強く答え、負けないほどの強さを持った眼でファルを見つめた。
「ふふふ…そろそろ帰りましょうか」

早足で歩きだしたファルは、いつになく嬉しそうな表情をしていた。大切な物や珍しいものを見つけた時のような、子供じみた笑顔だ。それもファルがするところか清楚で可憐な煌めきを感じさせる。
「もうお昼ですし、ダルタさんが待ちくたびれて拗ねているかもしれないですね。急ぎましょう」

「あ、はい」

早足から駆け足になり、輝きのある雪色が川のように流れる。案外その速度は速く、すぐにはつとしたフィストも走り出す態勢に入る。

「………」

追いかけようとしたフィストはふと足を止め、もう一度だけ河原に視線を落とした。

白いうねりが増している川面の隅に、忘れかけていた形の石が映る。

まごついていたように見えた黄色い花びらは、いつの間にかその姿を消してしまっていた。

「フィストさん、どうかしましたか？」

遠くからファルが呼んでいる。笑顔ではいるが、あまり待たせるとあとあとが恐ろしそうだ。僅かな未練も感じずに視線を前にやる。
「すみません、すぐ行きます！」

駆けだした時の足は、先刻のことが嘘のように軽く感じられた。

42話 雪の首飾り

壁に掛けてある日めくりカレンダーを見ると、もうクリスマスが近いことを数字から実感できる。未だ何も準備をしていないのだが、彼らは今それどころではない程忙しい。あとはフィストとダルタの帰りを待つだけだとアーミルは分かっているのだが、はつきりしない現状のせいでアーミル自体の限界が近くなってきた。

ユリスの正体。それを調べる過程で、あまりにも『余計でない』余計なことが分かりすぎてしまったのだ。仲間内だとしても、まさか大声で教えて回るのも良い判断とは言えない。それこそ、まずはフィストだけに伝えるべきだとアーミルは考えている。

「……」

「……」

おそろおそろといった様子でカレンダーがめくられる。その日付は翌日のものだ。

「……」

「……」

もう一日めくられる。日付は更に翌日…彼らの帰ってくる日だ。そこで彼女の手が止まっている。

これほど分かりやすい行動というのも珍しいだろう。

「……」

「……あのさ、ユリス」

急に声をかけられたからか、手が離れてカレンダーが今日に帰ってくる。

「そんなことをしても時間は進まないぞ」

「……うん」

分かっているても我慢できないのか、カレンダーの前から張り付き

たように動かない。他にやることもないらしく、ただ虚ろ気に進まない日付を見つめていた。

「…あのさあ、ユリス」

「…?」

気が気でないのか、返事すら来ない。耳の注意だけがアーミルに向き、意識はカレンダーに釘付けた。

「ユリス、今ヒマ?…だよな、その様子じゃ」

誰がそうさせているんだ、と言うような視線がアーミルに向けられる。憎々しげなものではないが、それを向けられてもあまりいい気分にはならない。

「じゃあ…仕方ない、ちょっと外を歩こうか。あんまり引き籠ってても体に悪いからな」

「え…」

顔だけしか向けられていなかったが、今の一言で全身がアーミルに向かい合った。それほど意外だったのだろう、それによりようやくアーミルの位置からも日付が確認できるようになった。

「まあ、身の安全から言えばあまり良いとも言えないんだけど。明後日までそうされ続けるのも困るし、遠くまで行かなければ何とかなるだろう」

そう言って席を立つ。そしてリメールを呼ぶためだろう、寝室に向かっていった。

「……」

刺さるようなユリスの視線がアーミルの背中に向けられる。アーミルもその理由を分かっているので、申し訳なさそうな表情をして頭を伏せた。苦笑いしか見せていないリメールは気づいていたのか

もしれない。

大量の塩、胡椒、砂糖。アーミル、リメール、ユリスがそれぞれの詰まった鞆を手に持って歩いている。市場に入った時のアーミルの一言は『もうあんまり残ってなかったんだ』だ。

この行動は一般では『買い出し』という名称を持っているのだろう。とすれば、さしずめあとの二人は『荷物持ち』だろうか。

手に持っている鞆の中を歩きながら覗き込んだ。店員が華奢なユリスを心配して瓶から入れ替えてくれた紙袋：その中には大量の砂糖が入っている。鞆の容量限界まで入れているので、紙か瓶かの差はもはや助けとなっていない。歩行速度が遅くならないようにしているが、両手で持たなければ支えきれない。その両手も痺れを訴えてきて、事務所まで持ちこたえてはくれなさそうだ。

「：ちよつと休ませて」

前方のアーミルにそう言うと、返事を待たずに鞆を壁に寄りかけて下に置いた。

鈍く重い音がして重量が大地に移る。それにより自身への負荷がなくなると、ユリスはふうと溜息が出た。つかの間の休息に、疲労感も手伝って視線が遠くにいく。

「大丈夫ですか？」

リメールが気遣ってきたが、そのリメールも大量の胡椒の入った鞆を下に置いてその場に座り込んでしまっている。人の心配をするべき状態ではないだろう。

「：リメールも、少し休もう」

アーミルも二人の元に戻ってきて、ばつの悪そうな苦笑いをしながら自身の荷物も下に置いた。ユリスはその場でふっと空を仰ぎ、やや雲のある空の青を虚ろ気に見つめた。音はなく、通りを静寂が包む。

近くに人の姿はない。この通りにいる人間は、今はどうやら三人だけのようだ。遠くから騒がしい声が聞こえてくるが、それはこの通りとはまるで別の世界ともとれるほどごく微量のものだった。

静かに目を閉じた。より鮮明で、より遠くまで、世界の細かな様子が聴覚からユリスに流れ込んでくる。

子供の笑い声は二、三人分重なり、ふざけ合いながら遠くへと走り去っていく。石畳の上を遊びながら駆け抜ける様子が浮かび上がる。少し羨ましいと思いつつも、今が『買い出し』の途中になっ

てしまっていることは忘れていない。

鳥が飛び立った。子供に驚いたのか、車でも走ってきたのか。一羽ではわずかな羽音も、五、六羽一斉に羽ばたけば案外大きな音を出す。鳩なのか、カラスなのか。そのせわしなさはスズメかもしれない。そこに興味がわき、更に耳に神経を集中させ始めた。

「…わっ」

下半身が後ろから押され、思わずよろめいてしまった。急に心がこの世界に引っぱり戻されたような感覚と同時に、あらゆる音が耳からさあっと引いていってしまった。

何事かと振り向く。そしてすぐに、自分よりも更に背の低い一人の女の子を見つけた。ユリスのすぐ前で、じっと彼女を見つめている。

それは、紅葉と見違えるほどの鮮やかな紅色だった。一片の曇りもない輝きを誇り、肩甲骨のあたりまで真っ直ぐに伸ばされている。瞳は新緑の色をして、その輝きの中で存在感を際立たせていた。

可愛らしい、と一言で片づけるには勿体ないほど、その顔立ちには愛らしいものだ。しかし、着ている服だけは真っ白いシャツ——以前のユリスと同じようなシンプルなシャツ——というあまりに簡素なもので済まされている。

そしてその子は、決して表情に変化を見せなかった。ぶつかったことに対して謝ろうとしているのか、ユリスを一直線に見つめて立ち尽くしているのだが、その表情には感情というものが全く含まれていない。

ただ見ている。それだけなのだ。

「…あの」

声はかけてみたが、何を言うべきなのか思いつかない。何を考え
ていて、どうしてほしいのかが全く伝わってこない。

「えっと…」

困惑した声が漏れる。今は相手の反応を待っていることになるの
だが、女の子が反応しようとしているのかも表情からは汲み取れな
かった。

「……」

「ごめん」

それは棒読みで、あまりにも小さな声だった。そして聞き返す間
もなく、女の子はユリスの横を走り抜けて行ってしまった。

「…無口な子だなあ…あれ？」

カツン、といって何かが石畳の上を滑った。足がぶつかったのだ
と気づき、慌てて拾い上げる。

それは、雪の結晶を模った首飾りだった。紐が丁度半分程の所で
切れてしまっていた。

さっきはこんなものは落ちていなかったはずだ。この通りは相変
わらず他の人間が行き来した様子はない。ならば、その首飾りは必
然的にあの女の子のものということになる。

見ると、女の子はまだ視界の及ぶ範囲にいる。すぐに渡してあげ
なければと、ユリスは首飾りをしっかり掴んでその背中を追い始め
た。

「二人とも、ごめん。ちよっと待ってて」

「ん、落し物？あんまり遠くに行くなよ」

その返答が得られると、すぐに全力で女の子に向かって走り始め
た。だが、今まさに角を曲がった女の子はもう視界の外へ出てしま
いそうだ。

二人の視界の外に出ることは避けるべき。以前の狼のこともあり、
ユリスもそれはよく分かっている。

「待って！」

そう叫ぶと、女の子の足が止まった。何事かと問うようにユリスの方を向いたその表情は、先ほどと全く変わらない限りのない『無表情』だ。

女の子にようやく追いつく。僅かな距離だが、それでもユリスは若干息が切れていた。女の子はそんなユリスをなんでもなさそうに見つめている。

「これ：あなたの？」

首飾りを差し出した。女の子の視線がそちらに移る。

女の子は動かない。じっと首飾りを見つめたまま固まっている。

「：あれ：？違った：？」

不安になってそう聞くと、女の子はひたたくるようにその首飾りを取り、首の後ろで紐を結び始めた。首飾りのはずだが女の子には少し大きいらしく、その飾りが胸から腹の辺りまで下がっている。

「ありがとう」

それもまたずいぶん小さく、感情もまるでこもっていないように感じた。だが女の子は更に言葉を続ける。

「あなたいい人。名前知りたい。教えて」

淡々とそれは述べられた。意外な質問だったが、ユリスも女の子の名前を聞きたいと思っていたので拒絶はしなかった。

「私はユリス。あなたは？」

言いながらユリスは以前にも似たようなことを人に聞いた事を思い出し、その子がその人と同じ雰囲気を持っていることにも同時に気づいた。

「リュナ」

「：リュナ。良い名前だね」

「……」

「じゃあ、もう落とさないようにね」

声は出さず、こっくりと頷いた。

「：リュナ、また会えるといいね」

時間をおき、ゆっくり頷く。

「…さよなら」

そう言っただけ背中を向けるまで、リュナの表情は結局変化が見られなかった。それ以降はユリスの方へ振り返りもせず、通りの果てまで走っていった。

そして、角を曲がって見えなくなった。

独りになり、ユリスはその会話を頭で再生する。そして自分の発言が彼女と重なっていたことに気づいた。

「…そうだ、ルフィーネも…また会おうって言ってくれたんだっけ…」

あの笑顔が浮かんでくる。空を仰ぐと、その笑顔は青色の中に吸い込まれて消えた。

得体のしれない寂寥感。もう泣かないと誓ったのに、またしても涙があふれ出そうになった。

ユリスを現実に戻したのは、手提げ鞆の倒れる音と慌てた様子のリメールだった。

「あー！アーミルさんどうしましょう！中身がこぼれて…！」

ユリスよりも泣きそうな顔をし、アーミルが苦笑しながらそれを見ている。助けようとしてもしているのだが、アーミルの鞆も倒れかけていてうまく離れられないようだ。

「…そっか、買い出しの途中だった」

涙を押し込み、ユリスは四苦八苦しているリメールへと駆け寄った。

43話 親を奪う夢

それは、いつも耳を引き裂くような奇音から始まる。私の頭の中で、それはよほど衝撃的だったのだろう。

私は確かに幼かったが、迫る危機の存在は分かっていた。それを行動に結びつけることもできたのだろう……おそらく。

けれど私は何もできなかった。何が起こっているのか考える前に私は強く突き飛ばされていた。ほっそりとした白い腕と、太くはないが筋肉のある腕。二本の腕が私をそこから押し出していた。

鮮明に記憶に残っているのは、その直後からだ。

ドン、という音。

頬にかかる飛沫。

甲高いスリップの音。

「……っう……！」

私の目の前に現れたのは、さっきまで渡っていた白のラインの汚れ。横転した軽自動車。道路に斑に広がる赤い水たまり。……いくら私でも、それがいかに異常な光景であるかよく分かる。

辺りが騒がしくなる。けど、そんなものは気にならない。何処かにいるはずの、二本の腕。それだけではどうしても捜しておきたかった。

こんな状態で生きている訳が無いことは分かっている。それでも捜すことを止められない。その無事な姿を見たい、そう願って辺りを見回す。

「……お母さん……？」

歩道のあたりから真っ青な顔の通行人がこちらを見ている。そこから道路に視線をおとして白いワンピースを捜す。だが母親の姿はない。

「……お父さん……！」

軽自動車から一人の男が這い出てくる。私は歩いていたので、そこに他の車は無い。その自動車が横転しているのは避けようとして失敗したからなのだろう。青いレザーの上着を捜すが、父親の姿はない。

「ファル様、危険です！」

歩道からドルイスが駆け寄ってくるが、無視して辺りを探し回る。広がっている赤い汚れが収束する方向へ、足ががくがくしていて駆けることができず、ふらついたまま歩いて行く。

目に映った瞬間、私は何も考えられなくなった。

身につけていた純白のワンピースは、どうしてだろう、赤色に変わってしまったていた。

「あ……お母さん！」

転びそうになっても構わず駆け寄り、揺さぶる。大きな声で何度も呼び続ける。

目が僅かに開いた。私の顔を見た後、複雑な体から震える腕を持ち上げる。

「……ファル……」

その手が私の頬を撫でた。流れていた涙も拭い取ってくれた。いつもと同じ笑顔を見せてくれたので、私もぎこちなく笑みをつくった。

大丈夫なのか、と一瞬だけ思った。

「……………」

口が動き、何かを言おうとする。すぐ近くにいるのに聞き取るこ

とができない。

「…え…何…？」

返事はなく、母はもう一度にっこりと笑った。

そして、頬の感触が急に冷たくなったかと思うと――

ことん、と道路に落ちた。

自動車の運転手を恨んではない。私を独りにした父や母を恨んだりはいしない。

これはきつと、私が悪かったのだと思う。私は父や母に、父母の財産に頼って生き、独りで何もしようとしなかった。だから罰として、神様が二人を連れていったのだ。

もう誰にも、何にも頼らない。私は私の力で生きていく。

どうしても頼らなければならなかった時はとても悔しかった。

私は出来る限りのことをしたつもりだ。もう私は自分の力でお金を稼ぎ、それで毎日の食事を取っている。あれほどこいやった遺産への依存ももう無い。

だから、もう、充分でしょう？ 私は自分の罪をしっかりと受け止めたし、罰も受けた。もう罪を繰り返さないで済むようにもなった。父を、母を、返して。もう大丈夫、私は独りでも生きていける。二人に頼る必要はもう無い筈。だから少し、ほんの少しでいい、二人に会いたい。二人に思い切り甘えたい。

もう嫌、独りは嫌、怖い…独りは…独りは――――

「――っ！」

裏返ったような自身の声でファルは目を覚ました。反射的に体は起き上がっている。息が荒れていて疲労感があり、体中に冷たい湿

感が迸る。見ると、両腕が細かく震えていた。

どうやら本を読んでいるうちに眠ってしまったらしい。ゆっくりと揺れるロッキングチェアに座り、膝の上に開いた本を置いたままの姿勢になっている。外は地上との接触面からやや茜色を持ち始めていた。

またあの夢、と溜息が出る。体中の通常ではそうそうあり得ないような事態も、目が覚めてしまえばいつもの事だとあっさり納得がいく。

事故の日の断片的な記憶から構成される、過去の再生。何の前触れもなく夢枕に立ち、ファルにその時の事を嫌でも思い出させる。自分では納得がいつているつもりでも、どこかで釈然としない引っかかりがあるらしい。

ファルはもうすぐ、母の歳と並ぶ。

——今の自分を見た時に母は何と言うのか。喜ぶのか、悲しむのか、それも全く分からない。生きていればもう五十前後になっているだろうが、あの時のような笑顔で見守ってくれているだろうか。結局は何も変わっていない自分に気づき、また溜息をつく。もう独りではない筈なのに、いつも孤独感に苛まれる。傍らには伴侶：いや、『家族』であるガルバートもいるというのに、何故だか心に空いた隙間を埋めることが出来ない。彼を『家族』として見られていない自身が、いちばん憎い。

ダルタとフィストは、もうじきファルの家を発つ。暗い森の道は危険だとファルは忠告したのだが、夜までには森を抜けるつもりだとダルタがあっさりはねのけた。強がりではないと判断したファルはそれ以上引き留めることはしなかった。

ダルタ。そしてフィスト。

彼らもまた、ファルにとって『家族』に似た立場となっていた。たとえば本当の家族でなく、ファルが無意識のうちに距離を置いてし

まっけていても、彼らは何の嘘もない笑顔でファルと接しようとしてくれるのだ。ファルはそれに対し、作ったような笑顔しか返すことができないのだが。

彼らはファルに対して『家族』のように振る舞おうとしてくれる。それを受け止められずに独りで勝手に苦しんでいる自身が、ファルには何より許せなかった。

「じゃあ、本当に世話になったな」

ダルタ、フィスト。ファル、ガルバート、ドルイズが並んでそれと向かい合っている。まだ外は明るいが、ここから暗くなるのはあつという間だ。もたもたしていると森を抜ける前に夜になってしまふ。ファルが心配な様子だったのでダルタも早めに出発することにした。

「本当にたいしたこともできませんで」

「いえいえ、大助かりですよ。な、フィスト」

今回最も世話になっただろう少年が分かりやすく照れた。ダルタが背中を叩くと多少よろめき、それから苦笑いをにじませた。

これが『家族』か、とファルが羨望の眼差しを向けた。それもほんの瞬だけで、すぐに人当たりの良い笑顔を取り戻す。

「ファルさん、ガルバートさん、ドルイズさん。お世話になりました」

フィストが頭を下げた。三人が三様に笑った後、思い出したようにファルがフィストに歩み寄った。頭を上げたフィストが不思議そうにファルを見上げると、腰から一つの包みを取り出してフィストに手渡した。

「フィストさん、これを」

「これは…?」

簡素な包装をそつと開き、中身を確認する。

それは銀色の輝きをもった拳銃だった。黒いフィストの物よりやや大きく、装填数もやや多い。持ってみると分かるが重量もかなり軽くなっている使いやすそうだ。

「私の愛用している物です。フィストさんのものより多少は高性能ですし、何かあった時に役に立つかと思ひまして」

ファルの嬉しそうな笑顔を見て、それから拳銃に視線を落とす。確かにその銃に新品らしい初々しさはなく、やや年季の入った印象を受ける。だがその使いやすさは持つだけでも良く分かり、これを使えばいざという時に少しでも有利になれるだろう。武器にうるさそうなファルが愛用するというのも頷ける代物だ。

しばらく考える。一瞬はそれを懷に納めようとするが、すぐにその手を止めた。それからファルの方に恐る恐る差し出した。

「ありがとうございます。でも、すみませんが受け取れません」

「：なぜ？」

笑顔が消えて不安そうな表情に変わっているが、それも当然と言えた。きっとファルはフィストが近々それを使用することになるのを会話から感じていたはずだ。

フィストもまた、それは分かっていた。ファルの心配も、そしてそれを受け取れない理由も。

「僕は、僕の過去にしてきた罪の清算に行くんです。人を殺しに行くわけじゃありませんから」

その言葉にファルははつと目を見開いた。

冷静な人間ならば、そんなものは子供の屁理屈にすぎないと聞き流されただろう。清算に行こうにも本人が死んでは元も子もないからだ。

それでもファルは、差し出された包みを慎重に受け取った。銃と一緒にフィストの志も受け取ったのだろう。

「：分かりました。そうですね、あなたは私にそう言ってくれましたものね。すみません、そのことを忘れていましたわ」

再びファルに笑顔が戻ったが、それは単なる自嘲の笑みだ。

「はあ：結局は私も、自己の満足のためにしか銃を持たない人間で
したのね」

「そんなこと：！」

「いいのです、分かっていた事ですから。フィストさんは何が大切
なものかを分かっている、そうでしょう？」

子供をあやすような言い方に、フィストは何も言えなくなってし
まう。

「さあ、もう出発しないと夜になってしまいますわ。せかす形にな
ってすみませんが、お急ぎになった方が良いかもしれません」

見上げて見えた空は、確かに半分ほどがやや赤色をにじませたよ
うな紫色をしていた。冬の日没は速いため、ここから完全に夜にな
るまであまり時間はかからない。

「そうだな。じゃあ、また会う日まで！」

ダルタが右手を軽く上げると、軽い足取りで走りだした。後れを
取ったフィストも「失礼しますっ！」と急いで会釈をし、追って駆
け出した。

そのスピードは速く、ものの数十秒で音も聞こえなくなった。

「いやはや、相変わらず元気な方ですな。フィスト様も昔のダルタ
様とよく似ていらっしゃる」

まずドルイズが口を開いた。

「きっとたくましい男性になるでしょうね。その時は常連さんにな
ってくださいるとうれいのですけど」

ファルがいつの間にかいつもの調子に戻っていた。コレクション
を思い出したのか、頬に両手を添えて顔を赤くしている。

「……ほら、そろそろ入るぞ」

呆れかえったガルバートがさっさと玄関を開く。それでも含み笑
いをしているのがバレバレだ。

「ふふふ、ガルバートもフィストさんのこと気に入ったようですね」

「……」

ガルバートを追って家に入ったファルが彼と並んだ。顔を覗き込むと、見られるのを嫌がるようにガルバートの顔が反対を向いた。

「また次に会ったときは……いえ、なんでもありません」

「……それはどういう意味だ？」

思わせぶりの発言に振り返った時には、ファルはガルバートの遙か先を歩いていた。

「私もあの方たちが羨ましいです。とても仲がよさそうでした」

「……ああ、そうだな」

「私も同感でございます」

最後に入ってきたドルイズが廊下の明かりをつけた。窓からその明かりが外に漏れる。

年末という厳しい冬の時季だが、そのの薔薇は相変わらず力強く咲き誇っていた。

アーミルとリメール。それぞれが自身の席についている。あとの二人はすでに夢の中だ。

別に二人で約束したわけでもなく、気がついたら二人だけが未だに起きているといった状況になっていた。

「……なあ、リメール」

耐えられなくなったアーミルが口を開いていた。

「何でしょう」

「……なんか、ずいぶん平気そうだなって」

前日の買い出しの際も、リメールは『それ』を感じさせる素振り
は全く見せなかった。表情にこそ出さなかったがアーミルの驚愕は
相当なものだったのだ。

「…だって…」

言葉を濁らせる。さすがに直接聞きすぎたか、とアーミルも眉を
ひそめた。

「…だって、いつまでも気にしてても仕方ないじゃないですか。
どうにかできるものでもありませんし。それにきつと、ユリスさん
やフィストさんの方が辛いと思うんです。私があれっぽっちのこと
でくよくよしてちゃいけないんだって、そう思いました」

「……強いな、リメールは」

返答はなかった。それはアーミルにとってはあまりあってほしく
なかった反応であり、焦燥を誤魔化すように頬の内側を噛んだ。

「…アーミルさん、やっぱり聞かせてください」

「…何を？」

リメールが急に真剣なまなざしを向けてきたので、つられてアー
ミルの姿勢を直す。

「私は……ここに必要な存在ですか？」

リメールの顔が赤くなっている。どちらかというと、恥ずかしい
のではなくて泣きそうな時のそれだ。

「先日のこともそうです：私がここにいて邪魔だったりしませんか
？私のこと、いらなかったりしますか？」

「……」

分かりきっている質問、というわけではないのはリメールの表情
から窺えた。どうやら真剣にそのことで悩んでいるらしい。

「なるほど、だから最近様子がおかしかったのか」

「…そうでしたか？」

赤い顔のままそわそわしている。

アーミルの返答が、よほど気になっているのだろう。

机に肘を突き、リメールの顔を見つめる。

くりっとした赤い瞳。そこから湧き出す僅かな雫が確認できる。初めて見たわけではないのだが、心をくすぐられるような感覚に襲われる。期待半分、不安半分といった顔でアーミルを真っ直ぐに見据えているのだ。

「分かりきってるだろう？」

アーミルはそれほど悩むこととは思えなかったが、その質問にリメールは首を横に振る。つまり全く分からない、だから聞いているんだ…そう言うように。

「…口に出して言うのも恥ずかしいが…」

「……私は…」

お互いの呼吸が一瞬止まる。

「もちろん、欠かすことのできない存在だ。それははっきり宣言しよう」

「……っ！」

顔が伏せられた。感極まったのか、とアーミルが詮索する間もなく寝室に駆け出してしまった。

追いかけようとしたアーミルだが、すぐに席に座り直す。それから口元だけで笑って溜息をついた。

「…これでよかったのか…分からないな…」

いらないと言わなければならないのか、アーミルにすぐ判断することはできなかった。

それは、彼女の為か自分たちの為か、そんな判断なのだから。

窓の外に目をやる。大きな上弦の月が出ていた。

44話 帰還

「あら、今日は機嫌がいいみたいね」

女性はいっぴくなく饒舌だった。抱えている赤ちゃんは眠りこけているが、女性は駆け回りそうな元気の良さがある。

「うん…」

その理由は女性も分かっているのだろう、それ以上聞いてくることはない。

「私も嬉しいな。まあ、フィストは私のことそんなに気にしてないと思うけど」

「……」

独り言のようでユリスは反応しない。何がきっかけになったのか、それから女性は急にユリスに近づいてきた。

「ユリス」

「……？」

「この子」

やや逃げ腰になっているユリスに、腕の中の赤ちゃんを見せた。安心しきった眠り顔はユリスでさえ愛おしく感じるほどのものだ。

「ユリス、ちょっと抱いてみる？」

「…この子は…？」

その女性の子供であるのは間違いない。別に断る理由はないが、嬉々として受ける理由もないのだ。その問いもまた当然のものだ。

「この子、あなたも知ってるでしょう？…分かるかしら」

黙って首を横に振る。ユリスがその子供を見たのは、少なくとも記憶では夢の中でしたか経験がない。

「この子、フィストよ？」

「……！？」

ユリスには言っている意味がすぐには理解できなかった。確かに夢の中ではある。しかしこれほど明確に、現実であり得な

いようなものをはっきりした意識で見ることは予想外だったのだ。
それから時間を置く。じんわりとその子がフィストであることを
自身に教え込んでいく。

やがて、迷いなくフィストであることを信じていることができるよう
になった。言われてみれば確かに面影があるのだ。

「……………あ…」

恐る恐る受け取る。まだ小さなユリスの腕いっぱいとその柔らか
い感触が伝わる。相変わらずの寝顔に、見下ろすユリスも思わず笑
顔になっていた。

「かわいい？」

首を縦に振る。それから女性の顔を見た。

ユリスもようやく気付くことができたのだが、彼女は確かにフィ
ストの母親に間違いない。腕に収まっているフィストとも記憶の中
のフィストとも、どこか似ている部分がある。笑顔になった時の様
子は疑いようもない親子だ。

「……………」

恥ずかしくなったのか腕の子供を彼女に返した。そして女性が抱
え直すと、タイミングが重なってようやく子供が目を覚ました。

「……………ふえ…」

「？」

「ふええええええ…」

泣きだしていた。

「あらら…ユリスの方がいいみたいね」

「ええ、そんなこと…」

嬉しそうにした女性が再び子供をユリスに渡した。ユリスが抱い
て少し揺すってやると、ようやく泣き止んだ。

「ふふ…ユリスのこと気に入ってるのかしら。嫉妬しちゃうわ」

「……………え、と」

やや頬を赤らめる。それは現実のフィストとは違うはずなのだが、
意識がそちらにいつてしまう。

それからいつまでそうしていたか分からない。覚えている限りは、目の覚めるまでだが。明らかな彼女との別れはなく、意識が現実に戻る際も腕に子供の感覚が残っていた。

「…私の名前？」

「うん…私、あなたの名前もまだ知らない」

「うーん、今無理に教える必要もないと思うけど…まあいいわ」

「…ありがとう」

「私の名前は、クレア。いずれまた耳にすることもあるでしょう」

「…クレア…それが、フィストのお母さんの名前……」

「……うう…」

ぼんやりとした夢の記憶の間に寒朝の厳しさが入り込んでくる。毎朝のことなので驚くようなことはないのだが、だからといって辛くないわけでもない。身を覆う布から右手がはみ出した途端、刺さるような外気の冷たさがそこを襲った。瞬時にしてそこを引っ込める。

「……う…ん……」

鮮やかなブロンドが毛布の中から姿を現した。

顔を僅かに出し、周囲の様子を窺う。横に並んでいるベッドで、ユリスと同じように布のふくらみが三つ確認できる。完全に布に身を潜らせている辺り、今朝の冷え込みは相当のものだったのがよく分かる。

今日は一番に起きたという意味のない優越感を覚えながら、ユリ

スは再び眠りにつこうと判断する。だが、その寒さに体が驚いたのか思いのほか目が覚めてしまっていた。

給湯室から紅茶の香りがしたので体を震わせながら起き上がる。凍りつくような冷気が一瞬で全身を埋め尽くした。淹れたての紅茶で体を温めようとユリスの足が急ぐ。

寝室を出ようという所で、ふと足を止めた。ようやくその妙な点に気づいたのだ。

振り返ってみても、布のふくらみは三つだ。ゆつくりと上下しているのでそこに人が入っていることは間違いない。

だとしたら、今紅茶を淹れているのは誰なのか。

その香りは普段と何の変わりもない。だが、それに向かって何の躊躇いもなく近づくことはあまり良策とは言えない。なにせ、その正体が分からないのだ。

ゆつくり近づく。給湯室からはガチャガチャと食器を動かす音が聞こえてくる。そしてそれとは別に、紅茶をすするように飲む音が耳に入った。

音の出所はソファだ。まだ相当の熱気を持っているだろうカップがソファの奥のテーブルに置かれた。それに反応して足を止める。

何者なのか――おそらく敵ではないだろうが。

背もたれに隠れて姿は見えない。先日のこともあるので、ユリスとしても油断してはいけないうのがよく分かっている。

音が止む。食器の音も、紅茶の音も、ユリスの呼吸も。

戻って誰かを呼んだほうがいいと判断し、寝室の方へ踵を返した。

「あ、ユリスさん。おはようございます」

「……！」

給湯室から顔を出したのはリメールだった。

「ユリスさんにも紅茶用意しましょうか？」

もう一度寝室を覗き込む。何度見てもそこにあるふくらみは三つだ。

「…えっと…」

どうしても合わない人数、そしてソファにいるもう一人が気になり返事があやふやになる。後ずさるようにして足が一步下がる。

「ユリス。せっかくだし、一緒に飲もうよ」

幼げな少年の声。それと同時にソファから人の影が立ち上がった。ユリスはその声を初めて聞いたわけでもなく、むしろ長い間待ち望んでいたというべきだろう。

そしてユリスに向けられていた笑顔は、まさしく彼女の最も欲していたものだった。

「ただいま」

フィストのそのあいさつの返事は、泣き崩れそうな表情。

新しく注がれた紅茶は割って入ることもなく、給湯室からその様子を窺っていた。

「ふあああ…あ？」

ダルタが起き上がると、フィストと並んでユリスがダルタを見つめていた。あまり機嫌が良くないようで、むすっとした様子で睨みつけている。その理由はダルタには分からず、とりあえず苦笑いをした。

「…どうした？」

「…いつ帰ったの」

「あー、それか…」

体にかかったシーツをどかしながら頭を掻く。短い髪の毛でも寝癖が好き放題に跳ねまわっている。

「昨日の夜だ。起きてたのはアーミルだけだった」

「起こすのも悪いと思ってね…そのままソファで寝ることにしたん

だ」

「俺は空いてたベッドで寝たけどな」

「……」

寝起きの不安定な笑い声を飛ばすと、ユリスはより一層不機嫌になって背を向けてしまった。どうやら前置きも何もなく突然帰っていたことに腹を立てているようだ。

「…そんなに怒らなくてもよさそうなモンだけど…」

「まあ、心の準備とかしたかったんじゃないかな」

ようやくベッドから這い出てきたダルタの横で、ティリアだけがなおも寝息を聞かせていた。

「…?」

とんとん、とフィストの肩が二回たたかれた。

「よう、フィスト」

いつの間に起きたのか、アーミルが髪も整えてそこではにかんでいた。フィストがその顔を見るのも久しぶりだ。

「ああ、アーミル。ただいま」

「早速で悪いんだが、いろいろと話したいことがたまってるんだ。疲れてるかもしれないが付き合ってもらえないか?」

「あ、うん、分かった」

フィストも断るつもりはなかったのだが、肩を掴んだまま引っ張るので拒否することが出来ない。アーミルがそんな強行手段を使うのはフィストから見ても珍しいことなのだが、よほどすぐに伝えたことがあるのだろうとあまり考え込まずに納得していた。

アーミルが自分の席に座り、机の反対側に椅子を持ってきてフィストも座った。二人きりで話すにはちょうどいい間合いだ。

「…まあ、お前の『宿敵』に関する情報なんだけどな」

アーミルが頭を掻く。言葉がまとまっていないうで、口元で呻くように何かを呟いているがフィストの耳には届かない。しばらく

時間がかかりそうな様子で、フィストの興味は机の上に散らばっている資料に移った。

「……これは？」

「ん？それは…例の研究所の所員名簿だ」

確かに表紙にそれらしいものを書いてあるが、葉が一枚挿みこまれている。何かの手がかりでもあったのだろうか、フィストはそれとなくそのページを開いた。

まず顔写真が目に入る。

ぼさぼさの銀髪に、僅かばかりの髭。まだそこそ若そうな顔立ちだが、その輪郭線には何か記憶を刺激するものがあつた。一瞬体が震え、彼の氏名に視線が移った時それはピークに達した。

『バステイル・ギルフォテニア』

「ああ、彼のことか。正規の名簿には無かつたけど、一度作つた記録っていうのはそう簡単には消えないものだからな。でもそれはフィストには――」

「バステイル…」

忌々しい記憶。身代わりになり犠牲になつた無口で不器用な、だが誰よりも頼もしかった男。

「…バステイルの事覚えてるのか？」

「…え？」

覚えてるのか、とはフィストの耳に引っかかる言い方だった。少なくともこういった状況なら『知っている』という動詞を使った方が適切だろう。だがアーミルは言い間違えたような素振りも見せない。

「そんなわけないだろ、だってバステイルがお前と最後に会つたのはお前が三歳の時だぞ」

「……僕とバステイルは以前にもあつたことが？」

いまいち会話がかみ合っていないことに気づく。たまたま自分を助けただけだと思っていた彼がどんな存在なのか、それはフィストを混乱させるのには充分だった。

「……まさか……！……けど、もしそうなら……ハハ……まったく運命つてやつは……」

「何？どうしたの？」

途端に脱力したようにアーミルが笑ってフィストを見た。

「もっと早く、お前に話すべきだったのかもしれない。俺もどこかで分かっていたはずなんだが、気付かないうちに自分自身でそれを否定していたようだ。まあ、今でもまだ遅くはないから大丈夫だよな」

「???」

アーミルが一人で話を進めていってしまう。ようやくフィストがその話に参加できたのは、アーミルの差し出した封筒を受け取ってからだった。

「バステイルからの手紙だ。彼が死んだことはお前から聞くまでもなく知っていた。昔から交友があったからな。で、その知らせを聞いた直後に届いたのがそれだ。読んでみな」

言われるがまま封筒の真っ直ぐな切り口を押し開いた。指を入れ、中の紙をつまみ上げる。

それは、手紙と呼ぶにはあまりに短い内容だった。

——あれからずいぶん経つが、俺はもう大丈夫だ。それに独りじゃない。理由は分からないが、誰かに追われていた子供を助けて一緒に暮らしている。やはり子供とは良いものだ。フィストの事が思い出される。

まだその子の名前も聞いていないが、いずれ聞く機会もあるだろう。何かあったらまた連絡する——

思い出される……その一言が決定打だった。

「短い文章だけど、わざわざ手紙を搔いたってことは相当嬉しかったんだろうな。お前バステイルにすぐ名乗らなかったな？知ったらもっと喜んだらう」

もうフィストの頭は機能していない。手紙の内容を整理すると、自分の立ち位置が分からなくなった。

沈黙が続く。

フィストは勿論、アーミルまでもが黙っているのはフィストの準備が整うのを待っているからだろうか。

「…昔何があったのか…知っているだけの事を教えてほしい」

「…長くなるぞ」

44話 帰還（後書き）

50話くらいで終わらせようと思っていたのですが、これは終わるのか際どい所ですねー…。

まあ、この後の過去話が済んだら最終決戦の地に行かせるつもりです。ここまで読んでくださった方々、最後までお付き合いよろしくお願いします。

45話 兄妹はそこへ向かう

「俺が実験台になる」

ギースのその一言は嫌に威勢がよく、バステイルの不安を煽った。

「…お前、自分が何を言っているのか分かって言ってるのか？」

「ああ、まともな考えじゃないことは分かってる。お前にも理解してくれとは言わない。ただ、俺は…何か一つでいい、一生のうちに誰かの役に立ちたいんだ」

ギースの暴走癖はバステイルもよく知っている。まずは一通り話を聞かなければ、こちらの話もまるで聞かない。黙って次を聞いた。

「今、フェラート王は実験台を捜してる。どんなに狂気に満ちたものであっても、それは俺が誰かのために貢献できる最後のチャンスなんだ」

「…お前がそれを正しいと思うのなら俺はもう何も言わない」

「…ありがとう」

このとき体を張ってでも止めるべきだったと、彼は生涯後悔していた。

それは十三年前…王妃ホムリが亡くなった翌年の、セントヘイムのある研究所の一室。白い研究服を着た男二人の会話だった。

カモメが騒ぐ。彼らの狙いはついさっき帰ってきたイカ漁船のおこぼれらしく、隣接する漁港の上空を集団でぐるぐる飛び回っている。

青い空、そして青い海。爆発しているような太陽が照りつけるそれらの境界線は混じり合い、どこが海でどこが空なのかをうやむやにしていた。時が積みば積むだけ増殖する綿のような雲だけが、少なくともそこだけは空だと図々しく主張していた。それは、無限の解放を求めるアーミルにとっては邪魔なものでしかない。

終わりのない海と空へ向き直り、縛られ続けている自分自身に溜息をついた。

服の袖が引っ張られた。頭一つ低い所に見慣れた茶色の長髪が映る。口うるさい彼の妹だ。

「アーミル、もう行くってさ。海なんか見つめてどうしたの？」

疑問符で結んではいるが、返答を聞く気はなさそうだ。ティリアの顔はもう行くべき先をずっと見つめていた。

「…はいはい、分かりましたよ」

聞く耳を持っている筈はないが、うんざりしたような返事を返す。そこでそのやりとりを済ませ、くるりと向きを変えた。

彼はまだ、一商業事務所の所長ではない。所長の息子、いわゆる『後継ぎ』に位置する子供だ。

父親の仕事についてセントヘイムに向かう兄妹、すなわちアーミルとティリア。

語るべきことはそこから始まる。

セントヘイム郊外にある国立研究所。アーミルの父親が興した商業事務所に、そこから時折物資の注文が入る。この時はその注文品の在庫が切れていたので早朝から仕入れのために港に来ていた。しかし、まだ幼さの残る兄妹には特に出来ることもなくすぐにそこを離れた。

「お父さん、明日行く研究所ってどんなところ？」

街の中心に戻るバスの中だ。ティリアが父親に向かって何かを聞いているが、睡魔により意識がはっきりしないアーミルにそれは聞き取れなかった。今はとりあえず、バスの中を流れる穏やかな時間

に抱かれてゆつくりと眠りたかった。

バスが『講堂前』に着いたら下車し、一度事務所に戻って身支度を整える。それからテッドフォース駅に向かい、ブルーイーグルに乗れば一日でセントヘイムに到着する。彼らのこれからの日程は、だいたいこんなものだ。

夢の中かどうか判断がつかない。アーミルの頭の中はこれから自分に関係する固有名詞で詰まりきっていた。次第に、それらが何なのかすら分からなくなっていく。

自分でも気付かないうちに視界が黒くなる。

「……」

「……」

「……」

「……」

「アーミル！」

体が大きく揺さぶられた。ティリアが半ば怒ったような表情で眠っているアーミルを起こそうとしていた。

「もう講堂前に着くよ！降りる準備して！」

返事をする気になれず、窓の外を見た。

港を出た辺りは建物が少なく、トウモロコシ畑が風で波を作っていた。深緑にざわめくそこには、空をゆったり進む雲の影が端から端へと駆け抜けていった。

今の外はもう中心部まで入ってしまったらしい。

空が狭い。誰があんなに建てると言ったのか、道の両脇に犇めく灰色のビルが青空を四角くくり抜いていて見通しが悪い。相当大きいのだろう、綿毛のような雲の頭だけがちょこんと出ている。

「アーミル！」

さらに語勢のきつくなったティリアの呼びかけで完全に意識が連れ戻された。

降りる準備と言っても、特に荷物は持っていない。あえてあるとしたら、半ば眠っているこの体を叩き起こすことくらいだろうか。

バスのスピードが落ちた。ようやく、重々しく体を持ち上げた。

「…」

開いたドアに向かうにつれて、外で日の光を反射する銀色の髪がよく確認できるようになる。それももう見慣れたもので、そこにある笑顔は見ずとも分かった。

「おかえりなさい！」

「リメール、むかえに来てくれたのか」

「行けなくて寂しかったものですから、帰りが待ちきれなくて」

相変わらずの笑顔だ。アーミルより六つも年下なのだが、ここまですで誰にでも敬語を使うのはやはり珍しいものだった。二人とも最近では慣れたが。

「リメールはセントヘイムにはいかないんだっけ」

「…ええ、そうです。行きたかったんですけど、アーミルさんのお母様に止められてしまいました」

「そっか。なんか悪いな」

「そんなことないですよ！」

リメールが笑うのにつられてアーミルも小さく笑ったが、急に後ろから押されてのけぞった。

「アーミル、後ろ！つかえてるよ！」

ティリアが呆れたような顔をしてアーミルの背中を膝で押していた。

それは、あまりにも無味乾燥なものだった。ブルーイーグルに乗るとあれば、鉄道好きでなくとも子供なら走りまわって喜ぶものだ。実際ティリアは走りまわって全身でその感動を表現し、知らない人とぶつかって父親に怒られた。あまりしよげている様子ではなかったが、嬉しそうにはしても走り回ることにはなくなった。

アーミルにそんな感動はなかった。その様子にさしたる変化はなく、乗車時間の大半を寝て過ごした。再び意識がはっきりした時には、彼らはもうセントヘイムの土地を踏んでいた。一日を過ごした

のは事実のはずだが、アーミルにとってはバスと同じ睡眠時間であることに変わりはないかったようだ。

日差しが実際以上に強く感じられ、思わず目を細めた。初夏の日差しは寝起きの人間にはこの上なく酷だ。アーミルの視界は、今は普段の半分もない。

「うう：頭がガンガンする：」

テーブルで突っ伏して寝た代償だろう、アーミルの頭にはまるで何か刺さったような痛みがあった。

「ずっと寝てるからだよ。外の景色でも見てればよかったのに」

半分は馬鹿にしているが、もう半分は本気で心配している言い方だった。とりあえず大丈夫であることをアピールし、それから近くの日陰に逃げた。

「そういえば、お父さんがいないな」

ようやく目が慣れたころ、アーミルが辺りを見回して父親の姿がないことに気づいた。

「今荷物の検査を受けてるところだよ。しばらくかかるって言うってたよ？」

アーミルも日差しの下に戻るにはもう暫くかかりそうなので、それはちょうどいい時間稼ぎの理由になった。

ブルーイーグルに関連した人間の流れもかなりのものだが、普通列車の利用者の方が遥かに多いはずだ。

セントヘイムは産業発展時代に鉱業で豊かになった街だ。今はその資源が尽きているので、人通りが少なくなってもおかしくない。

だが、この駅を保有する鉄道会社は、蜘蛛の手のように貪欲にレールをあちこちに延ばし、セントヘイムを無理矢理移動の中継点としていた。そのおかげかセントヘイムの総人口はかつてと同じように大都市らしい数字を示していた。それにより、駅前ともなると並々ならぬ人間の充填率でそこにいる者の気を滅入らせる。

アーミルもまた、気力の欠片も見せないままそんな人の流れを見つめていた。

不意にティリアが立ち上がったかと思うと、日陰から外へ歩き始めた。それだけならアーミルの知ったところではないのだが、アーミルの手もつかんで一緒に連れて行こうとしてくる。

「ん…？うわ、やめろ！」

「違うの！ほら、あそこ…」

ティリアが指さしたのは人混みの中だ。スーツがいくつも重なってよく見えないが、確かにその中に何かいる。

「人がうずくまってるみたいだよ。助けてあげようよ」

ティリアに引っ張られて近づくにつれて、次第にその状態がより細かく把握できた。

女性だった。茶色に近いふわふわした金髪をゆったりと結わえ、ブラウンのTシャツにベージュのチュニック、そして黒いスカートを着ている。腹部が大きく膨らんでいて、そこを摩るようにしながら膝について少し苦しそうな表情をしていた。

もうすぐ予定日なのだろう。アーミルにはまるで想像がつかないが、その表情からはかなりの激痛が見て取れた。最初は引っ張られていたアーミルだったが、気がついた時にはティリアを追い越していた。

「大丈夫ですか？」

女性の前でしゃがみ込む。辛そうにしていた女性も、こちらに気を掛けている二人の子供に気づくと無理矢理笑って見せた。

「…ええ、大丈夫：ありがとうございます…っ！」

そこでまた痛みが生じたのだろう、笑った顔がまた歪んだ。

「全然大丈夫じゃないですよ。一旦日陰で休みましょう」

「…ごめんなさい、お願いできるかしら」

「もちろんです」

アーミルが肩を貸し、ティリアが腹部に気を掛けながら、先ほど休んでいた日陰まで連れていった。残念なことに椅子は置いてなかったもので、木にもたれ掛けるようにして慎重に座らせた。

「…ふう、だいぶ楽になったわ。どうもありがとう」

ようやく落ち着きを取り戻したようで、人当たりの良さそうな笑顔で二人に笑いかけた。それでもお腹をさすっていたわるのは忘れない。

「もうすぐ産まれるんですか？」

そのお腹に興味を抱いたのか、ティリアが笑顔で聞いた。

「ええ、そろそろ予定日なの。元気な子になってほしいわね…あたたちは、二人で旅行？」

「いえ、父の仕事にくつついて来てるだけです。卸売業をしているんですが、この近くの研究所から注文が来ているので」

何気ない会話の中の一文だったが、その分に女性が敏感に反応した。

「近くの研究所？じゃあ、ひょっとしてあなたたちがアーミルくとティリアちゃん？」

「は？…はい」

いつの間に自分たちはそんなに有名人になったのか。知らない人が自分の名を知っていればアーミルでなくとも驚くだろう。それを何とか隠し通そうとしたが、十歳とそこそこのアーミルはまだそれほど器用ではない。その反応で彼女のくすくすという笑いを誘ってしまった。

「そう。連絡は受けているわ。今回は子供二人と一緒に連れてくるって」

「…そう、なんですか。じゃああなたも、そこで働いてるんですか？」

返事の代わりに彼女はまた優しくそうに笑った。とても『研究員』といった印象は受けないが、それは母であるが故だろう。

アーミルの肩を、誰かがトントンとたたいた。

父親だった。待たせたな、と言うような顔で二人と顔を見合わせた後、お腹をさすり続ける彼女と挨拶を交わす。

「私もこれから研究所に戻るところなの。一緒に行こうか」
立ち上がった彼女が二人に手を伸ばす。その手を掴んでティリア

が立ち上がり、アーミルはその手を借りずに重々しく立ち上がった。

「あの…あなたの名前は？」

ティリアが手をつないだまま聞いた。

「私？私はクレア。よろしくね」

その笑顔は、自分の母親と間違えそうなほど優しく二人を撫でた。

46話 誕生

「いつもありがとうございます。おかげで助かってます」

扉の隙間から覗くと、父親が白い服の男と握手をしているところだった。ちょうど取引額の交渉が終わったのだろう、二人の間にある低いテーブルの上には父の持ってきていた何かの木箱——おそらく今回注文された品——とお金の入った袋が並んで置いてあった。

商売がうまくいくのは誰だって嬉しいだろう。今握手を交わしている二人の笑顔にはそれも含まれているはずだが、それ以前の何か大きなもの、奥深いところでの繋がりがその笑顔を本物にしていた。「お父さん、嬉しそう」

小さな声だが、ティリアも嬉しそうだ。

「だいたいいい売値なんだろうな。にしても、何の注文だったんだろ」もっとよく見ようとアーミルは更に顔を近づける。

だがあまりに中が気になっていたせいで、二人は少しそちらに注意をやりすぎていた。

ふいに二人の肩にのしかかる、重い感触。

「そんなところで何やってんだ」

知らない声だった。だからこそ、一瞬心臓が止まったような錯覚を覚える。

扉の向こうで笑い合う二人と、対照的に表情の固まる二人。

極力首を動かさず、流し目で後ろを確認した。

まず白い服が見えた。少しずつ動かしていくと、次第にその人全てが見えてくる。

男だ。髪はぼさぼさでやや長め。どちらかと言うとがっちりした体格だが、どうやらアーミルとの年齢差は三、四ほどしかないらしく、その顔はまだ若々しいイメージだ。

男の表情は冷やかに見えたが、声のトーンは子供に対して少し呆

れた時のそれだ。すぐに苦笑しているようなものに綻んだ。

「：まあ、子供におとなしくしてろなんて言う方が無理な話だよな。とりあえずこっちに來な。何か飲み物でも出すよ」

怒られる訳ではなさそうなのが分かると、二人の背筋からようやく寒気が引いていった。

「まあ、まずはココアでも飲みな」

顔は笑っていないが、やはり彼も優しそうだ。今のところ二人のこの研究所への印象は良い。

目の前には湯気を盛んに立てるココアが二つ並んでいる。ティリアが早速飛びつくが、生憎アーミルは猫舌なのでまだ口にはできない。

「俺はバステイル。君らは？」

「俺はアーミル」

「私はティリア」

自己紹介は短く、簡潔にまとめられていた。二人とも余計に個人情報教える必要性を感じなかったのもあるが、バステイルの態度がまるで幼児を扱う素振りだったのが気に入らなかったからでもある。

ただ、実際に幼児なのは事実なのだから文句のつけようもない。

「ココア、おかわりもあるから」

やはりこの扱われ方はアーミルには釈然としなかった。もしそれが全く飲まれていないアーミルのそれを見た上での発言だったのならそれも癪に障る。

アーミルの胸中など知らぬといった顔でバステイルもココアを飲み始めた。

「バステイル、ここって何の研究所？どんな研究してるの？」

好奇心旺盛なティリアが早速会話の糸口を紡ぐ。

この状況で言えば妥当な質問だが、バステイルはそれに答える

のを嫌がっているようだ。

数秒ののち、ようやく口を開く。

「人体内における変異化合物とベルテニロ類属の偶発核理論料
化剤のホード系第三次飽和エネルギーの研究」

言うまでもなく、二人にはまるで内容が理解できなかった。

アーミルは『ベルテニロ』と『ホード』しか聞き取れなかったが、
理解できないことを承知で言ったのだろう、もっと分かりやすく言
ってくれと不満の声を漏らしそうなテイリアに掌を突きつけてそれ
を制した。これ以上説明する気はなさそうだ。

「まあ、君たちの未来を潰したくはないからな。すまん、聞かない
でくれ」

そこだけは相手が子供であろうと関係のない、純粹な頼みだ。そ
してすぐに話題を変えた時には、もう応対が子供へのそれに戻って
いた。

「すぐ帰るのか？」

「いや：一週間ぐらい滞在するらしいよ」

まだ年相応の振舞いはちゃんと出来ず、不器用にそう呟いた。

発生する蒸気がやっと減ってきたのを見計らって、アーミルもよ
うやくココアを口に運んだ。

その甘い味に一瞬は心がとろけそうになったが、そのせいで自分
がまだ子供であることを否応なしに再確認させられる。

「そんな嫌そうな顔するな。まあここを探検するのは勝手だが、あ
まり仕事の邪魔するなよ。あと、立ち入り禁止のところには絶対に
入るなよ」

立ち入り禁止とはすなわち入るなという意味なのだから、あまり
この注意の必要性は無いだろう。念を押す、という意味では確かに
有効そうだが。

「分かった。それより、トイレどこ？」

それをあまり重要なことと受け取らず、アーミルは今の自分にと
ってより重要なことについて率直に聞いた。

「トイレか。広いから分かるかな…」

アーミルの急な振りにも嫌な顔一つせずに対応する様は、やはりそれ相応に歳月を重ねてきているのだろう。

「…いいや、俺が連れて行く」

持っていたカップを置き、バステイルがゆつくりと立ち上がる。掌をひらひらと動かしてアーミルについてくるよう促した。

「あ、私も行く」

独りになるのが嫌だったのか、ティリアも急いで飲みかけのカップを置いた。

長い廊下に機械的に扉が並んでいる。なるほどこれは迷う、とアーミルは心の中で納得した。

時折壁に突き当たって曲がることはあっても、どの扉が何なのか、はたして別の場所なのか、それすら証明する材料が無い。一人でうろついたら最後、トイレはおろか元の部屋に戻ることもかなわないだろうと悟った。その意味で、バステイルに頼んだのは正解だったようだ。

三人の足音が無駄に響き渡る。今のところこの長い廊下に他の人影は存在しない。

実は無人なんじゃないかとアーミルが疑い始めた辺りで、バステイルの背中に顔がぶつかった。バステイルがいつの間にか足を止めていたのだ。

扉の前だ。ほんの少し開いているようで、中の会話が僅かに漏れてくる。

「…ここトイレ？」

「シッ」

何故か怒ったような表情。そんな顔をする理由は自分の中には見当たらなかったが、彼の注意がその扉の向こうに向けられているのは二人にもよく分かった。

つられるように扉の中へ意識を傾ける。

「————たか？」

その低い声はどこかで聞き覚えがなくもなかったが、印象がまるで違っていた。

父と握手をしたあの男だ。

「はい。いつでも接続可能です」

こちらはもっと若々しい声。ただ、あまりにも無機質な声だ。

「そうか。早ければ一週間後に開始するから準備を進めておけ」

あまりに冷たい声。本当に同一人物なのか、にわかには信じることが出来ない。

「しかし、被験体のストックがありません。一週間で新しく調達するのは難しいと思われます」

「それは大丈夫だ」

「はい？」

アーミルの聴力もそれがなぜ大丈夫なのかを漏らさず聞き取ろうと待ち構えていた。

「私の部下の一人がもうじき出産予定だそう。その子を回そう」

「…しかし、その方には了承を取ったのですか？」

「……その子の実験が後々…人を救うことになるのは保証する」

「その方の名前は…」

「クレアだ」

「そうですか、分かりました」

自分の耳がおかしいのだと、アーミルは信じたかった。

そうだと聞き間違いだと勝手に頷き視線を横にずらしたが、おそらく自分と同じであろう表情をした妹と目が合った。

聞き間違いではない。

バステールが歩き出していた。その足取りは見た目にも重々しい。

自分の体が震えて制御しきれないが何とか音をたてずにそのあとをついて行く。

ティリアもうまく立ち上がれていないのはアーミルも分かっていたが、手を差し出す余裕などなかった。

それほど、とてもないショックだった。

「…クレアさんの子…どうなるんだよ」

バスティールにそう食ってかかったのは、トイレで二人きりになった直後だった。

バスティールは何の反応も見せない。それが更に焦りと不安を掻きたてる。

「答えてくれ！あの子はどうなるんだ！」

怒り。それは明らかな怒りだ。もう自分自身を押さえられない。

「…俺にも、分からん」

対照的にバスティールは極めて冷静だった。

次の一言が続いていなければ、アーミルは身長差を考えずに彼の顔を殴りに飛びかかっただろう。

「だが、俺は決してその子を不幸にはさせない。もしそれが危険な実験だとしたら俺が全力で守る」

「――っ」

今のアーミルの知識に、続けるのにふさわしい言葉はなかった。殴りかけていたその左拳をゆっくり下ろすと、もう頭の中が城で満たされていく。

「俺だって、ここでどんな実験がされているか全て知っている訳じゃない。一生を棒に振るような実験もあるだろうし、逆になんてことないような小さな実験だってたくさんやってる。その子が必ずしも不幸になるような羽目になるとは限らないだろう」

言い返せなかった時点でアーミルは完全に負けていた。バスティールはそんなアーミルを残し先にトイレを出ていった。

アーミルの怒りは彼に向けたものではない。おそらくそれは、自身に向けてなのだろう。

結局は、バスティールの言ったとおりになるよう祈ることしかできないのだから。それがアーミル自身も、痛いほどに分かっていた

から。

三日が過ぎた。

あまりにも急な知らせだったが、二人はすっかり眠ってしまった父親に伝えることもなく夜の街を駆け抜けていった。もし勝手に外出したことがばれれば稲妻が二人に落とされることだろう。だが、そのリスクを負ってでも二人は外出することを選んだ。

心の中にあったわだかまりも、その時だけはきれいに忘れられていた。

バステイルと合流し、そのまま廊下をたどっていく。彼はすぐに近くの扉に入り、それに続いてその部屋に飛び込んだ。

そこにあった笑顔はそれまでと全く変わらないものだ。見慣れた笑顔が息を切らす兄妹を迎える。

ベッドの中で体だけを起こしているクレア。最高に幸せそうなのは間違いなく『それ』のせいだろう。

彼女の腕の中。ふわふわの布の中。

新しい、命。

「名前は…」

まだ舌がうまく回らないのは、走った直後だからだけではない。あの男の言っていたことなど、今のアーミルにはどうでもよかった。

「この子は男の子だから——」

もったいぶったようにクレアが言葉をためる。悪戯っぽい笑顔。「フィスト」

良い響きだった。その時の笑顔はとても印象深く、アーミルの記憶にしみ込んでいった。

「クレアさん、おめでとう」

バスティールも言葉を重ねる。そして赤ちゃん――フィストの顔をよく見ようとしたのだろう、クレアに近づいたが、その途端にフィストがぐずり始めた。

「えっ：俺、嫌われたかな：？」

バスティールが苦笑いする。クレアもフィストをあやしつつ、くすくすと笑った。

「アーミル、可愛いね」

「あ、ああ：」

ティリアが少し切なそうに言ったので、アーミルは今一度『あのこと』を思い出した。それを思うと、どうしても明るい笑顔が曇りがちになってしまう。

それに気づいたのか、バスティールがアーミルの頭を軽く小突いた。

「言ったら」

まだ十六、七歳だろう男の、輝かしい自信と笑顔。

「俺が全力で守るって」

「……」

もう疑う必要もない。絶対の安心を、その時初めて二人は手にしていた。

この時が永遠に続いてほしい。この場にいる全員がそう思っただろう。

その時間を引き裂いたのは、唐突な大地の震え。

「ん？」

過敏に反応したのはバスティールだ。顔から笑顔が瞬時に消えた。より強い揺れと、今度は何かの崩れるような音がした。未知の何かに、驚いたフィストが大声で泣き始める。クレアが宥めるが泣き止む気配はない。

「様子を見てくる」

耐えかねたバステイルが踵を返した。強張った表情を見る限りでは、やはりただ事ではない。

扉がやや乱暴に閉められると部屋の中に赤ん坊の泣き声がより一層響き渡り、その不安を何よりストレートに表していた。言いようのない胸騒ぎが四人の中で共有されている。

「大丈夫よ：たまにあることだもの」

忘れていた芝居の台詞の如くクレアが言ったが、それが嘘であるのは火を見るよりも明らかだ。安心させようとした心遣いは二人にとっても有難いものなのだが、生憎二人はそれほど素直な性格に育ってはいない。

三度揺れた。今度は震えというより、地響きといった方が適切だ。立っているとバランスを保てないので、その場にしゃがみこんだ。

このままじっとしていると、何か取り返しのつかない事態になるのではないかという不安が二人を襲っていた。

何もしないでこの部屋で震えているのは、年相応の対処として最もふさわしいだろう。余計なことに首を突っ込んで自ら危険に立ち向かっていくには、それなりの力と経験が必要不可欠だ。そのどちらも満たさない彼らがここで働いても、足手まといになるのは間違いないだろう。

それでも、何もせず他人のふりをするのは二人には我慢できなかった。

揺れの中で立ち上がったのは決して単なる強がりによるものではない。

「俺も行く」

それに驚いたのはやはりクレアだ。行ったら危険という予想は、その反応により確信へと変わった。

「駄目よ、きつとすぐ収まるから、ここで大人しく…」

「私も一緒に。アーミルを一人で行かせるわけないでしょ」

ティリアもアーミルに同意する。こんなところだけ兄妹なんだな、とアーミルは心の中で笑った。

「クレアさん、ごめんなさい」

その一言が、せっかく心配してくれたクレアに対するせめてものお詫びだった。一瞬後には、もう扉が思い切り開かれていた。

「ちよっと、待ちなさ…」

クレアが手を伸ばしたが、フィストを抱いてベッドの中にいるクレアに二人の勢いを止める力は無かった。

47話 眞実を胸に抱いて

気がつくと、机も床も、自分たちの顔も沈む夕日の色に同化していた。陰陽の差もはつきりと表れている。

話に聞きこんでいるうちにどれだけ時間が過ぎてしまったのだろうか、その周りの変化だけでもかなりの経過が見込まれる。

「長くなるって言っただろ」

気持ちを読んだかのようにアーミルが笑う。

「まだまだこれからだぞ」

「僕は大丈夫。続けて」

「…フィスト」

「？」

「…あーいや、なんでもない。さっきフィストに話しておこうと思ったことがあったんだが…今はとりあえずこっちの話が先だな」

「…うん、そうだね。後でまた話してくればいいから」

アーミルが何を知っているのかは聞いてみなければ分からない。

おそらくはこの一週間で分かったことなのだろうと考えてフィストはすぐ首を縦に振った。

「ありがとう。じゃ、続けようか」

長い通路。いつまでも続くそこを永遠と思えるほど走っていた。どこへ向かっているのかは分からない。胸騒ぎの覚える方へとひた走る。

度重なる地響きに、不安が風船のように大きくなる。

次に足を止めるのは何が起こっているのかその目で確かめた時、アーミルはそう決めていた。

そして、足が止まった。

『それ』がそこにいたからだ。

——怪物。子供心の第一印象は、その二文字。

身の丈は二メートル強ほど。人の形はとりあえず持っているが、異様に筋肉の隆起した上半身からは普通の人間を見取することは絶対に出来ない。

体がある程度の水気を運び、その足跡に水たまりを残してきている。一步を踏み出す度に大きく飛散する水の音が心の余裕を打ち崩す。

背中から機械的なチューブが何本も生えていた。それがどここと繋がってどんな働きをしていたのかは分からないが、それがその圧倒的な力で引きちぎられたこと、そしてそれが常軌を逸脱した実験により生み出された存在であることは嫌というほど理解できた。

「：何なんだ、このバケモノ」

ティリアがいたからこそアーミルは冷静でいられたが、一人ならば確実に大声で叫んで逃げ出していただろう。

二人の姿をその目で捉え、じりじりと、あくまでゆっくりと近づいてくる。一步一步が地面を割りそうなほどの地揺れを引き起こしている。

「アーミル：」

ティリアがアーミルの服の背中をぎゅっと握りしめる。

「大丈夫、だ。俺がいるから、あまり慌て——」

そこで、気付いてしまった。

怪物の、赤ワインに浸したような色の右手に。

何かを鷲掴みにしている。その『何か』が元『人』であるのが、指の隙間からはみ出す腕の存在で分かった。不規則に力無く揺れて、自身の存在を主張している。

それも二、三人分ではない。多くの人間が、まるで信じられない僅かなスペースに強引に納められているのだ。どうしても入り切らなかった腕がそうして外側に出たのだろう。

掌の中で握り込まれ、もう人らしい姿を残していないことはおおよそ察しがつく。

見えていた腕ボトリと床に落ちたことで、それは確定した。

「…アーミル…これ、夢だよ？ 悪い夢だよ？」

ティリアが壊れたような明るい声で問う。

「落ち着け、ティリア」

「そうだよ、これは夢だ。長い長い悪夢で、きっともうすぐ朝が来てお母さんが起こしてくれるんだ。だから大丈夫だよ、あはは…はははは…」

その狂った笑い声がアーミルの心に余計に重荷を増やし、耐えられずティリアの腹を肘で突く。う、と短い苦痛の音を漏らし、それによりようやく我に返ったようだ。

「しっかりしろ、これは現実だ」

「…ご、ごめん」

怒ったように言ったが、アーミルもその気持ちは痛いほどよく分かっていた。こんな状況であんなものを見せられてまともでいられる人間の方が少ないのだろう。そのくらい、目の前に突き出されたものは現実離れした惨劇だった。

怪物の『掴んだままの』右手が動いた。本能的に危険を感じたアーミルがティリアを突き飛ばす。それが振りかぶっている動作だと分かった時にはもうアーミルの体はさらわれ、掌で壁に押し付けられていた。

「アーミル！！」

「……ぐ……あ……」

声が出ない。体が潰れそうなほどの圧迫感。首から下がもう掌に挟まれていて、首以外を自由に動かすことすら叶わない。

それだけではなかった。

掌に捉えられた体に、同時に『それら』が押し付けられている。アーミルの手には、やや温かみのある果物のような何かが触れて

いる。

更に強く押しつけられた。と、その何かがアーミルの手の中で破裂した。

それが何なのか、想像もしたくない。

押しつけられる苦痛と、触覚からくる精神的苦痛。

二つの苦痛がアーミルを限界まで押しやった。声が出せたのならティリアのことも忘れて確実に大声でそれを口にしていただろう。

「ぐは！」

びちゃり、という濡れたものがぶつかるような音がしてアーミルが床に落ちた。彼の服は何種類ものワインを飲み干して顔中を真っ赤にしていた。アーミルと一緒に、いくらかの潰れた葡萄が床に広がっている。

掌が壁から離れていた。壁にも大量の赤いシミが残り、その威力は長く伸びる亀裂がよく表している。

何が起こったのか、そう考えた後に先刻の銃声の存在に気づいた。怪物の体越しに、煙の流れ出るライフルがバステイルとともに目に映った。他の人間などそこにはいないのに、バステイルが撃ったのだと判断するのさえ困難なほどアーミルの頭は白く染まっていた。

「……ウウ……」

体に貫通した穴を有しながらも、怪物はあまり深手を負ったような様子を見せない。それどころか、その掴んでいた塊の残りを横に叩きつけた後、ティリアのいる廊下の先を睨みつけて一気に走りだした。

見た目からは想像のつかないスピード。巨大な銃弾が頬を掠めたような感覚。

「きゃあ！」

すぐ横を巨体がすれ違いティリアはしりもちをついた。手は床についているが、その震えようでは簡単には立ち上がれそうもない。

走る怪物の地響きが二人の体に早すぎる鼓動を刻みこんでいった。それは恐怖そのものであり、二人の足にまわりつく足枷でもある。姿が小さくなっても、二人が立ち上がることを決して許さなかった。

「まずい、あっちにはクレアさんが！」

バステイルが後を追おうと走り出す。アーミルを軽く飛び越して行こうとする彼に何か言わなければと、口だけが動いてすぐに遮られた。

「二人とも：ここで何してるんだ？」

焦っているようだったが、こちらの心配をしているのも二人には分かった。呼び起されたようにハツとして、アーミルだけはようやく立ち上がることが叶った。

「その：ごめん」

まずは謝った。結局自分たちが足手まといにしかならなかったことが分かっていたからだ。

「：とりあえず、彼の後を追うぞ！」

すぐに精一杯の表情に戻ったバステイルが巨大な弾丸の後を追う。遅れまいとアーミルも駆け出す。まだへたっているティリアを助け起こすことも忘れない。

ただ、バステイルへの疑念とも違う妙な違和感をアーミルは覚えていた。

彼：バステイルは、怪物のことを迷いもせずに『彼』と呼んでいた。

背中が見えた。体に生じている裂傷はおそらく誰がやったものでもなく、実験自体の無理の表れなのだろう。あのスピードの割には案外すぐに追いついた。

「グオオ……アア……オ……」

苦しげな、やっと人らしい声が聞きたれた。その裂傷は勿論、自

分全てを蝕む毒にもがき苦しんでいるらしい。

その口から、さらに言葉が発生する。

「…オ：オレは…：ヤクに、タつんだ…：ダレかの…：タメに…」

言葉は、まるで軋んだレコードのようにかすれている。言っている内容は二人にはさっぱり分からない。

バステイルがライフルを構えたまま近づく。二、三步分間を置いて二人も続く。

他の研究員は誰一人姿を見せない。何をしているのかともどかしく思い、まさかあの『葡萄』で全滅しているのでは、とアーミルは不安ばかりを先走らせた。

怪物も彼らに気づき、ゆっくり向き直る。

怪物の荒い呼吸だけが廊下を吹き抜けていく。

「ギース！」

バステイルのその一言で空気が一斉にサアツと音を立てて引いた。

ギースとは怪物の名前だろう。彼らの関係がつかめていない二人には、口を挟むチャンスはまだない。バステイルの背中を見つめ、事の成り行きを確認するのがやっとだ。

「分かるか？俺だ！」

ギースに反応は見られない。こちらの隙を窺っているようにも見える。

「…：オレの…：イミ…：ソンザイの…：…」

うわごとだけが羅列されていく。それもこのようすだと、バステイルの言葉に耳を貸しているとは思えない。いつ一撃が飛来するか、その危険な香りがどんどん増してきている。

「分かってくれ！…：殺したくない！」

だいぶ切羽詰まっているようだ。

この『二人』の過去に何があったのか。彼、ギースには何があったのか。この部分に介入するには余りにもピースが足りない。

ハッとせざるを得なかった。一度受けたから分かる、その殺気。

考えるよりも先に、アーミルの体はバネのようにはじけとんだ。

「くうっ！」

掌を中心に床が碎ける。アーミルがバステイルを自分の方へ引っ張り倒したのとそれはほぼ同時だった。

「：だめだ、今のあいつかから理性らしいものを感じられない」

「分かったようなことを言うな」

そう言うてはいるが、バステイル自身が最もそれを分かっているはずなのだ。

その証拠に、音もなく腰からボール状のものを取り出していた。やや楕円形をしていて、頂点には引き抜けそうな金具が付いている。迷っているのは二人にも伝わっていた。だがそうしている間にも、床に広がった手がゆっくりと体の方へと戻っていく。

時間は無い。

「バステイル、俺は：」

「アーミル：ティリアも、下がってる」

後押しにはなったようだ。ティリアの横まで下がると、改めて脱力感に苛まれて溜息が出た。

「アーミル：」

「：あとはバステイルに任せよう」

向かい合うバステイルとギース。

背中を向けたバステイルが何を考えているのかは察しがつかない。

「：俺は」

そんな声がかろうじて聞こえた。

「俺の信じる……」

金具が思い切り引き抜かれた。

「正義に生きる！」

腕を思い切り振りかぶった。

ボールが放物線を描く。

急に振り返ったバステイルが巻き込むようにして二人を押し倒し、一緒に床に伏せた。それにより二人の目の前はバステイルで塞がれてしまう。

視界から情報は入らない。その分まで神経のいきわたった聴覚に、見る以上に鮮明な情景が映り込んできた。

すさまじい爆音。その音にふさわしいほどの強烈な風がバステイル越しでもよく伝わってくる。

一緒に、ギースの悲鳴に近い声も。

あまりに痛々しい叫び。

断末魔にも匹敵するその理由が、聴覚からすぐに伝わってきた。べちゃ、べちゃと、肉片が床やら壁やらに無数に飛び散ってへばりつく音がした。風と一緒に人間の肉の生臭い臭いが押し寄せてきて思わず鼻を覆う。

その瞬間は永遠にも思えた。

轟音が無限の如くいつまでも耳に焦げ付いていた。

アーミルが確かに感じていた、バステイルの圧力が軽くなった。それによりゆっくり体を起こしたが、体を突き抜けていった衝撃のせいでまだめまいが抜けない。

揺らぐ廊下に、規模の大きな赤い斑点が見える。それぞれがある一点を中心として花を咲かせているように広がり、その花びらを演じていた。

バステイルが立ち上がり、倒れているギースに歩み寄る。アーミルも近くに行こうとしたが、体を起こすことがやっとで立ち上がるのは難しそうだ。

ギースの右手のあたりを調べているようだ。ずっと葡萄を握りしめていたそこは、色の濃さも死臭の強さも相当なはずだが、バステイルは気にもしていない。ただ無心に右手を見つめたまま、釘を

立てられたように動かない。

二人がようやく立ち上がると、バステイルも立ち上がった。しかし向こうを向いたまま二人を見ようとはしない。今、どんな心境なのか。それを考えると、むしろ二人の方が顔を見ることを拒んだ。

「アーミル、ティリア」

バステイルの声だけが届く。

「二人はすぐに帰るんだ。しばらくはここに近づくな」

「……」

何とも言えない。それに反対する理由は特になかったが、素直に従うべきだともすぐには断言できなかった。

「俺はクレアさんとフィストを連れてここを離れる。どうやら、フィストの関わる実験は最悪の部類だったらしい。…幸いまだ他の誰も二人がここにいることを知らない。見つかると厄介なことになる、早く行くんだ」

「……」

「この廊下をそっちに真っ直ぐ行けば出口がある。さあ、早く」

アーミルはすぐにでも走り出したかったのだが、それはこの場からではない。自身で道を切り開くこともなく、ただ言うとおりに動くしかない自分から逃げ去りたかったただけだ。

「バステイル、私たちだって…むぐ」

アーミルはティリアの発言を封じながら後ろを向いた。走りだす態勢だ。

「もし機会があれば…また」

「…ああ、必ず連絡する」

それが最後の会話。妹の手を無理やり引っ張って走っていくアーミルを、バステイルはずっと見送っていた。

僅かながらの涙は、誰に向けてのものだろうか。

「……」

フィストはどう返答すべきか詰まった。たくさん聞きたいことがあるはずなのに。自分の過去のスケールの大きさに呆気にとられている、というのがもつともそれらしい理由だ。

「…え、と…んーっと…」

「釈然としないか？」

単なる思い出話をしたかのように、アーミルは少し寂しそうな笑いを作った。その手にはいつの間にかガラス製のサイコロがつままれている。

「…その後、僕とお母さんは…」

「そうだな、バステイルからすぐに連絡がきた。フィストは自分が預かって、クレアさんは研究所に戻ったそうだ」

「戻った？」

「ああ。バステイルと二人で姿を消すと怪しまれるから自分はそれらしい理由をでっちあげる、と言ったらしい。俺は何度もバステイルに会いに行ったが、その時一緒にクレアさんに会えたのはその三年後だ」

アーミルの顔はフィストからはよく見えない。だいぶ暗くなって顔に光が当たらなくなったせいだろう。それでも、笑っているのか、悲しんでいるのか、その程度は何となく見てとれる。

今はどちらかと言うと、笑っている。

「三年の間に何があったのかはバステイルも知らなかった。ただ、少しやつれて、疲れ切った様子だったと聞いたな。クレアさんが自分から語ろうとしなかったから分からないが、一言だけ『何か大切なもの』を失ったと…クレアさんは、フィストと二人きりで暮らしたいと言ってバステイルのもとを離れていった…まあ、そんな所か」

それから二人は黙る。

部屋の中に聞こえてくるのは、やや小さめの寝息。

「……え？」

寝息だ。

「話は終わりましたか」

心を現実に戻す優しい声。

「ティリアさんはもう寝ちゃいましたよ。二人なんか待ってられるかって」

リメールが呆れたような表情で歩いてきた。

「寝た？夕飯も食わずにか？」

「食べました！お二人の分も用意してたんですけど、私もユリスさんもダルタさんも待ちきれなくなって先に済ませちゃいましたよ」

リメールは軽く拗ねているようだ。さんざん人を待たせた、小さな罰のつもりなのだろう。

しかし元々の性格か、すぐに苦笑いして言葉を付け加えた。

「大丈夫ですよ、すぐに何か作りますから」

「…ああ、じゃあお願いしようかな」

承ったとお辞儀をすると、軽い足取りで給湯室へ消えていった。

換気扇の音が聞こえてきたので火を使い始めたのが分かる。

「……あ、そう言えば…僕に話しかかったことって何？」

先刻——といっても何時間も前のことだが——のアーミルの言葉を思い出したのか、フィストが顔を上げた。ああ、とアーミルが頷く。

「ま、それこそ山のようにあるんだけど…せっかく二人だけなんだ、みんなには聞かれたくないことだけを言っておこう」

「うん」

前置きが重々しいのでフィストも多少たじろぐ。

二人して辺りを見回す。他に誰か聞いているものがないか目配りを利かせたが、視界にはだれも映らない。

「誰もいないみたいだね」

フィストが安心したように言う。

「……はたしてそうかな？」

「なに？」

割って入ってきた低い声に振りかえると、いつ現れたのかソファに座っていたダルタが見えた。意地悪そうににやけているところを見ると、これから始めようとしていることがばれてしまったようだ。「……まあ、俺のことは気にすんな。あちこちに言いふらすようなことはしないし」

「……だ、そうだ。フィスト、構わないか？」

「内容が分からないから何とも言えないけど……別にいいよ」

フィストが承諾したことでダルタも胸を張って二人に近づいてきた。近くにあった椅子を引き寄せて逆向きに座っている。

「まず一つ。急で悪いんだが、明日の夕方くらいにここを出発してあそこに向かおうと思ってる。フィストがもう少し休みたいならそうするが、少しでも早い方がいいだろうしな」

「……僕は大丈夫」

「……そうか」

アーミルが特大の溜息をついた。フィストのその返答をどこかで分かっていたのか、その溜息は別のものに向けられているようだ。

「二人でどこ行くのか？」

「……正直に言うが、ちょっと危険なことになるのは間違いない。だからあまり大勢で行きたくなかったんだが……」

ダルタについてはあまり心配していないのかアーミルはもう一度辺りを見回した。やはり他の人間が心配なのだろう。そしてリメルがまだ料理に取り掛かっていることを確かめ、すでに疲労感をにじませている。

「まったく……神経がすり減るな」

軽く笑い、また溜息をつく。

まだ話すのを躊躇っているらしい。アーミルにしては珍しく優柔不断だが、それ相応の内容なのだろうとフィストも覚悟している。

「……よし」

決意の息が噴き出された。

「…じゃあ、話そうか」

何かを紛らわすかのように、アーミルはガラスのサイコロをいじりながら、それでもしっかりと話し始めた。

三人の耳には、楽しげなりメールの鼻歌だけが聞こえ続けた。

夜は、更けていく。

47話 眞実を胸に抱いて（後書き）

過去話はさっさと終わらせようと無理に詰め込んだら中身がボロボロになりました。ちよつと後悔してます。

ここからは慎重に話を進めなければ、と意気込んでいますが、なにぶん勝手の分からない未熟者ですのでどこか話に矛盾が生じるかもしれません。その時は鼻で笑ってやってください。

48話 葛藤

朝は——いつも快く、人に勇気と希望を与える。

名の知れた哲学者がそんなことを言っていたなど、フィストは思いついて出していた。

いま彼の目の前に姿を現したそれは、はたして勇気と希望を与えてくれるのだろうか？今の彼にふさわしい何かを見つけさせてくれるのだろうか？

決して落ち込んでいるわけではない。フィストはただ混乱しているだけだ。昨夜アーミルと話したことがその原因になっていることは間違いない。今までそれを知らずにいたという事実をすぐに受け止めることができなかった。

まっすぐにのびた光がフィストの目を細めさせる。まだ静かな街の細く暗い通りから、胡麻のような粒がその間を縫うように飛び去っていた。

まだ他の誰もこの光の中に起きだしてこない。後ろを向くと、また夢の中に浸かりきっている面々が映った。

ユリス、アーミル、ティリア、ダルタ：リメールがいないが、もう起きて給湯室にでも行ったのだろう。残りの人間はそこで深く眠りにつき、それを羨ましく思う自分にフィストはようやく気付き、昨晩は殆ど寝付けなかったことを思い出した。

結局一晩中考えてもそれらしい答えは見つからなかったなど、フィストは自分の世界が未だ狭いことを痛感していた。

「あ」

給湯室から姿を現したりメールと目があった。大してやましいこともないはずだが、何故だか気まずい。小難しそうな表情を隠しきれなかった。

「：おはようございます、フィストさん」

どこかフィストを労わっているような挨拶だが、フィストにいつ

も通りの返事をする余裕はない。しどろもどろになっているのがリメールにも筒抜けになっている。

「…う、うん、おはよう」

「……」

「……」

言葉が消える。リメールは昨晚、話を聞き終わった直後の気持ち
が錯乱したフィストを見ているのだ。氣遣っているのか彼女もまた
何を言っているかわからずにいるようだ。だが、会話を終わりにす
るには今の間はあまりにも悪い。

「あ、あのう…大丈夫でした？昨日は…」

「う、うん…ごめん、驚かせちゃったかな」

「そ…そうですか。大丈夫ならいいんですけど」

フィストには、それが口先だけの言葉であるように聞こえた。彼
女としても何があったのか知らなければ気がすまないのだろう、そ
れは表情にもよく表れている。話がややこしくなるのでそれを口に
出して言うことはなかったが。

そこでフィストは無理に笑顔を見せた。リメールが次にどんなこ
とを聞いてくるのか、何となく分かっていたからこそその行動だ。

「フィストさんは昨日…アーミルさんと何を話していたんですか？」
予想通りの質問だった。

昨夜リメールが給湯室から戻ってきたのはアーミルの話が終わっ
た後だ。なので、アーミルの話の内容をリメールは知らない。

笑顔を崩さず、数秒の間を置く。

「ごめん、話したくないんだ」

フィストはそうやってかわした。無理な笑顔が正確に真意を伝え
るだろうという思いからだ。そのおかげか、リメールはすぐにしま
ったというような顔をした。

「あの…ごめんなさい」

リメールが謝ってくるのも早かった。

話したくないのはフィストの本心だ。教える必要をなくすために

今、彼は無理矢理笑った。本当はとても笑えないほど混乱しているにもかかわらず、だ。

あの時、他の人間には教えようとしなかったアーミルに感謝していた。彼の話はあまりに単純で、しかしこの上なく難解な渦を巻いていたからだ。

フィストにはまだその渦を抜け出す力はない。

じっくり考える時間が必要と思われた。

「フィスト？」

リメールと違う自分と呼ぶ声にハツとした。

「え？」

「ボーっとしてたけど…大丈夫？」

いつ起きたのか、ユリスが後ろからフィストを見つめていた。

「あ、ああ、うん、大丈夫。なんでもないよ」

とつさに目をそらしてしまう。ユリスの無垢な瞳がフィストを不思議そうに捉えている。

いつものように対応しなければ、そう心がけるほどますます意識が例の話に傾いてしまい、まともに声も出せなくなっていた。

「…ホントに大丈夫？ フィスト、なんか変だよ」

「……」

声も出せず、否定もできなかった。

答えの出る日は来るのか、フィストが訊いても答える者はいない。

昼も過ぎただろうか、フィストは相変わらず外を見続けていた。

今日は仕事がなく、朝からずっと今の姿勢を保ち続けている。誰も何も言ってこないのはそれで別に問題がないからだ。何をすることもなく、柔らかな日光の下に晒されていた。

冬の日光は有難いほどに暖かく、普通なら睡魔に襲われてもおかしくないだろう。だが、フィストが眠気を感じることは無かった。

フィストは悩み続けていた。迷うことなくそれを受け入れられず、

答えを模索しているうちに時間はあつという間に過ぎてしまった。

出発は今日の夜と言われた。迷いを残したまま向かうのは危険であるのはもちろんなので、今は何もかも忘れて結論を出そうと必死になっていた。時間はまだあるのだ。

しかし、その葛藤はメビウスの輪の如く果てのないものだった。気がつけばいつも振り出しに戻っている。そしてまた、同じ道を歩き出す。

一体メビウスの輪を何周したのか分からなくなったところ、ついにフィストの頭がダウンした。

精神面からの疲労で頭痛が発生し始めていた。どうしてもその先を無意識に考えてしまうが、頭痛はそれにさえ勝った。何も見ていなかった視線が、ふらふらと部屋の中を徘徊する。

何か足りない。その理由は、今のフィストにはすぐ分かった。

「：ユリスがいない」

「ああ：さっきおつかいに行ったよ。ダルタが一緒だから大丈夫」

そう答えたのは半分目の閉じているティリアだ。机に伏せていた頭を重々しく持ち上げている。

「：ダルタだけで行けばよかったんじゃないかな。無理にユリスに行かせるのは、危なくないかな」

「ダルタはすぐめ事起こすからなあ：彼だけに行かせるのはちょっと、ね」

そう言うと、ティリアはまたすぐに伏せてしまった。その様子を見ると、フィストにもようやく苦笑するほどの余裕が生まれていた。

「――そっか」

それによってようやく思い出す。

彼女がそれを知らないということ。

この、単純でややこしい真実を。

やはり彼女に伝えるべきだろう：フィストのメビウスの輪に、そんな方向の終わりが見えつつあった。

ユリスに直接伝えなかったアーミルの考えが、今になってフィス

トにも分かってきていた。

先日は大量の調味料が詰め込まれていた鞆に、今回は何種類もの野菜が入れてある。重いものはダルタが持っているのだが、量が多いためユリスの分もなかなかの重量を誇っている。前回よりはだいぶましになっているので手の痺れなどは無いが、無論長時間耐えられるような姿勢ではない。

「……ふうっ……」

交差点で信号を待つ際に荷物を下ろし、誰にも聞こえないように溜息をついていた。あまり長くはないが、それでも無いよりはましといったところだ。

ユリスにはどうにも腑に落ちないことがあった。今朝のフィストだ。

昨日までに比べて様子がおかしいのは誰の目にも明らかだった。大丈夫だといったその言葉が全く大丈夫そうではなかったのだ。その直後はユリスも、嘘をつくのが下手だなと隠れて笑っていたのを思い出していた。

もうじき信号が変わるようだ。荷物を持ち上げたユリスは、ふと交差している歩道に視線を沿わせた。

ふわ、と吹いた風にモミジ色の髪の毛がたなびいていた。

「あ……」

信号が青になる。他に待っていた人々が渡っていくが、ユリスは横を見たまま渡ろうとしない。渡ろうとしていたダルタもそれに気づいて足を止めた。

「……おい、ユリス？」

ダルタが声をかけるが視線を戻そうとしない。何かあったのかと同じ方を向くが、いるのは赤髪の女の子……十にも満たなさそうな容

姿の子だけだ。

「…ごめん、ちょっとだけ」

「そうか？ま、俺は別にかまわねえが」

荷物の重量も忘れ、ユリスはいつの間にか駆け出していた。

どうやらその建物で誰かを待っているらしい。駆け寄ってくるユリスには気づかず、背中を向けてただ立ちすくんでいる。

「リュナ」

声をかけるとようやく振り向いた。依然として何の進歩もない様子だがユリスのことは覚えているようで、警戒心を持った様子はない。

「また会ったね」

「……」

無言で頷く。

「今…誰か待ってるの？」

「……」

建物の方に視線をやった。扉のガラスからは黒っぽいスーツを身にまとった男二人が老人と何か話している様子が見える。おそらくはその二人組の方を待っているのだろうが、仮にも『家族』のような間柄ではなさそうだ。

「…リュナのお父さんとお母さんは？」

「知らない」

返答はそつけないのだが、それは決して気軽に肯定していいものではない。とはいえ、ユリスもまた自身の両親については何も知らないのだからどうしようもない。

「…そっか。私も、お父さんとお母さんのことは何も知らないの。ずっと知らない白服の人たちに囲まれて生きてきたから…」

「……」

それを聞いて何を思っているのか、そもそも何か考えているのかは全く伝わらない。

「…でもね、今は違うよ。お父さんとお母さんはいないけど、同じくらい大切な人たちが回りにたくさんいるの。リュナにはそんな人いないの?」

しばらく黙る。それがリュナ独特の会話の間合いだというのをユリスは理解しているので、せかすことなく返答を待つ。

「一人だけ」

「…一人?」

「これ」

そう言うところリュナは、首にかけている首飾りを少し持ち上げた。よく見ると、一部欠けていたり錆びていたり損傷が激しい。

「今は会ってない。けど、ずっと一緒にいる」

「…そっか」

遠くにいる大切な人、と連想したところでルフィーネの顔が浮かんだ。ユリスにとっては彼女もまた『家族』に匹敵する大切な存在であることに相違ない。

「…そういえば私にも一人いるなあ…もう会えない大切な人」

「……」

「…ルフィーネっていうんだけど、その人、少し前に死んじゃった…だからもう、会いたくても会えないの」

「…ルフィーネ…?」

そこで初めて、リュナの表情に変化が現れた。

目を見開き、あからさまに驚いている。

「…どうしたの?」

何を言うよりも先に、リュナは再び首飾りを持ち上げた。

「…これ、ルフィーネ」

「…!?!」

「…ルフィーネ…死んだ? 本当に?」

「………うん」

自分の発言が思いがけない方向に転がり、ユリスもはつきりと驚愕の表情を浮かべていた。たまたま街中で知り合った子がルフィー

ネの知り合いだとは予想のしようもないだろう。

「…あっ」

一瞬気がそれた瞬間、リュナは走り出していた。ユリスは荷物を持って追いかけることもできず、その姿はすぐに建物に隠れて見えなくなった。

「…：リュナ：」

自分がどれだけ軽はずみな発言をしてしまったのか、ユリスは後悔していた。知らないのならわざわざ伝えることもなかっただろうに、彼女のたった一人という大切な人がこの世にいないことを教えてしまったのだ。そう考えると、自身がたまらなく憎くなった。

「：ユリス、どうしたんだ？あの子はどっか行っちゃったみたいだが」

遠くから様子を見ていたのだろうダルタがやってきたのはそれから少ししてからだった。

49話 一人じゃない

「フィスト、ダルタ、そろそろ時間だ」

努めて明るく、アーミルが言った。横に大きなバッグを置いている。

「他の三人には、泊まりがけでお得意様との取引だって言っておいた」

つまり、殴り込みは二人だけで、ということ。

ユリスやティリアやリメールは関与しないということ。

「それを聞いて安心したよ」

フィストは安心して胸をなでおろした。失敗すれば即身柄拘束、最悪の場合死すらもあり得る危険なものだ、彼女たちを巻き込みたくはなかったのだ。フィストは一人で行くべきとも考えていたのだが、それはそれで不安だったようだ。

この部屋に名残を惜しみつつ、フィストはゆっくりと立ち上がる。連動したようにダルタも勢いよく立ちあがった。

「ずいぶんと因縁浅からぬ取引先様のようだね、アーミル？」

「…!？」

その勝気な声は、扉を塞ぐように立っている三人のうちの一人から発せられていた。

「…ティリア」

「私だけじゃない。この御二方も御同行希望だそうだからね」

ティリアの横に、申し訳なさそうに——ティリアとは対照的な様子で——ユリスとリメールが苦笑いして立っていた。それがどういった意味を持っているのか、聞く方が野暮というものだ。

「…ここで待ってるなんて無理だよ、私だって無関係じゃないんだから。そうでしょ、アーミル？」

「…ちっ、俺は何も話してないぜ？」

頭を掻きながらダルタが呟く。アーミルもそれは疑っていないよ

うで、ただ驚いただけの表情で三人を見据えていた。

「三人とも：分かったのか：？」

すると、リメールが何も言わずにぺこりと頭を下げた。どうやら昨晚の言い回しでリメールにばれてしまっていたようだ。二人にそれを伝えたのも間違いない。

「すみません、アーミルさん。：でも、私もじつとなんかしてられなかったんです。私たちにもきつとできることはあります。お願いします、私たちも連れて行ってください」

「：お願い、フィスト」

ユリスも重ねて頭を下げた。慣れないことなのでフィストもひるんでしまう。

「……俺たちが何で言わなかったか：」

「分かってるよ。分かった上でこうしてるんだから。首を縦に振るまでここはどかないからね！」

ティリアが勝ち誇ったような顔で三人を見つめていた。

「：けど、ブルーイーグルの切符は？俺は三人分しか――」

そこで言葉が止まった。ティリアが三枚の小さな紙をひらひらとアーミルに見せつけたのだ。大きさも、色も、アーミルの持っている三枚と何一つ変わらない物であるのは言うまでもない。

「リメールの行動力は拔群なんだから」

「……ハア……」

アーミルが溜息の後、横のフィストに視線をやった。フィストの見る限りでもその顔は万事休すと音を上げている。その目はフィストに謝っているようでもあった。

「：分かったよ」

アーミルが降参して、両手を小さく上げてその申し入れを承諾した。その途端、三人の表情は満面の笑みへと変わった。

「アーミル：いいのかな：」

「：すまない。危険なことは分かりきってるからな：でもあいつらはそれを承知で言っているんだろうし、こういうときは梃子でも動

かないからなあ……」

そう答えられたフィストが三人を見たが、その笑顔からはそんな覚悟をほとんど感じることはできなかった。

だが、同時に不安も不思議なほど感じなかった。

「じゃあ、今一度確認するぞ」

アーミルが大きな声で一氣に騒がしくなったその場を制した。

「今回の目的は何だ、フィスト」

急に振られたフィストは、ほんの一瞬復讐と答えそうになり、何か違うという感覚からすぐに引っ込めた。

これは復讐のためじゃない――

「……あの研究所の、間違いを正すため」

小さな声になったが、それを聞いたアーミルは安心したように笑った。

「復讐とか言ったら張り倒してたかもしれない」

「……え……」

自分は危ない橋を渡りそうになっていたのが分かり、フィストの背中を冷たい汗が流れた。何か違うという感覚はそこから来ていたのかもしれない。

「確かに彼らの過ちを正しに行くのも目的の一つだ。しかし、彼らがそんな凶行に走ったのはそれなりの理由があるはずだ。それを解明して取り除く必要もある」

「……つまり、その二つが今回の目的だってことか」

「ああ」

ダルタが腕を組みながらそれらをまとめあげた。

「……あ」

ユリスが恐る恐るといった様子でそこに割り込んできた。真剣な表情で三人の視線がユリスに向けられる。

「私……自分のこと調べたい……」

フィストが固まり、それを隠すようにアーミルがその言葉を受け

止めた。

「まだ何の手がかりも見つかってないんだったな。じゃあ、目的は三つ。凶行の抑止、原因の究明、それとユリスの正体。異論はないな？」

全員を一通り見渡す。それぞれが全員の顔を見渡し、そして一緒に、大きく頷いた。

「よし——出発だ」

各々が大きな鞆を持ち、ぐっと表情を引き締める。

扉が勢いよく開かれた。

ブルーイーグルの運航は、驚くほど平常通りにこなされていた。

あの事件からまだ数日。この運行再開の早さは通常では考えられなかった。さすがに食堂車は別のものと変えられ、一部の個室も使用禁止となっていたが。

乗客もだいぶ少数となっていた。どんなに急いでいる人間でもやはり死にたくはないのだろう。逆に、自分たち以外に一人でも乗客がいることがフィストには意外だった。

ティリア、リメールは座席についたまま寄り添いあって深い眠りにおちていた。ダルタは何を考えたのか五人とは離れた席に座っている。フィストの左右に座るアーミル、ユリスは、特に何か話すわけでもなく座ったまま目を開いている。

ただユリスは何か思うところがあるのだろうか、時折立ち上がってふらふらとどこかに行き、しばらくしてまた戻ってくるという行動を繰り返していた。

今また、ユリスが唐突に立ち上がって前方車両へと歩いて行ってしまった。

「…やっぱり…妙だな…」

アーミルが口だけを動かして小声で言う。

「え？ユリスが？」

「違う。前の方にいるあの男たちだ」

見ると、左斜め前の座席群の中に確かに男が三人並んで座っている。しかし動きは全くなく、何が妙なのかフィストにはいまいち分からぬ。

一人が立ち上がり、後方車両へ歩いていった。横をすぎる時一瞬目が合ったが、やはりそれほど変わった様子は見受けられない。

「……うーん、何か変かな？」

「もともとおかしいと思う部分もあったんだ。この列車、運行再開が早すぎると思わないか？」

「……それは……確かに……」

「きつとやましいことがなければもつと時間を開けただろう。どうせあんな事件のあった列車に乗るモノ好きはいないだろうしな。なのにあれだけ急いで動かそうとしたってことは、動かさなければいけない理由があるってことだ。乗客は皆無なんだ、何かをこっそり運ぶのにこれほどいい運搬手段もないだろう？」

アーミルが何を言いたいのかはフィストにも良く分かる。

「……あの研究所、かな」

「多分な。今歩いていった男も、あの正確で規則的な歩き方は軍隊経験があるんだと思う。分かっていったことだが、この国がまるごと関わっているんだろうな、あそこは」

それはつまり、同じ列車に乗っている自分たちにも危険があるということになる。だが、それでもフィストに臆する心は微塵も無い。多少の危険はすでに覚悟の上なのだから。

「とりあえず、目立つ行動をとらなければ危険性も減るだろう。ここで騒ぎを起こしてもメリットは無いしな」

前方の車両まで来ていたユリスは、それ以上自分の意思で動くことができなかった。

目の前にある個室の扉。そしてそこに提げられている立ち入り禁

止のプレート。

以前一度だけ入ったことのあるそこは、もはや何人たりとも受け入れることは無いしかった。

ここで彼女：ルフィーネは死んだ。時間の空いた今でもユリスは鮮明に当時のことを思い出せる。

彼女がどんな人生を歩んできたのか、あれだけの会話ですべて分かるはずもない。その中のどこかにリユナと関係する何かもあったということだが、もっと早く知っておきたかったと肩を落としていた。

ここで何か出来るわけでもないのだが、動かずにはいられなかったのだ。もしかしたらルフィーネがいるかもしれないなどという、浅はかな希望すら持って。

いるはずも、ないのだ。

「……」

人が死ぬということは誰かが悲しむということ。そしてそれは今、ユリス自身に最もよく当てはまる。彼女はそれが分かっていたし、そして辛かった。

「ん」

服が引っ張られる。フィストが来たのかと思い振り返る。

「…あれ？」

「……」

昼間に見た紅葉色が、またも感情を見せずにユリスを見つめていた。だがほんの少しだけ、以前よりも表情が緩やかになっているようにも見受けられる。

「…リユナ」

もしルフィーネのことを引きずっていたら。そう考えていると、気まずさからユリスは彼女の顔を直視できなかった。何も顔に出さないで窺い知ることも出来ない。

「……ありがとう」

「え？」

ユリスには全く予想の出来なかった事態だ。昼間の別れからもう会うこともないかもしれないと思っていた人が、まさか同じ列車に乗っているとは。

更に顔を合わせた第一声は感謝の言葉だ。むしろ恨まれて然るべきと考えていたユリスは訳が分からなくなっている。

「……何が？」

「ルフィーネのこと。教えてくれた」

「……うん、そんなこと……私、言わなくていいようなこと言っちゃった気がして……」

「知っておきたかった。嬉しかった……」

自身に乗っていた重い革袋がどさりと音を立てて地についたような気がした。

そう考えてくれることが何よりの救いだった。

「……私も、ありがとう」

「………」

ユリスが顔を伏せると、リユナはくるりと踵を返した。列車の後方へ歩みを進めていく。

「……私、まだ一人じゃない」

「……え？」

「ユリスがいる」

照れ隠しか、リユナがユリスに振り返ることは無かった。

ここに来てよかった……ユリスはようやくそこに向かった理由を見つけ出すことが出来、部屋に向かって黙祷をささげた後席に戻っていった。

50話 研究所『壺』

森の中に、何も変わらずにそれはあった。

まるでくり抜いたような草原の中に、まるで入道雲を落としたような白さのまま。

深夜だった。人口の明かりは皆無と思われそこに白い塊が妖しく浮かび上がっている。ぼやけた輪郭にはフィストもユリスも、アーミルもティリアも見覚えがあった。記憶をたどろうとするだけでいずれも吐き気に似た気分が苛まれた。

その林と茂みは建物を取り囲むようにその周りだけ姿を消している。それはまるで建物を浮かび上がらせているようでもあり、人を寄せ付けないまじないのようでもある。

目の前、五十メートルほど先には正面の入口が見えている。六人はその茂みの裏に円になって座っていた。アーミルがその中心となり、全員に説明を施している。

「この時間は全員が二階に集まっているはずだ。今なら裏から入ればまず見つかることは無い。：もちろん、確実じゃないけどな」

誰も反応らしいものを見せない。緊張のせいもあるだろうが、半分は恐怖も占めているだろう。

建物から深い闇のような瘴気が津波のように押し寄せてその場を圧迫している。特にフィストは、それが以前よりもさらに強くなっているのをひしひしと体で感じていた。そしてフィスト以外も、フィストほどではないしろその影響を受けて多かれ少なかれ恐怖を感じている。

「うーん、それで…」

アーミルが言葉を詰まらせる。親指の爪を噛んでいる様子から、彼の中で最後の迷いが膨らんでいるのが窺える。

「…三人とも、引き返すなら今だぞ」

「……」

その問いは聞き飽きた、と言うようにティリアが嫌悪感をあらわにした。それでもアーミルはまだ吹っ切れないでいるようだ。何かを言おうとしたが、哀しそうに目をそらして暫く黙りこんでいた。

「俺とフィスト、それからダルタが先に様子を見てくる。安全が確認できたら呼びに戻るから、それまではここで待っていてくれ。すぐ戻る」

それだけ言ってフィストに目配せした。フィストはすっきりしないまま立ち上がり、歩き出したアーミルの後ろについた。それにやや遅れてダルタも立ち上がる。他の三人はまだその場に座ったまま、一応はアーミルに従うつもりであることを主張していた。

「……」

だが、急に何か思い出したようにユリスが立ち上がってフィストに駆け寄った。三人のいた位置から見えなくなる寸前のところでフィストが足を止める。

「…ユリス？」

「……フィスト」

フィストがやや切なげに振り返ると、ユリスはその手に何かを握りしめていた。フィストがそれに気づいたことを確認すると、表情をほころばせてその手を開いた。

何が握られていたのかちゃんと確認する前に、ユリスはそれをフィストに渡した。ちゃんと見なくとも、フィストにはそれが何なのか良く分かっていた。

「…返すの、遅れちゃったね」

「いや、別に…」

もらうとすぐに、以前入れていた胸ポケットにおさめた。それを渡しておきたかったのだろうが、ユリスは更に何か言いたげだ。

「…私ね…これ、すごくいいものだと思う」

「…」

「だから：今度また：貸してもらいたいと思ってるんだ」

「…」

再びこれを貸す。フィストがそれを実行するには、最低限この場面を生き延びて帰ってこなくてはならない。

このタイミングでユリスが渡してきたのは、それが言いたかったからなのだろう。面と向かって言わないことに対してやや笑みをこぼしつつ、フィストはまた貸すことを約束した。ユリスの笑顔は更に明るいものになった。それも一瞬のことで、その場の緊迫した雰囲気に戻ってしまう。

「……じゃあ：気をつけてね。絶対、死なないでね」

本心ははっきり言っておきたかったようで、結局ユリスははっきりそれを口にしてしまった。その逼迫した心情を理解した上で、フィストはもう一度頷いた。

「アーミル！」

座っていたティリアも何か想うところがあったのか、フィストを待っていたアーミルに声をかけた。

「……ホントに、すぐ戻ってきてよ？」

「なんだ？俺がいないと不安か？」

「…バカっ！」

いつになく子供っぽいティリアに、アーミルのみならずダルタやリメールも可笑しそうに笑った。顔を赤くしていたティリアもそれにつられてすぐに笑い始めた。場の雰囲気は僅かだが和む。

「…それじゃ、ちよつと行ってくるよ」

その機を逃さず、アーミルをはじめ三人はちよつとしたお使用のように気軽な様子で茂みの向こうへと歩いていった。

その先にあるのは、相変わらずの白。

「……フィスト…」

ユリスは三人の背中が見えなくなってもずっとその方向を見つめていた。再びその方向から彼らの姿が見えることを待ち望んでいる

のだ。それを気持ちばかりが先走ってしまい、そのような行動に表れているのだろう。

茂みからはみ出しそうなその頭に、ティリアが後ろから手を置く。「大丈夫だよ、あの三人に限って死ぬなんてありえないって」
力強い笑顔。

「私たちをここで待たせたのはきっと、連れていくなら少しでも安全を確保しておきたかったからなんだと思う。私たちも無理言ってついてきたんだし、それくらい分かってあげないとね」

急に寂しそうになった。

「ユリスさん——待ちましょう」
リメールの繊細な笑顔。

「お二人は確実に、私たちの身に危険が及ぶことを何よりも恐れています。私たちにも出来ることはあるでしょうが、それ以上に足手まといになることの方が多いのは間違いないです」

笑顔は崩れなかったが、言うという行為そのものが辛そうな様子だ。

「…そう、だよね」

ユリスは自分の左胸を押さえ、不安に駆られる自分自身を落ち着かせようとした。

「でも、そうかもしれないけど…ティリアも、リメールも…」

言葉は、こみあげる感情が一度突っかからせた。やはり落ち着き切れなかったらしい。

「…強がりすぎだよ」

その場にいた全員の神経が、一瞬凍った。

「危ないのはあの三人にとっても一緒なのに…なんであの三人だけが無理するの？何でティリアもリメールも何も言わないの？」

「……」

「私は…後悔するんじゃないかって思うの。もしあの三人に何かあったら、待ってるだけだった自分を責めると思う。それはずっと…一生引きずる足枷になる」

「……」

「私は行きたい！すぐにでも後を追いかけてい！」

「ユリス」

「ユリスさん」

子供をなだめる親のような声だ。

「落ち着いて」

二人の声は重なった。

ユリスは黙った。それは諦めたからではなく、二人の眼も自分と同じ色をしていることに気づいたからだった。

「…ま、結局」

ティリアが頭を掻く。

「この中の誰も、ある意味でアーミルを信用してないってことなんだね」

ダルタが扉の中の様子をうかがっている。扉に鍵がかかっていないのはあまりに不用心に思えたが、彼らにとっては好都合だ。監視カメラらしいものも見当たらない。

アーミルとフィストは並んで壁に張り付いている。すぐ横でダルタが中を確認するように、二人もあたりに人の気配がないか常に気を配っている。

必要以上に、その場は静まり返っている。

「…アーミル」

耐えきれずにフィストが口を開いた。アーミルは建物の表の方を気にしていてフィストの方を見ない。

「嘘つき」

「…分かってたか」

アーミルが降参したように言った。軽く苦笑いしているようだ。

「分かるよ。嘘つくの下手なんだね。あの三人にばれてるかもよ？」
「…それは…困るなあ…」

誤魔化すように笑っている。あまり口に出して言うべきではないのかもしれないが、フィストとしてもそこははっきりさせておきたかった。

「…どうせあの三人のところには戻らないんでしょ？」

「ああ。やっぱりあの三人を巻き込むのは嫌だからな。ユリスのことは後でお前が伝えておいてやれ」

投げやりなアーミルに対し、フィストは逆にある種のおかしさを覚えた。

「さあ、本当にまた会えるかな？」

「次に会うとしたら、全てを片づけた後か、あるいは――」

「死体になって放り出された時」

おそらく、ダルタもこの会話を聞いているのだろう。それを態度に全く見せないところは流石と言うべきか。

「…フィストは、俺を責めるか？」

口には出さなかったが、フィストは心の中でそれを否定した。それはあるべき嘘でもあったし、分かっている指摘しなかった自分にも気づいていたからだ。

「…大丈夫だよ、僕らは死なない」

笑顔に力を込める。

「お前も言うようになったな…少しは成長した、ってことかな」

「…ちよつと違う気が…」

「おい二人とも、そろそろおしゃべりは終わりにしようぜ」

ダルタが手で合図を送った。二人も表情を引き締め直す。

音を一切立てず、三人は扉の内側に滑り込んだ。

その廊下は依然として何も変わっていないかった。誰もいないと思えるほど静かで、雲の内側とも見られるほど白く、無個性な扉が一

定の間隔でどこまでも続いている。

ここで狂気に満ちた実験が繰り返し行われ、そして十三年前にはギースの悲劇もあった。そのはずだが、その無機質な空間からそんな禍々しいものは何一つ感じられない。あるのは、まさしくただの廊下だ。

アーミルは黙々と歩いて行く。時々立ち止まっては何かを思い出すように考え込み、暫くしてからまた歩き始める、といったことを繰り返していた。廊下は左右に分かれ、もしくは脇に階段を備え、何かに引き寄せられるように二人は進んでいく。

右に伸びる廊下を曲がると、すぐ目の前に突き当たりの窓が映った。そこは廊下というよりただのくぼみに近く、横に扉を一つ有して何とか廊下の名を保とうとしていた。

アーミルが暫くぶりに二人に振りかえる。

「ここは：倉庫のはずだ。この中で二十分ほど隠れる」

「一応理由を聞いておこうか」

訝しげにダルタが聞く。

「今の時間は所員全員を集めて二階でミーティングをしている、はずだ。出歩く危険は減るが、ミーティングが終わらないと目当ての人物に会えない。で、ミーティングが終わるまでは待たなきゃいけない。出歩くよりも、ここで隠れたほうが安心できるだろ？」

「…なるほど」

思ったほど面白い内容で無かったからか、ダルタは興味を失ったように低い声で返答した。

「……ヴェクス…」

黙って二人のやり取りを聞いていたフィストだが、彼はどうしても『目当ての人物』の顔が頭に浮かんだままそれを忘れられないでいた。

会ったこともないはずなのに、その顔は分かる。

かつての母の上司、ユリスの因縁の相手、この研究所の所長。情報に嫌というほど彼のもとへ伝わってきていた。

情報の限りでは、到底話を聞いてくれる人物とは思えなかった。それでもフィストはなるべく穏便に事を進めることを願っているのだ、彼の説得を試みようとしていた。説得に応じてくれれば、それほど速く、かつ報われる道は他にない。

「…人を殺しに來たわけじゃない、か…」

自分がファルに言った言葉がよみがえる。

そしてフィストは、それが自分の妄想であることに気づかされた。躊躇していたのか、アーミルはようやく二人に背を向けてゆっくりとドアノブを回した。

小さな部屋に、木箱が幾つか積み重ねられている。黒っぽく変色しているものもあれば、若干空いた隙間から刺激のある薬品臭を漂わすものもある。危険なのは一目瞭然なので、三人はそれらにぶつからないよう慎重に奥へと進んでいく。

「…二十分か…短いようで長いな」

「この部屋なら、ミーティングが終わったらそれっぽい音が聞こえると思う。それまではあまり動かない方がいいだろうな」

「……」

それから三人は黙った。この場にふさわしい話題は三人とも生憎持ち合わせていない。それぞれ何も話す気になれず、最高の静寂がそこを支配している。

早朝の裏路地、深夜の樹海、そんなものはこの場には遠く及ばないほど賑やかだ。

無生物、人工的、邪悪…このどれか一つが欠けてもこの静寂を創りだすことは不可能だ。全てが揃ったここは、まさしく完璧と称する他ない。

時が歩みを鈍らせる。今まで宇宙の歩んできた時が凝縮してそこを流れているようだ。

沈黙。

アーミルが小さく咳払いした。

沈黙。

フィストが溜息をついた。

沈黙。

ダルタが腕を動かすと、服の擦れる音がした。

また、沈黙。

二十分とは、あまりにも長い時間だった。

51話 研究所『式』

大量の椅子が引きずられるような音が振動となって伝わってくる。それにより、二十分というあまりにも長い僅かな時間が過ぎたことが分かった。三人は顔を合せ、同時に頷く。

しばらくは何かを引きずったりするような音が聞こえていたが、すぐに耳から分かる程度の人の気配は消えた。

「よし、行こう」

久しぶりに聞いたアーミルの肉声はいやに重々しく、慎重さを醸し出している。そしてその雰囲気のまま、何かに恐れるようにゆっくりと扉を開けた。

自分の心拍数の大きさを、フィストはこの時とてつもなく強く感じていた。

廊下は何も変わっていない。相変わらず白く、そして長い。それでもやはり二十分前とは明らかに違って、得体の知れない何かがそこら中に蠢いている。逆に全てが変わってしまったかのように、その『何か』は確かに存在している。

「走るぞ！」

アーミルがそう言ったが、彼自身も含めてすでに走り出していた。

「……」

「フィスト、大丈夫か？あまり緊張らないでいいぞ」

走りながらダルタが励ましの言葉をかけた。彼は特にフォームが崩れるでもなく余裕のある走りを見せている。それに比べ、フィストの余裕は皆無だ。前に行くアーミルの背中を追うのに精いっぱい、足取りも不安定に走り続けている。

「…地図は頭に入れておいたつもりなんだが…」

先頭でアーミルが何かつぶやいたが、後ろの二人には聞き取れなかった。聞き返すつもりもなかったのだが、逆にアーミルから言葉が飛んできていた。

「対象は人間だ。特定の場所にいるとも限らない。一応そいつの部屋は抑えてあるからそこに向かっているんだが：そこにいなかった場合、この研究所のどこに行けばいいのかは分からないんだ」

「：まあ、大丈夫だよ。きっとなんとかなるよ」

聞いている側としては、もうその部屋にいるのを祈ることしかできない。曲がり角や扉は何の特徴もないため、後の二人が道を覚えることはほぼ不可能だ。

道標となっているのは前のアーミルだけなのだ。

後ろの方で誰かが叫ぶのが耳に届いた。流石にいい加減気付かれなくても仕方ない頃だろうと、半ば諦めに近い溜息が三人から何となく洩れる。一瞬後ろを見ただけでもこちらに向かってくる研究服の姿が確認できた。今はまだ一着だけのようだが、これから増えるのはまず間違いない。フィストの走りはふらついているのでその映像は乱れ、位置関係すら掴むことは出来なかったが。

「っあ：！」

「：フィスト！？」

前を向こうとして、足がもつれて見事に転んだ。二人はそれにすぐ気付いたが、全力で走っていたのだからすぐに止まれるはずもない。たちまち研究服が二人より先にフィストに追いついてしまった。「動くな！」

銃口がフィストに向けられる。同時に残りの二人にももう一丁の銃で狙いを定めているので近づくことすら叶わない。隙がなく、ダルタもアーミルも完全に動きを封じられた。

「わざわざ戻ってくるなんて馬鹿なやつだ。こんな下衆に我々が振り回されていたとは情けない」

倒れたままの姿勢で銃を突き付けられ、フィストは身動きが取れ

なかった。伏せているので目で確認はできないが、死が目の前に構えているはずだ。

しかし今のフィストには、恐怖という感情は不思議と存在しなかった。

奇妙な思いがフィストの中で交錯する。

——この状況、『あの夜』の続きなんだろうな。本当ならあそこで捕まって殺されてただろうに、多くの人と出会って、助けられて……そんな人たちを犠牲にして、ここまで生きてしまった。殺されるのがその罰なのだとしたら、受け入れるのも悪くないかもしれない。

ああ、今までアーミル達と過ごしてきたあの日々は僕にとって何の意味があったんだろう。一緒にいて楽しかったし、ずっと一緒にいたいと思った。けど、もう死んでしまうのにそんなものに意味があったんだろうか。あったとして、それがなんだというのだろうか？別にどうでもいいか。もう死ぬんだから。

ファルさんに鍛えてもらったけど、あんまり活かせなかったなあ。

……そういえば、ユリスに絶対死なないって約束したんだっけ。

ごめんユリス。約束、守れそうにないや。

フィストは一瞬、寂しそうに笑った。

誰かが研究服の肩をたたく。

「じゃあ、ひとつ聞いていい？」

ぎよっとして振り向く。

「そんな下衆にやられる気分って……」

刹那。

「どんな感じ？」

「なっ……があっ！」

鋭い拳が言葉を潰し、頬を深く抉った。口から血が洩れ、空中で半回転した後倒れた。すぐに立ち上がろうとしたが、体を起こそうとしたところで別の銃口が彼へと向けられて動きを止めた。

「声はあげないでくださいね」

悪魔のように優しい笑顔はある種の恐怖を植え付ける。研究員が自分の置かれている状況をようやく理解するのと同時に、縄を持った小さな影が現れて縛りあげ始めた。

他に研究服の姿はなく、固まっている二人を尻目に場は落ち着きを取り戻しつつあるようだ。

研究服を殴り飛ばした長い茶色の髪がアーミルにゆっくり振りかえる。

「ふふん、大丈夫だった？」

ティリアが自慢げに笑った。顎をゆっくりと撫でるその様は救世主としてはあまり見栄えのいいものではなかったが。

「テッ：バカ、お前待ってろって言ったろ！」

「私たちが来なかったら今危なかったよね？」

「う…」

つい先刻何も出来なかった自分が思い返され、アーミルは反論のしようがなくなってしまう。リメールがそれにさらに追い打ちをかける。

「それに、様子を見てくるって言って何十分も戻ってこなかったのは誰でしたっけ？」

「ぐう…」

「アーミル」

「…すまん」

それが精一杯の一言だった。

「ま、これでおあいこってとこかな」

「ん…あ、ありがと…」

ティリアに助けられながらフィストはようやく立ち上がり礼を述べたが、ふと自分に向けられている視線に気づいた。

一通り縛り終わったユリスが今にも泣きそうな顔をしてフィストを見つめている。そしてフィストと目が合うとその顔から一変して怒りを露わにし、フィストに詰め寄った。

「……」

「…ユリス…」

「……」

不機嫌な表情がフィストには何より痛い。

「……」

「…心配したよ」

怒鳴るでもなくそう言い、すぐに下を向いてしまった。

「…ごめん」

俯くユリスにフィストは何を言っているのか分からなかった。ついさっきまで死を受け入れる心境だったフィストに何か言う権利は無いのかもしれない。

「約束を破りそうになってたからな、平謝りだろ」

「ダルタも何も出来てなかったじゃない」

ティリアに睨まれ、ダルタもやりにくそうに苦笑いした。

何故かしんみりしたその場の空気を、遠くからの足音が引き裂く。

「…おっと、こんなことしてる場合じゃなかったな。…三人も早く」

「最初からそう言っていればよかったんだよ」

そのやり取りを最後にふざけ合いをやめ、それぞれの表情が一気に引き締まった。そして全員がまとまると、風のように駆け出していた。

突き当りにある一つの扉の前で先頭のアーミルが足を止めた。その扉はこれといった特徴もないが、扉の斜め上に珍しくプレートが掲げられていて『資料庫』とされていた。アーミルが後ろに振り返り、指で合図を送る。

「ユリス、調べ物ならここだ」

ユリスがあからさまに嬉しそうな表情になった。それも、後ろに姿の確認できる研究服を思い出してすぐに引き締まったそれに戻る。「…仕方ねえ、俺があいつらの気を引いてるから、その間にややこしいこと決めといてくれ」

人数が多くなっているため、あまり機動力はよくない。ダルタの腕を知っているらしいアーミルやティリアはそれに反論せず、「すまない、頼む」とだけアーミルが言った。あくまで攪乱するだけのつもりらしく、持っているはずのナイフは取り出さない。両手のこぶしを握りしめ、数の増えた研究服の方へ飛び出していった。

「さて、早急に今後のことを決めよう」

彼の言う『ややこしいこと』とは、すなわち人員の分配。

誰が何をするのか、計画なしに大人数が動いていればすぐに破滅の道をたどることになる。

「そうですね…どうしましょうか」

リメールが呟く。時間が無いのもそうだが、簡単に決めるにいくのもまた事実だ。少なくとも女性三人はそう考えているようだ。

「まず、勢力は二つ。ここでユリスのことを調べる班と、敵の親玉を探す班」

早口にアーミルが状況を整理する。だがあまり考えた様子もなく、矢継ぎ早に結論を述べ始めた。

「親玉とぶつかるのは、俺とフィストは絶対だ。…俺たちはいろいろと借りがあるからな。それから、ユリスは勿論自分のことを調べたいんじゃないのか？」

フィストと一緒にいたいという気持ちもあったのか、ユリスは一瞬悩む仕草をした。それでも彼らの状況や気持ちを察したらしく、小さめに首を縦に振った。

「あとは…分かってるな？まあ敵が来ないとも限らない。いざとなったらユリスを守ってほしいんだ」

残った二人と目を合わせる。合流したばかりとはいえ、これ以上危険なところを任せたくないという気持ちが二人にもよく伝わって

いた。またしてもアーミルに与えられた待機のような扱いに対して、二人は異論を唱えようとしなかった。

「…早めに見つかったら、加勢に行くよ。まあ余裕があればの話だけど」

「…ありがとう」

アーミルが頭を下げた。時間がないことを焦っているのか、言葉での返事をしないままティリアがすぐに扉を開く。中に誰かいたとしても不意さえ突かれなければティリアの敵ではないだろう。

「…失礼します。お二人とも、頑張ってくださいね」

続けざまにリメールも中に入る。残されたのは、あとはユリスだけ。

「……」

何か言いたそうにフィストを見ている。

フィストは何も言えない。先刻のことをまだ怒っているのかもしれないし、フィストの身を案じているのかもしれない。出会った当初のような感情のない顔をしていて、フィストにその心境をくみ取することはできなかった。

そして黙ったまま、ユリスも扉の内側に消えた。

「…ユリス…ごめん…」

扉に向かって言っても、彼女に届くわけではない。

「謝るのはいつでもできる、もう行くぞ」

廊下の先の方には、『氣を引き付ける』の域を逸脱した暴れようのダルタが確認できる。彼を戦闘班にするか調査班にするか、彼に聞いた時にどう答えるかは目に見えている。

「敵の目もなるべくここから外したいし、適当に目立つ必要もあるな。もう十分目立っている気もするが」

「大丈夫かな、大将を見つける前にやられないといいけど」

「その意味でもダルタは戦闘班こっちに連れて行くべき、だと思う」

「僕も」

意見がまとまったのを確認すると、未だ奮闘しているダルタの方

へ走り出す。二人の目にはとても彼には心配する必要があるように見えなかったが。

「ダルタ」

アーミルの声に、動きを鈍らせないまま顔がそちらへ向いた。

「お、決まったかい？ま、聞くまでもなさそうだがな」

「ああ、敵将を叩くのは変わらず、俺たち三人だ」

「……そうか」

一部の研究服がアーミルとファーストに気づき、二人にも銃口を向けようとしてくる。ダルタがそれらを残らず叩き伏せているので銃弾は飛んできそうにない。

「敵の気を引きつけつつ奴を探す。時間との勝負だ」

どこに向かえばいいのか、知っているとしたらこの三人ではアーミルだけだ。彼がどこまでこの研究所の情報を得ているのか、頼れるのはそれだけなのだ。標的が思い通りの場所にいるとも考え難いので、そうそうすぐに見つかるとは思えない。

それでも、退くことはない。ただひたすら前進するだけ。

何があろうとも、彼らがその場所に縛られることはもうあつてはならないのだから。

彼ら自身がそれを望んでいないから。

「…ねえ、私気になったんだけど」

「ユリス？どうかした？」

「アーミルは…私たちを連れていく気が無かったんなら、どうやって私のことを調べるつもりだったんだろう…」

「…んー、決着付けてからにしようと思ったんじゃない？」

「そうかな…」

「何にしても、私たちがいま調べられるんだからいいじゃないですか」

「……うん」

51話 研究所『弐』（後書き）

お久しぶりです。でも、まだテスト終わってません。諦めた…？
のかもしれませんが、とりあえずまた投稿再開させていただきます。

52話 研究所『参』

右に曲がった。アーミルの背中が一瞬視界から消えるだけで何故だか不安に駆られる。追って曲がればその背中はずぐに目の前に現れた。

左に曲がった。後ろの足音も気になったが追いつかれることはないだろうとフィストは踏んでいる。無論、転んだりすれば別だが。曲がるたびに転びそうになるのだが、なんとか体のバランスを保って倒れずに済んでいる。

「この先を右に曲がったら目的の部屋だ」

アーミルが前から叫んだ。目的地、というのはおそらくこの研究所の所長の部屋だろう。そこに彼がいるのか、三人ともただひたすら祈るばかりだ。

右に曲がる。その先の廊下はあまり長くなく、突き当りに一つだけ扉を有している。飾り気のない姿で、そこが本当に目的地なのか若干疑いたくなってくる。だが他の扉はないのだから、もうそこに飛び込むしかない。

「このっ！」

扉を蹴破る。そのアーミルに続き、二人も流れ込むように部屋に入り込んだ。

「…なんだと…？」

確かにその部屋は、目的地で違いなかった。

置いてある調度品や高価そうな椅子など、所長の部屋らしい雰囲気は誰が見てもよく感じ取れる。

だが、肝心の彼の姿がそこには無かった。

驚くほどその部屋は静かだったのだ。

その静寂がじつくりと三人に染み込んでいった。

「くそ…いないのかよ…!」

ダルタが悔しそうに拳を握り締めていた。いくら部屋の中を見回してみても、人の姿はおろか生物的な影は何も見当たらない。

部屋の外から走る音が聞こえる。追手は確実に三人に迫って来ているようだ。

「どうしたもんかな? 当てはもう無いんだろ?」

「ああ…部屋の数が多い、どこにいるかの予測はほとんど不可能だ」
冷静を装って考え事をしているようだが、耳に迫りつつある足音はそんな余裕を持たせたりはしない。結論はなかなか出てこないようだ。

「……」

(—————)

「…?」

焦燥の様子だったフィストの顔がその雰囲気から一瞬で離脱した。催眠術にかかったように切迫した感情が欠落し、追手の迫る廊下へ視線が向けられている。

「…声が…聞こえる…」

「は? 声?」

ダルタが呆けた声を上げるが返事をしない。ダルタの耳には何も聞こえないのだが、フィストは確かにその声を聞いてそれに誘いざなわれているらしい。現実意識が残っていないのか、そのまま廊下に出ようとしている。

「おい、危ないぞ!」

アーミルが肩を掴むとようやく目が覚めたらしく、困惑した様子で辺りを見回した。

「どうした?」

「…聞こえた…どこにいるのか、今聞こえたんだ」

「……それは、お前にレポートを盗ませた『声』か?」

「…うん、そうだ。あれはそれと同じ声だった」

普通ならば軽くあしらわれるような戯言なのだが、アーミルはそ

の『声』の信憑性をどこかで容認していた。だからこそフィストの言うその可能性にかけようと決断する気になったのだろう。

「…よし、案内してくれ」

フィストもすぐに頷いたのだが、足は動きだすことはなかった。

その部屋に他の扉は見当たらない。ここから脱出するには、聞こえている足音の集団を通り抜けなければならない。

「ここで籠城戦をしてる時間はないぞ」

アーミルが言うまでもなく、全員がそれを理解している。障害物が多いので相手の銃弾をかわすことは可能だが、その間に標的に逃げられるかもしれないし、何より資料庫にいる三人にいつ危険が及ぶか分かったものではない。

「……しょうがねえ」

呟いたのはダルタだ。

二人が視線を向けると、懷から新品のナイフを取り出していた。全く汚れの無い刀身が部屋の明かりを反射している。その美しさに、思わず手を差し出してしまいそうだ。

「あいつらをここに誘い込もう。そしたら俺が引きつけておくから、おまえら二人は先に行け」

「……」

一人では、とは言わない。彼にはそれ相応の実力があることを二人とも分かっているからだ。だが仲間を置いて行くという行動に対する抵抗が二人に訝しげな表情をさせているのだ。

それに気づいたのか、ダルタはいつになく真面目な表情をあらわにした。

「いいか、そいつと因果で結ばれてんのはお前ら二人だ。俺はそれに関して手を出すことはできない。今まで引きずってた怨讐…いや、決意を！自分たちの手で結実させるんだ」

何を言いたいかよく分かっていた。

ダルタには標的を打ち取る個人的理由がない。だがフィストとアーミルにはそれがある。後悔を残さないためにも、二人に任せよう

というわけだ。

「別に殺しにかかるわけじゃないさ」

「そうかい、それは何より。雑魚は俺に任せて、思う存分語り合っ
てこい」

三人が大きな机の影に隠れる。同時に、扉から幾つか足音が部屋
に踏み込んできた。

およそ八人……やや面倒くさい数だ。ダルタが煙幕を準備し、二人
は外に向かって駆け出す姿勢をしている。

「……ダルタ」

フィストだ。

「どした？ 心配なら不要だぜ」

「……何ていうか、あつかましいお願いなんだけど……」

「？」

「出来るなら……誰も、殺さないでほしい」

「……」

どういった考えでそう言うのか。

彼らは確実に殺意を持って襲いかかってきているだろう。そんな
彼らを殺してほしくないという願いも、フィストが言うならばダル
タにも理解できた。

「……努力はしよう。お前の過去に報いる意味でな」

バステイルや、ルフィーネのこと。おそらく話で聞いただけの
ギースや、彼の犠牲になったこの研究所の人々のことも。フィスト
は誰であろうとも、もう死者を出したくない……そう願っている。

人が死ぬことの重さを、誰よりも理解している。

「じゃあ、ご武運を」

「お互いにな」

ダルタが小さな玉を机の向こう側に放り投げる。そこから煙が噴
出し、部屋が真っ白く染まった。

「行くぞ！」

「ダルタ、あとはお願い！」

アーミルが駆け出し、フィストもそれに続いた。煙の薄い扉の外が視界にかりうじて確認できる。

煙で混乱している八人は、一気に飛び出した二人には気づかなかつたようだ。

あまり時間を置かず、煙幕が次第に薄らいでいく。

「……誰も殺すな、か。難しいこと言ってくれるじゃねえか」

ダルタが机の上に仁王立ちしていた。

八人の視線はそれに釘付けになり、外に駆けて行った二人のことは完全に見逃される形となった。

「よかったなお前ら、あいつが優しいやつだよ」

「……！殺せ！」

はっとした一人が弾糾し、全員が一斉に銃を構えた。

銃弾が放たれると同時に、ダルタの姿が机の上から消えた。

大量の紙束を取り出しては机に持って行き、一つ一つ目を通してから戻す。この単純で面倒な作業は、三人分の労力を持ってしても終わる兆しが一向に見えてこない。まだ調べていない紙の詰まった棚は百にも及ぶ数があるだろう。

初めて見るような単語の羅列、おぞましい挿絵に何度も声を上げそうになっては慌てて口を塞いでいた。

調べる紙束が三組目を迎えた辺りでユリスの手が止まった。

（—————）

「え？…なに？」

思わず聞き返す。返答はなく、ただ同じフレーズだけが繰り返される。

「…なに？何を言ってるの？」

なおも再生される、聞き覚えのある声。

「…ひょっとして…クレア？」

自分を逃がし、フィストと巡り合わせた声だ。ただし、今回のそれはずいぶんと焦りを感じさせる。聞くだけで胸騒ぎがする。

「ユリスさん？」

その異変に気づいたリメールが声を掛けてきたが、ユリスには届いていない。

「呼んでる…行かなきゃ」

持っていた紙束を床に落とした。足元に紙が山となって広がる。それをひよいと乗り越えようと、扉へと一直線に歩み始めた。

「ユリス、ちよっとどこ行くの！」

ティリアの呼びかけにも全く反応せず、糸に引かれるマリオネットのようにその姿は外へ消えた。

「もう、ユリスは何をやってるの？」

「怒るのは後にして、早く呼び戻しましょう」

またしても言いつけを守れないことをこの場にはいないアーミルに詫びつつ、二人は追って外に飛び出した。ユリスはその時にもう廊下を走りだしていた。

「ユリス、危ないよ！早く戻ろう！」

危険と無視を承知で叫んだが、ユリスは案外いつもの調子で振り返った。

「ごめん、出来ないよ。私が行かなきゃいけないの。取り返しがつかなくなるの」

「取り返し…って」

その言い回しに、ティリアも押さえつけていた不安を膨らまし始めてしまう。

「それ…どういう意味？」

驚いた様子で聞いたが、こちらは無視された。

少し泣きそうな声だったのは、怖いからだろうか。それでもユリ

スは決して足を止めない。彼女のつま先はまっすぐ前を向いている。「しょうがないなあ……」

ティリアが頭を掻いた。しかしその笑みからは嬉々とした感情すら見てとれる。

「やっぱ行くしかないか」

フィストは階段を駆け下りていた。つまりは地下に入ったことになる。一度に何段飛ばしたか分からないくらい勢いよく、濁流のように駆け下りた。嫌に長く感じる。

フィストは立ち止まった。少し遅れてアーミルも追い付いて止まる。二人とも肩で息をして足には震えが生じていた。が、そんなことを気にしている場合ではなかった。

長い廊下には扉が一つもなく、巨大な直方体に閉じ込められたと錯覚するほどだ。定期的に蛍光灯が並んではいるが、その光量はあまりにも頼りない。

地下なので外の光はあまり入ってこない。蛍光灯の明かりも僅かで、白いであろう廊下はむしろ黒に近い色をしている。所々で、まさしくホタルのようにと持っている幾つかの明かりのおかげで何とか物の形状は把握できる。

人が二人。アーミルを超える長身の研究服と、その半分にも満たないほど小さな女の子。暗闇の中で、研究服の眼鏡と女の子の首飾りが僅かな光を反射させて光っている。

女の子はいたって無表情だ。その視線は氷のように冷たく、檜のように二人の体を貫いていた。

圧倒される威圧感と流れ出る瘴気。三人を追いかけていた研究員

たちとは比べ物にならない『闇』がそこに存在している。

「…そうか、君たちが上で騒いでいた侵入者か…」

口を開いたのは研究服の方だ。

「何をしにきた、というのは愚問だな」

「よく分かっているようで」

アーミルが薄ら笑いを見せながら言い返した。

「だが残念だ…実に残念。来るのが僅かながら遅かったらしい」

「……」

「最終実験が完了したよ、たった今」

まるでそれを憂いているような口調だ。だが、発せられる言葉はその真逆を示していた。

「君たちでその成果を試す」

目つきが変わる。

本物の闇。

とっさに二人も身構える。それと同時に、女の子が一步、前に出た。

二人が確認できたのは、それぞれが自身に感じた痛みだけだった。今の一瞬に何が起きてどうなったのか、分かることは何もない。痛みを覚えた部位を抑えると、その手がすぐに自分の紅蓮へと色を変えた。

確か、女の子が右手を突きつけていた。間は数十メートルもあるだろうが、その掌から閃光が走って消えた。それだけだった。

結果、光の筋は時間をかけずに二人に飛来し、正体不明の痛みが発生したのだ。

「…あぐ…」

女の子の表情に変化は全く無い。一気に苦痛に表情を歪ませて膝を折るフィストとは対照的だ。

感情が無い、と言えばよく表せているかもしれない。

女の子の片足が軽く地を蹴る。僅かでも屈んだ様子はなかったのだが、その姿は瞬時に消え、フィストの目の前に現れていた。腕を振りかぶっている。

「――っ！」

叩きつけるような殺気からとっさに後ろに飛ぶ。直後、女の子の指が腹につき立てられる。

そこを中心に体が後方数メートルにわたって吹き飛ばされた。跳んでいたおかげである程度ダメージは軽減できたようだが、体には亀裂の入ったような激痛が残っている。

「フィス…！」

ト、は音にならなかった。指を突き立てた姿勢から空中で反転し、その勢いのまま回し蹴りをアーミルに繰り出してきたのだ。とっさに腕で受け止めるが、体が一気にスピードを持って研究服の方へ引っ張られていく。両足でブレーキをかけると、研究服とうまく対峙できるような位置で静止した。

「何だあの子は…!？」

どうやら彼女は先にフィストに狙いをつけたらしく、アーミルを一瞥してからフィストの方にゆっくり歩き出した。

鬼神のようなオーラを纏いながら。

「…くっ」

すぐにフィストを守りに行こうと一瞬は考えたが、それはすぐに諦めざるを得なくなった。

彼のすぐ後ろにも、敵がもう一人いるのだ。

すでにダメージが溜まり始めているが、決して臆さないように立ち上がって彼と向かい合った。

勢いを殺す間もなく、体が壁に叩きつけられる。明らかに年下の、しかもほっそりとした女の子。その子の指一本でフィストは壁まで

吹き飛ばされたのだ。身をもって体験しても信じることは容易には出来ない。

「あの子は……」

このままではまずいと思い、懷に手を入れる。銃の握りが指に触った。反撃を、と考えていたのだが、その手はすぐに止まった。

もう片方の手で腹を押さえながら前を見ると、研究服と向き合うアーミル、その手前でフィストを凝視しながら近づいてくる女の子が映った。

その殺気。

体が覚えていた。

それは『あの時』のユリスのそれ。

それよりもさらに強力になって。

今度はフィストに向けられていて。

恐ろしさが押しつぶそうと迫ってきていて。

フィストは、ユリスの実験の成果が彼女なのだと確信した。

それと同時に、出しかけていた銃を再び懷に納めた。

52話 研究所『参』（後書き）

そろそろオチが見えてきてしまっているのでは、と不安を感じてきている今日この頃。

それに加え、次に長編を書くならこれの続編にするか新作にするか、などと考え込んでいます。まあこの物語をちゃんと終わらせることが先決ですが。

53話 暁が如き光

研究服は銃を隠し持っている。

アーミルはそれが分かっていた。

「もうご存じかな？ 私はヴェクス。ヴェクス・ラムフィールドという」

研究服——ヴェクスは、わざとらしく今更の自己紹介をした。

アーミルは負傷した箇所を押さえながらも笑いながら向き合っている。

「あんたがここのトップか」

「…名乗られたら名乗り返すのが礼儀だと私は思っていたが」

まだ銃は出してこない。後ろのファストがピンチなのは音だけでも分かるが、背中を向けた途端に撃たれて終わりだ。こちらを先に済ませなければ何も出来そうにない。

「あんたは根に持つタイプとみた。覚えられたくないから教えないでおくことにする。…まあ、どうやら教えなくても知っているようだが」

「慎重であり臆病でもある、か。確かにそうかもしれない」

ヴェクスの言葉はあくまで重い。多数の人間を束ねるのにふさわしい威厳がその声からありありと伝わってきた。今アーミルに押し寄せている衝撃を、恐怖以外のどんな言葉でも言い表せそうにない。ヴェクスの視線がアーミルから外れる。その対象が何なのかは、見ずとも分かる。

「君が助けに行かないと、あの子は死ぬぞ」

「……」

誘っている。背を向けるその時を待っている。

ならばおめおめと引つかかるわけにもいかない。

「残念だが、あんたの思ってるほどあいつはヤワじゃない。いろんな試練を乗り越えてきた立派な男だ。だから絶対に死なない。俺が

保証する」

「大した自信だが」

「それに」

強く言いだし、ヴェクスの反撃を塞いだ。そして更に続ける。

「あんたは俺を行かせないはずさ」

「…」

反応はしない。

「まさか敵に背中は見せられないだろう。後ろから——そう、例えば撃たれたりしたらシャレにならないだろう？」

「おやおや」

意地悪そうに笑ったヴェクスがその服の右側をめくり上げた。

銃の入ったホルスターがしっかりと存在を認知できた。

「隙だらけに見えたが、それほど間抜けでもないらしい」

「お褒めにあずかり光栄です」

わざとらしく礼をしてみせる。

傷口の痛みはどんどん増していくが、余裕のあるように笑って見せるのは決してやめない。余裕を見せ続けなければ絶対に勝てないとアーミルは思ったからだ。

ヴェクスの余裕は本物のようで、まだ汗ひとつ見せずにアーミルと対峙している。

「だが、私も引くことのできない理由がある。調べがいつているのなら、君も分かるだろう？——兄ならば」

そう言った時のヴェクスは闇を一瞬消し、幾分か寂しそうにしている。

アーミルはそれに同情するでもなく、ただ口の端を釣りあげながら言葉を返す。

「ああ、分かる。そしてこんな方法で解決するべきでないのも分かっている」

フィストの希望を尊重すべく、アーミルは武力に頼るのをやめてヴェクスが銃を捨てるのを慎重に待っている。まだヴェクスは少し

俯いたままそうしようとはしていない。

顔を上げたヴェクスは、急に余裕のなさそうな顔になった。というより、悲しみを帯びた怒りの表情になっているようだ。

「そんな物は詭弁にすぎない。彼もなんとか平和的に終わらせようとことを進めていた。しかし、ベルトニアは決してその努力を实らせようとはしてくれなかった」

アーミルは調べがついていた。

ベルトニア——オルディアと隣接する、強大な力を持った軍事国家。しかし国自体は平和思想でまとまっていた、軍部は大概被災地の救助活動や犯罪の制圧をこなしている。

長い間同盟国としてオルディアとは強い結託があったはずなのだが、現王ハーゲンティは即位するや否やその同盟を解いた。何を考えているのかと国内の反発も多少はあったが、やはり相手が軍事国家であることもあってそこまで追及はされなかった。同盟を解いた理由は今も正式には公表されていない。

アーミルは知っていた。ハーゲンティがなぜそんなことをしたのか。

「だから胡散臭い研究であの子を兵器につくりかえて、それで脅しをかけようとしていたってことか」

「…名推理に拍手しよう」

「間違いには気づかなかったのか？これじゃ駄目だって、途中少しも疑問に思わなかったのか？」

ヴェクスは黙る。吟味するような眼差しをアーミルに向けている。「もっと他にすべきことがあったはずだ」

「すべては王の——ハーゲンティ様の為。私は彼と約束をしたのだから」

「その約束のためならどんな犠牲が出てもいいのか？人が死んでもいいのか？」

「…未練がない、とは言わない。犠牲を強いたことに心が痛まなかったわけではない」

トーンが下がっていた。その部分には後ろめたさを感じているということだ。

「…銃を捨ててくれ。もうその必要はない」

たたみかける。

「しかし」

「俺は“彼女”の居場所を知っている」

「――！」

その言葉でヴェクスの顔から完全に余裕が消え、代わりに驚愕がそこを占拠した。

何も言わなくなった。

ヴァクスがゆっくりと天を仰ぐ。

アーミルはただひたすらに待った。

やがて、疲れたように口を開いた。

別人のような変貌とともに。

「…君は全て知っているようだが…まだ分かっていないことはあるか？」

「何が分かっていないか分からない。だからもう一度、確認させてほしい」

「…ああ」

事前に調べは付いていた。何がきっかけになり、何をしてきたのか。すなわち何をすればこの研究をやめさせられるのかを、アーミルは既に知っていたのだ。

つまり、“彼女”を見つけ出すこと。

「…もう何年前になるか…ハーゲンティ様が十歳ほどの時だ」
そして語りだす。

大広間の中央階段。人よりも遥かに大きいシャンデリアが隅々まで照らしつけている。人の通る赤い道筋は赤いカーペットで印され、豪華絢爛の極みを尽くしている。

ヴェクスが訪れた時、ハーゲンティはその階段の途中にうずくまってシャンデリアの光を受けられずにいた。それはあまりに暗く、また何かに対する莫大な怒りを伴っている。たとえ十歳いくらかの子供であっても、それは近づくことを躊躇わせるものだった。

だがヴェクスは声をかけた。それは、ただ単に心配だったから。少し前に写真をせがんできたときの、初めて見た子供らしい姿を忘れられずにいたから。

「どうしました？」

下を向いていた幼顔がゆっくりと上がった。兎のように赤くなった瞳がヴェクスの存在に気づく。その赤い瞳を見て、ヴェクスはやはり大変なことが起きたのだと悟った。

彼は今まで人前で弱いところを見せたことが無い。転んでも、物をなくしても、父王に叱責を受けた時でさえ、普通の子供なら泣き叫ぶだろうに、毅然とした態度でそれらに立ち向かっていた。

周りのものは口をそろえて、次期国王として周囲に強く見せるためだろうと言った。

それが国王としてではなく一人の兄としての強さのためだとヴェクスが理解したのは、彼からその答えを聞いてからだ。

「妹がいなくなった」

どれだけの間泣き続けているのか、声は完全に噎れてかなり聞き取りづらいものだった。

照明は暖房能力を持っていたりすることは無い。階段の途中のそこは体がかじかむほど寒いはずだ。それでも彼はそこで小さくなることを選んだのだ。それほどショックが大きいということだ。

「妹様が…」

ヴェクスはまたしても驚いてしまう。彼がハーゲンティの妹の存在を知ったのは先日 of 写真を撮った時だ。それまでフェラートの子はハーゲンティ一人だと信じていて、まだ信じ切れていない。

王に新たな子が生まれれば、どんな子だろうと少なくとも噂は広がる。知らせはおろか、そんな噂の一つも立っていない。しかし確かに、今まで見たこともなかった少女の姿を先日確認しているのだ。彼の言うことを嘘と割り切ることもできない。

とにかくヴェクスは、その存在がよく知られているかのように振る舞うことにした。

「どこかへお出かけになられたのでは？」

「そのはずだった。実際に今朝、母とともに出発するのを見送ったばかりだ」

「では…」

「母はいつの間にか帰っていた。なぜかひどくショックを受けているようで声はかけられなかった。僕は妹を呼んだが、いつまでたっても出てこない。いつもは呼んだらすぐに飛んでやってきたのに」

「…」

「父に聞いた。妹はどこにいるか知らないかと。言葉を濁した。もっと強く聞いた。そしたら…」

記憶の再来。そこで言葉が切れたのは、その後に続く最悪の言葉を思い返しているからだろう。再び涙を溢れさせた後、さらに語勢を強めて一気に言った。

「外出先で攫われたと！ベルトニアのものに拉致されたと！そう言った！同時に…妹のことは忘れろと！」

再び顔が伏せられた。実の妹が目の前から突然いなくなった悲しみ…ヴェクスには想像がつかないほどの苦痛だろう。ましてそれを背負うのはどんな大人でもない、成人の半分しか生きていないこの少年なのだ。胸の張り裂けそうな思いに違いない。

この涙は、次期国王であったとしても、それ以前に人間として当然の反応だった。

その一言は、その子が次期国王だからではない。苦しむ一人の少年を救ってやりたい、その一心だった。

「私も、微力ながらお手伝いします」

「…ヴェクス…」

涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔がヴェクスを見る。

「ベルトニアは平和思想の国ですから、隣国、それも同盟国の人間を拉致するとは何か余程の理由があるのでしょう。しかし同時に、そこは世界有数の軍事国家でもあります。もしこちらの話を聞き入れてもらえなければ、我々は成す術がなくなってしまいます。…しかし拉致は誰もが認める非人道的行為、道はあるはずです」

「…とりあえずハーゲンティ様はベルトニアに直接要求してください。拉致した人間をすぐに返還するようにと。もしそれが上手いかなかった時のために、私がベルトニアを超える戦力を準備いたします。もしあちらが交渉に応じなかった時は、その戦力を提示し、もっと強く揺さぶりを掛けるのです」

「…しかし、ベルトニアの戦力を超えることなど…」

「一つだけ——心当たりがあります。ハーゲンティ様も聞いたことがあるのではないでしょうか。『人工の人』^{ホームクルス}を利用して生きた兵器を創りだす秘術の話」

「…まさか『生物錬成』のことか？しかし、それはただの都市伝説では…」

「いいえ、そうとも言いきれないのです。私の研究の一部で、科学の力だけでは解明できない事実が幾つか発見されています。それこそ錬金術の一部…ひいては『生物錬成』に繋がっていると、私は確信します」

その自信に満ちた説得に、ハーゲンティはようやく希望を見出したようだ。

「成功までどれだけの日数を要するかは分かりません。数年…いえ、数十年かかるかもしれません。それでも、ハーゲンティ様は戦い続けることができますか？」

「…ああ勿論、妹のためなら。王位を継いだら、セントヘイムの近くの研究所も使用できるようにしておく」

「ハーゲンティ様…」

「だから…ヴェクスも僕を支えてくれ。妹と会えるその日まで」

「ええ、約束します」

「私の中でハーゲンティ様はまだ子供。妹様のせいで時間が止まってしまった。私は、そんなハーゲンティ様を助きたい、その一心で研究を続けてきた。諦めたらハーゲンティ様を裏切ることになると我が身に言い聞かせ、人命を賭した実験をも心を鬼にして断行した。…笑いたければ笑ってくれ、その方が私も楽だ」
長く語って疲れたのか、ヴェクスの疲労の色はだいぶ濃くなってきた。

「…本当にバカだな、あんたは」

「そうか…。君が妹様の行方を知っているのなら——もう研究の必要もないのだな。多くのキメラを創りだし、ユリスやフィストを殺そうと暗躍するのも、そしてあの子も…」

生きる支えを失った…文字通りのそんな表情が、ヴェクスの闇を払拭していく。

「そうだ、もうこれ以上罪を重ねる必要はない。鬼になる時は過ぎたんだ…さあ」

アーミルがそつと催促すると、ヴェクスは服の右側に手を入れて銃を取り出した。アーミルは一瞬緊張したが、ヴェクスはその銃を遥か後ろに投げ捨てた。カシャン、と気持ちいいほどの音がして遠くへと滑って行く。

アーミルはそれを確認すると見計らったかのように後ろを向き、

フィストの安否を確認した。無事かどうかは不安だったが、二人の戦闘は行われておらず、何故かユリスが加わって何かを話している。

「よかった：フィスト」

アーミルが安心し、一歩足をそちらに出す。

「……だが」

ヴェクスの最後の闇。

「後始末は私自身がつける」

はっとして振り返った。ヴェクスが銃を構えているがその狙いはアーミルではない。彼の服の左側にもホルスターが装備されていたことに、アーミルはその時になって気づいた。

（しまった——こいつ銃を二丁持って——！）

しかし、もう遅すぎた。

フィストは壁に追い詰められていた。

まるで動きが見えない。フィストは銃をしまいこんで全く反撃をしていないのだが、女の子はそんなことお構いなしでフィストに連撃を叩きこんでくる。左腕に二発、右足に一発、右耳に一発。それぞれあの閃光が掠めていった跡がある。中でも右足のものはほぼ中心を捉えていて、とめどなく血が流れていた。

一歩ずつ、決して急がずにフィストに近づいてくる。慈悲とか残忍とか、そんなジャンル分け出来る存在ではない。

それは、誇り高き竜の如く。

「……」

ほんの一瞬だが、先ほどとは違う声が頭に聞こえた気がした。

「…あのさ、君」

フィストは彼女を兵器としてはとらえなかった。ユリスが『そう』

であったように、その子もまた人間であるはずなのだ。フィストはそうだと確認していた。ならば彼女を殺すことはフィストの望むところではない。

だから、声をかけた。

「名前、何ていうの？」

何がそうさせたのかは分からない。そんな状況でないのは確かなのだが、しかしフィストは、はっきりとした自分の意思でその質問をしていた。

他愛もない質問だ。だからこそその場にはそぐわない。

女の子は足を止めた。考えているのか、そんなことを聞く真意を探っているのか。

「あなたもうすぐ死ぬ。知っても仕方がない」

フィストはその時によく彼女の肉声を聞いた。可愛らしく幼い声だったが、それは事務的で、見た目の年齢と話し方は全く合わない。そんなことをフィストは気にしていないようだが。

「君は多分…人間だ、兵器じゃない。だから、君にも親がいるはずなんだ。ならその人たちが、君に名前を付けたはず」

「関係ない」

短く言った後、掌を向ける。

次は右腕だろうか、左足だろうか、それとも直接心臓を狙ってくるか。そんなことよりも、フィストはまだ名前が気になっていた。時間稼ぎとか言う理由も結果的にはあるのだろうが、フィストになおも質問させたのは一体何なのだろうか。

「関係なくなんか、ないよ。君の名前にも、ちゃんと意味がある。

つけてくれた人の思いが」

「……」

「そんな名前をさ、一人でも多くの人に知ってもらえるのって幸せなことなんじゃないかな」

「つけた人の思い…幸せ…？」

「だから知っておきたいんだ、君の名前を。たとえもうすぐ死ぬと

しても」

フィストは言っているうちに、まるでこの子に告白しているようだ
と恥ずかしくなって僅かに笑った。

「……」

言おうか迷っているらしく、手を突き出した姿勢のまま固まっている。

「リュナ」

それはその子の声ではなかった。もう少し成長した、そして息の切れた声だった。

フィストは驚きを隠せなかった。いるはずのない人間が、そこにいた。

「それが、この子の名前」

「ユリス…！なんで…」

だがユリスはフィストの質問に答えず、フィストの前に立ってリュナと向かい合った。

「ユリス」

リュナが名前を呼んだ。呼ばれたユリスは嬉しそうに微笑む。

「…まだ覚えててくれたんだ」

「当たり前。あなたいい人」

リュナは上げていた手を下した。しかし、フィストを殺そうとしているのに変わりはないようだ。

「そこどいて。後ろの人殺す」

脅しをかけているのではなく、機械的な単なる『お願い』だ。勿論ユリスは動かない。

「…やっぱり、私と一緒に…私もそうだった…物事の善悪が分からなくて、ただ喋るだけの生きた兵器に仕立て上げられた…」

ユリスが俯く。同じ境遇の人間の存在を憂いている。

「ユリス、どいて」

「もう十分だから、これ以上犠牲を増やさないで。もう人が苦しむ

のは見たくない…」

泣いているのだろうか。後ろから見ているフィストには分からない。しかしリュナの様子に変化はなく、まだフィストを殺すという思想に揺らぎはない。

「ユリス、あなた殺したくない」

「…殺したくない？」

その一言にフィストが反応した。

今の一言は紛れもない『リュナの意思』だ。

すなわち、リュナにはまだ人間の心が残っているということ。

ユリスが叫んだ。

「…ルフィーネ、リュナを助けて！人に戻してあげて！」

「…！」

その叫びでもその場は何も変わっていないようにも見えた。変わったと言えるのは、ユリスが俯いたまま両手で顔を覆いあからさまに泣き出したことだ。声はこもっているが、幼い泣き声が流れてくる。

フィスト、ユリス、リュナ。ほんの一瞬、フィストはこの三人の間を光球が通り抜けたように見えた。

母親のように優しい光。

それが彼らの気に留まることは殆ど無かった。

その場を沈黙が流れる。ユリスのすすり泣きが響く。

「ユリス」

フィストの声ではない。

「…ありがとう」

ユリスが顔を覆う手を下した。

目の前に、リュナが立っていた。何の表情の変化もなく言葉も相変わらず事務的だが、明らかな差があった。

リュナがフィストに向き直り、じっと見つめる。

「ごめん」

ぽつり、と言った。

「リュナ……！」

歓喜の声をあげ、ユリスがリュナを抱きしめた。

「よかった……ホントによかった……！」

ユリスの涙は止まらない。様子を見ていたフィストがふうと溜息をついた。

一つの終焉。フィストには、この瞬間がついさっきまで遥か彼方にあるように感じられていた。それが彼の元までやってくるのに、さほど時間はかからなかった。

「終わった……んだよね」

返答はないが、その様子はすなわち肯定を示している。

「……」

「……ねえ、フィスト」

「？」

泣きじゃくったような笑顔が真っ赤になりながらフィストに向けられていた。

「リュナのことだけど……」

「ああ、そのことなら大丈夫だよ。殺すつもりは元から無いし」

「……それでね、私……リュナを……連れて帰りたいの」

「……」

ユリスが言うには、リュナもまた今までここで育てられてきた身であり、これからもここに続けるのは彼女にとって良策とは言えない。かといってここを出るにしても、どこにも行く当てがないのだそうだ。

殆どユリスの予想から話しているらしいのでフィストはリュナに

もその確認を取ったが、それで殆ど間違いはないようだ。

どちらかと言うとユリスの希望が強く全面に出ている要求だったが、今言い並べられたことも間違っていない。実際にユリスはフイストに会わなければどこに行くつもりだったということもなかったのだから、リユナにもそれが当てはまるのだろう。

「…僕は別にいいよ。アーミル達はどう言うか分からないけど」
「……！ありがとうございます！」

不安そうにしていた表情から、再び満面の笑みへ。止まりかけていた涙が再び流れ始め、またもリユナを強く抱きしめた。それもまた、フイストにとって微笑ましい光景だ。

「…こっちは一件落着かな。あとはアーミルが――」

研究服と対峙するアーミルの方をそれとなく見た。

そして気づく。

気づいてからの行動はすぐだった。すぐに体を飛び出させ、まだユリスに抱きつかれているリユナの前に立ち塞がった。

銃声。

左胸を直撃した。

リユナに狙いを定めていたのだろうが、発射の直前にフィストがその前に飛び出した。おかげで弾はフィストの、それもちょうど心臓のあたりをうまく挟んだ。

「……………っ！」

言葉にならないユリスの叫び。ヴェクスは銃を下に落とすと、脱力したように膝をついた。間髪を入れずにアーミルがその胸ぐらを掴み上げる。

「デメエ！後始末するのはそういうことじゃねえだろうが！」

ヴェクスは何も言わない。きつと心の中では身の全てを持って懺悔しているだろうが、アーミルにはどうしても許せなかった。

「フィスト！しっかりしてフィスト！」

ユリスが倒れたフィストを抱き起こして名前を呼んでいる。そしてそれをリユナが釈然としない様子で見ている。アーミルもヴェクスを放り出しフィストに駆け寄った。

着ている服の左胸部には、一つの穴が空けられていた。

「いやああああああ！！！」

ユリスの叫びが、波のように広がっていった。

エピソード1

「このまま戻らなくていいのか？」

耳に入ってくるのはブルーイーグルとは違う、別の列車のエンジン音だ。

出勤時間と重なっているので人の数が多く、それに伴ってかなり騒がしい。二人の会話はわざわざ聞き耳を立てている者でなければ聞こえないだろう。

「構わないさ。ユリスは俺のことまだ怖がってるみたいだしな。そんなに悪いこともしてないと思うんだが、あの怯えようは何だ？」

「ファースト・インプレッション：第一印象が悪すぎた。もともと大柄なのも一因だろう」

それに関しては誰がどうすることもできない。仕方無いか、とダルタもため息交じりに苦笑いした。

「…ところで、他の奴らは？」

「みんな外で待ってる。あんまり人が多くて入る気になれないんだそう。今回はいろいろあったし、疲れてるんだろうな」

それは二人にも言えることなのだが、まだまだやらなければならぬことは多い。ダルタも休むことなく出発することにしたらしく、今はその出発間際の挨拶といったところだ。

「悪かったな、付き合わせて。殆ど俺とフィストの問題だったのにみんなまで巻き込んでしまったことは申し訳ないと思ってる。ダルタが何か困った時は相談してくれ、力になるよ」

「そりゃ助かる、じゃあ機会があれば頼らせてもらおうとするか」

ダルタの頼みとなると何をさせられるか分かったものではないのだが、今回アーミルは完全に下手だ。断ることなどできるはずもなく、ただ苦笑いを返した。

「それじゃあな。ファルとガルバートさんよろしく」

「ああ」

差し出されたダルタの右手。アーミルも右手を交わらせ、しっかりと握りあった。

「あ：アーミル」

ティリアの声には張りが無い。他の誰よりも疲労がたまっているのだろう、アーミルを待ちながら壁に寄りかかって立っている姿はまるで眠っているかのようだった。ひよっとしたら立ったまま眠れるほど疲れていて、実際に寝ていたのかもしれない。

その横の方から、やはり重い足取りでリメールがアーミルに近づいてきた。

「……」

一瞬だけ口が開き、そしてすぐ止まってしまった。

「何が言いたいかはなんとなく分かる。けどまあ、そんなに気にすることは無いさ」

「：ですよね」

こういうところばかりはリメールも頑固だ。周りの説得を聞いても一人で悩みを抱え込もうとするところは彼女の成長しない点だ。まだ割り切って受け止めることができていないようだが、アーミルはそれでも構わないと考えていた。

「：とりあえず、ヴェクスももう研究はやめることを約束してくれただ。目的は達成できたじゃないか」

「ユリスの正体は分からなかったけど」

「……ああ、そうだな」

言った本人のティリアは眠たそうな顔をしているが、その内容は相変わらず的を得ている。確かにユリスの正体はあそこでは見つからなかった。探す時間が無かったというべきなのだろうが、一部はアーミルのせいでもあるので彼に何か言い返すことはできない。

だが、それはもう誰も気にしていないことだ。ユリス自身が別にかまわないと承諾していたのも事実なのだ。

「：今回は、みんなにもいろいろ迷惑かけたな」

ダルタにも言ったことをその二人に対しても呟く。それぞれの様子を見ればどうしても気になってしまうのだろう。もともとアーミルは三人だけで行くつもりだったのだから彼の責任は薄いだろうが、アーミル自身が感じている責任感はその理由で軽くなったりはしない。

「気にしなくてもいいって！ 私たち仲間でしょ！」

明らかな疲労を見せていたティリアもそれに気づき、落ち込んだ様子を隠すように笑ってみせたが、もう遅いだろう。その無理な様子が逆にアーミルの自責の念を煽っている。

「まあ、そう言ってくれると俺も助かるよ」

言葉だけでその行動を擁護する。やりきれない様子でティリアも笑うのをやめた。

「アーミルさん：一番疲れてるのはアーミルさんでしょう？」

「……そうかもな」

それについては言葉を濁した。あまり深く語ろうとしないようだ。リメールは更に何かを問おうとしたが、アーミルは逃げるように彼女と目を合わせないようにしてしまった。リメールも申し訳なさを感じて黙り込んでしまった。

「さて、見送りの終わったし」

アーミルの腕が真上に上がり、大きく伸びをしたことが分かる。

「そろそろ行こうか？」

「……」

二人とも頷いたが、見ても分かるかどうかというほど僅かなものだった。

ベルトニアは要求を退け、頼みにしていたヴェクスは外部からの障害により失敗したという連絡が入った。つまりいよいよ、妹救出の道は閉ざされてしまったことになる。

それが分かることで、ハーゲンティは悲壮の渦に飲み込まれていた。彼はヴェクスを恨んでいるわけではなく、むしろ尽力していたことへの感謝の意を持っていた。仕方が無いという、ある意味仕方のありそうな言葉をハーゲンティはずっと自身に言い聞かせていた。それで気が晴れるはずもないのだが。

妹の存在は、今はハーゲンティの生き甲斐と呼んでもいい。そして助け出す手段を見失ったことで、まるで生きる理由を奪われたに等しいほどの絶望感が彼に叩きこまれたのだ。

実験の失敗が分かって二日。最後まで頑張ってくれたヴェクスが王城に帰還し、数年ぶりの再会を果たした。そしてその時、ハーゲンティと会いたがっている人間が来ていることを教えられた。

そこは一国の王だ。どれだけ落ち込み、生きる理由を失っていたようが、客の前で軟弱な様子を見せるわけにはいかない。ハーゲンティはすぐに接客用の服に着替え、自慢の銀髪に櫛を通した。会っているときに表情に何か表れないように気を引き締め、それから客間に入った。

背の低いテーブルと、それをはさんでソファが二脚向かい合う。観葉植物をいくらか置き、ここに入る者に爽やかなイメージを与えている。部屋に派手な装飾はなく、シックで落ち着いた配色が施されている。居心地がよく、ここに住んでも悪くないと思えてしまう。椅子に着くと同時に、また溜息が出た。無意識に出たそれに気づき、慌てて気をしっかりさせようとした。

ふと、ハーゲンティの脳裏に最後に見た妹の笑顔がかすめる。

人懐っこく、素直で、人を疑うことを知らない性格だった。それが災いして攫われたのかもしれないが。

たとえ妹を攫われても、ハーゲンティは極力ベルトニアとの友好関係を保とうと尽力してきた。

研究の成功する前から、妹のためにベルトニアに強く詰め寄るという選択肢も彼には一応あった。それを選ばなかったのは、その後に発生するであろうベルトニアとの関係のヒビを懸念してのことだ。ハーゲンティ個人としてはベルトニアへの怨恨は底を知らないほど深く、友好関係の放棄などリスクとも思わなかっただろう。しかし、一国の王として、そう簡単に他国との連携を断ち切ることがあってはならないのだ。彼にとってこれほど辛いものもなかったが、王の自覚がそれを同盟解除まででとどまらせた。

（お兄ちゃんのこと、大好きです——）

妹の声の気配を感じ、孤独な兄の心からまた溜息が洩れた。今度はそれに気づくこともなく。

「…ああ…少しここで待っていてくれ…すぐに呼ぶから」

扉の向こうに誰かいるらしい。二人…一人がもう一人に待つよう諭している。

「入ってどうぞ」

なかなか入ってこないのを待ちかねたようにハーゲンティが呼んだ。それを聞き、すぐに一人の男が申し訳なさそうに扉を開けて入ってくる。

「どうも…すみません」

「はじめまして。私がハーゲンティ・エノクです」

この時のハーゲンティの表情はすでに雄大な王のそれだった。彼の憂鬱な感情を感じ取る余地はどこにもない。

「私との面会を御所望とか…」

「はい…はじめまして、アーミル・ローアンです」

アーミルはハーゲンティに話をしておかねばならなかった。それというのも、フィストとともに掲げていた目的を達成するためだ。

研究所の無力化は済んだ。第一人者であるヴェクスの説得も成功した。ユリスの正体も、すでに分かっている。これで『目的』の二つは達成したことになる。しかし『目的』は三つ。最後の一つ――ある意味、最も大切な一つがまだ完了していない。

訣別だ。

どんなに単純な予想を立てても、ハーゲンティはいずれまた同じことに手を出す可能性も高い。理不尽に引き離された妹と再び会うためならば世の中の兄はきつとどんな無謀にもなるし、どんな悪事も率先して取り組むだろう。アーミル自身も、ティリアのことを考えればそれは決して墮落した人間ではなく、家族と会いたいと願う人間の起こし得ることなのかもしれないと思えた。

しかし、アーミルには義務がある。ハーゲンティにその行為の無駄を説き、連鎖を断ち切ること。もはやその必要がないと教えてやること。

つまりは、それがフィストの望んだ決別という名の終焉。

ヴェクスには口止めをお願いした。それはヴェクスに言ってほしくなかったからであり、自身で伝えなければならなかったからでもある。

ハーゲンティはすぐに会ってくれるとのことだ。どんな顔をしているのか若干恐れたが、最初に目を合わせた時からまるで何の変哲もない雄大さを見せてつけていた。そこは流石国王だ、とアーミルは一人感心していた。

「失礼します」

作り上げたような笑顔のままアーミルはハーゲンティの向かいに座る。ハーゲンティも人の良さそうなただの笑顔で返す。

「では：アーミルさん、早速ですが用件をお聞きしてもよろしいですか？」

心の中を隅々まであさるような瞳がアーミルに向けられる。国王という仕事がどんな人間を相手にどんなことをするのか、それだけでアーミルには何となく察しがついた。アーミルも職業の關係上そういった視線を浴びることは慣れているので気にしていない。

「それを話す前に：こちらから一つ確認しておきたいのですが」

ハーゲンティは無言でそれを待つ。

「あなたがセントヘイムで何を：いや、どんな研究をさせていたのかを」

「：」

笑顔のまま黙る。アーミルはあからさまに驚くことを予想していたのだが、ハーゲンティはそこまで分かりやすい生き方をしてはいないようだ。

「：あなたがそれを御存知であるということは、外部から入った邪魔というのは：」

アーミルは黙ってそれを肯定した。

「そうですか：」

「恨みますか？」

「個人的にはそれなりに、ですね。他人から見ればそれは止めるべきことだったのでしようし：あなたを恨むのは筋違いというものでしょう」

ハーゲンティは予想をはるかに超えてあっさりとしていた。ひよっとしたら、どこかで自分の過ちに気づいて後悔していたのではなにかと思えてくる。いずれにしても殆ど変化のない笑顔からは何も見て取れない。

「それは：妹さんのため？」

「：ええ」

妹という単語に反応したのは明らかだ。人の心の傷を抉る趣味はアーミルには無いのだが、ここは言ってやらなければならない。

「その妹さんは…」

「そこまで分かっているのなら御存知なんじゃないですか？ベルトニアに拉致されていると」

流石に少し怒っているようだ。それも仕方のないことだろう。

しかし、アーミルがここに赴いたのはそこから先が大きな理由となる。

「本当にベルトニアの仕業でしょうか？」

「え？」

聞き返す声はなかなか大きい。

「つまり、妹さんのいなくなられた原因はベルトニアではないかもしれないということですよ」

「…そんなことが？」

これにはハーゲンティも表情を変えて驚いた。それはつまり、今まで恨み続けていた相手が無実かもしれないということなのだから。アーミルは矢継ぎ早に言葉を並べていく。

「ここははっきりさせてください。何故あなたはベルトニアが関係していると確信したのか」

「…父に、そう言われたからです」

母はどうにも話の聞ける状態ではない。知っていそうなのは、あとは父親だ。

「父上！」

ハーゲンティが来るなり父親——フェラートは何かに脅えていたかのように体をびくりとさせた。

「…ハーゲンティか。どうした？」

「妹が見当たらないのです。知りませんか？」

「…それは…」

明らかに挙動不審だ。何か知っているとみて間違いはなさそうだ。

「父上、知っているんですね！？教えてください！」

揺さぶった。フェラートは目をそらしていたが、少し俯いた後に口を開いた。

「あの子は——攫われた、そう、攫われたんだ——ベルトニアに」

「……！！」

言葉を失った、では表しきれない衝撃だった。

何をどうしたらいいのか分からない。どうしてそうなったのかが分からない。

時間を置いて、その内容が彼の理性に沁みわたっていく。

「…なら、すぐに助けに…」

「ハーゲンティ」

慌てているハーゲンティに向けられた父親の一言は、彼の中の何かを打ち崩した。

「悪いことは言わん、妹の存在は…忘れろ。初めからそんな者はいなかった、そういうことにするべきだ」

「——！！？」

父親の言うことが理解できなかった。したくもなかったのだ。

怒り。それは確かな怒り。父親にぶつけるにしてもどこか筋違いだ。

ならば、何にぶつければいいのか？そんなもの、ここには無い。

「……」

そのあたりにある物に八つ当たりもできただろう。だが王家の血筋たる自分がそんなことをしているのか。そう考えるとその感情を暴力に変えることもできず、彼の中には受けただけのストレス・絶望が凝縮されていた。

どこへ向かっていたのかは彼自身にも分からないが、大広間の中央階段の半ばあたりに来たところで、不意にそこに座り込んでしまった。脱力感と比喻した方がいいかもしれない。むしろそれは、何

もすることのできない自身に対して。

「…なんで…なんで…！」

彼は何も悪いことをしていない。妹に関しては更に自身を持って
そう言える。なのになぜ、こんな目に遭わなければならないのか。

この世は理不尽だ。そしてそれを、自分は黙って受け入れなければ
ならない。ハーゲンティにはそれがたまらなく悔しかった。

「どうしました？」

「……？」

先日の火曜日に聞いたような、そんな声だ。

顔をあげて見えたその人間は、自分の掛けている眼鏡を中指で掛
け直していた。

「なるほど」

その話を聞き、アーミルは確信した。

「何ができるほどなんですか？」

「先王フェラートは…嘘をついたんですよ」

「…嘘、ですか？」

「何故嘘をついたのかはご本人が亡くなった今は分かりません。跡
継ぎ争いを防ごうとしていたのかもしれませんが」

オルディアでは必ずしも男児に王位が譲られる訳ではない。最年
長の子に歳の差が五つ以内の弟あるいは妹がいた場合、下の子の十
の誕生日を持ってその子供全員に平等に王位継承権が発生するとい
う、あまり賢いとも言えないシステムだ。

過去には同じように兄妹のどちらかを次期国王とするかで大規模な
抗争になったこともあるらしい。フェラートはそれを知っていて阻
止しようとしていたのかもしれない、ということだ。

「そんな…馬鹿なことが…」

ハーゲンティの足は震えていた。何かとてつもなく大きな間違い

にようやく気付いたような、得体のしれない恐怖におびえているような様子だ。そして暫くしてからはっとして顔を上げた。本当に明らかにすべきことが分かったようだ。

「それならば、妹はどこに…今はどうしているのでしょうか…」

最初の落ち着きは完全に姿を消し、貪欲に妹の行方を求める兄の顔になっていた。アーミルは自身の冷静さでそれを諫める。

「それですが…その日出かけたテッドフォースのどこかに捨てられたのだと思います。十五年近く前なので誰かに拾われているとは思いますが、この国から出てはいませんか」

「…そうですか…」

いつの間にか興奮したことで立ってしまっていたハーゲンティが、しっかりとそのソファに座り直した。

「アーミルさん…ありがとうございます、その話をしてくれて、そして私を止めてくれて」

その笑顔は本物だと、アーミルは分かっていた。

「アーミルさんは、わざわざそれを伝えに？」

「いえ…もう一つ大事なことが」

そう言うと、「ちよつと失礼」と断ってからアーミルは立ちあがって扉に歩み寄った。少し開いて外に首を出し、誰かを呼んでいるようだ。どうやらそれは最初に待たせていた人間らしい。

「し…失礼します」

入ってきたのは女性だった。銀色のやや癖のある髪はポニーテールにまとめられ、肩のあたりまで垂らされている。頭の頂点はアーミルの肩までしかないが、俯いていて正確な身長は分からない。

俯いていた顔が上がり、その赤い瞳と目が合った。やや悲しみを帯びている。

「妹さんの名前は何というのですか？」

「…名前、ですか？」

その質問の意図をハーゲンティは考えた。そしてすぐに分かった。

彼が何を言いたいのか。

「紹介します」

アーミルが答え合わせを始める。

「彼女の名前はリメールといいます」

「リメール……！」

「つまり……あなたの実の妹に当たる人です」

それはアレムが事務所を出て行った直後のこと。

真剣な表情で対峙するアーミルとリメール。事前に脅しをかけすぎたせいか、もうその表情は怯えに似たものを感じ取っているようだ。

「リメール：ハーゲンティって知ってるか？」

「……ハーゲンティ？現国王のことですか？」

出てきた質問があまりに軽かったためか、リメールは急に安心しきったような表情になった。そしてその質問が間違いでないのか確認をしてくる。そして間違いないと確認すると、すぐにせつせと答え始めた。

「ハーゲンティ・エノク。言わずと知れた現国王で、今年二十五歳になるという若年王です。拔群の洞察力と行動力で安定した政治を続け、今なお支持率が七十パーセントを超えていますね。あまり目立った新政策などはありませんが、長年続いていたベルトニアとの同盟関係を解除しました。ちなみに、銀のロングヘアーと重厚な赤い瞳で若奥様方からの絶大な人気を誇っているそうですよ」

「……くだらないことまでよく知ってるなあ……」

少し感心したようにアーミルが笑う。

「それで、その王様がどうかしましたか？」

「……リメールは、ハーゲンティの兄弟姉妹について何か知ってるか

？」

「…そう言われても…私は一人っ子だと聞いてますけど」

未だに質問の本意が掴めないらしい。だがリメールを置いていかんばかりの速さでアーミルは続けた。

「一人、妹がいたらしい。そしてその存在は公には明かされず、裏の方でも六歳くらいまでの記録しかなかった」

「亡くなられたのでしょうか…でも、そんなに隠す必要もない気がしますけど」

「隠したかったんだ。たぶん、跡継ぎ争いの元になり得るから。だから一般の目には触れさせず、しかも六歳程の時に捨てたんだろう」
「捨てたんですか？」

「ああ。妹を捨てるのはフェラートの命令だったらしいんだが、もともとは殺す予定だったらしい。それを妃のホムリが何とか食いさがって捨てるまでにとどめさせたんだそうだ。ホムリはショックのせいで病気にかかってすぐに亡くなってしまったようだ…。で、肝心なのは、ハーゲンティがベルトニアとの交渉に乗り出したのがこの時、妹が姿を消した直後だったことなんだ。この妹のためにハーゲンティはユリスの関わってた実験を始めたのだとしたら、止める方法もそこにあるってことだ」

「…なるほど」

リメールもその意味を十分に理解し、更に自身の感想をまとめて述べた。

「つまりその妹さんが捨てられなかったとしたら、ユリスさんはその研究の実験体にならなかったし、それに関わった多くの人も死なずに済んだ…ということですか？なんだか悲しい話ですね」

この何気ない発言でアーミルは硬直していた。

「でも、その妹さんを見つけ出せば研究をやめさせられるかもしれないですね！」

「…鈍いというか何というか…自覚は無いんだろうけど、すごくここから先が言いにくくなったな…」

「え？どういう意味ですか、それ？」

聞き返したがアーミルは答えない。リメールを若干無視しながら自身の話を再開させる。

「その妹も：兄と同じ銀髪の赤い瞳をしている。ただし、左肩の裏に月の形のあざがあるらしい」

「え：？」

アーミルの単調な言葉にそれほど刺激のある単語は無い。が、リメールは明らかに動揺を表に出していた。

そんなリメールに、無情にもアーミルが頼み込む。

「リメール、もしよかったら左肩を見せてはくれないか？」

「……」

リメールは黙っている。アーミルの心配するような顔を見ると俯いて何か考え込み始めた。

数秒ののち、後ろを向いて上着をそっとはだけさせ、その左肩を静かに晒した。

その曲線は、あまりに滑らかで、僅かで、そして残忍だった。

「捨てられたらしい日とリメールに会った日が一致するんで、もしやとは思ったんだ」

アーミルも伝えるのが辛そうだが、一番はやはりリメールのようだ。

突然リメールの両膝が床についた。泣きそう、というより啞然としているのに近いものだ。

アーミルが焦って助けに入る。

「リメール、大丈夫か？」

「：どうすれば、いいんでしょう」

声が震えていた。

「喜んでいいんですか……？私が捨てられなければ：いえ、私という存在が無かったら、たくさんの人が死ぬこともなかったんじゃない

いでしょうか：」

涙は素早くその瞳から零れ落ちていく。リメールの頬に月光を反射する細い筋が二本走っていた。

「落ち着け、リメール」

アーミルがリメールの頭を撫でる。顔を上げないまま、リメールはアーミルに抱きついた。

「うっ：うわああああ：アーミルさあん：」

リメールはその腕の中で震え続けていた。ずっと昔に忘れてしまった子供の頃のように。しかしそれを笑う者は誰一人としておらず、逆に労わりの意を持つ彼女の仲間がその様を見守っていた。

アーミルは独り、帰路についていた。他の仲間は先に帰しておいたし、リメールは本人の承諾を得たうえでハーゲンティの下に置いてきたのだ。

これからどうするか、時間を掛けて考えたいということだった。それにあの二人は実の兄妹なのだ。十五年のブランクもあり、話したいことだって山のようにあるだろう。リメールにとってそれは幸せ以外の何であるのか。

そう考えれば、以前彼女に自分は必要かと聞かれた時、アーミルは必要だと答えるべきではなかったのかもしれない。『必要ない』と言えば多少は傷ついてしまうだろうが、代わりに後ろ髪を引かれることなく彼の下に戻れるのだから。

たとえ『必要ない』のが嘘だったとしても。

帰りのバスの中、アーミルは心に空いた穴を吹き抜けていく風の

冷たさを感じていた。

リメールとアーミル、ティリアは、殆ど兄妹のように育てられてきた。リメールを拾った時からずっとだ。なので、リメールのいなくなった自らの事務所を想像するとどうしても切なさが入み上げてきた。

無駄に大きく首を振り、その思いを振り切ろうとした。

どうすればリメールが幸せなのか、それが重要なのだ。

（こればかりは考えても駄目だ：リメールが自分の意思で決めることなんだから――）

ますます暗くなった心境でいつもの扉をくぐる。

「ただいま」

返事がない。ティリアが突っ伏して寝ているのは見える。溜息をつき、荷物を置きに自分の机に向かった。

ふと、横の机にいかにも大事そうに置かれている女物のブローチに目が行った。彫られていたという菊の絵が見た目から全く分からないのは、それが中心部分から大きくひしゃげているからだ。そうやって大きくひしゃげたということは、そこはかなり大きな力が加わったことになる。そこまで頑丈そうには見えないが、あの衝撃を受けて耐えきったのはその様子からも確かだ。

よく割れなかったなど、アーミルにはそちらの方が驚きだった。

割れていたならこれほど冷静にもなれていないだろうが。

「：寝ちゃったのかな？」

荷物を降ろすと、すぐに隣の寝室をのぞきに行く。人数が多くなり、寝床をちゃんとした数まで増やしたのでそちらの部屋には全員のベッドが並んでいる。

すぐ目の前のシーツがもそもそと動いた。髪の毛が乱れてシーツと絡まりながら広がっている。どうやら、そこに女の子が寝ているらしい。どんな寝顔なのかと覗き込んでみる。

「：リユナって案外寝相が悪いんだな」

その顔は、やはり無表情に近いものに見えた。

溜息を一つ。それからどんな姿勢で寝ているのか確認し、ひよいと抱きあげてベッドに真っ直ぐ寝かせ直してシーツをそっと掛けた。手を離れた途端に勢いよくシーツを跳ね飛ばしたが。

「やれやれ：やってやるだけ無駄らしい」

アーミルはそれ以上世話してやるのを諦め、他のベッドを見回した。

明かりをつけていないので殆ど真っ暗だ。シーツの中に人が潜り込んでいるかくらいしか判断がつかない。

もう少し奥に、盛りあがったシーツが見えた。そこにも人が寝ているようだ。

「あ：やっぱりな」

『それ』を確認すると、アーミルは音をたてないようにそっとそれに近寄る。

ベッドは他にも沢山あるのに、わざわざ一つに集まって。

あからさまに仲良く。

「：あーあ、ほんとに羨ましいな」

ユリスと、フィスト。

二人並んで、笑顔で寝息を立てていた。

お疲れ様、とアーミルの放った小さな一言も、二人にはおそらく聞こえていない。

エピソード1（後書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

残すところエピソード2のみとなりました。長かったような短かったような、いろいろ好きなようにやらせてもらってとても楽しんで書いていたような気がします。

読んでいて好きなキャラなどがあれば、教えていただけるととても嬉しいです。あと一話なので、最後までお付き合いお願いします。

エピソード2

「ユリスには話したのか？」

「いや、まだ…」

アーミルの高いテンションとは逆に、フィストはいささか覇気が薄い。話題のせいかもしれないし、振り始めた雪のせいかもしれないし、負け続けているアーミルとのオセロのせいかもしれないし――

――
帰ってきていないリメールのせいかもしれない。

そんな物はお構いなしと言ったような高陽ぶりでアーミルはフィストの頭を軽く叩いた。

「おいおい、早く話してやった方がいいと思うぞ？ 結局あそこじゃ正体分からなかったってしよげてたみたいだし、知ってるのはここだと俺とおまえだけなんだからな。：リメールが聞いてなければいいが」

「分かってるけど――」

その明るさが逆に気に入らなかったのか、力の入った言葉とともに叩いていた手を払いのけた。

「：なんだかタイミングが無くて」

「タイミング、か：確かに、いつ話してもいいようなものでもないか：」

何を確認するつもりか、二人は給湯室の方を覗いた。ユリス、ティリア、リュナが茶葉とヤカンを相手に死闘を繰り広げている。

ティリアが指を水で流しているのは火傷でもしたのかもしれない。ユリスは背伸びをしてなんとか作業に追いついているといった様子で、あまり効率よく仕事をしているとは言い難い。

リュナに至ってはその危険性を認知していないのか、何の躊躇いもなく火に手を入れようとしてすんでのところティリアに止められていた。あと一瞬遅ければその手が焼失していた場面で、フィス

トとアーミルも驚いた格好で固まっていた。

しばらくして五つのカップに紅茶を注いだ三人が戻ってきたのだが、その表情は疲れきったようにも、苦笑いしているようにも――リユナだけは何も変わっていない様子だが――見える。そしてそれを表すように、ずいぶんと紅茶の色が薄い。香りもあまりたらず、ただのお湯に近い印象があった。

「ん…味が…」

もらって一口、アーミルが言葉を濁らせる。フィストは遠慮したかのように何も言わない。

「ごめんねー、リメールみたいにはいかないもんだね」

自身で分かっていたのだろう、二人の反応から間を置かずティリアが申し訳なさそうに言った。

「お茶淹れるの、難しい。失敗した」

リユナも重ねて、詫びのようにそうもらした。

「…リメール、帰ってくるかな」

カップを持ったままユリスは紅茶を飲まない。飲みたくないのではなく、飲むのを忘れているだけのようだ。

「それは…本当に分からない。リメールがどうしたいか、だから」
その場が静まり返る。一人欠けただけでこうも変わるものなのかと、リメールの偉大さを痛感していた。

「…あ」

空気を破る一言がアーミルから飛び出した。

「そう言えば今日…クリスマスなんだっけ」

アーミルはカレンダーを見ていた。十二月のカレンダー…その二十五の数字で見た全員の目が留まる。

「あー、何も準備できてなかったな…今から何か買いに行こうか。せっかくなんだし、何かうまいもの食いたいしな」

「おーっ、賛成！」

ティリアが子供のように飛び跳ねた。他三人も口には出さないだ

けでそれには同意したようだ。各々がお湯、改め紅茶を置いて立ち上がった。

「…でも、リメールがないのにいいのかな？　なんか気が引けるよ、僕」

「…この段階でそれを言うか」

「うわあ…」

感性が乏しくなっているはずのユリスがそんな分かりやすい感情表現をしたのも、無理はないだろう。それは、長年この街に住んでいるはずのアーミルやティリアでさえ改めて見とれてしまうほど光り輝いて見えたからだ。雪を初めて見るらしいユリスは、すぐに走りだして全身で喜びと興奮を表現し始めた。

「私、今なら『きれい』って分かるような気がする」

走りながらフィストにそう言い、フィストもそれはよかったと笑顔で返した。同時に、まさかあれをせがまれたりはしないかと不安もよぎって行ったが。

街に人影は無い。昼間はロボットのように表情を変えないスーツが我先にと歩きまわっていて、見るにも聞くにもこれほどやかましい場所もそうないのだが、今はその面影を僅かも感じさせない。

つまりどこのロボットも、神様の誕生日には家で過ごしたいという心が残っているらしい。

ロボットばかりではない。大きな車道には一台も車が走っておらず、脇の店も一つ残らずシャッターが下ろされている。降り始めてどれだけ経つのか、まだ歩道のタイルの模様が透けて見える程度に積もった雪には他に何の跡も付いていない。黙って降ってくる雪を、無数の窓から漏れる光、定期的に並ぶ街灯が闇世の中に照らしだす。

「…アーミル」

先頭に行くアーミルにフィストが声をかける。ずいぶん歩いたの

で、流石に寒さが身にしみてきたようだ。

「まだ開いてる店なんてあるの？」

また一つ、灰色のシャッターが一行の横を通り過ぎていく。それらの数を重ねるほどに不安が蓄積していったのだろう、フィストもそろそろ聞かずにはいられなかったらしい。

「あるさ、行きつけの店だ。：ちようどついたかな」

「……ああ、ホントだ」

たった一つ、シャッターの降ろされていない店。整列したシャッターの中ではひどく不自然な存在だ。ランプの灯の下に浮かび上がる看板の文字からは、そこが食料を扱っている店だと分かる。辺りの静寂と比べれば、その店の明かりはかなり珍しいものと言える。その流れのまま中に入ろうとしたのだが、入口の前でアーミルが足を止めた。

「：フィスト、ユリス、ちょっとここで待っててもらっていいか？」

「なんで？」

「あー：ここは、店のオジサンが人嫌いなんだよ。荷物持ちは欲しいし：でもあんま大勢だと：だから三人にとどめておこうと思って」

「荷物持ちにリユナを優先したのが気になるんだけど」

この店が成り立っているのか、というのも心の中だけで付け加える。

「この後他の店にも行くからさ、ここは待っててもらえないか」

ここ以外に開いている店があるのかも信じがたいが、ユリスは依然として雪に興味深々のようなので弊害はなさそうだ。フィストはこつくりと頷いた。

「ユリスもごめんな」

「ううん、いいよ」

雪から視線を外さない。その返事も信憑性を疑うものだが、あまりにも雪に夢中なので問題はなさそうだ。

「私も残る」

リユナがアーミルに異議申し立てをしていた。さすがに彼女もそ

の配分の矛盾点が気になったのだろう。

「…えーつとだな、リュナ…」

アーミルもリュナを見つめ返した。申し訳なさそうな、しかし譲ることを考えていない眼。

「…分かった」

根負けしたのはリュナの方だった。

「二人ともごめんね。大丈夫、ここだけじゃないって」

「じゃあ、すぐ戻るから」

それぞれが思い思いのことを言いながら入口に入っていく。

だがアーミルは一度手前に戻ってきてから、すれ違いざまにそれとなくフィストの肩を叩いていった。

「え？」

返事はなく、三人の姿は扉の向こう側に隠れてしまった。

今のは一体何を意味しているのか。

「…！」

その状況、間違いはない。

それならば、店の人が人嫌いと言うのも嘘かもしれない。

この通りに他の人間はいない。真の意味でユリスと二人きりになっている。

人嫌いと言いながらティリアとリュナも連れて行ったのは単なる荷物持ちではなく、フィストにこの状況というプレゼントをあげるためだったらしい。

とんだクリスマスプレゼントだった。アーミルはすぐ戻ると言っていたが、おそらくこのプレゼントをちゃんと受け取るまで戻っては来ないだろう。

「んー…あー…ユリス？」

フィストは視線を扉にやっただけユリスを呼んだ。

「ん？」

曖昧な返事だ。おそらくまだ雪で遊んでいるのだろう。とても言

える状況ではないので、まずは別の話題を探した。

「……」

「何？」

「あ…結局、ユリスの正体って分かった？」

話題を見つける暇がなかった。急に切り出しすぎたか、とフィストは後悔した。ユリスがそれに分かりやすく反応してくれたのがせめてもの救いか。

「…うん、見つからなかった。もう処分しただろうってヴェクスも言ってたし」

「……そっか」

むしろ、知っていてほしいと考えていた。自身を介さずに知ってほしいとフィストは願っていた。だが知らないのなら言わねばならない。それが分かっているはずなのに、彼の心は一向に準備を進める気配がない。

「でも、仕方ないことだと思ってる。私はひょっとしたら…創られた人間なのかもしれないけど…私は他の何でもない、私だよ」

「…でも、知りたいんだよね？」

「…うん…でも、フィストがいてくれるなら私はそれでいいよ」

ふと後ろを見ると、ユリスが車道にまで足を伸ばして、そこに付く自分の足跡を見て無邪気に笑っていた。思わず見とれていると、その視線に気づいたユリスがフィストと視線を合わせてくる。それも一瞬で、すぐにまた下を向いてしまう。

頬が赤みを帯びているのは、寒いからだろうか。

もう大丈夫だろう、とフィストは安心した。会ったばかりのユリスなら雪でここまではしゃぐこともなかったはずだ。現にその当時と似た状況のリユナは雪を見ても全く騒がなかった。それと比べると、今はしゃいでいるユリスの姿には見た目相応の可愛らしさも感じられるようになった。

仮にユリスが人間でなかったとしても、それがなんだというのか。

フィストは、結局自分はずっとユリスと一緒にいることを分かっていた。しかしだからこそ――

伝えなければ。そう思えば思うほどその笑顔が眩しく見え、言うべき言葉が詰まる。

ひょっとしたらこれまでのような関係でいられなくなるかも……そんな恐怖さえあった。

ユリスが立ち止まっている。フィストに背を向け、足元を見ているようだ。俯いているようにも見えるが。

次に切り出したのはユリスの方だった。

「フィスト……ちよっといいかな」

背を向けたまま、いつもより甘えるような声でそんなことを言った。

いつもと違う……そんな雰囲気。お互いにかたまって、それをより丁寧に演出していた。

「聞いて、おきたいの」

絶対にフィストの方を向こうとしない。まだ足元の雪への興味が捨てきれないのか、フィストを見る勇気がないのか。

「……何？」

少し硬い声での返事となった。フィスト自身も気をつけていたが、どうしても今まで通りの声で話が出来ない。みんなで集まって雑談している時ならまだしも、二人きりになると隠しとおせるものではない。そんな声の変化には気がつかなかったのか、ユリスはいつにも増して小さな声で用件を述べた。

「フィストは……私のこと、どう思ってるのかなって」

しゃりしゃりと雪が足に踏まれる音が聞こえる。緊張しているように、ユリスがつま先で雪をすりつぶしていた。

「……なんで、そんなこと」

「私、最初はリメールに言われたの。自分の気持ちに気づいてないんじゃないかって。それで私……」

「……」

足の動きが一瞬止まる。ユリスが深く息を吸い込む音が聞こえた。
「…私、フィストのこと好きなのかもって思った」

見なくとも分かるのは、その瞬間ユリスの顔が真っ赤になったという事。

「……」

「…えっと…何となく、だけど…」

フィストの顔も間を置かず赤く染まった。

「でも、でもね、違ったの。フィストとずっと一緒にいて、でもちよつと別れたりして、いろんなこと話して、何度も失いそうになつて…これはちよつと違う、好きなんかより、ずっと深い感情だつて気づいた。結局それが何なのかは今も分からない。でも、好きよりもっと大きな好き、そんな感じがする」

その言葉には、僅かながら嬉しそうな気持ちが垣間見えた。

それこそが嘘偽りのない、本当の気持ちなのだろう。

「それで、その…フィストの気持ちも聞いておきたくて」

「……」

「……ダメ？」

「……これ…って…告白…?」

「……」

無言の肯定。僅かに見えるユリスの頬は熟れすぎた林檎のようだ。

自分の気持ち。本当にそうなのかは分からない。フィストも、気付かないうちにどこかでユリスのことを好いていたのではないかと考える。

だがしかし、これが最後のチャンスかもしれない。フィストの拳が固く握られる。

「…それは、もちろん」

ユリスの背中に一歩近づいた。雪をいじくる足が止まり、フィストの発する言葉を一字一句漏らさず聞き取ろうとしている。

「もちろん？」

手を伸ばせば触れられるほどの間まで近づいた。ユリスはまだフィストの方を見ないが、荒れている呼吸は見ただけでも分かる。それはきつとお互いのことなのだろうが。

「：誰よりも特別に思ってる」

フィストは自身の鼓動がかってないほど早くなっているのが分かったが、もうそんなものは気にしていない。

言うのは今しかない。

言葉にするのは一瞬。

「：特別って、どういうこと？何で、特別なの？」

ユリスははっきりと、その口から聞きたいらしい。

「だって」

そっと背中から抱き寄せてあげた。

「――僕の、たった一人の妹だから」

あの晩。

椅子に座りながらガラスのサイコロをいじくっているアーミルが、もう一度他の人間が聞いていないか辺りに気を配った。

「さて、フィスト：心の準備はできてるな？」

そう言われたことで、フィストはもう一度気を引き締め直した。

「：うん、僕は大丈夫」

「そうか」

それだけ言うと、アーミルは視線を窓の外にやった。もったいぶっている様子でもないの、フィストは何も言わずに待っている。ダルタはせっかちな性格なのか、その行為にそわそわし始めているが。

「…フィストがフォルクコートに行っている間、ユリスの願いもあって俺はいろいろとあの研究所について調べていた。ハーゲンティが実験をしている理由とか、あの研究所の地図とか、まあこれらはフィストだけに話すことでもないし、今は置いておこう」

アーミルは決してフィストを見ない。フィストは椅子に座ったまま背筋を伸ばし、そのまま固まって綴られていく言葉を耳で拾い集めている。

「お前だけに話したいことってのは…まあ、ダルタもいるわけだが……ユリスのことだ」

「…」

「分かったことだけを伝えよう」

「……うん」

「ユリス。年は十と四ヶ月。髪はブロンド、瞳は濃い空色。生後三ヶ月で実験体を選抜され、それ以来研究所地下の隔離実験室でウェクスをはじめとする研究員に育てられた。翼竜精製のプロセスを問題なくこなし、実験過程でもそれといった失敗は無い。ただし、時折脳から発せられる情報電波に解読不能のノイズが入り込むことがあった。そして最終テストの直前に脱走、今現在も行方不明…」

ここまでではすでに知っている事柄がほとんどで、特に差し支えないような内容も目立つ。これだけで終わリなわけが無いので、フィストは何も言わずに続きを待つ。

「彼女の関わっていた『翼竜』の生成について…ああ、今現在進められているのは『翼竜』の一つ上の段階、『闘竜』らしいけどな。どっちも同じようなものだ、差は気にしなくていい」

「うん…」

初めて耳にする単語『闘竜』。かつて『翼竜』の名を聞いた時のようなおぞましさを、今回感じるようなことは無かった。それが慣れのせいだとしたら恐ろしいことだが。

「『翼竜』も『闘竜』も、元はれっきとした人間だ。それに手を加えて、常識はずれの戦闘力を付加させてるってのが実態だ。…まあ

つまり、ユリスは間違いなく人間ってことだな」

「：それは―――！」

明らかに喜んだ様子のフィストが何か言おうとするのをアーミルが諫めた。興奮して立ち上がったフィストに座るよう促し、「大切なのはここからだ」と付け加えた。

「：なに？ユリスが人間って分かったなら早く教えてあげよう。そのこと気にしてみたいだし、絶対に喜ぶよ。：何なの、それよりも大切な事って？」

その質問に、アーミルはすぐには答えなかった。まるで緊張感のないフィストに対して訝しげな表情を見せている。アーミルの前置きが軽くなかったことを思い出し、フィストも大人しく席に着いた。

「：ユリスの両親のことだ」

「……ユリスの……？」

ユリスの正体からつながらない話ではないが、それがそれほど重要な意味を持つのか。フィストがそう疑問に思ったが、次の瞬間にはその思考が完全に停止していた。

「父親は正確には分かっているが、母は研究員だった。ユリスの前に生んだ子で実験を行おうとしたが他の研究員がその子連れて脱走、三年後に生まれた第二子、つまりユリスに実験対象を移行した」

「……え……？」

「ユリスでの実験を開始すると同時に彼女は研究所を去った。それがだいたい十年前のことだ」

「：ちよっと、待って……」

「母親の名前は、クレア。：つまり、お前の母親と同じ人間ということになる」

「……っ！」

クレア。それがユリスの母親の名前。

そして同時に、自分の母親の名前。

ユリスは第二子。では第一子は……考えるまでもない。

「…ユリスには、お前から伝えたほうがいいだろう。俺からは何も言わないし、ダルタも…」

そう言って視線をダルタに向ける。

「…ああ、分かっているよ。俺は今日ここで何も聞かなかったしこの場にもいなかった、そんなモンでいいか？」

「…ああ」

すべてを言い切ったようなアーミルは、それ以上何も言わずに立ち上がった。ダルタも共に立ち上がり、フィストそのあとはフィストの発言を拒否するように寝室へと消えて行った。

「…ユリスが…僕の…妹…？」

「…それ…いつ分かったの？」

困惑した様子を隠そうとせず、ユリスが背中のフィストに問いかける。

「出発の前の日の夜。アーミルが教えてくれた」

「…ずっと黙ってたんだ」

「うん、なかなか言い出す機会がなくて…ごめん」

「…だから好きとはちよつと違うような感じがしてたんだ…分かったら、なんかスッキリした」

「…それはよかった」

後ろから抱きしめられた姿勢のままユリスはしばらく動かなかった。だが暫くして、胸のあたりで組まれたフィストの手を握りしめて目を閉じ、嬉しそうに微笑んだ。

「フィスト…あ…えっと、お兄ちゃんって呼んでも…いい？」

「どっちでも、ユリスの好きな方でいいよ」

「じゃあ、今だけ…」

「うん」

「ありがとう、お兄ちゃん」

自身の手を握るユリスの温かみを感じ、フィストはもう一度ユリスを強く抱きしめた。

大量の食料を買った帰り道。

ユリスは幸せをかみしめるような笑顔で、フィストの腕にしがみつきのながら歩いている。

フィストはそれをしっかりと教えてやれたようだ。

アーミルがフィストの方を見ると、目の合ったフィストが全てを肯定するように頷いて見せた。

何もかも終わったのが、アーミルにもそれで分かった。

「ユリス、嬉しそう」

リユナがアーミルに駆け寄り、その様子を見つめながら事務的に呟いた。

「そうだな、自分の家族が見つかったんだもんな」

「ユリス嬉しいと、私も嬉しい」

無表情のままそんなことを言うものだから、アーミルは少し意外そうな顔をしてから、

「そうか」

とだけ返した。

「ねえ、アーミル」

リユナの反対側からティリアがアーミルの肩を叩く。

「事務所の電気って消してきたよね？」

「そりゃあ、勿論…」

消してきた、と言いかけて、見えてきた事務所の窓に明かりが灯

っているのに気がついて口が止まった。

出る前にちゃんと確認して消した、わざわざ覚えていたのだから間違いはない：アーミルはその記憶を何度も復唱する。

しかし、そこには確かに明かりがついている。消したのは確かなのだから、誰かがつけたとしか考えようがない。

誰だろうかとアーミルは頭をひねる。鍵はしっかり掛けていった。たとえ泥棒だとしても電気をつけるとは考えにくい。となると、電気をつけてもやましくない人間がそのスイッチを入れたということになる。もちろん、鍵を持って。

事務所の鍵は今現在三つ。オリジナルのものはアーミルが常に携帯している。フィスト、ユリス、リュナにはまだ持たせていない。一つはティリアに渡した。もう一つは、その時一緒に誰かに渡していたはずだ。

「まさか：！」

アーミルのひらめいたような口調により、そこにいた全員が、この場にいらない彼女のことを思い返していた。そしてそれが具現化されたように、窓にポニーテールのシルエットが現れた。

「：帰って、来たんだ」

フィストが感嘆の声をあげる。

「そっか：あいつはこれからも俺達と一緒にいたいって思ってくれたんだな」

嬉しさを前面に出してアーミルも呟く。

「なら、早く行って私たちの顔を見せてあげないとね。もう嫌って言うくらい見せつけてあげるんだから」

意地の悪そうにティリアが笑う。

「私も、会いたい」

リュナも僅かに笑う。

「私は紅茶の淹れ方を教えてもらいたいな」

ユリスがあのお湯のような紅茶を全員に思い出させる。

「そうだな、早く帰ろう。きつとおいしい紅茶を淹れてくれるぞ」

すると、窓のあたりをうろうろしていたポニーテールが何かに躓いたように腕を振り回し、そのまま倒れて窓から消えた。

「ありゃりゃ、何をやってるんだか」

ティリアが呆れたように、しかし嬉しそうにその相変わらずな部分を笑った。

そしてそれにつられるように全員が満ち足りた笑みをこぼした。

それは、何もかもが彼らの望んだとおりに全て終わったという何よりの証。

ティリアを先頭に、そこへ向かって走りだす。

（フィスト…ユリスをよろしくね…）

「えっ」

呼ばれて振り向いたが、そこには誰もいない。頭の中にエコーが残っているだけだ。

その声は、ずっと昔も、最近も、フィストは聞いた記憶があった。

「今のは…」

「何してんだフィスト、置いてくぞ！」

「…うん、すぐ行くよ！」

詮索をやめ、すぐに駆け出す。

ずっと自分たちを見守ってくれていたその声に感謝しながら。

吹き抜ける風も、今は穏やかに――――

エピソード2（後書き）

一度読み返してみて、無駄に長い話だったなあと虚しさすら感じました。それでもやりきったことに対する達成感はとても大きいですが。

自分でも変だと感じる部分や矛盾の生じている部分が気になりましたが、自分がまだまだ修行不足であることの反省材料としておきたいと思います。初めて書くこの連載小説に、とても多くのことを学んだ気がします。

最後に、拙作に目を通してくださった全ての方に最大限の感謝を述べさせていただきますと思います。

本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8888e/>

目覚める竜

2010年10月8日14時25分発行